埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第 37 集

緑 川 遺 跡

2020

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第 37 集

緑川遺跡（みどりかわいせき）

2020

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、市内には地下に埋蔵されている多くの遺跡が所在しております。そして、これらの遺跡内では、様々な工事が行われ、遺跡を保護・保存できない場合があります。このような状況が発生した際には、発掘調査を実施して記録保存を行い、後世に伝えるべく方策を採っております。

本書は、平成 30 年度に発掘調査を行った緑川遺跡について報告するものであります。緑川遺跡は、国宝「歓喜院聖天堂」を本殿に持つ妻沼聖天山にほど近い場所にあり、昭和 47 年に遺跡として周知化がなされて以来、今回初めて発掘調査が行われました。その結果、遺跡からは、弥生時代末から平安時代までの住居跡や掘立柱建物跡などが多数見つかり、土器をはじめとする大量の遺物が出土し、大変貴重な成果を得ることが出来ました。今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として、広くご活用いただければ幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護の趣旨を尊重され、御理解、御協力を賜りました井上令子様をはじめ、地元及び工事関係者に厚くお礼申し上げます。

令和２年３月

熊谷市教育委員会
教育長　**野原　晃**

例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市妻沼字森廻 1327 番 1 地内に所在する緑川遺跡（埼玉県遺跡番号 61 － 002）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査及び整理・報告書作成に係る費用は、井上令子氏に負担していただいた。

3　本調査は、分譲住宅建設工事に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、整理・報告書作成作業も含め、熊谷市教育委員会が実施した。

4　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

5　発掘調査期間は、平成30年11月16日から平成31年３月29日までである。整理･報告書作成期間は、平成 31 年４月１日から令和２年３月 31 日までである。

6　発掘調査の担当は、武部喜充、島村範久が、本書の執筆は、第Ⅰ～Ⅲ章を松田　哲が、第Ⅳ・Ⅴ章を松田、武部が、編集は松田が行った。

7　発掘調査における写真撮影は、武部が、遺物の写真撮影は、松田が行った。

8　基準点測量は、中央航業株式会社に委託して実施した。

9　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

10　発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略）

井上令子　株式会社ファイブイズホーム　株式会社イーエイチケー
青木克尚　礒崎　一　小野美代子　金子正之　小林　高　沢口和正　菅谷浩之　知久裕昭
富田和夫　蛭間健吾　森田安彦
埼玉県教育局文化資源課　公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡　例

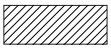
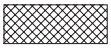
本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　調査区全測図及び出土状況などの挿図縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものについては、個別に示した。

調査区全測図…１／400　　住居跡・掘立柱建物跡・土坑・井戸跡・性格不明遺構…１／60

溝跡・道路跡平面図…１／150　　溝跡・道路跡断面図…１／80　　柵列跡…１／80

2　遺構挿図中のトーン等は、次のとおりである。

 ＝地山　 ＝焼土　  ＝アンペラ

3　遺構挿図中、断面に添えてある数値は、標高を示している。

4　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

縄文土器・須恵器・土師器・灰釉陶器・円筒埴輪・磁器・陶器・瓦質土器・瓦…１／４

土製品…１／２・１／４　　鉄製品…１／２　　石製品…１／２・１／４

5　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

縄文土器・土師器・円筒埴輪・磁器・陶器・瓦質土器・瓦・土製品・鉄製品・石製品断面：白抜き

須恵器断面：黒塗り　　灰釉陶器断面： 　　赤彩：

6　遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

7　遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位は、cm、ｇである。（）が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物などを以下の記号で示した。

Ａ：白色粒子　　Ｂ：黒色粒子　　Ｃ：赤色粒子　　Ｄ：褐色粒子　　Ｅ：赤褐色粒子

Ｆ：白色針状物質　　Ｇ：長石　　Ｈ：石英　　Ｉ：白雲母　　ｊ：黒雲母

Ｋ：角閃石　　Ｌ：片岩　　Ｍ：砂粒　　Ｎ：礫

8　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

9　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖 36 版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行　2014）を参考にした。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過……1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……9
　1　調査の方法……9
　2　検出された遺構と遺物……9
Ⅳ　遺構と遺物……13
　1　住居跡……13
　2　掘立柱建物跡……91
　3　柵列跡……98
　4　溝跡……100
　5　道路跡……104
　6　土坑……104
　7　井戸跡……110
　8　性格不明遺構……110
　9　ピット……110
　10　遺構外出土遺物……113
Ⅴ　調査のまとめ……115

挿図目次

第1図　埼玉県の地形……3
第2図　周辺遺跡分布図……5
第3図　調査地点位置図……10
第4図　調査区全測図・基本土層図……11
第5図　第1号住居跡……13
第6図　第1号住居跡出土遺物（1）……14
第7図　第1号住居跡出土遺物（2）……15
第8図　第2号住居跡・出土遺物……17
第9図　第3・4号住居跡……19
第10図　第3号住居跡出土遺物……20
第11図　第5・6号住居跡……22
第12図　第5号住居跡出土遺物（1）……23
第13図　第5号住居跡出土遺物（2）……24
第14図　第7～9号住居跡（1）……26
第15図　第7～9号住居跡（2）……27
第16図　第7号住居跡出土遺物……28
第17図　第8号住居跡出土遺物（1）……30
第18図　第8号住居跡出土遺物（2）……31
第19図　第10号住居跡・出土遺物……33
第20図　第11号住居跡……34
第21図　第11号住居跡出土遺物……35
第22図　第12･13号住居跡……37
第23図　第12･13号住居跡出土遺物……38
第24図　第14号住居跡・出土遺物……39
第25図　第15～18号住居跡（1）……41
第26図　第15～18号住居跡（2）……42
第27図　第15号住居跡出土遺物……43
第28図　第16号住居跡出土遺物……44
第29図　第17号住居跡出土遺物……46
第30図　第19～22号住居跡（1）……47
第31図　第19～22号住居跡（2）……49
第32図　第19号住居跡出土遺物……50

第 33 図　第 20 号住居跡出土遺物（１）……51
第 34 図　第 20 号住居跡出土遺物（２）……52
第 35 図　第 21 号住居跡出土遺物……54
第 36 図　第 23 号住居跡・出土遺物（１）……56
第 37 図　第 23 号住居跡出土遺物（２）……58
第 38 図　第 23 号住居跡出土遺物（３）……59
第 39 図　第 24･25 号住居跡……61
第 40 図　第 24 号住居跡出土遺物……62
第 41 図　第 25 号住居跡出土遺物……62
第 42 図　第 26 ～ 28 号住居跡・出土遺物 ……65
第 43 図　第 29 ～ 31 号住居跡（１）……67
第 44 図　第 29 ～ 31 号住居跡（２）……68
第 45 図　第 29 号住居跡出土遺物……69
第 46 図　第 30 号住居跡出土遺物……69
第 47 図　第 31 号住居跡出土遺物……69
第 48 図　第 32 号住居跡・出土遺物……71
第 49 図　第 33 ～ 35 号住居跡（１）……74
第 50 図　第 33 ～ 35 号住居跡（２）……75
第 51 図　第 33 ～ 35 号住居跡（３）……76
第 52 図　第 33 号住居跡出土遺物（１）……77
第 53 図　第 33 号住居跡出土遺物（２）……78
第 54 図　第 34 号住居跡出土遺物……78
第 55 図　第 35 号住居跡出土遺物……78
第 56 図　第 36 ～ 39 号住居跡（１）……82
第 57 図　第 36 ～ 39 号住居跡（２）……83
第 58 図　第 36 号住居跡出土遺物（１）……84
第 59 図　第 36 号住居跡出土遺物（２）……85
第 60 図　第 37 号住居跡出土遺物……85
第 61 図　第 38･39 号住居跡出土遺物 ……85
第 62 図　第 40 号住居跡・出土遺物……89
第 63 図　第 41 号住居跡・出土遺物……90
第 64 図　第１号掘立柱建物跡・出土遺物……91
第 65 図　第２号掘立柱建物跡・出土遺物……92
第 66 図　第３号掘立柱建物跡 ……93
第 67 図　第４号掘立柱建物跡 ……94
第 68 図　第５号掘立柱建物跡 ……95
第 69 図　第６号掘立柱建物跡・出土遺物 ……96
第 70 図　第１号柵列跡 ……99
第 71 図　第２号柵列跡 ……99
第 72 図　第１～３号溝跡・第１号道路跡……101
第 73 図　第１号溝跡出土遺物……102
第 74 図　第２号溝跡出土遺物……102
第 75 図　第1～10 号土坑……105
第 76 図　第11～15 号土坑・第１号井戸跡・第１号性格不明遺構……107
第 77 図　土坑・井戸跡・性格不明遺構出土遺物…108
第 78 図　ピット出土遺物……113
第 79 図　遺構外出土遺物……114

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表…… 6
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表……16
第３表　第２号住居跡出土遺物観察表……17
第４表　第３号住居跡出土遺物観察表……20
第５表　第５号住居跡出土遺物観察表……24
第６表　第７号住居跡出土遺物観察表……28
第７表　第８号住居跡出土遺物観察表……32
第８表　第 10 号住居跡出土遺物観察表 ……33
第９表　第 11 号住居跡出土遺物観察表 ……35
第 10 表　第 12 号住居跡出土遺物観察表……38
第 11 表　第 13 号住居跡出土遺物観察表……38
第 12 表　第 14 号住居跡出土遺物観察表……39
第 13 表　第 15 号住居跡出土遺物観察表……43
第 14 表　第 16 号住居跡出土遺物観察表……45
第 15 表　第 17 号住居跡出土遺物観察表……46
第 16 表　第 19 号住居跡出土遺物観察表……50
第 17 表　第 20 号住居跡出土遺物観察表……53
第 18 表　第 21 号住居跡出土遺物観察表……54

第 19 表　第 23 号住居跡出土遺物観察表……60
第 20 表　第 24 号住居跡出土遺物観察表……63
第 21 表　第 25 号住居跡出土遺物観察表……63
第 22 表　第 27 号住居跡出土遺物観察表……65
第 23 表　第 28 号住居跡出土遺物観察表……65
第 24 表　第 29 号住居跡出土遺物観察表……70
第 25 表　第 30 号住居跡出土遺物観察表……70
第 26 表　第 31 号住居跡出土遺物観察表……70
第 27 表　第 32 号住居跡出土遺物観察表……72
第 28 表　第 33 号住居跡出土遺物観察表……79
第 29 表　第 34 号住居跡出土遺物観察表……79
第 30 表　第 35 号住居跡出土遺物観察表……79
第 31 表　第 36 号住居跡出土遺物観察表……86
第 32 表　第 37 号住居跡出土遺物観察表……86
第 33 表　第 38 号住居跡出土遺物観察表……86
第 34 表　第 39 号住居跡出土遺物観察表……86
第 35 表　第 40 号住居跡出土遺物観察表……89
第 36 表　第 41 号住居跡出土遺物観察表……90
第 37 表　第 1 号掘立柱建物跡出土遺物観察表…91
第 38 表　第 2 号掘立柱建物跡出土遺物観察表…92
第 39 表　第 6 号掘立柱建物跡出土遺物観察表…97
第 40 表　第 1 号溝跡出土遺物観察表……103
第 41 表　第 2 号溝跡出土遺物観察表……103
第 42 表　土坑・井戸跡・性格不明遺構出土遺物観察表…108
第 43 表　ピット計測表 ……111
第 44 表　ピット出土遺物観察表……113
第 45 表　遺構外出土遺物観察表……114

図 版 目 次

図版 1　調査区付近遠景（遺跡から北東を望む）
調査区全景（真上から）
図版 2　調査区南側全景（西から）
調査区北側全景（西から）
図版 3　第 1 号住居跡
第 1 号住居跡カマド
第 1 号住居跡遺物出土状況 1
第 1 号住居跡遺物出土状況 2
第 2 号住居跡
第 2 号住居跡北西隅遺物出土状況
第 3 号住居跡
第 4 号住居跡南側
図版 4　第 5 ・ 6 号住居跡
第 5 号住居跡東カマド
第 5 号住居跡西カマド
第 5 号住居跡遺物出土状況
第 7 ～ 9 号住居跡
第 7 ・ 9 号住居跡
第 7 号住居跡カマド
第 7 号住居跡東カマド煙道部
図版 5　第 8 号住居跡
第 8 号住居跡遺物出土状況
第 8 号住居跡西隅遺物出土状況
第 10 号住居跡
第 11 号住居跡
第 11 号住居跡カマド
第 11 号住居跡ピット確認状況
第 12・13 号住居跡
図版 6　第 13 号住居跡カマド
第 14 号住居跡
第 15 ～ 18 号住居跡（東から）
第 15 ～ 18 号住居跡（南から）
第 15 ～ 18 号住居跡（北東から）
第 15 号住居跡カマド
第 16 号住居跡カマド
第 16 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
図版 7　第 17 号住居跡カマド
第 17 号住居跡西壁遺物出土状況

第 19 ～ 23 号住居跡
第 19 号住居跡遺物出土状況
第 19 号住居跡カマド
第 20・21 号住居跡
第 21・22 号住居跡
第 20 号住居跡カマド
図版 8　第 20 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第 20 号住居跡遺物出土状況
第 21 号住居跡カマド
第 21 号住居跡南西隅遺物出土状況
第 21 号住居跡石製模造品出土状況
第 23 号住居跡
第 23 号住居跡遺物出土状況 1
第 23 号住居跡遺物出土状況 2
図版 9　第 24 号住居跡
第 24・25 号住居跡遺物出土状況
第 24 ～ 31 号住居跡
第 24 号住居跡遺物出土状況
第 25 号住居跡遺物出土状況
第 26 ～ 28 号住居跡
第 27 号住居跡遺物出土状況
第 28 号住居跡カマド煙道部
図版 10　第 28 号住居跡カマド煙道部
第 29 ～ 31 号住居跡
第 30 号住居跡
第 31 号住居跡
第 29 号住居跡遺物出土状況 1
第 29 号住居跡遺物出土状況 2
第 30 号住居跡琥珀玉出土状況
第 31 号住居跡埋設土器断割状況
図版 11　第 32 号住居跡
第 32 号住居跡カマド
第 32 号住居跡カマド袖断割状況
第 32 号住居跡石製模造品出土状況
第 33 号住居跡
第 33 号住居跡遺物出土状況
第 33 号住居跡カマド
第 33 号住居跡北隅遺物出土状況
図版 12　第 34 号住居跡
第 34 号住居跡遺物出土状況
第 34 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第 34 号住居跡南東壁遺物出土状況
第 35 号住居跡
第 35 号住居跡アンペラ出土状況
第 36 号住居跡
第 36 号住居跡遺物出土状況
図版 13　第 36 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第 36 号住居跡遺物出土状況
第 37 号住居跡
第 37 号住居跡カマド
第 37 号住居跡カマド煙道部断面断割状況
第 38 号住居跡
第 39 号住居跡
第 39 号住居跡遺物出土状況
図版 14　第 40 号住居跡
第 40 号住居跡炉跡断割状況
第 41 号住居跡
第 41 号住居跡遺物出土状況
第 1 号掘立柱建物跡
第 1 号掘立柱建物跡確認状況
第 2 号掘立柱建物跡
第 2 号掘立柱建物跡Ｐ 3 噴砂確認状況
図版 15　第 3 号掘立柱建物跡（北東から）
第 3 号掘立柱建物跡（北西から）
第 3 号掘立柱建物跡確認状況
第 4 号掘立柱建物跡
第 5 号掘立柱建物跡
第 6 号掘立柱建物跡
第 1 ・ 2 号溝跡
第 1 号溝跡土層断面
図版 16　第 1 号土坑
第 2 号土坑

第３号土坑
第５号土坑
第６号土坑
第７号土坑
第８号土坑
第 10 号土坑土層断面
図版 17　第 11 号土坑
第 12 号土坑
第 13 号土坑
第 14・15 号土坑
第１号井戸跡
第１号井戸跡土層断面
第１号性格不明遺構
P97 遺物出土状況
図版 18　第１号住居跡　第６図２～ 11
図版 19　第１号住居跡　第６図 12 ～ 18
図版 20　第１号住居跡　第６図 19･20
第７図 21 ～ 23･25･26
図版 21　第１号住居跡　第７図 27 ～ 29・29 底面
第２号住居跡　第８図３
第３号住居跡　第 10 図２・３・５
図版 22　第３号住居跡　第 10 図７～９･10 底面 ･11
第５号住居跡　第 12 図１・２・６・７
図版 23　第５号住居跡　第 12 図８･15･17 ～ 22
図版 24　第５号住居跡　第 12 図 23 ～ 25・27・28
第 13 図 31・33・34
図版 25　第７号住居跡　第 16 図１・２・５・７
第８号住居跡　第 17 図１～４
図版 26　第８号住居跡　第 17 図５～９・第 18 図 11
図版 27　第８号住居跡　第 18 図 12･14 ～ 16･18 ～ 21
図版 28　第８号住居跡　第 18 図 23 ～ 26
第 11 号住居跡　第 21 図１・８
第 12 号住居跡　第 23 図 12 － 3 ･12 － 4
図版 29　第 13 号住居跡　第 23 図 13 － 1 ･13 － 2
第 14 号住居跡　第 24 図１
第 15 号住居跡　第 27 図１・４・５・８・９･11
図版 30　第 16 号住居跡　第 28 図１・２・４～７
図版 31　第 16 号住居跡　第 28 図９･10･12･13･15 上面 ･15
第 17 号住居跡　第 29 図１・２
図版 32　第 17 号住居跡　第 29 図 3 内面・3・4 内面・5～7
第 19 号住居跡　第 32 図１～３
図版 33　第 19 号住居跡　第 32 図４・７
第 20 号住居跡　第 33 図１・３～６・９･10
図版 34　第 20 号住居跡　第 33 図 12･12 内面 ･13 ～ 17
図版 35　第 20 号住居跡　第 34 図 18 ～ 23
図版 36　第 20 号住居跡　第 34 図 24 ～ 26
第 21 号住居跡　第 35 図２～４・６
図版 37　第 22 号住居跡　第 35 図７・８･10
第 23 号住居跡　第 36 図１～５
図版 38　第 23 号住居跡　第 36 図 6・8 内面・8・9 内面・9･10 ～ 12
図版 39　第 23 号住居跡　第 37 図 13 ～ 18
図版 40　第 23 号住居跡　第 38 図 19 ～ 26
図版 41　第 23 号住居跡　第 38 図 27
第 24 号住居跡　第 40 図１～７・９
図版 42　第 25 号住居跡　第 41 図１
第 27 号住居跡　第 42 図 27 －１･27 －３
第 29 号住居跡　第 45 図３～５・５内面 ･12
図版 43　第 30 号住居跡　第 46 図１・２・４・６・６内面・９
第 31 号住居跡　第 47 図１・３
第 32 号住居跡　第 48 図１・３
図版 44　第 32 号住居跡　第 48 図５
第 33 号住居跡　第 52 図 11 ～ 13･15･21･22
図版 45　第 33 号住居跡　第 52 図 23 ～ 25･ 第 53 図 29･30
第 34 号住居跡　第 54 図４・７
図版 46　第 34 号住居跡　第 54 図８
第 35 号住居跡　第 55 図３・３内面
第 36 号住居跡　第 58 図２～６･10
図版 47　第 36 号住居跡　第 58 図 19･20･22 ～ 25
図版 48　第 36 号住居跡　第 59 図 26
第 37 号住居跡　第 60 図１・４～７･11･12
図版 49　第 37 号住居跡　第 60 図 13
第 38 号住居跡　第 61 図 38 －１･38 －２

第 39 号住居跡　第 61 図 39 － 1
第 40 号住居跡　第 62 図 1 ～ 4
図版 50　第 41 号住居跡　第 63 図 1 ～ 3
第 6 号掘立柱建物跡　第 69 図 2
第 1 号溝跡　第 73 図 1 ～ 6
図版 51　第 1 号溝跡　第 73 図 7 ～ 9 ·19
第 2 号溝跡　第 74 図 1
第 6 号土坑　第 76 図 6 土－ 1
第 7 号土坑　第 76 図 7 土－ 1
P52　第 77 図 P 52 － 1
P96　第 77 図 P 96 － 1
P144　第 77 図 P 144 － 1
図版 52　第 1 号住居跡　第 6 図 1
第 3 号住居跡　第 10 図 1
第 5 号住居跡　第 12 図 3 ・ 4
第 7 号住居跡　第 16 図 3 ・ 4
第 15 号住居跡　第 27 図 2 ・ 3
第 20 号住居跡　第 33 図 2
第 21 号住居跡　第 35 図 1
第 29 号住居跡　第 45 図 1 ・ 2
第 31 号住居跡　第 47 図 2
第 33 号住居跡　第 52 図 1 ～ 10
図版 53　第 34 号住居跡　第 54 図 1 ～ 3
第 35 号住居跡　第 55 図 1 ・ 2
第 36 号住居跡　第 58 図 1
第 6 号掘立柱建物跡　第 69 図 1
第 1 号溝跡　第 73 図 17 · 18
第 15 号土坑　第 77 図 15 土－ 1
第 1 号井戸跡　第 77 図 1 井－ 1
第 1 号性格不明遺構　第 77 図 1 不－ 2 ～ 4
P43·145·169　第 78 図 P43 － 1·P145 － 1·P169 － 1
遺構外　第 79 図 3 ～ 5
図版 54　第 24 号住居跡　第 40 図 8 ・ 10 ～ 17
第 32 号住居跡　第 48 図 7 ～ 9
遺構外　第 79 図 1
第 1 号溝跡　第 73 図 10 ～ 16
第 2 号溝跡　第 74 図 2 ～ 4
図版 55　第 2 号住居跡　第 8 図 4 ～ 6
第 11 号住居跡　第 21 図 10
第 15 号住居跡　第 27 図 12
第 20 号住居跡　第 34 図 27
第 29 号住居跡　第 45 図 14
第 33 号住居跡　第 53 図 34 · 35
第 2 号溝跡　第 74 図 5
第 5 号住居跡　第 13 図 35
第 7 号住居跡　第 16 図 9
第 17 号住居跡　第 29 図 11
第 29 号住居跡　第 45 図 15
第 33 号住居跡　第 53 図 31 ～ 33
遺構外　第 78 図 6 · 7
図版 56　第 1 号住居跡　第 7 図 30
第 3 号住居跡　第 10 図 12 · 13
第 7 号住居跡　第 16 図 10
第 8 号住居跡　第 18 図 22
第 11 号住居跡　第 21 図 11
第 13 号住居跡　第 23 図 13 － 3 · 4
第 23 号住居跡　第 38 図 28 · 29
第 28 号住居跡　第 42 図 1
第 30 号住居跡　第 46 図 11
第 33 号住居跡　第 53 図 11
第 37 号住居跡　第 60 図 14
第 40 号住居跡　第 62 図 5
図版 57　第 16 号住居跡　第 28 図 14
第 21 号住居跡　第 35 図 11
第 32 号住居跡　第 48 図 6
第 19 号住居跡　第 32 図 9
第 14 号住居跡　第 24 図 2
P144　第 77 図 P144 － 2
第 11 号住居跡　第 21 図 12
第 29 号住居跡　第 45 図 16
第 33 号住居跡　第 53 図 37
第 30 号住居跡出土琥珀玉 1 ～ 3

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

平成 30 年５月 14 日、事業者の株式会社ファイブイズホーム代表取締役細井保雄氏より埋蔵文化財発掘の届出が提出された。工事内容は、井上令子氏が所有する熊谷市妻沼字森廻 1327 番１地内における分譲住宅建設である。これを受け、熊谷市教育委員会では、事業予定地内が緑川遺跡（埼玉県遺跡番号№ 61-002）に該当し、古墳時代から奈良・平安時代までの遺構・遺物が所在する箇所であることから、平成 30 年６月４日に遺跡の所在を確認するため、試掘調査を実施した。その結果、事業予定地内ほぼ全面において古墳時代から奈良・平安時代までの遺構・遺物が多数確認された。

事業予定地は、妻沼地区では珍しいやや小高い地形上にあり、遺跡は現況畑地である地表面下 20 ㎝で確認された。事業者から提出された工事内容は、事業予定地東側を南北に通る道路に合わせて切土を行うものであったが、試掘調査の結果及び工事内容を鑑みると、計画通りの工事では遺跡が破壊されてしまうことから、熊谷市教育委員会では事業者へ発掘調査を実施し、記録保存を行うか、もしくは工事計画の変更が必要となる旨を伝えた。その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であるとの結論に達したため、遺跡の破壊される箇所を対象に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

この結果を踏まえ、熊谷市教育委員会では、平成 30 年８月１日付け熊教社埋発第 203 号で埼玉県教育委員会教育長へ記録保存の措置が適当である旨を副申とした埋蔵文化財発掘の届出を送付した。事業者あてには、埼玉県教育委員会教育長から平成 30 年８月１日付け教文資第４－ 679 号で周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、発掘調査実施の指示通知がなされた。

その後、発掘調査の実施について具体的な協議を重ねた結果、本事業は平成 30 年９月の熊谷市定例議会において補正予算の承認を受け、熊谷市教育委員会が実施することとなった。そして、土地所有者の井上令子氏と平成 30 年７月 26 日付けで埋蔵文化財に関する協定書を締結し、平成 30 年 11 月８日付けで埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結した。発掘調査の通知は、熊谷市教育委員会から平成 30 年 10 月 31 日付け熊教社埋発第 296 号で埼玉県教育委員会教育長あてへ送付し、発掘調査は、平成 30 年 11 月から平成 31 年３月まで実施した。

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

発掘調査は、平成 30 年 11 月 16 日から平成 31 年３月 29 日まで実施した。調査面積は、1,450 ㎡である。

調査は、まず調査区の 2/3 を重機により表土除去を行い、作業員を導入して遺構確認作業を行った。そして、11 月下旬から遺構の発掘、土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行い、２月中旬に概ね終了したことから、次いで残りの調査区 1/3 の調査に着手し、上記の作業を順次行った。そして、３月下旬に重機による調査区の埋め戻しを行い、現場におけるすべての作業を終了した。

（2）整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、平成31年4月1日付けで井上氏と埋蔵文化財包蔵地発掘調査（整理・報告書作成）の委託契約を締結し、平成31年4月から令和2年3月まで実施した。作業は、4月から7月まで遺物の洗浄、注記、接合、復元などの作業を行い、併行して遺構の図面整理を行った。8月から11月までは、遺物の実測･拓本･トレース及び図面のデジタル化、遺構のデジタルトレースを行い、遺構･遺物の版組を作成した。12月には遺物の写真撮影、写真図版の割付け、原稿執筆を行い、翌年1月に編集作業を行った。そして、1月末に印刷業者選定の後、印刷に入り、数回の校正を行って3月下旬に報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

（1）発掘調査

平成30年度

教育長	野原　　晃
教育次長	小林　教子
社会教育課長	鶴田　敏男
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野　　健
社会教育課文化財保護係長	松田　　哲
社会教育課文化財保護係主査	星　　祥子
主査	小島　洋一
主査	蔵持　俊輔
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
主任	新井　　端
主事	武部　喜充
主事	島村　範久
主事	大野美知子

（2）整理・報告書作成

平成31年度・令和元年度

平成30年度と同じ。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

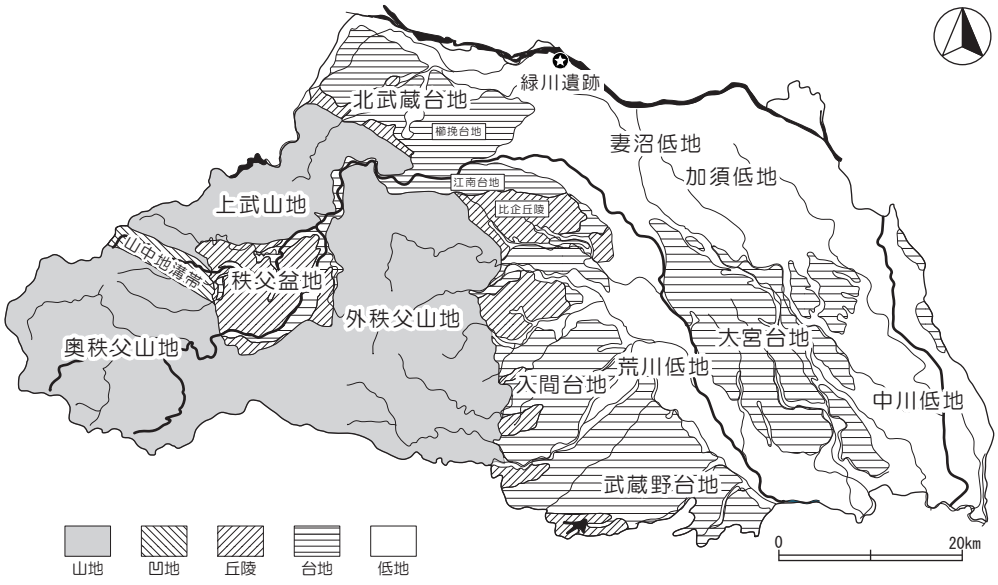
熊谷市は、埼玉県北部に位置し、平成の大合併（平成17年に妻沼町及び大里町、平成19年に江南町）を経て、県北最大の人口を有する。市の総面積は、159.82㎢である。市の北側には、群馬県との境を利根川、南側には荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、関東地方の２大河川が最も近接する地域にある。地形的には、市の西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第１図）。

櫛挽台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はJR高崎線籠原駅から北へ約２kmの西別府付近にまで延びている。標高は約36～54 mを測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。荒川に面した櫛挽台地南東端には、独立丘陵地である観音山（標高81 m、第３紀層の残丘）があり、台地からの比高差は約25 m、沖積地からの比高差は約35 mを測る。櫛挽台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新期荒川扇状地が広がる。新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や微高地、後背湿地が発達している。

今回報告する緑川遺跡は、熊谷市北部の妻沼地区に所在する。妻沼地区は、利根川及びその支流により形成された自然堤防とその後背地からなる低地帯（妻沼低地）が広がっており、西から東へ緩やかに傾斜する。遺跡は、利根川と妻沼聖天山の北側を流れる芝川との間に形成された標高29 m前後の台地上を呈する自然堤防上に立地するが、遺跡の東側は急激に下り、高低差が約2.6 mある。

次に周辺の歴史的環境について概観する（第２図）。

旧石器時代から縄文時代中期までの遺跡は、熊谷市西部及び深谷市域の櫛挽台地及び台地直下に多くみられる。旧石器時代は、櫛挽台地東端に立地する熊谷市籠原裏遺跡（73）から出土した黒耀石の尖頭器が唯一の事例である。縄文時代は、早期段階は櫛挽台地北端に位置する深谷市東方城跡（地図未掲載）において尖頭器が検出されているのみである。前期は、次第に遺跡数が増え始め、台地上では三ヶ尻遺跡（85）で集落跡が確認されている。中期になると、遺跡数が大幅に増え、特に中期後半の加曽利Ｅ式

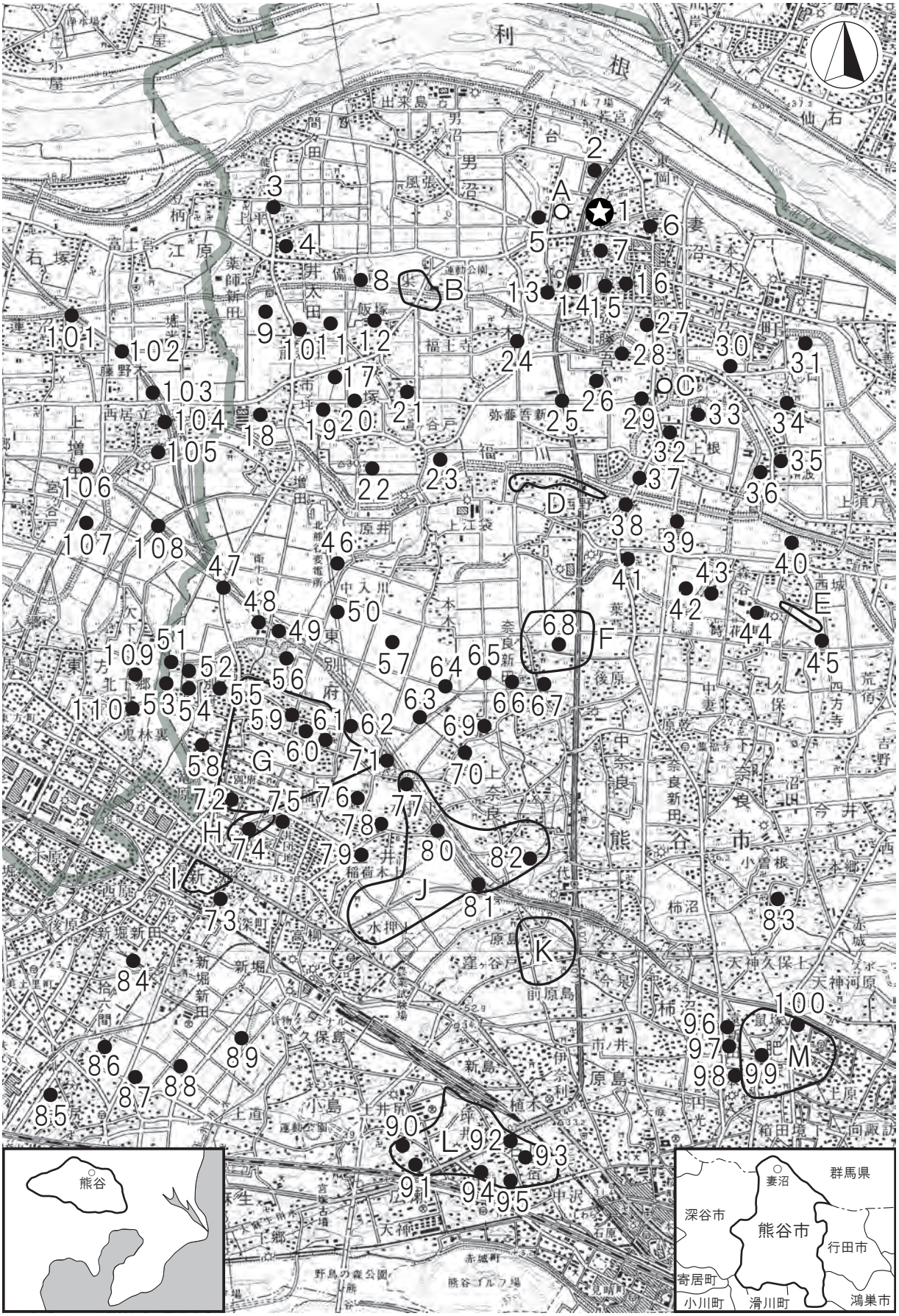


第１図　埼玉県の地形

期の遺跡が多い。前期と異なり、台地以外に低地上にも集落跡が確認されるようになるが、特に櫛挽台地北東端及び台地下の低地上に集中する。後期になると、遺跡数は減少するが、さらに低地へ進出しはじめ、妻沼地区でも西城切通遺跡（40）、場違ヶ谷戸遺跡（41）など櫛挽台地から離れた低地上で遺跡が認められるようになる。晩期は、遺跡数がさらに減少する。地図中には示せなかったが、市東部では低地上に立地する諏訪木遺跡や中西遺跡（地図未掲載）で集落跡が確認されている。この他では、櫛挽台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）で晩期最終末の浮線文土器が多数検出されている。遺構からの検出ではないが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代は、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。前期末～中期前半の遺跡は、櫛挽台地北東端及び台地下の低地上に集中するが、検出されたのは集落跡ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡（48）では、前期末から中期前半までの再葬墓が13基確認されており、再葬墓一括資料は1999年3月に埼玉県指定になっている。妻沼地区では、飯塚遺跡（12）、飯塚南遺跡（20）、深谷市では上敷免遺跡などで再葬墓が検出されている。上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺胴部片も出土している。中期中葉以降は、これまでの状況と一変して市東部の低地上に集落跡が出現する。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（地図未掲載）やその墓域とされ、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（地図未掲載）などをはじめ、本格的な農耕集落が展開されるようになる。この他にも北島遺跡や前中西遺跡（地図未掲載）などで大規模集落が展開されるようになるが、市北部及び西部では確認例が少ない。後期以降の遺跡は、深谷市明戸東遺跡（地図未掲載）などいくつか点在するのみであるが、今回報告の緑川遺跡では、弥生時代末から古墳時代初頭にかけて過渡的な様相を示す遺構・遺物が初めて確認された。

古墳時代になると、低地上への進出がより活発化し、前期の遺跡は緑川遺跡も含め、近年確認例が増加している。本遺跡の南側にある大我井遺跡（６）では、前期の土師器片が採集されており、各種開発に伴う試掘調査でも遺構・遺物が確認されている。弥藤吾新田遺跡（25）や一本木前遺跡（64）では集落跡が確認されており、後者では約100軒もの膨大な数の住居跡の他に４基の方形周溝墓が確認され、２号方形周溝墓の主体部からは、ヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯などが検出されている。この他にも、古墳時代前期は確認例がたくさんあるが、遺跡は主に利根川流域沿いに分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、本遺跡以外では市東部で集落跡が確認されている。古墳は、市指定史跡である横塚山古墳（F：奈良古墳群）があり、B種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部削平されている。後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は大規模になり、低地上にも多数出現する。そして、これらは、奈良・平安時代へと継続するものが多い。妻沼地区では、飯塚南遺跡、道ヶ谷戸遺跡（23）などがある。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地や低地上に築造されている。妻沼地区では、飯塚古墳群（B）のほかに、摩多利神社古墳（A）や王子古墳（C）など単独のものもあるが、おそらく周辺に未確認の古墳が群在すると思われる。古墳群は、概ね６世紀から７世紀末ないし８世紀初頭にかけて築造されたが、埴輪を持たない末期の古墳群には在家古墳群（H）、籠原裏古墳群（Ⅰ）などがある。市内の古墳群で特筆すべきは、籠原裏古墳群で墳形が八角形を呈する古墳が検出されたことなどが挙げられ、後述する深谷市幡羅遺跡（109）や熊谷市西別府祭祀遺跡（51）、西別府廃寺（54）などの郡家や郡家に関連する遺跡と時期的・地理的に近い関係にあり、



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

№.	遺　跡　名	時　　代	№.	遺　跡　名	時　　代
	熊　谷　市		63	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
1	緑川遺跡	弥生末､古墳前・中・後、奈良・平安、近世	64	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世
2	観音堂瓦窯跡	平安、中世	65	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安
3	永井太田北廓遺跡	古墳後、奈良・平安、近世	66	西通遺跡	古墳後
4	永井太田西浦遺跡	古墳前、奈良・平安	67	東通遺跡	古墳後
5	雉子尾遺跡	古墳後、奈良	68	横塚遺跡	古墳前、平安
6	大我井遺跡	古墳前、奈良・平安、中世	69	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
7	池ノ上遺跡	古墳後	70	奈良氏館跡	平安末～中世
8	飯塚北遺跡	古墳後、奈良・平安	71	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
9	本新田遺跡	古墳後	72	別府三丁目遺跡	奈良・平安
10	前新田遺跡	古墳後、奈良・平安	73	籠原裏遺跡	旧石器、縄文前・中、古墳後、平安、中・近世
11	藤屋敷遺跡	古墳後、奈良・平安	74	在家遺跡	古墳後、奈良・平安
12	飯塚遺跡	弥生中	75	五反畑遺跡	中世
13	年代遺跡	古墳後	76	玉井陣屋跡	平安末～中世
14	彦松西遺跡	古墳後、奈良	77	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
15	彦松遺跡	古墳後、奈良・平安	78	水押下遺跡	古墳後
16	彦松東遺跡	古墳前、奈良・平安	79	稲荷木上遺跡	古墳後
17	中西原遺跡	奈良・平安	80	下河原中遺跡	奈良・平安
18	踏切遺跡	平安	81	下河原上遺跡	近世
19	八幡木遺跡	古墳後、奈良	82	本代遺跡	古墳後、近世
20	飯塚南遺跡	縄文後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世	83	東浦遺跡	古墳前、平安
21	羽黒遺跡	古墳後	84	拾六間後遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
22	道ヶ谷戸条里遺跡	奈良	85	三ヶ尻遺跡	縄文前～後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世
23	道ヶ谷戸遺跡	古墳後、平安	86	樋の上遺跡	縄文前～後、古墳後、奈良・平安、中・近世
24	中浦遺跡	奈良・平安	87	若松遺跡	中・近世
25	弥藤吾新田遺跡	古墳前、奈良・平安	88	黒沢館跡	中世
26	一本杉遺跡	古墳後、中・近世	89	東遺跡	平安、中世
27	下宿遺跡	古墳後	90	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
28	杉之道遺跡	古墳後、奈良・平安	91	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
29	王子西遺跡	古墳後、奈良・平安	92	天神前遺跡	古墳中・後、中世
30	堀ノ内遺跡	縄文後、古墳後	93	兵部裏屋敷跡	中世
31	釜ノ上遺跡	奈良	94	田角遺跡	平安
32	長井庵遺跡	古墳後	95	御蔵場跡	近世
33	出口北遺跡	古墳後	96	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世
34	出口南遺跡	古墳後	97	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世
35	東嬉愛遺跡	奈良・平安	98	肥塚館跡	中世
36	西嬉愛遺跡	古墳後、奈良・平安	99	出口下遺跡	古墳後
37	高林遺跡	古墳後、奈良・平安	100	八幡山遺跡	古墳
38	実盛館	平安		深　谷　市	
39	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	101	砂田遺跡	古墳中・後、平安、中世
40	西城切通遺跡	縄文後	102	柳町遺跡	古墳中・後、奈良・平安、中世
41	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	103	城北遺跡	古墳後、平安
42	鷺ヶ谷戸遺跡	奈良・平安	104	居立遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
43	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	105	前遺跡	古墳前、奈良・平安、中・近世
44	鵜森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	106	原遺跡	縄文後・晩、古墳後
45	西城城跡	平安	107	東川端遺跡	古墳前・後、奈良・平安
46	入川遺跡	縄文後、古墳前・後	108	清水上遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前・後、奈良・平安
47	根絡遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	109	幡羅遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
48	横間栗遺跡	縄文後､弥生前･中､古墳前･中､奈良･平安､近世	110	下郷遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安
49	関下遺跡	縄文中、弥生中、古墳後		古　墳　群	
50	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良・平安	A	摩多利神社古墳	古墳後
51	西別府祭祀遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	B	飯塚古墳群	古墳後
52	西方遺跡	奈良・平安、中・近世	C	王子古墳	古墳後
53	西別府遺跡	古墳後、奈良・平安	D	上江袋古墳群	古墳後
54	西別府廃寺	古墳後、奈良・平安、中・近世	E	乙鵜森古墳群	古墳後
55	西別府館跡	平安末～中世	F	奈良古墳群	古墳中期後～末
56	石田遺跡	縄文中・後、弥生中、古墳前	G	別府古墳群	古墳後
57	別府条里遺跡	奈良・平安	H	在家古墳群	古墳末
58	大竹遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	I	籠原裏古墳群	古墳末
59	埋鳥遺跡	縄文中、奈良・平安	J	玉井古墳群	古墳後
60	別府城跡	平安、中世	K	原島古墳群	古墳後
61	別府氏館跡	平安末～中世	L	石原古墳群	古墳後
62	寺東遺跡	縄文前～後	M	肥塚古墳群	古墳後～末

注目に値する古墳群と言える。

律令体制の始まる奈良・平安時代において本地域周辺一帯は、武蔵国幡羅郡に属する。上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市北部及び西部、深谷市東部を含む一帯が該当すると考えられている。櫛挽台地北東端に立地する深谷市幡羅遺跡では、平成 13 年度に郡家の正倉と推定される総柱掘立柱建物跡が確認されて以来、幡羅郡家推定地として確認調査が実施されており、これまでに多数の大型掘立建物跡や区画大溝などが確認されている。幡羅遺跡の東側に所在する熊谷市西別府廃寺は、８世紀初頭に創建された県内でも古い寺院であり、平成２・４年度に実施された発掘調査では、瓦溜り状遺構、基壇跡、区画溝など検出されている。出土した瓦には９世紀後半まで下るものもみられ、寺院は平安時代まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、西別府廃寺北西の櫛挽台地縁辺部に位置する。現在は湯殿神社となっているが、昭和 38 年度及び平成４年度に実施した発掘調査では、神社裏の湧水堀から土師器、須恵器の他に人形、馬形、櫛形、勾玉形、剣形、有線円板形などの滑石製模造品が多数検出されており、これらは水辺の祭祀に用いられたと考えられている。平成４年度の発掘調査では、古墳時代末から平安時代でも末期に位置づけられる土器群が多数検出されており、祭祀が平安時代の終わり頃まで存続していたことが確認されている。熊谷市西別府廃寺及び西別府祭祀遺跡、そして深谷市幡羅遺跡は、時間的・空間的に密接な関係にあったことは明白である。郡庁は未だ確認できていないが、この地域一帯が当時の中心地であったことが徐々に明らかになってきている。その成果から、幡羅遺跡と西別府祭祀遺跡は、平成 30 年２月に「幡羅官衙遺跡群」の名称で県内初の官衙遺跡として国の史跡に指定されている。

集落は、前述のとおり、古墳時代後期以降継続する遺跡が多く、かつ規模の大きいものが多い。妻沼地区では、飯塚北遺跡（８）、鵜森遺跡（44）などがあり、前者では、埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって行われた発掘調査の結果、竪穴住居跡約 300 軒、掘立柱建物跡約 40 棟と膨大な数の遺構が検出されており、大規模集落であったことが判明している（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005･2006）。そして、一部の竪穴住居跡からは、円面硯の圏足硯の破片や鉸子、帯金具、石製丸鞆などの帯金具一式が出土し、９世紀中葉～ 10 世紀前半の土坑からは、施釉陶器が多数出土していることから一般的な集落とは言えない規模・内容を持っている。

集落以外では、道ヶ谷戸条里遺跡（22）、別府条里遺跡（57）など後背湿地を利用した生産遺跡が分布するが、詳細については不明と言わざるを得ない。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも館跡が多数みられる。市北部の妻沼地区では、実盛館（38）、西城城跡（45）、東城城跡（地図未掲載）、市西部では西別府館跡（55）、別府氏館跡（61）、奈良氏館跡（70）などがあるが、その実態は不明なものが多い。市西部の東別府地区にある別府城跡（60）は、現在、東別府神社として鎮座しているが、現在も土塁と空堀が一部残っている。三ヶ尻地区では、中世の遺構・遺物が比較的多く確認されている。中でも黒沢館跡（88）は発掘調査の結果、出隅を持ち全周する堀と土塁、虎口などが検出され、江戸時代に渡辺崋山が記した文献『訪瓩録（ほうちょうろく）』所収の「黒沢屋敷」の記述と発掘調査成果が合致するという大変貴重な例である。館跡以外では、妻沼地区に所在する大我井遺跡出土の経塚４基が著名であり、最古の経筒には「久安」（1145 ～ 1151 年）の紀年銘が残っている。近年、水口氏が再検

討を加えており、中世墓と埋経遺構の複合遺跡と推測している（水口 2006）。同じく妻沼地区の観音堂瓦窯跡（２）は、低地に築かれた有牀式平窯であり、縄目・布目の平瓦が検出されているが、供給先も含め不明な点が多い。また、本遺跡のすぐ南側に所在する国宝「歓喜院聖天堂」、国指定重要文化財「貴惣門」を有する歓喜院長楽寺は、治承三年（1179 年）に斎藤別当実盛公による白髪神社の改修・合祀を端緒とし、建久八年（1197 年）に良心僧都によって、別当聖天山歓喜院長楽寺として建立されたものとされている。

中世段階については、館跡などを中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。そして、近世段階についても同様であり、市内ではいくつかの確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ　遺跡の概要

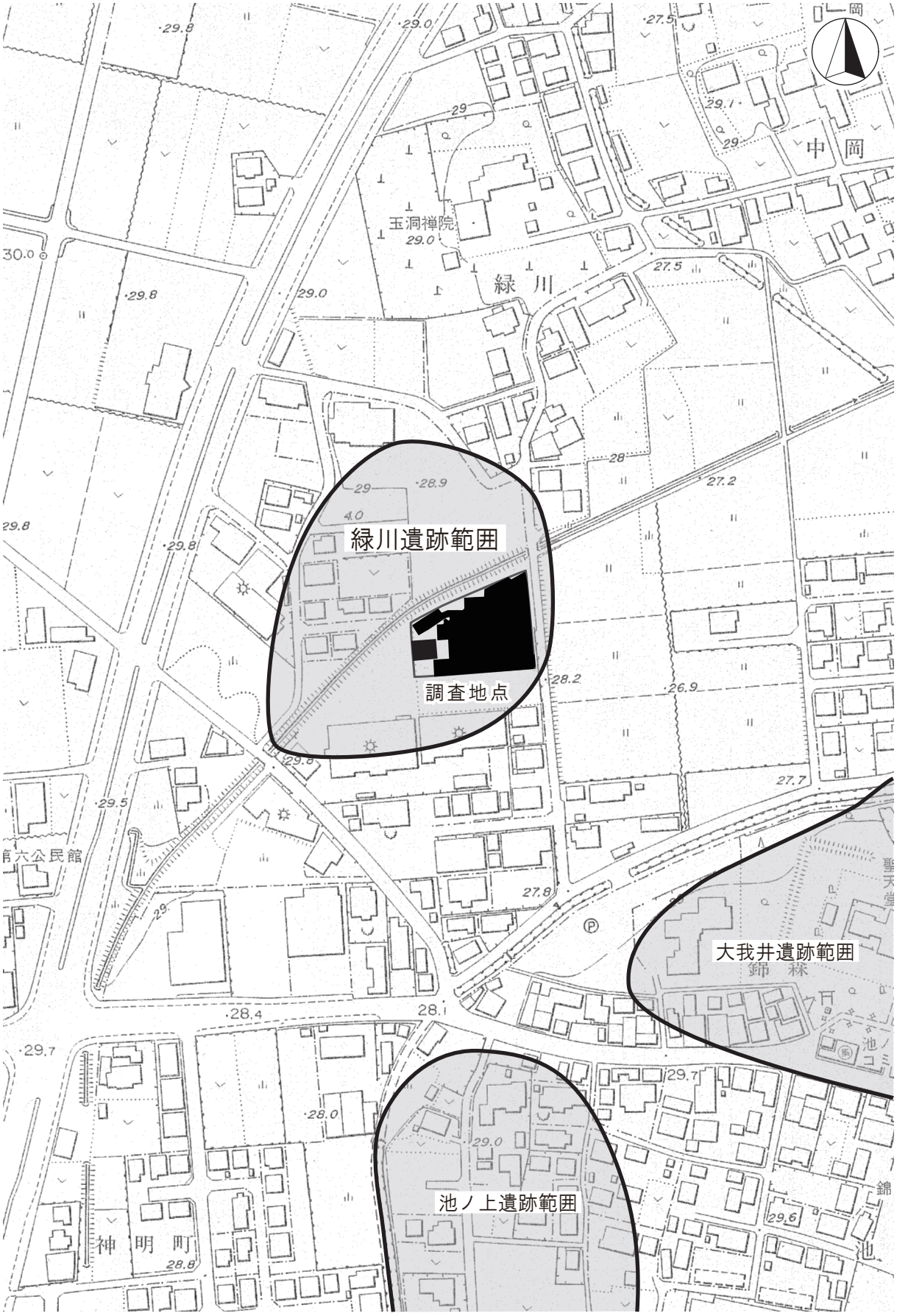
1　調査の方法

発掘調査は、遺構掘削に伴う排出土の置場を確保するため、調査区東側 2/3 から着手した。調査は、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後、人力により遺構確認作業を行った。そして、遺構の手掘り、実測、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行い、概ねこれらの作業が終了した段階で、残りの調査区 1/3 に着手し、上記の作業を順次行っていった。なお、実測作業を行うにあたっては、調査区内に世界測地系に基づく国家座標に合わせた一辺５ｍのグリッド方式を用いて、東西方向を西からアルファベットでＡからＬまで、南北方向を北からアラビア数字で１から 10 までグリッドの設定を行い、交点の杭を基準に水糸で１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法に電子平板を併用して行った。

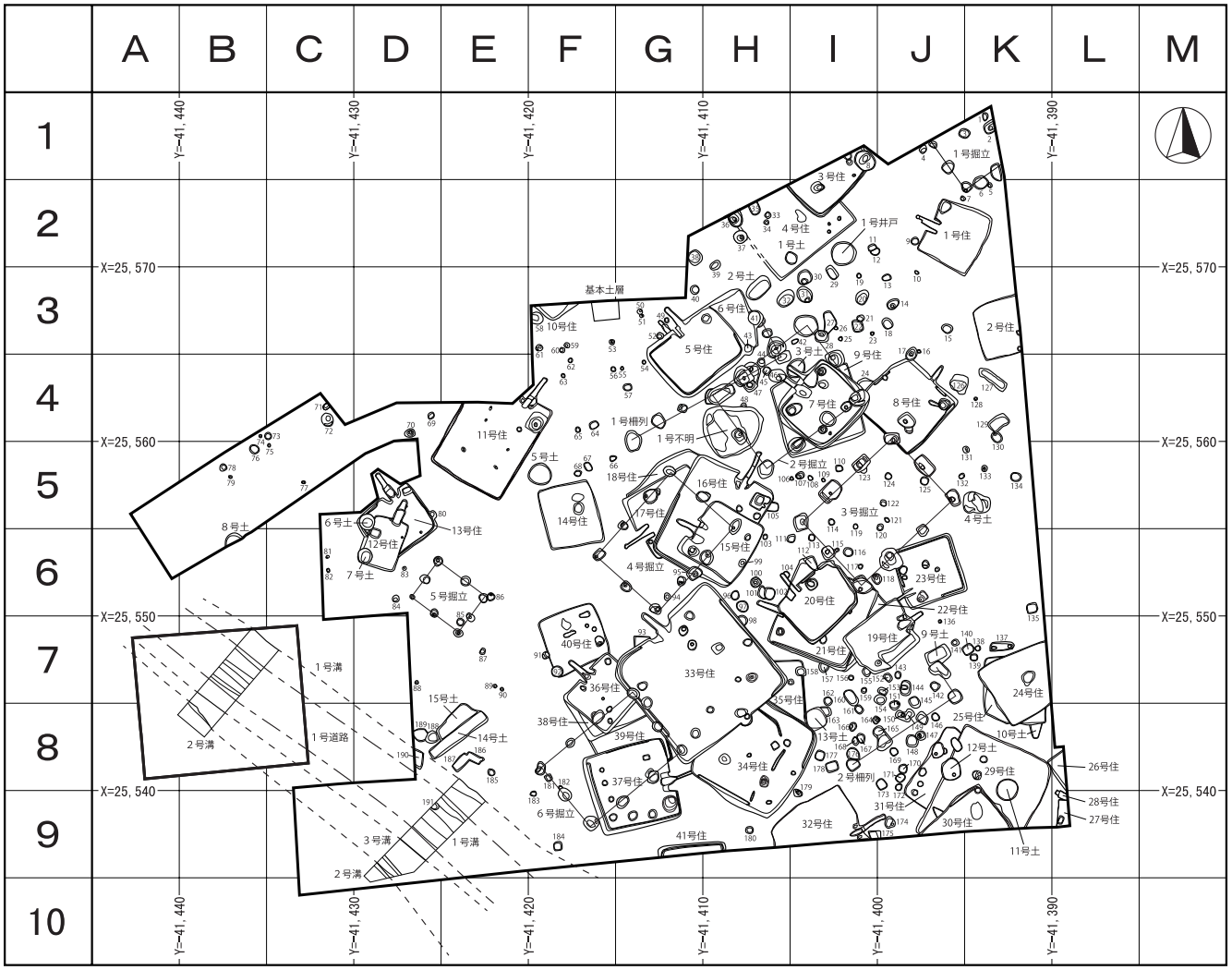
2　検出された遺構と遺物

緑川遺跡における発掘調査は、今回が初となる。遺跡は、東西約 90 ｍ、南北 100 ｍの範囲に広がっており、報告する地点は、遺跡範囲南東部にあたる（第３図）。検出された遺構は、住居跡 41 軒、掘立柱建物跡６棟、柵列跡２列、溝跡３条、道路跡１条、土坑 15 基、井戸跡１基、性格不明遺構１基、ピット 191 基である（第４図左）。調査面積は、1,450 ㎡である。遺構は、調査区ほぼ全面から検出されたが、地形的に高い中央付近から東側に集中しており、緩やかに下る西側は希薄である。基本土層は、調査区中央北側で確認したが、ほぼ全面において同様の層位を確認した。詳細については、第４図右のとおりであるが、遺構確認面まで 20 ㎝程と妻沼低地では非常に浅い。また、確認面となる明黄褐色土以下の土層は、関東ローム層に似ており、極めて強固なものであった。

住居跡は、41 軒と多数検出された。調査区西側を除き、ほぼ全面に位置する。掘り込みが深く、残存状況の良好なものが多いが、重複が激しく、また一部のみ調査したものもあるため、時期の特定が困難なものもある。時代･時期は、弥生時代末からやや空白期間を持ちながら平安時代まで続く。内訳は、可能性が高いものも含めて、弥生時代末から古墳時代前期までが９軒、古墳時代中期が６軒、古墳時代後期が 19 軒、奈良・平安時代４軒であり、古墳時代後期が最も多い。なお、残りの３軒については、具体的な時代・時期は不明である。平面形は方形を呈し、規模は概ね約４ｍ四方のものが多いが、古墳時代後期の第 33 号住居跡は、７ｍ四方を測り、本報告の中で最も大きい。古墳時代中期以降のものは、カマドを持つが、地山が強固であったことから、煙道部の天井部が残存するものが多数みられた。出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、土製品（土玉、土錘、支脚）、鉄製品（釘、刀子など）、石製品（砥石、凹石、磨石、紡錘車、石製模造品など）がある。弥生時代末から古墳時代前期については、第 24 号住居跡から完形品はないが、土器がややまとまって出土している。また、流れ込みで縄文時代後期後葉の高井東式の土器片も出土した。古墳時代中期は、第８･23 号住居跡から土器が大量に出土し、古式須恵器など良好な資料が得られた。古墳時代後期は、第１号住居跡をはじめ、多くの住居跡から土器を中心に多数の遺物が出土した。また、第 30 号住居跡では、残存状態が悪いため、粉々になってし

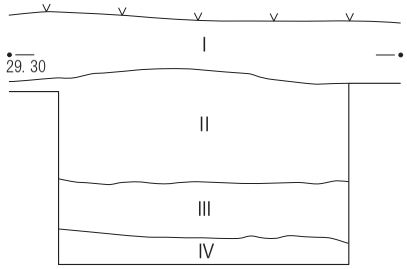


第３図　調査地点位置図



0 5m
1:400

基本土層



土層説明

Ⅰ　褐色土 10YR4/4：耕作土。しまり・粘性弱。φ２～５㎜大の黄褐色土塊、黄褐色土粒多量、炭化物微量含む。

Ⅱ　明黄褐色土 10YR6/8：確認面。しまり・粘性極強。上部にクラック有。

Ⅲ　黄褐色土 10YR5/6：Ⅱ層と同じ黄褐色土層であるが、色調やや暗い。

Ⅳ　にぶい黄褐色土 10YR5/4：Ⅱ・Ⅲ層より粘性さらに強。

0 1m
1:40

第４図　調査区全測図・基本土層図

まったが、琥珀玉が出土した。奈良・平安時代は、残存状態は良好ではないが、時期を特定し得る土器が出土した。なお、古墳時代後期の第16号住居跡からは、流れ込みであるが、奈良・平安時代の須恵器円面硯の破片が出土した。

掘立柱建物跡は、６棟検出された。住居跡同様、調査区西側を除いたほぼ全面に位置するが、特に中央付近に集中する。いずれもほぼ同軸方向を向くが、大型の第１～４・６号掘立柱建物跡が２×３の東西棟、小振りの第５号掘立柱建物跡が２×２の南北棟である。出土遺物は、土器の小片が多いが、第１・２・６号掘立柱建物跡からは、流れ込みのものも含め、図示可能なものがみられた。時期については、出土遺物や他の遺構との新旧関係などから、すべて奈良・平安時代と思われる。

柵列跡は、２列検出された。いずれもＬ字状を呈し、掘立柱建物跡とほぼ同軸方向を向く。調査区北側中央と南東部に位置するが、周辺にはピットや土坑が多数あり、柱筋を捉えきれなかった掘立柱建物跡になる可能性もある。出土遺物は、土器の小片のみであり、図示可能なものはみられないが、時期は掘立柱建物跡と同じく奈良・平安時代と思われる。

溝跡は、３条検出された。掘り込みが深いため、調査後に行う住宅建設工事に際して影響を与えてしまうことや近世の遺構であることから、トレンチ２箇所のみの調査とした。すべて調査区西側に位置しており、重複しながら南東から北西方向に走る。最も古いのが第３号溝跡、次いで第２号溝跡、最も新しいのが第１号溝跡であり、第１号溝跡は、人為的に埋め戻されて道路跡が敷設されている。出土遺物や覆土に浅間Ａ軽石が含まれていることから、時期は江戸時代と思われる。なお、出土遺物には、古墳時代後期、平安時代、中世段階のものも流れ込みで少数出土している。

道路跡は、調査区西側で１条確認された。前述のとおり、第１号溝跡を埋め戻して溝跡と同方向に敷設されている。出土遺物はないが、重複する溝跡との新旧関係や明治時代初期に作成された迅速図上の道路とラインがほぼ一致することから、時期は近代と思われる。

土坑は、15基検出された。特に偏在すること無く、調査区ほぼ全面に散在する。平面形は円形と方形があるが、前者が多い。時期は不明なものが多いが、出土遺物や重複する遺構との新旧関係などから、検出された他の遺構と同じ時代･時期に収まると思われる。なお、第14号土坑では、流れ込みであるが、古墳時代後期の円筒埴輪片が出土している。

井戸跡は、調査区北東部で１基検出された。安全面を考慮し、調査は確認面から1.5ｍ程の深さまでとした。円形の素掘りで井戸枠などはみられなかった。伴う遺物はないが、時期は、覆土に浅間Ａ軽石が含まれていることから、江戸時代と思われる。

性格不明遺構は、調査区中央北側で１基検出された。長軸・短軸ともに３ｍ前後の不整形を呈し、人為的に埋め戻されていた。出土遺物は、古墳時代後期から奈良・平安時代までの須恵器・土師器があるが、時期は、重複する遺構との新旧関係から平安時代以降と思われる。

ピットは、191基確認された。調査区ほぼ全面にみられるが、西側は希薄であり、大半は東側に集中する。東側のものについては、柱筋を捉えきれなかった掘立柱建物跡の掘り方になる可能性もある。時期を特定できるものは少ないが、概ね検出された遺構の時代・時期に収まると思われる。

遺構外出土遺物は、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の須恵器・土師器、古墳時代後期以降の須恵器、土製支脚、土錘がある。数は少ないが、検出された遺構の時代・時期と合致する。

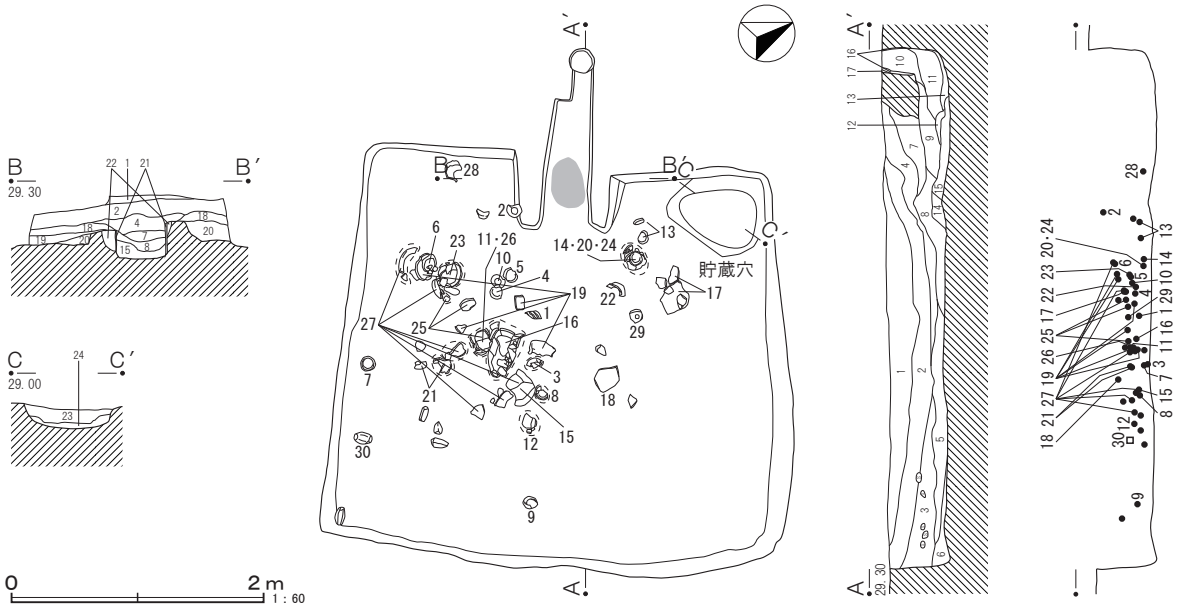
Ⅳ　遺構と遺物

1　住居跡

第１号住居跡（第５図）

調査区北東端のＪ－２、Ｋ－２・３グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 3.58 m×短軸 3.29 m、床面積 9.16 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.48 mである。主軸方向は、Ｎ－ 67°－Ｗを指す。重複は無く、遺存状況は、極めて良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

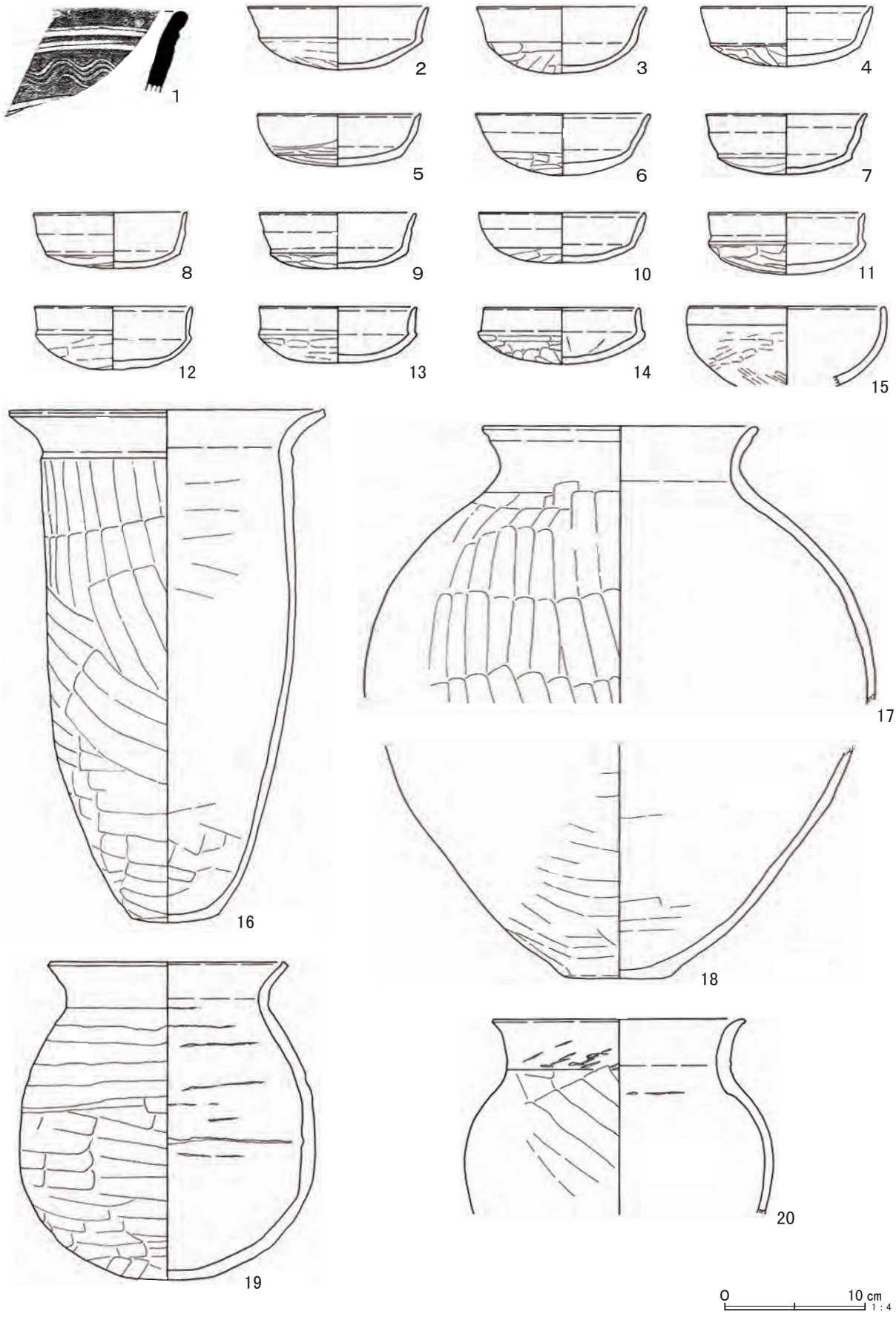
カマドは、北西壁中央に付設されている。燃焼部の 1/4 が壁外へ張出し、掘込みは床面から深さ 0.11 mである。燃焼部内の火床面は、被熱で黄褐色の地山が赤褐色に変化している。袖部は、地山を造りだし、内壁に白色粘土を貼り付けている。内壁は、弧状に膨らむことなく、0.42 mの同一幅で焚口まで直線的に伸びる。煙道部は、地山を刳り抜き、1.30 m壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。煙出しの平面形は、径 0.22 mの円形である。



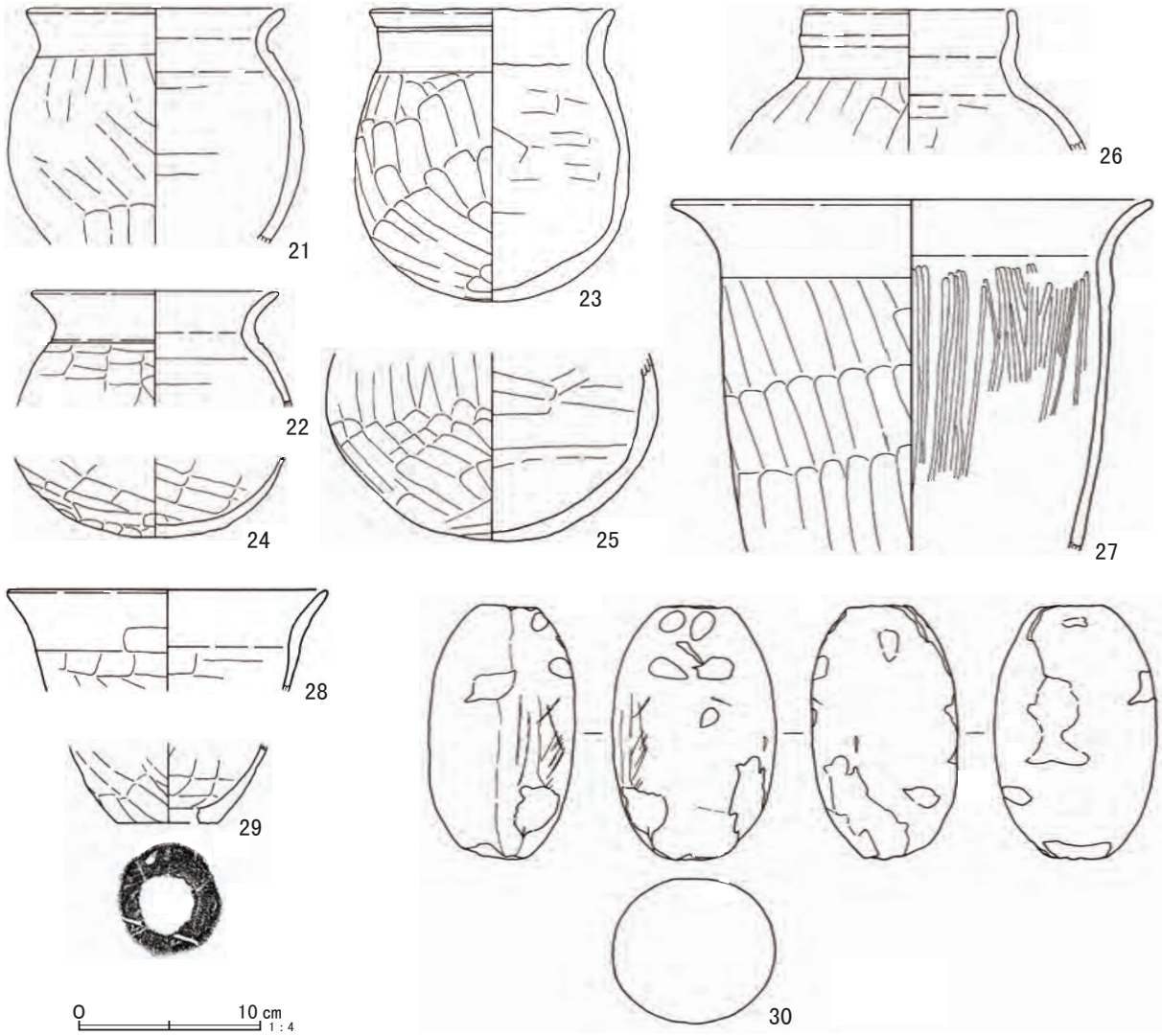
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′）

1　暗褐色土 10YR3/3：しまり強。粘性弱。φ２～５㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒、炭化物微量含む。
2　暗褐色土 10YR3/4：φ５～ 10 ㎜大の黄褐色土塊、焼土粒、炭化物少量含む。
3　褐色土 10YR4/6：しまり・粘性強。φ５～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
4　暗褐色土 10YR3/4：しまり・粘性強。φ２～ 10 ㎜大の黄褐色土塊、焼土塊少量含む。
5　褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
6　明褐色土 7.5YR5/6：しまり・粘性強。黄褐色土粒主体。焼土粒、炭化物微量含む。
7　褐色土 10YR4/6：しまり・粘性弱。黄褐色土塊、焼土粒少量含む。
8　にぶい黄褐色土 10YR5/4：φ５～ 20 ㎜大の焼土塊、炭化物少量含む。
9　褐色土 7.5YR4/4：しまり・粘性強。黄褐色土塊多量、焼土塊少量含む。
10　褐色土 7.5YR4/3：しまり・粘性弱。黄褐色土粒多量、焼土粒少量含む。煙出し部。
11　暗赤褐色土 2.5YR3/3：しまり・粘性弱。焼土粒、炭化物多量含む。
12　明赤褐色土 2.5YR5/8：φ５～ 20 ㎜大の焼土塊多量含む。天井部崩落土。
13　赤色土 10R4/6：φ５～ 20 ㎜大の焼土塊多量含む。
14　暗赤褐色土 2.5YR3/4：しまり・粘性弱。φ５～ 20 ㎜大の焼土塊多量、炭化物少量含む。焚口部。
15　暗赤色土 10R3/6：しまり・粘性無。灰多量、焼土塊、炭化物少量含む。燃焼部。
16　橙色土 2.5YR6/6：煙道部の地山に貼付けた 10 ～ 20 ㎜の灰白色土粘土が被熱で色調変化。
17　褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒、焼土粒少量含む。煙道部の地山が被熱で色調変化。
18　暗褐色土 10YR3/3：黄褐色土塊、炭化物少量含む。
19　暗褐色土 10YR3/4：黄褐色土塊、炭化物少量含む。
20　褐色土 10YR4/4：φ５～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
21　橙色土 2.5YR7/8：袖部内壁に貼付けた 10 ～ 15 ㎜の灰白色土粘土が被熱で色調変化。
22　赤橙色土 10R6/8：袖部の地山が被熱で色調変化。
23　褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
24　暗褐色土 10YR3/4：φ２～５㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。

第５図　第１号住居跡



第６図　第１号住居跡出土遺物（１）



第７図　第１号住居跡出土遺物（２）

床面は、ほぼ平坦であり、カマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。

ピットは、北隅に深さ0.18 mの浅いピット１があるのみである。その位置から貯蔵穴とみられる。

壁溝・掘り方は、確認されなかった。

本住居跡からは、残存状態の良好な古墳時代後期の遺物が多数出土した。出土位置は、貯蔵穴南側と床面中央付近から南西側にかけて集中するが、大半は廃絶後に廃棄されたものとみられ、時期差を持つものが混在する。

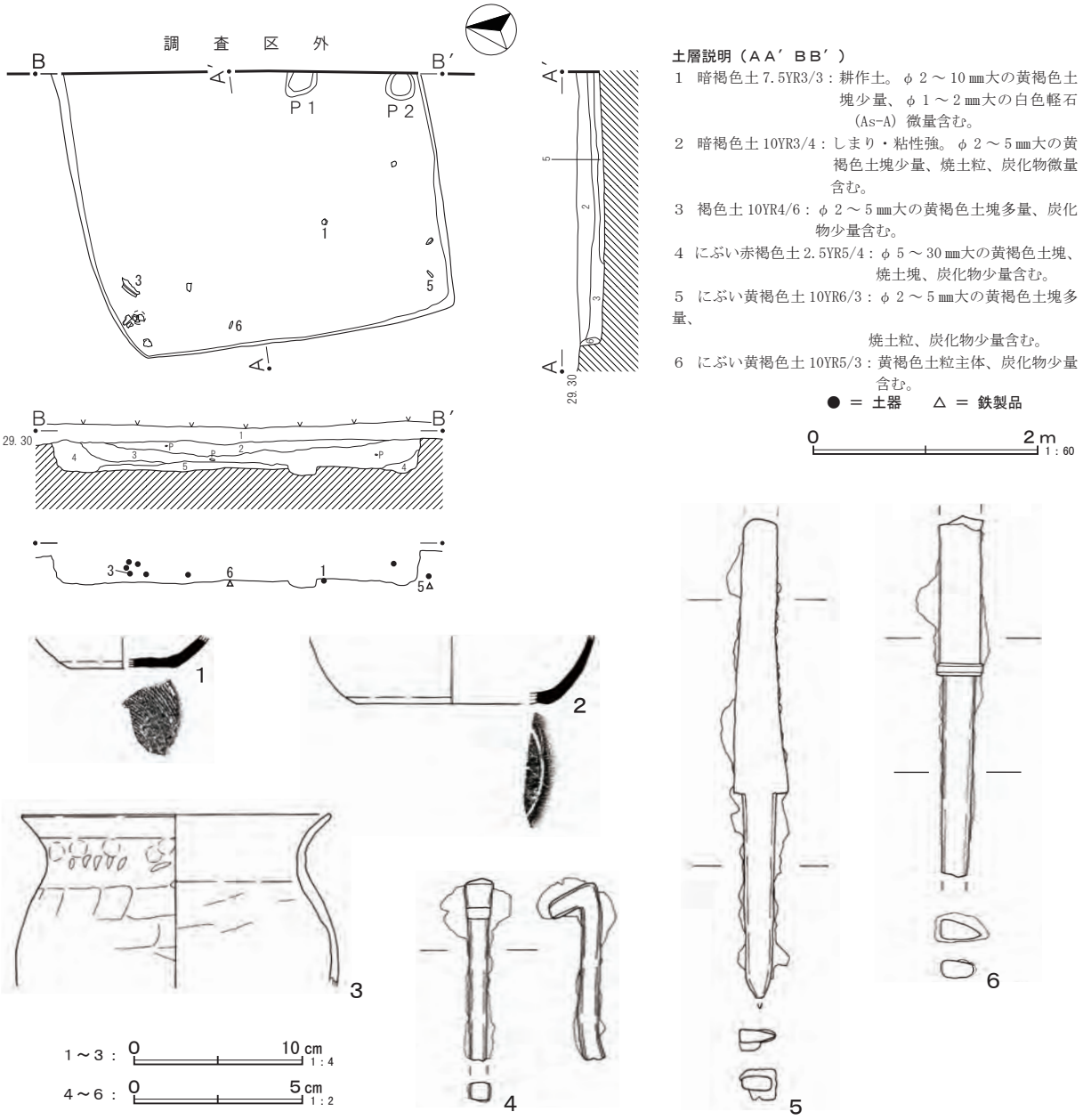
出土遺物（第６・７図）は、須恵器甕（１）、土師器坏（２～15）、甕（16～25）、壺（26）、甑（27～29）、不明石製品（30）がある。

１は、須恵器大甕の口縁部片である。ロクロナデ調整後、外面に二本一組の沈線二条と櫛歯状工具によるやや緩い波状文が巡る。内外面に自然釉が付着している。産地不明である。２～14は、土師器模倣坏である。いずれも体部と底部の境に稜を持つが、５・６･10はやや不明瞭である。２～５と11～13は坏蓋模倣坏であるが、前者は口縁部が外に開き、後者は口縁部がほぼ直立する。後者は、前者よりも古い様相を呈する。６～10は、有段口縁坏である。浅身のものが多く、坏蓋模倣坏２～５と同

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎 土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	-	-	-	AB	灰色	B	口縁部片	産地不明。内外面自然釉付着。
2	土師器　坏	12.7	4.5	-	ABDIK	橙色	B	90%	外面やや摩耗。
3	土師器　坏	(12.0)	4.8	-	ABCIK	橙色	B	50%	
4	土師器　坏	12.2	4.3	-	ABDEIK	外：にぶい橙 内：橙	B	70%	
5	土師器　坏	(11.6)	3.8	-	ABEIK	橙色	B	50%	
6	土師器　坏	12.4	4.4	-	ABDIKN	橙色	B	90%	内外面やや摩耗。
7	土師器　坏	11.4	4.3	-	ABCDHIKN	橙色	B	ほぼ完形	
8	土師器　坏	(10.8)	4.0	-	ABDEIK	明赤褐色	B	70%	
9	土師器　坏	11.2	4.0	-	ABIKN	明赤褐色	B	70%	
10	土師器　坏	11.8	3.6	-	ABDIK	橙色	B	90%	
11	土師器　坏	11.1	4.4	-	ABCIKN	明赤褐色	B	90%	
12	土師器　坏	11.2	4.5	-	ABCIK	橙色	B	70%	内外面摩耗顕著。
13	土師器　坏	11.2	4.0	-	AEHIK	黒褐色	B	完形	外面摩耗顕著。
14	土師器　坏	11.2	4.0	-	ABIK	灰褐色	B	ほぼ完形	内面ヘラ描き放射状暗文有。
15	土師器　坏	(14.2)	(5.6)	-	ABDIK	橙色	B	口～体 30%	外面摩耗顕著。
16	土師器　甕	22.4	36.7	6.2	ABDEHKN	浅黄橙色	B	90%	内面摩耗顕著。
17	土師器　甕	(19.6)	(19.8)	-	ABDIK	橙色	B	口～胴 30%	胴部内面剥離顕著。№18 と同一個体。
18	土師器　甕	-	(16.5)	7.4	ABDIK	橙色	B	胴～底 40%	内外面摩耗顕著。№17 と同一個体。
19	土師器　甕	(17.1)	22.6	-	ABCGIKN	にぶい褐色	B	70%	胴上部内外面輪積痕有。
20	土師器　甕	(18.0)	(13.8)	-	ABDGIK	灰黄褐色	B	口～胴 25%	胴上部内面輪積痕有。
21	土師器　甕	14.2	(13.0)	-	ABDIK	浅黄橙色	B	口～胴 90%	胴部外面摩耗顕著。
22	土師器　甕	13.6	(6.3)	-	ABDIKM	橙色	B	口～胴 90%	
23	土師器　甕	(13.5)	16.1	-	ABKN	にぶい橙色	B	50%	
24	土師器　甕	-	(4.4)	-	ABDKN	明赤褐色	B	胴～底 60%	
25	土師器　甕	-	(10.4)	-	ABCIK	淡黄色	B	胴～底 80%	胴下部内面輪積痕有。
26	土師器　壺	(11.6)	(7.7)	-	ABDIK	浅黄橙色	B	口～胴 40%	
27	土師器　甑	26.6	(19.4)	-	ABCDHKN	にぶい褐色	B	口～胴 70%	胴部内面下位摩耗顕著。
28	土師器　甑	(17.6)	(5.6)	-	ABDIKM	にぶい褐色	B	口～胴 95%	
29	土師器　甑	-	(4.4)	5.6	ABDKM	にぶい黄橙色	B	胴～底 80%	外面摩耗顕著。
30	不明石製品	最大長 14.0 ㎝、最大幅 9.0 ㎝、最大厚 8.0 ㎝。重量 1,248g。安山岩。所々剥離。							

時期のものであろう。14 は坏身模倣坏であるが、口縁部の内傾が小さい。調整は、口縁部が横ナデ、体部以下はヘラ削りである。内面にヘラ描きによる放射状暗文が間隔を空けて施文されている。15 は、半球形を呈する土師器坏である。口縁部が直立し、体部は内湾する。底部を欠く。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部は、摩耗が著しいが、ヘラミガキである。16 は、土師器長胴甕である。最大径を持つ口縁部が外反し、端部はやや受け口状を呈する。胴部は、ほぼ直線的で、底部に向かって緩やかにすぼまる。底部は、平底に近いが、中央がやや出っ張る。17 ～ 25 は、土師器丸胴甕である。全形の分かるものは少ないが、法量・器形にバラエティがある。いずれも口縁部がくの字状を呈するが、端部はやや外反するものが多い。17・23 は、口縁端部に段を持つ。胴部は、球形を呈するものが多く、中段に最大径を持つ。底部は、18 のみ平底、その他は丸底である。器壁の厚いものが多い。大型の 17･18 は、接合関係はみられないが、同一個体である。19 は、胴部が長胴化する前段階の器形を呈することから、古い様相を呈する。小型の 21 ～ 23 は、口径と胴部最大径があまり変わらず、胴部の膨らみが弱い。甕の調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。19 は、胴上部内外面に輪積痕が明確に残る。20 は、口縁部外面にヘラによる刻みを複数持つ。26 は、土師器壺である。受け口状を呈する有段口縁部がほぼ直立し、胴部は中段以下を欠くが、大きく膨らむ。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。27 ～ 29 は、土師器甑である。27・28 は、口縁部が大きく外反する器形から甑としたが、小振りの 28 は、鉢の可能性もある。いずれも胴部中段以下を欠く。29 は、胴下部から底部にかけての部位であり、底面中央に孔を持つ。調整は、



第８図　第２号住居跡・出土遺物

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器　坏	-	(1.9)	(6.4)	ADHLN	褐灰色	B	体～底 25%	末野産。
2	須恵器　椀	-	(4.2)	(11.0)	ABL	灰白色	B	体～底 20%	末野産。
3	土師器　甕	(18.5)	(10.3)	-	ABCIK	橙色	B	口～胴 25%	
4	鉄　釘	最大長 (5.4) ㎝、最大幅 0.85 ㎝、最大厚 0.55 ㎝。重量 (13.5)g。頭部のみ残。							
5	鉄製刀子	最大長 (14.2) ㎝、最大幅 1.6 ㎝、最大厚 0.4 ㎝。重量 (31.1)g。刃部先端、柄基部欠。							
6	鉄製刀子	最大長 (10.8) ㎝、最大幅 1.4 ㎝、最大厚 0.9 ㎝。重量 (21.6)g。刃部先端、柄基部欠。							

口縁部が横ナデ、胴部外面はヘラ削りであるが、胴部内面は、27 がヘラミガキ、28･29 はヘラナデである。30 は、俵状を呈する不明石製品である。所々欠損しているが、一部に線状痕がみられた。

出土遺物のうち、大半は７世紀前半に相当するが、これらは住居廃絶後に廃棄されたと思われる。よって、本住居跡の時期は、古相を示す遺物の存在から６世紀前半と思われる。

第２号住居跡（第８図）

調査区北東端のＫ－３・４グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸3.24 m、短軸 2.51 m以上、床面積 7.85 ㎡以上、遺構確認面からの深さは 0.25 mである。主軸方向は、Ｎ－ 72°－Ｅを指す。東側は調査区外にあり、全体の 2/3 ほどの調査となった。遺存状況は概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、確認できなかったが、位置関係から東壁側に付設されているとみられる。床面は、ほぼ平坦であり、全体に軟弱である。東側で浅いピットが２基確認された。

壁溝・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物は、須恵器坏（１）、椀（２）、土師器甕（３）、鉄釘（４）、鉄製刀子（５・６）がある。出土量が僅少であり、残存状態も良好ではないものが多いが、出土位置は、南西隅及び北西隅付近に集中する。

１は須恵器坏、２は須恵器椀の体部から底部にかけての部位である。１は、底面に回転糸切痕が残り、２は回転ヘラ削りが施されている。いずれも末野産である。３は、土師器甕の口縁部から胴部中段までの部位である。口縁部がくの字状を呈し、胴部はやや膨らむ。調整は、口縁部に横ナデと指オサエが施され、ヘラによる刻みが等間隔に巡る。胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデである。４は、鉄釘である。頭部付近のみの検出である。角柱状を呈する。５・６は、鉄製刀子である。いずれも刃部中段以上及び柄部の端部を欠く。

本住居跡の時期は、８世紀末から９世紀初頭と思われる。

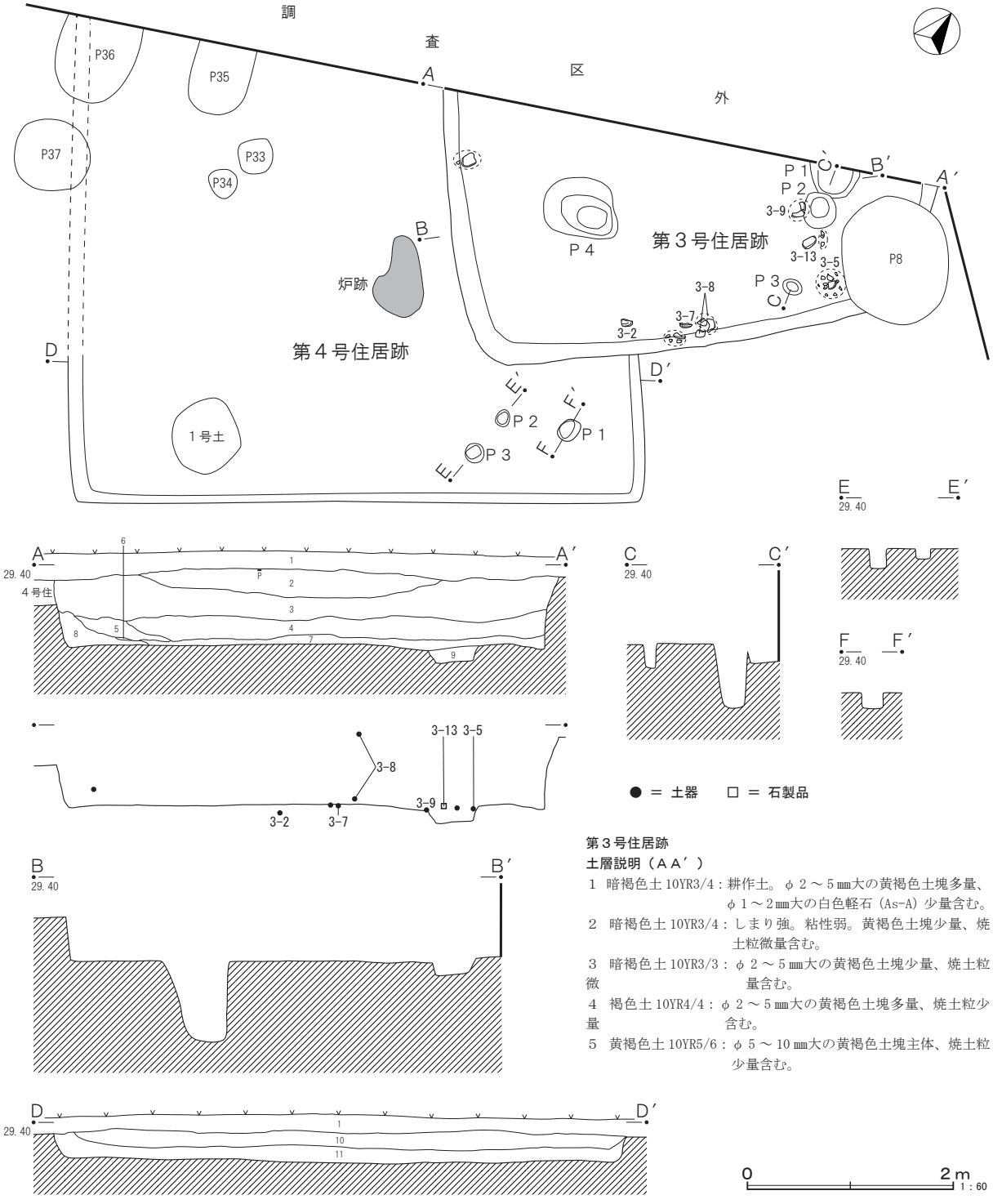
第３号住居跡（第９図）

調査区北東側のＩ－１・２グリッドに跨って位置する。平面形は、方形とみられる。規模の全容は不明であるが、長軸 4.57 m×短軸 2.56 m以上、遺構確認面からの深さは、0.73 mである。主軸方向は、Ｎ－ 45°－Ｗを指す。北側半分以上が調査区外にあり、西側で第４号住居跡を切り、東側でピット８に切られている。

床面は、ほぼ平坦であり、全体に軟弱である。ピットは４基確認され、ピット２は、0.60 mの深さである。カマド・壁溝・掘り方は、確認できなかった。

出土遺物（第 10 図）は、須恵器甕（１）、土師器坏（２～７）、甕（８～ 10）、高坏（11）、凹石・砥石（12）、砥石（13）がある。出土位置は、南壁際の床面直上に集中が見られる。

１は、須恵器甕の胴下部片である。調整は、タタキ後、内外面ともに横・斜位のヘラナデが施されている。南比企産である。流れ込みの可能性が高い。土師器坏は、２～６が坏身模倣坏、７は坏蓋模倣坏である。前者は、口縁部の内傾が強い。後者は、口縁部が外に開く。いずれも浅身で、口径は 12cm前後を測り、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は、７のみ平底に近いが、その他は丸底である。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。８～ 10 は、土師器丸胴甕である。全形の分かるものはないが、８は口縁部が外反し、胴部は中段以下を欠くが、大きく膨らむ。９は、口縁部の開きが小さく、器壁が厚い。胴上部以下を欠く。10 は底部で、底面に木葉痕が残る。調整は、口縁部が横ナデ、胴部から底部は、外面がヘラ削り、内面はヘラナデであるが、９は口縁部内外面に指オサエと輪積痕がみられた。11 は、土師器高坏の接合部から脚部にかけての部位である。調整は、外面



第３号住居跡
土層説明（ＡＡ′）

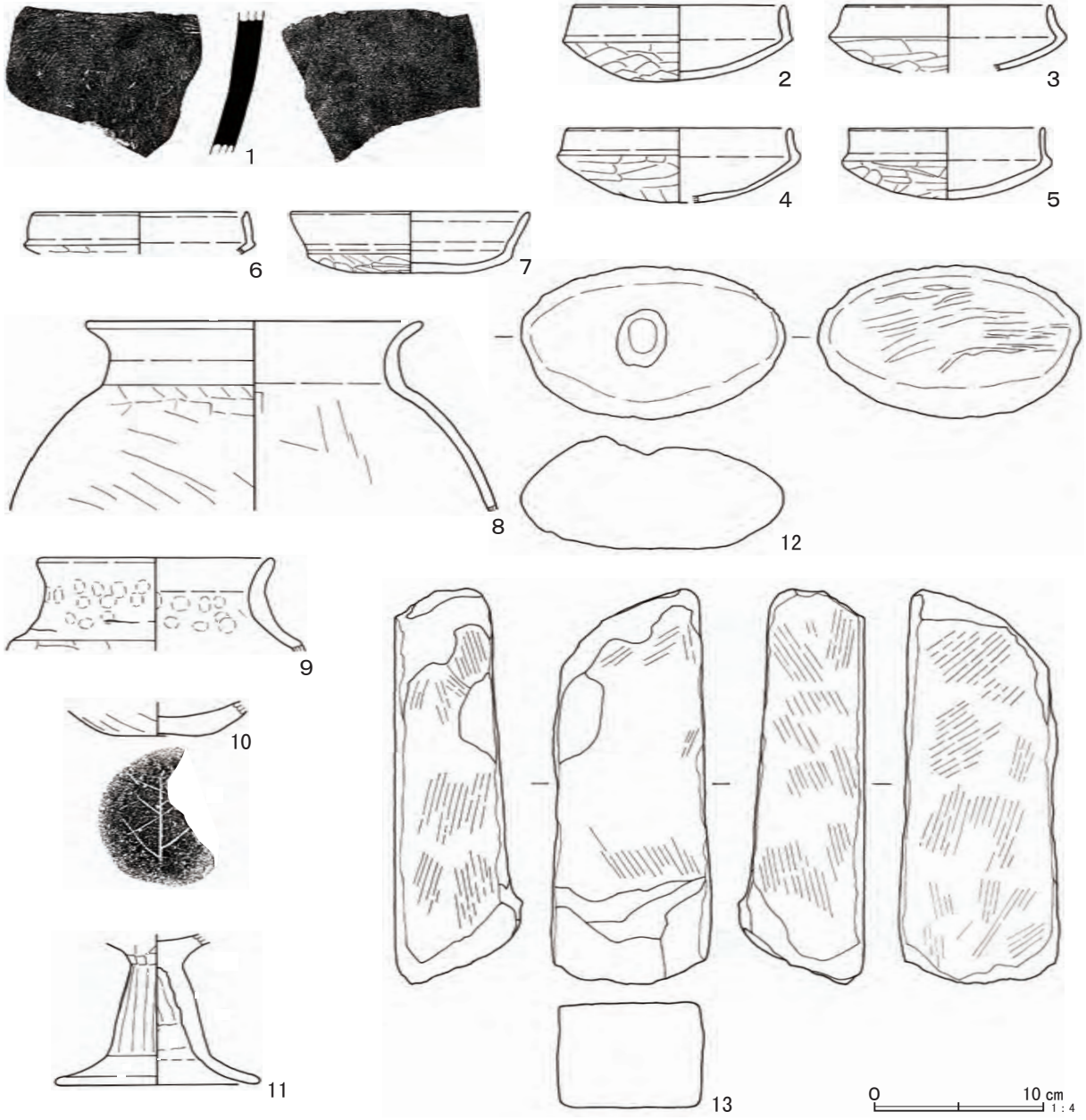
1　暗褐色土 10YR3/4：耕作土。φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量、φ１～２㎜大の白色軽石（As-A）少量含む。
2　暗褐色土 10YR3/4：しまり強。粘性弱。黄褐色土塊少量、焼土粒微量含む。
3　暗褐色土 10YR3/3：φ２～５㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒微量含む。
4　褐色土 10YR4/4：φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒少量含む。
5　黄褐色土 10YR5/6：φ５～10㎜大の黄褐色土塊主体、焼土粒少量含む。
6　赤褐色土 2.5YR4/6：φ２～５㎜大の黄褐色土塊、焼土塊多量含む。
7　にぶい黄褐色土 10YR5/4：黄褐色土粒、炭化物多量、焼土粒少量含む。
8　にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
9　褐色土 10YR4/6：黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。

第４号住居跡
土層説明（ＤＤ′）

10　褐色土 10YR4/4：しまり・粘性有。黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物微量含む。
11　にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。φ５～10㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。

第９図　第３・４号住居跡

がヘラナデ、裾部は横ナデである。内面は、絞り目で輪積痕が残る。流れ込みと思われる。12は、凹石・砥石である。楕円形状を呈し、片面中央に浅い凹みを持つ。もう片面には、複数の線状痕がみられた。



第 10 図　第３号住居跡出土遺物

第４表　第３号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎 土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	-	-	-	ABFN	外 : 灰 内 : 灰白	A	胴下部片	南比企産。
2	土師器　坏	12.4	4.55	-	ABCHIK	黒褐色	B	90%	
3	土師器　坏	12.2	(3.9)	-	ABEIK	橙色	B	50%	
4	土師器　坏	(13.5)	(4.4)	-	ABCHKN	にぶい赤褐色	A	30%	
5	土師器　坏	11.7	4.2	-	ABDIN	にぶい橙色	B	60%	内外面やや摩耗。
6	土師器　坏	(12.6)	(2.4)	-	ABHK	にぶい赤褐色	B	口～体 30%	
7	土師器　坏	(14.2)	3.6	-	ABCHIKN	褐色	B	45%	
8	土師器　甕	(19.8)	(11.2)	-	ABEIKN	橙色	B	口～胴 25%	内外面摩耗顕著。
9	土師器　甕	(15.0)	(5.5)	-	ABDIKN	明赤褐色	B	口～胴 40%	口縁部外面輪積痕有。
10	土師器　甕	-	(2.0)	(5.2)	ABEIK	外 : 黒 内 : 明赤褐	B	底部 70%	底面木葉痕有。
11	土師器高坏	-	(9.9)	(12.1)	ABCHIK	橙色	B	接～脚 50%	脚部内面輪積痕有。
12	凹石・砥石	最大長 15.6 ㎝、最大幅 9.1 ㎝、最大厚 6.7 ㎝。重量 484.0 ｇ。角閃石安山岩。完形。片面凹み、片面線状痕有。							
13	砥　石	最大長 23.4 ㎝、最大幅 9.5 ㎝、最大厚 7.5 ㎝。重量 2,8 kg。砂岩。所々剥離。四面線状痕有。							

13は、砥石である。大型で四面に線状痕がみられた。所々剥離している。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の６世紀末から７世紀初頭と思われる。

第４号住居跡（第９図）

調査区北東側のＨ－２・３、Ｉ－２グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模の全容は不明であるが、長軸5.63ｍ×短軸1.44ｍ以上、床面積7.70㎡以上、遺構確認面からの深さは、0.30ｍである。主軸方向は、Ｎ－41°－Ｗを指す。東側で第３号住居跡、西側でピット33～37、南側で第１号土坑にそれぞれ切られている。

床面中央東寄りで地床炉が確認された。床面からの深さは、５cmと浅い。断面皿状の炉底が設けられ、被熱で黄褐色の地山が赤褐色に変化している。床面は、ほぼ平坦であり、全体に軟弱である。

ピットは、３基確認された。いずれも南東隅に位置する。壁溝・掘り方は、確認できなかった。

出土遺物は僅少であり、浅身の土師器有段口縁坏の小片が出土しているが、図示不可能であり、流れ込みと思われる。

本住居跡の時期は、地床炉を持つことなどから、弥生時代末から古墳時代前期としておきたい。

第５号住居跡（第11図）

調査区北側のＧ－３・４、Ｈ－３・４グリッドに跨って位置する。平面形は、横長の長方形である。規模は、長軸4.58ｍ×短軸3.55ｍ、床面積14.96㎡、遺構確認面からの深さは、0.62ｍである。主軸方向は、Ｎ－40°－Ｗを指す。東側で第６号住居跡を切り、南東隅でピット43、北西壁でピット52にそれぞれ切られているが、遺存状況は概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、北西壁中央に２基並んで確認された。東側が廃絶時に使用されていた新しいカマドであり、黄褐色土の地山で造り出した西側の片袖だけ残っていた。内壁に灰白色粘土を貼り付け、燃焼部の火床は、床面とほぼ同一レベル、幅は0.52ｍである。煙道部は、壁際で一段高くなり地山を刳り抜き、1.15ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。煙出しの平面形は、径0.30ｍの円形である。西側のカマドは、構築時に造られた古いものであり、火床面は確認できなかった。煙道部は、壁際で一段高くなり、0.85ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。煙出しの平面形は、径0.22ｍの円形である。

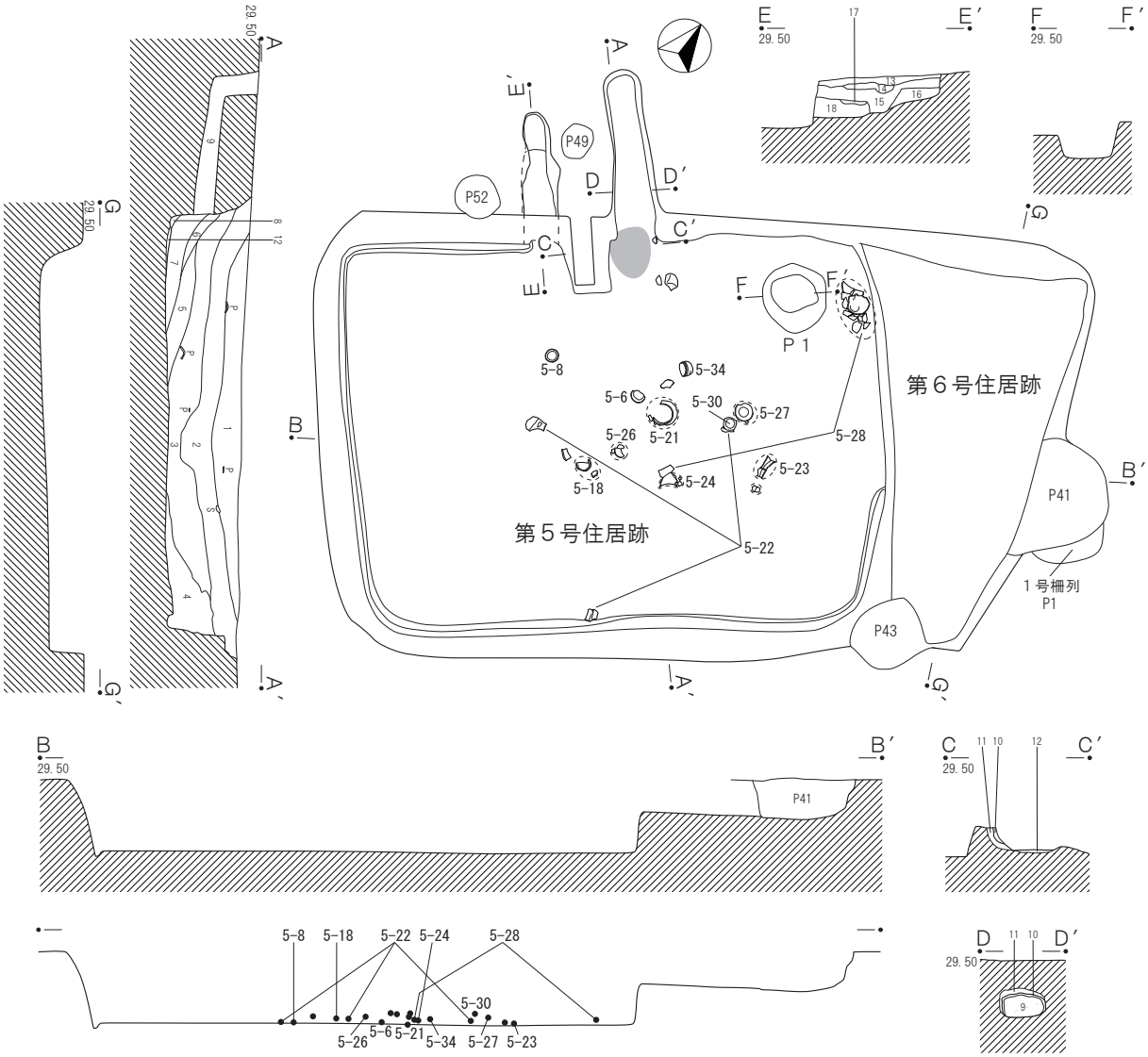
壁溝は、北東隅を除いて周る。床面は、ほぼ平坦であり、カマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。

ピットは、北東隅に深さ0.22ｍの浅いピット１があるのみである。その位置から貯蔵穴と思われる。

掘り方は、確認されなかった。

出土遺物（12･13図）は、須恵器蓋（１）、短頸壺（２）、甕（３・４）、土師器坏（５～20）、甕（21～30）、甑（31）、高坏（32）、鉢（33・34）、土錘（35）がある。出土位置は、床面中央付近とピット１東脇に集中する。出土位置を示していない遺物は、覆土上層からの出土である。

１は、いわゆる須恵器坏Ｈの蓋である。小振りで、器高が高い。天井部を欠く。調整は、内外面ともにロクロナデであるが、外面は中段から上に回転ヘラ削りが施されている。２は、須恵器短頸壺の胴下部から底部にかけての部位である。球形を呈し、丸底である。調整は、外面が回転カキ目、内面



土層説明（AA′ CC′ DD′ EE′）

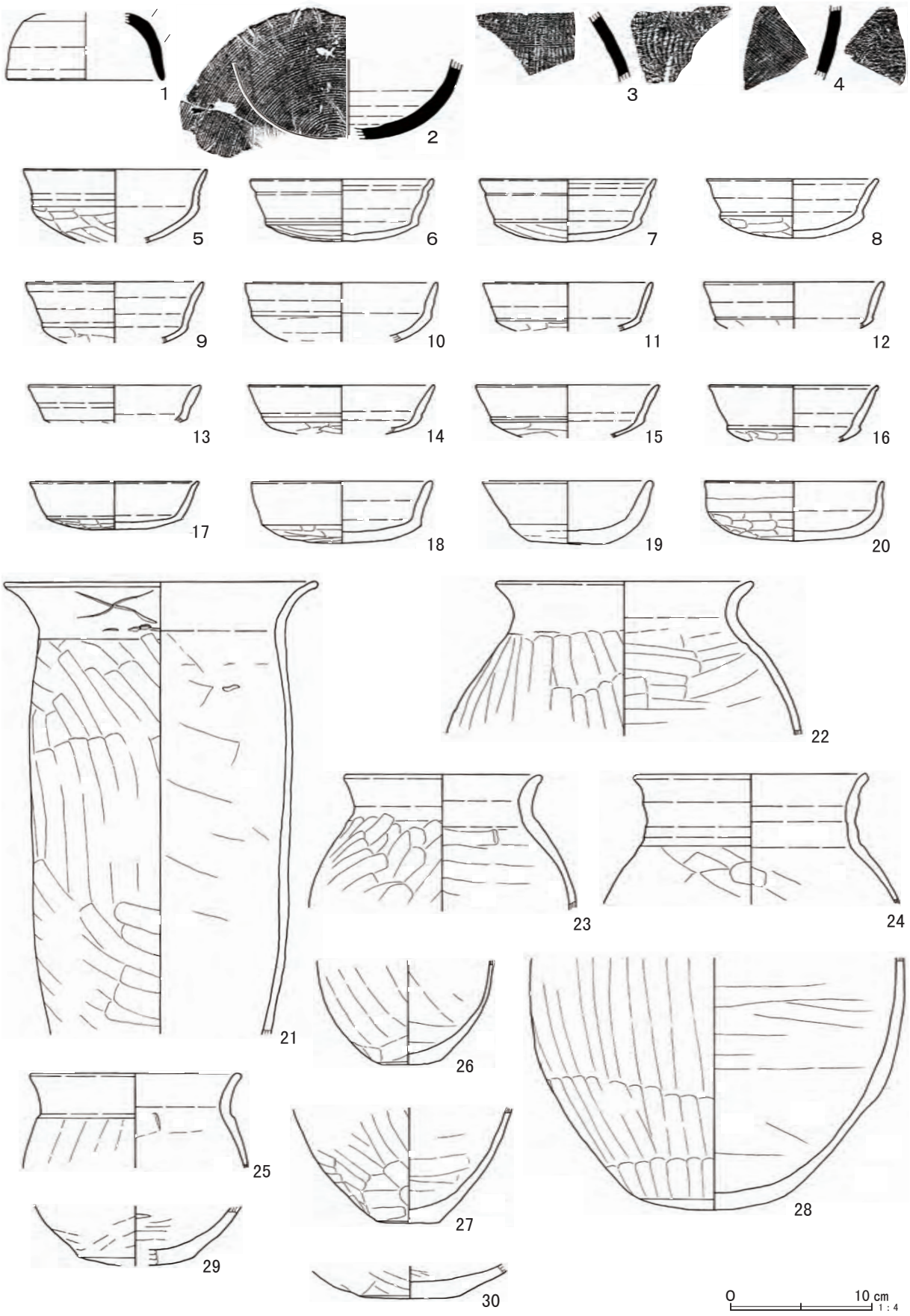
1 暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性強。黄褐色土粒少量、焼土粒微量含む。
2 暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒微量含む。
3 褐 色 土 10YR4/6：黄褐色土塊多量、焼土粒少量含む。
4 暗褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
5 にぶい赤褐色土 5YR4/4：黄褐色土粒、焼土粒多量含む。
6 赤色土 10YR4/8：φ 10 ～ 30 ㎜大の焼土塊主体。
7 暗赤褐色土 2.5YR3/4：黄褐色土粒、焼土塊多量、炭化物、灰少量含む。燃焼部。
8 褐色土 7.5YR4/3：黄褐色土粒、焼土粒多量含む。
9 褐色土 10YR4/6：しまり有。粘性弱。黄褐色土粒多量、φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊少量、炭化物微量含む。煙道部。
10 橙色土 5YR7/8：燃焼部内壁に貼付けた 10 ～ 15 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
11 明赤褐色土 2.5YR5/6：地山が被熱で色調変化。
12 赤褐色土 10R4/4：火床部直下の地山が被熱で色調変化。
13 褐色土 10YR4/4：黄褐色土塊多量、焼土塊少量含む。
14 赤褐色土 10R4/3：φ 5 ～ 20 ㎜大の焼土塊多量含む。
15 暗褐色土 10YR3/3：黄褐色土塊多量、焼土塊、炭化物少量含む。
16 暗赤褐色土 10R3/3：しまり・粘性有。φ 5 ～ 20 ㎜大の焼土塊、炭化物多量含む。
17 赤褐色土 10R5/4：焼土塊主体。炭化物少量含む。
18 褐色土 10YR4/6：黄褐色土塊多量、焼土塊少量含む。

● ＝ 土器

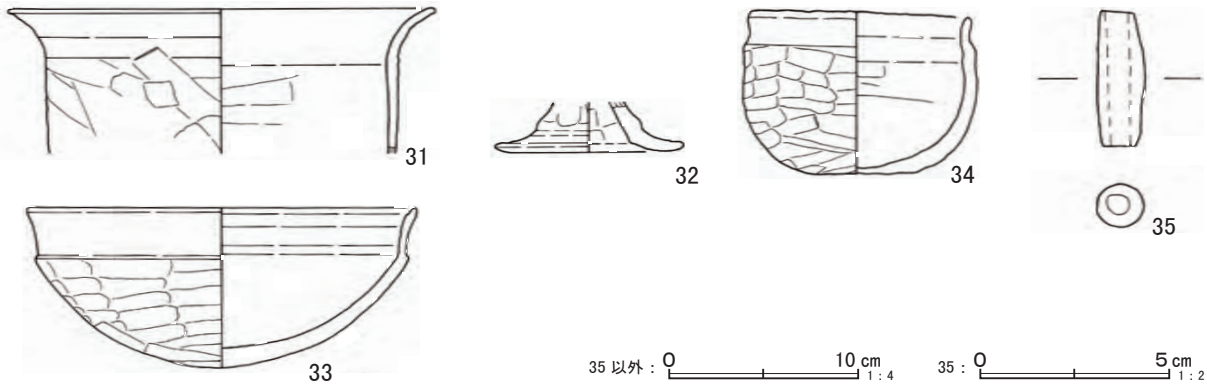
0　2m　1：60

第 11 図　第５・６号住居跡

はロクロナデである。流れ込みと思われる。３は須恵器甕の胴上部片、４は胴下部片である。調整は、いずれも外面にタタキ目、内面にあて具痕が残る。３は、外面一部に回転カキ目が施されている。土師器坏は、５～ 13 が有段口縁坏、14 ～ 18 は坏蓋模倣坏である。いずれも口縁部が外に開くが、直線的に開くものと外反するものがある。口径は 13cm 前後を測り、浅身のものが多いが、５のみ深身であり、流れ込みの可能性がある。体部と底部の境に明確な稜を持ち、底部は平底に近いものが多い。19 は、器形が坏蓋模倣坏に似るが、いびつである。体部と底部の境にある稜も不明瞭な箇所がある。底



第 12 図　第５号住居跡出土遺物（１）



第 13 図　第５号住居跡出土遺物（２）

第５表　第５号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	(11.2)	(4.7)	-	AL	灰色	B	15%	末野産。
2	須恵器短頸壺	-	(5.6)	-	AB	灰白色	A	胴～底 35%	産地不明。
3	須恵器　甕	-	-	-	AL	灰色	B	胴上部片	末野産。
4	須恵器　甕	-	-	-	AL	外 : 褐灰 内 : 灰	B	胴下部片	末野産。
5	土師器　坏	(13.0)	(5.2)	-	ABDIK	明黄褐色	B	25%	内面やや摩耗。
6	土師器　坏	(13.0)	4.4	-	ABIKN	橙色	B	30%	
7	土師器　坏	(12.5)	4.5	-	ABCIK	明赤褐色	B	70%	
8	土師器　坏	12.1	4.2	-	ABEIK	浅黄橙色	B	完形	
9	土師器　坏	(12.6)	(4.4)	-	ABCIKN	橙色	B	30%	内外面摩耗顕著。
10	土師器　坏	(13.6)	(4.2)	-	ABDEHIK	にぶい橙色	B	20%	内外面摩耗顕著。
11	土師器　坏	(12.0)	(3.4)	-	ABDIK	淡黄色	B	20%	内外面摩耗顕著。
12	土師器　坏	(12.8)	(3.3)	-	BDIK	灰白色	B	30%	内外面摩耗顕著。
13	土師器　坏	(12.2)	(2.7)	-	ABCDIK	にぶい赤褐色	B	30%	
14	土師器　坏	(13.2)	(3.5)	-	ABEIK	灰褐色	B	20%	外面やや摩耗。
15	土師器　坏	(13.0)	(3.8)	-	ABCIK	橙色	B	40%	外面摩耗顕著。
16	土師器　坏	(12.0)	(4.0)	-	ABDIKN	浅黄橙色	B	25%	内外面やや摩耗。
17	土師器　坏	(12.0)	3.4	-	ABDIK	外 : 橙 内 : 黒	B	50%	
18	土師器　坏	12.8	4.4	-	ABDHK	外 : 黒褐 内 : 橙	B	90%	
19	土師器　坏	(12.0)	4.4	5.4	ABDIK	淡黄色	B	70%	内外面摩耗顕著。
20	土師器　坏	(12.7)	4.3	-	ABDHIK	にぶい橙色	B	80%	口縁部輪積痕有。
21	土師器　甕	22.2	(32.0)	-	ABDHK	橙色	B	口～胴 70%	口縁部外面Ｘ状ヘラ描、胴部内面輪積痕有。
22	土師器　甕	(18.3)	(10.9)	-	ABEIK	浅黄橙色	B	口～胴 70%	口縁部外面輪積痕有。内外面やや摩耗。
23	土師器　甕	14.0	(9.6)	-	ABDEHIK	浅黄橙色	B	口～胴 70%	
24	土師器　甕	(16.6)	(9.2)	-	ABCKN	橙色	B	口～胴 30%	
25	土師器　甕	(15.0)	(6.7)	-	ABDIKN	橙色	B	口～胴 30%	内外面摩耗顕著。
26	土師器　甕	-	(7.3)	4.6	ABIKN	外 : 灰黄褐 内 : にぶい褐	B	胴～底 40%	内外面摩耗顕著。
27	土師器　甕	-	(8.1)	4.4	ABCIK	にぶい黄橙色	B	胴～底 90%	内面やや摩耗。
28	土師器　甕	-	(17.8)	10.4	ABIK	にぶい黄橙色	B	胴～底 70%	
29	土師器　甕	-	(4.3)	8.2	ABDIK	外 : 橙 内 : 灰黄	B	底部 80%	内外面摩耗顕著。
30	土師器　甕	-	(2.4)	7.2	ABEIK	橙色	B	底部 100%	外面摩耗顕著。
31	土師器　甑	(22.6)	(7.2)	-	ABEIKN	橙色	B	口～胴 20%	
32	土師器高坏	-	(2.6)	(8.4)	ABDIK	明赤褐色	B	脚部 30%	
33	土師器　鉢	(20.6)	8.5	-	ABDEGHIK	褐灰色	B	50%	
34	土師器　鉢	11.8	8.7	5.6	ABDIKN	浅黄橙色	B	ほぼ完形	内面やや摩耗。
35	土　錘	最大長 3.6 ㎝、最大径 1.3 ㎝、孔径 0.5 ㎝。重量 4.3 ｇ。完形。							

部は、やや上げ底である。20 は、口縁部がほぼ直立し、端部が外反する。体部は内湾し、底部は平底に近い。器壁の厚い 18 ～ 20 は、他の坏よりも古い様相を呈する。坏の調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。20 は、口縁部外面に輪積痕が残る。21・26・27 は、土師器長胴甕である。全形の分かるものはないが、21 は最大径を持つ口縁部が外反し、胴部は、ほぼ直線的に下る。胴下部以下を欠く。口縁部外面にヘラ描きによる×印が刻まれており、下に輪積痕が一部残る。26･27 は、胴下部から底部にかけての部位である。いずれも平底である。22 ～ 24・25・28 ～ 30 は、土師器丸胴

甕である。全形の分かるものはないが、いずれも口縁部の開きが小さく、端部がやや外反する。24は、口縁部中段及び下位に段を持つ。胴部は、球形を呈し、中段に最大径を持つと思われる。底部は、平底と中央がやや出っ張るものがある。31は、短い口縁部が大きく開くことから、土師器甑とした。胴部中段以下を欠く。甕・甑の調整は、口縁部が横ナデ、胴部から底部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。32は、土師器高坏の脚部である。短く、裾部が大きく外反する。調整は、内外面ともにヘラ削り、裾部は横ナデである。33・34は、土師器鉢である。33は、法量から鉢としたが、坏蓋模倣坏を大型化した器形である。調整は、坏と同じである。34は、短い口縁部がほぼ直立し、端部がやや外反する。胴部は、ほぼ直線的に下り、底部は平底に近い。調整は、甕と同じく口縁部が横ナデ、胴部から底部はヘラ削りである。35は、土錘である。筒状を呈するが、中段がやや膨らむ。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の7世紀中頃から後半と思われる。

第6号住居跡（第11図）

調査区北側のH－3グリッドに位置する。平面形は、方形とみられる。規模は、長軸3.32ｍ×短軸1.90ｍ以上、遺構確認面からの深さは、0.30ｍである。主軸方向は、N－18°－Wを指す。西側で第5号住居跡、東側で第1号柵列跡とピット41、南側でピット43と重複し、いずれも本住居跡が切られており、遺存状況は不良である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

床面は、ほぼ平坦であり、全体に軟弱である。

カマド・壁溝・ピット・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物は僅少であり、図示可能なものは見られないが、本住居跡の時期は、重複する第5号住居跡との新旧関係から7世紀中頃以前の古墳時代としか言えない。

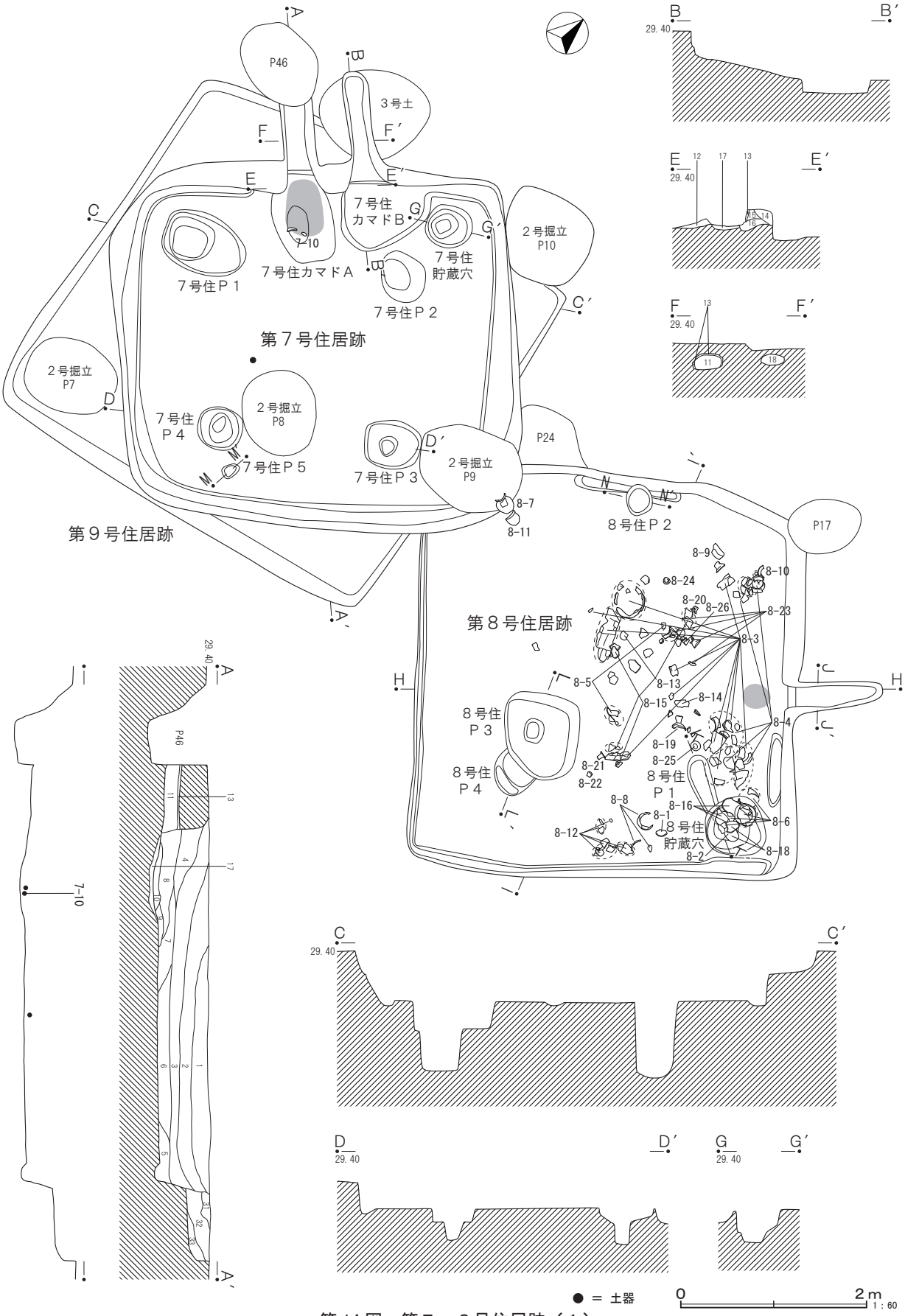
第7号住居跡（第14・15図）

調査区北東側のH－4、I－4・5グリッドに跨って位置する。平面形は、やや横長の方形を呈する。規模は、長軸4.10ｍ×短軸3.72ｍ、床面積12.60㎡、遺構確認面からの深さは、0.56ｍである。主軸方向は、N－47°－Wを指す。第9号住居跡の大半を切り、南東隅では第8号住居跡の西隅を切る。北西側で第3号土坑とピット46、南東側と南西側で第2号掘立柱建物跡のピット8～10にそれぞれ切られているが、遺存状況は概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

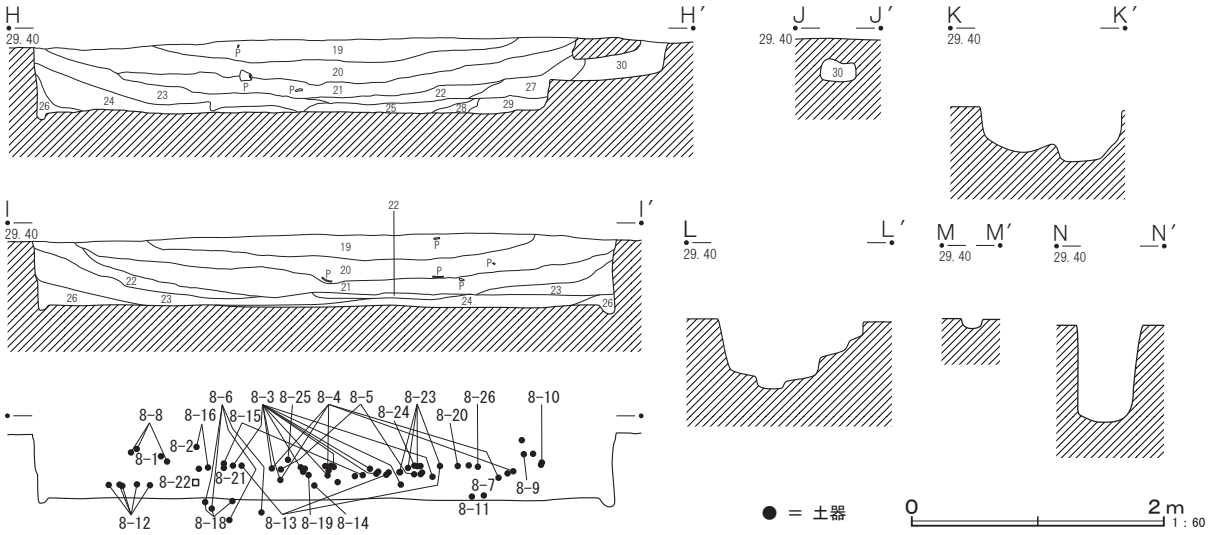
カマドは、北西壁中央に2基並んで確認された。西側は、廃絶時に使用されていた可能性の高いカマドで、主に地山の黄褐色土塊で構築された両袖が僅かに残っていた。燃焼部の掘り込みは、床面から深さ0.12ｍの皿状を呈し、火床面に顕著な被熱痕を確認した。煙道部は、壁際で一段高くなり、地山を刳り抜き、ピット46に深く壊されているが、1.20ｍ以上壁外へ突出する。東側のカマドは、西側に比べて古いのか、同時使用なのかは、立証できなかった。袖は崩壊流失し、火床面も確認できなかったが、壁際で一段高くなり、地山を刳り抜きながら、0.95ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる煙道部が確認された。煙出しの平面形は、一辺0.28ｍのほぼ正方形である。

壁溝は、北西壁中央のカマド下を除き全周する。床面は、ほぼ平坦であり、カマド前から中央部にかけて顕著な硬化部分を確認した。

ピットは、5基確認された。このうち、4基は対角線上に配置されることから主柱穴、北東隅の1



第 14 図　第７～９号住居跡（１）



第７号住居跡

土層説明（ＡＡ′ＥＥ′ＦＦ′）

1　黒褐色土 10YR3/2：しまり強。粘性弱。φ２～５㎜大の黄褐色土塊、焼土粒微量含む。
2　暗褐色土 10YR3/3：黄褐色土粒少量、焼土粒微量含む。
3　暗褐色土 10YR3/4：φ２～５㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量、焼土粒微量含む。
4　褐色土 10YR4/4：φ５～10㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
5　暗赤褐色土 5YR3/4：φ５～10㎜大の黄褐色土塊、焼土塊少量、炭化物微量含む。
6　褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
7　にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒多量、炭化物微量含む。
8　赤褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒、φ10～30㎜大の焼土塊多量含む。
9　暗赤灰色土 10R3/1：焼土塊、炭化物多量、灰少量含む。焚口部。
10　暗赤色土 10R3/4：しまり・粘性無。焼土粒、灰多量、炭化物少量含む。燃焼部。
11　褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、焼土粒少量含む。燃焼部。
12　褐色土 7.5YR4/4：しまり・粘性強。黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
13　黄褐色土 7.5YR7/8：燃焼部・煙道部内壁に貼付けた厚さ10～15㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
14　黄褐色土 10YR5/6：φ10～30㎜大の黄褐色土塊主体。
15　にぶい褐色土 7.5YR5/4：黄褐色土粒主体。焼土粒少量含む。
16　明褐色土 7.5YR5/6：φ10～30㎜大の黄褐色土塊主体。
17　にぶい赤褐色土 5YR5/4：火床面の地山が被熱で色調変化。
18　暗褐色土 10YR3/4：黄褐色土粒、φ２～10㎜大の焼土塊多量、炭化物少量含む。煙道部。

第８号住居跡

土層説明（ＨＨ′ＩＩ′ＪＪ′）

19　暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性強。黄褐色土粒少量、焼土粒微量含む。
20　暗褐色土 10YR3/4：φ２～５㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒微量含む。
21　褐色土 10YR4/4：黄褐色土塊多量、焼土塊、炭化物少量含む。
22　褐色土 10YR4/6：黄褐色土塊多量、焼土粒少量含む。
23　にぶい黄褐色土 10YR5/3：φ５㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
24　暗明褐色土 2.5YR2/3：黄褐色土粒・塊、焼土粒、炭化物多量含む。
25　にぶい褐色土 7.5YR5/3：黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
26　にぶい黄褐色土 10YR5/4：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
27　にぶい橙色土 7.5YR6/4：φ５～30㎜大の黄褐色土塊、焼土塊多量含む。
28　暗赤褐色土 5YR3/3：しまり・粘性無。φ５～10㎜大の焼土塊、炭化物多量、灰少量含む。
29　にぶい赤褐色土 5YR4/4：しまり・粘性無。φ５～20㎜大の焼土塊、灰多量、炭化物少量含む。燃焼部。
30　褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒多量、φ２～５㎜大の焼土塊、炭化物少量含む。煙道部。

第９号住居跡

土層説明（ＡＡ′）

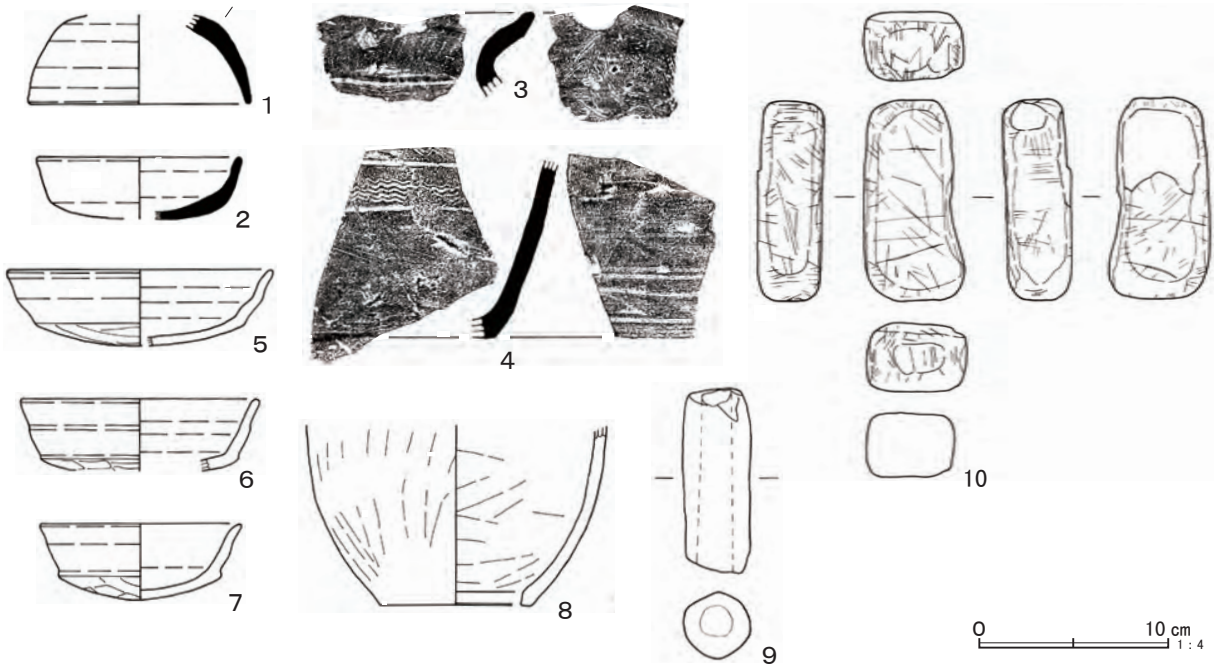
31　褐色土 10YR4/4：しまり・粘性強。φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
32　褐色土 10YR4/6：しまり強。粘性弱。黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
33　にぶい褐色土 7.5YR5/3：黄褐色土粒主体。焼土粒、炭化物少量含む。

第 15 図　第７～９号住居跡（２）

基は、貯蔵穴とみられる。

出土遺物（第16図）は、須恵器蓋（１）、坏（２）、甕（３・４）、土師器坏（５～７）、甑（８）、土錘（９）、砥石（10）がある。図示した遺物で出土位置が明確なのは、カマド出土の10のみである。出土位置を示していない遺物は、覆土上層からの出土である。

１は、いわゆる須恵器坏Ｈの蓋である。天井部を欠くが、器高が高い。調整は、内外面ともにロクロナデであるが、上位に回転ヘラ削りが施されている。２は、須恵器坏Ｇの身である。調整は、内外面ともにロクロナデであるが、底面は手持ちヘラ削りが施されている。３・４は、須恵器甕である。３は口縁部から頸部にかけて、４は胴下部から底部にかけての破片である。調整は、３が内外面ともにロクロナデであるが、内面はヘラナデも施されている。４は、内外面ともにロクロナデが施されており、胴下部外面には沈線で区画された緩い波状文が巡る。須恵器は、１・２が産地不明、３・４は末野産である。５～７は、土師器の有段口縁坏である。法量にバラエティがあるが、いずれも口縁部



第 16 図　第７号住居跡出土遺物

第６表　第７号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	(11.6)	(4.7)	-	ABN	灰色	B	20%	産地不明。
2	須恵器　坏	(10.8)	(3.3)	-	AB	灰白色	B	40%	産地不明。
3	須恵器　甕	-	-	-	ABLN	黄灰色	B	口～頸部片	末野産。
4	須恵器　甕	-	-	-	ABLN	灰色	B	胴～底部片	末野産。
5	土師器　坏	(14.0)	4.0	-	ABEKN	橙色	B	40%	
6	土師器　坏	(12.6)	(3.8)	-	ABEGIK	にぶい黄橙色	B	25%	
7	土師器　坏	(10.6)	4.0	-	ABCIK	浅黄橙色	B	45%	内外面やや摩耗。
8	土師器　甑	-	(9.5)	(8.0)	ABDIKN	橙色	B	胴～底 25%	内外面摩耗顕著。
9	土　錘	最大長 9.7 ㎝、最大径 3.6 ㎝、孔径 1.7 ㎝。重量 (105.0) ｇ。上端一部欠。							
10	砥　石	最大長 10.6 ㎝、最大幅 5.3 ㎝、最大厚 3.6 ㎝。重量 (369.0) ｇ。チャート。片面半分剥離。全面線状痕有。							

が外に開き、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は、６が平底に近く、他は丸底である。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。８は、土師器甑の胴部中段から底部にかけての部位である。摩耗が著しいが、調整は内外面ともにヘラナデである。９は、大型の土錘である。片端一部を欠くが、筒状を呈する。10 は、砥石である。側面も含め、全面に線状痕がみられた。片面半分は、表面が剥離している。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の６世紀中頃から後半と思われる。

第８号住居跡（第 14・15 図）

調査区北東側のⅠ－４、Ｊ－４・５グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 4.18 ｍ×短軸 3.92 ｍ、床面積 14.80 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.55 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 43°－Ｅを指す。西隅で第７号住居跡・第２号掘立柱建物跡のピット９、ピット 24、北隅でピット 17 と重複し、ピット 24 より新しいが、他は本住居跡のほうが古い。遺存状況は、概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、北東壁中央に付設されている。袖部は崩壊流失し、形状としては捉えることはできず、燃焼部も判然としない。火床面は、床面と同一レベルとみられ、被熱痕は顕著である。煙道部は、壁

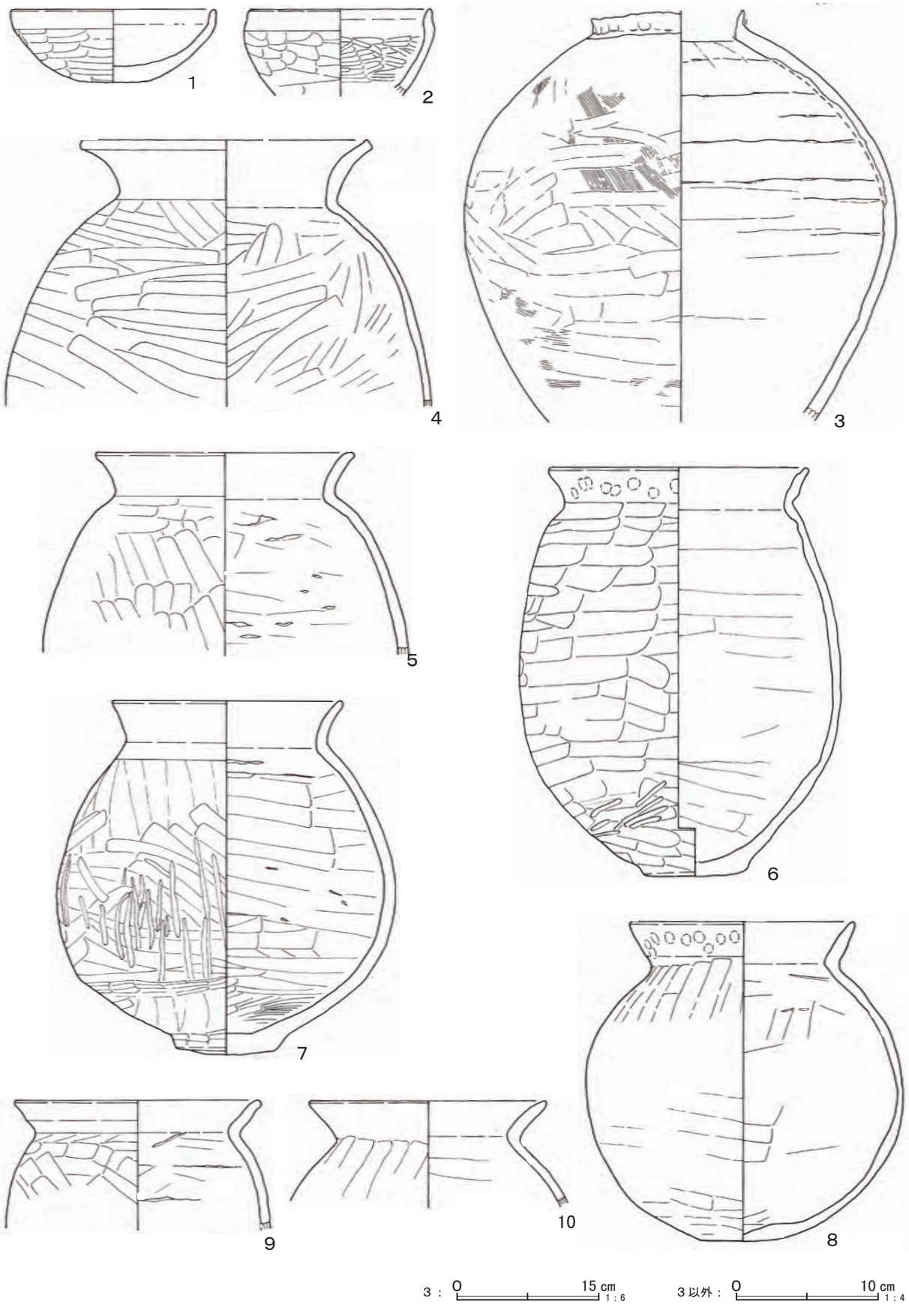
際で一段高くなり、地山を刳り抜き 0.90 m壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。

壁溝は、南西壁から南東壁に周り、他の壁際は部分的にしか確認できなかった。床面は、ほぼ平坦であり、カマド前から中央部にかけて顕著な硬化部分を確認した。

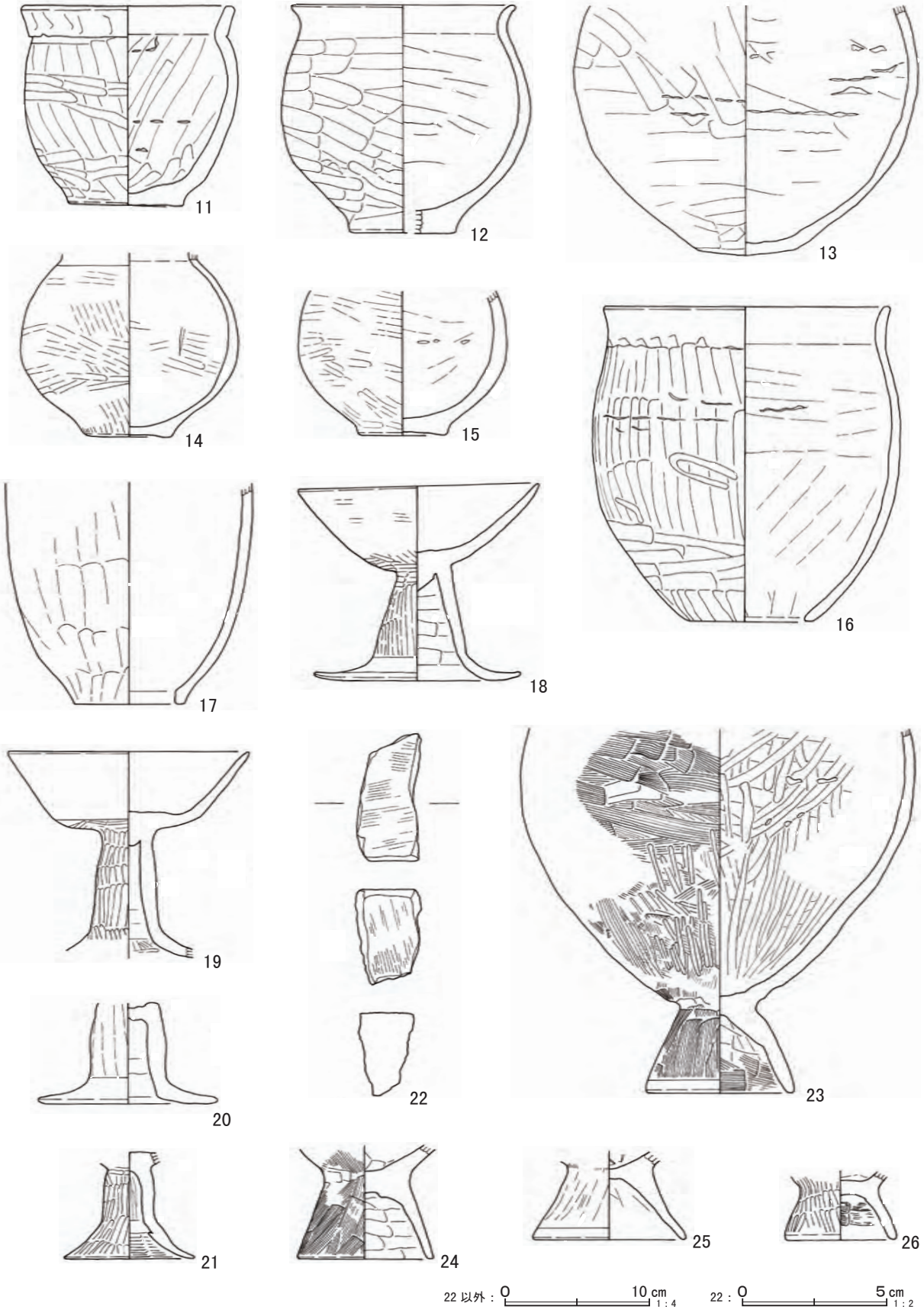
ピットは、５基確認された。北東隅の１基は貯蔵穴、ピット３は掘込みが深く、大型で掘立柱建物跡の柱穴の可能性もある。

出土遺物（第 17・18 図）は、土師器坏（１・２）、甕（３～ 13）、壺（14・15）、甑（16・17）、高坏（18 ～ 21）、砥石（22）がある。また、流れ込みで古墳時代前期の土師器台付甕（23 ～ 26）も出土した。出土量は膨大であるが、大半は廃絶後に東側から投棄されたものと考えられる。

１・２は、土師器坏である。いずれも半球形を呈するが、１は短い口縁部が直立し、体部は内湾する。底部は平底に近い。やや深身で、器壁が厚い。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラナデである。２は深身で、短い口縁部がやや内傾し、体部は内湾する。底部を欠く。調整は、口縁部が横ナデ、体部は外面がヘラナデ、内面はヘラミガキである。３～ 13 は、土師器甕である。３は、超大型の甕である。口縁部は上位を欠くが、下位はほぼ直立する。胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。胴下部から底部を欠き、胴上部内面は、器面が剥離している。摩耗が著しく、調整は口縁部が指オサエ、胴部は内外面ともにヘラナデであるが、外面はヘラナデ前のハケメ、内面は輪積痕が残る。４・５は、口縁部が緩やかに外反し、胴部は中段以下を欠くが、大きく膨らむ。５は、胴部内面に細かい輪積痕が複数残る。６は、短い口縁部が緩やかに外反し、胴部はやや長胴化している。７～ 10･13 は、短い口縁部が外反、ないし逆ハの字に開き、胴部は球形を呈するが、７は胴部が下膨れである。やや小振りの 11・12 は、甕としたが、鉢としても良いかもしれない。甕の調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削りの９･11･13 以外、内外面ともにヘラナデのものが多いが、６・８は口縁部に指オサエ、６は胴下部にヘラによる沈線状の刻み、７は胴部中段以下にヘラミガキも施されている。また、胴部内面に細かい輪積痕が残るものが多い。14・15 は、土師器壺である。いずれも口縁部を欠くが、胴部の調整がヘラミガキであることから壺とした。胴部は、球形を呈する。調整は、14 がヘラミガキの上位に横ナデ、15 は内面にヘラナデが施されており、細かい輪積痕が残る。16・17 は、土師器甑である。16 は、短い口縁部の開きが小さい。胴部は膨らみが小さく、中段に最大径を持つが、口径とあまり変わらない。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は内外面ともにヘラナデであるが、外面中段に弧状のヘラミガキが施されている。胴上部内外面に輪積痕が残る。17 は、胴部中段以上を欠くが、底部に向かってすぼまる。摩耗が著しく、調整は内面が図示不可能であったが、内外面ともにヘラナデである。18 ～ 21 は、土師器高坏である。18 は、坏部が逆ハの字に大きく開くが、下位の稜が弱い。脚部は下方が膨らみ、裾部が外反する。調整は、坏部の摩耗が著しいが、内外面と脚部外面はヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ、裾部は横ナデである。19 も坏部が逆ハの字に大きく開き、下位に明確な稜を持つ。脚部は、やや筒状を呈し、裾部は端部を欠く。調整は、坏部が横ナデ、接合部から脚裾部までは外面がヘラミガキ、内面は上位がヘラナデ、下位はヘラミガキが施されている。20・21 は、接合部から脚部にかけての部位である。20 は脚部が短く、裾部がやや外反する。調整は、内外面ともにヘラナデ、裾部は横ナデである。21 は、脚部が筒状を呈し、裾部はハの字に開く。調整は、脚部内面が絞り目である以外、ヘラミガキである。22 は、後述の 23 ～ 26 と同じく、流れ込みの可能性がある。22 は、砥石



第 17 図　第８号住居跡出土遺物（１）



第 18 図　第８号住居跡出土遺物（２）

第７表　第８号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	14.5	5.2	4.6	ABCIK	橙色	B	80%	内面剥離顕著。
2	土師器　坏	12.7	(6.0)	-	ABEIK	明赤褐色	B	口～体 90%	
3	土師器　甕	-	(44.0)	-	ABD	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	頸～胴 70%	内外面摩耗顕著。
4	土師器　甕	(20.6)	(18.8)	-	ABEH	橙色	B	口～胴 90%	
5	土師器　甕	(18.2)	(14.2)	-	ABCIK	橙色	B	口～胴 40%	胴部内面輪積痕有。
6	土師器　甕	18.4	28.9	7.2	ABEIK	浅黄橙色	B	80%	胴下部内面輪積痕有。
7	土師器　甕	16.2	25.0	6.9	ABCDIKN	橙色	B	完形	胴部内面輪積痕有。
8	土師器　甕	15.8	22.6	6.0	ABD	橙色	B	70%	胴上部内面輪積痕有。内外面摩耗顕著。
9	土師器　甕	(17.4)	(9.2)	-	ABEIK	淡黄色	B	口～胴 40%	胴部内面輪積痕有。
10	土師器　甕	(16.8)	(7.4)	-	ABEIK	黄橙色	B	口～胴 30%	
11	土師器　甕	14.8	13.9	7.9	ABCK	にぶい橙色	B	完形	胴部内面輪積痕有。
12	土師器　甕	15.6	15.85	(7.4)	ABDIK	にぶい橙色	B	70%	胴部内外面輪積痕有。
13	土師器　甕	-	(17.4)	(7.0)	ABDIK	にぶい黄橙色	B	胴～底 25%	胴部内外面輪積痕有。
14	土師器　壺	-	(12.8)	7.0	ABEIKN	外：橙 内：にぶい橙	B	頸～底 30%	内外面摩耗顕著。
15	土師器　壺	-	(10.0)	6.2	ABDIK	橙色	B	胴～底 45%	胴部内面輪積痕有。内外面摩耗顕著。
16	土師器　甑	(19.8)	21.8	8.4	ABDIK	外：浅黄橙 内：黒	B	60%	胴部内外面輪積痕有。内面やや摩耗。
17	土師器　甑	-	(15.3)	7.5	ABEIKN	橙色	B	胴～底 30%	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。
18	土師器　高坏	16.8	13.7	(14.3)	ABIKN	にぶい橙色	B	80%	坏部内外面摩耗顕著。
19	土師器　高坏	(16.6)	(14.3)	-	ABCEHIKN	明赤褐色	B	口～脚 70%	
20	土師器　高坏	-	(7.0)	(12.4)	ABIKN	橙色	B	接～脚 70%	
21	土師器　高坏	-	(7.4)	(9.0)	ABDEK	橙色	B	接～脚 70%	内面輪積痕有。
22	砥　石	最大長 (4.4) ㎝、最大幅 (2.3) ㎝、最大厚 (3.3) ㎝。重量 (34.9) ｇ。凝灰岩。大半欠。							
23	土師器台付甕	-	(25.3)	10.3	ABDEKN	橙色 灰褐色	B	胴～台 50%	胴部内面輪積痕有。
24	土師器台付甕	-	(7.85)	9.4	ABDEIKN	にぶい橙色	B	接～台 80%	
25	土師器台付甕	-	(6.05)	10.6	ABCDHK	浅黄橙色	B	接～台 95%	外面やや摩耗。
26	土師器台付甕	-	(4.7)	(7.7)	ABCDHIK	外：灰褐 内：黒褐	B	接～台 90%	内面、外面一部摩耗顕著。

である。大半を欠くが、二面に線状痕がみられた。23 ～ 26 は、古墳時代前期の土師器台付甕であり、流れ込みである。23 は、胴上部以上を欠くが、倒卵形を呈する胴部にやや小振りの台部が付く。調整は、外面のハケメ及び内面のヘラナデ後にヘラミガキが施されているが、外面は丁寧であるのに対し、内面はやや粗い。台部外面端部は、横ナデが施されている。24 ～ 26 は、接合部から台部までの部位である。台部は、いずれもハの字に開くが、26 はやや内湾する。調整は、24 は外面がハケメ、内面はヘラナデ、25 は内外面ともにヘラナデであり、端部は横ナデ、26 は外面がヘラミガキ、内面はハケメである。

本住居跡の時期は、古墳時代中期の５世紀後半と思われる。

第９号住居跡（第 14・15 図）

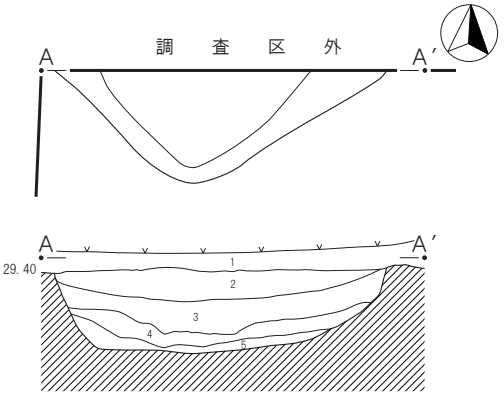
調査区西側のＤ－５・６グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 4.52 m ×短軸 4.10 m、床面積 16.17 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.26 mである。主軸方向は、Ｎ－ 14°－Ｗを指す。ほぼ大半を第７号住居跡と第２号掘立柱建物跡のピット７～ 10 に切られており、遺存状況は極めて不良である。

カマドや壁溝などは、確認できなかった。

出土遺物は僅少であり、図示可能なものは見られないが、本住居跡の時期は、重複する第７・８号住居跡との新旧関係から５世紀後半以前のものと思われ、カマドを持たないことや主軸方向などから弥生時代末から古墳時代前期としておきたい。

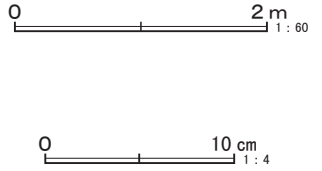
第 10 号住居跡（第 19 図）

調査区西側のＦ－３グリッドに位置する。平面形は方形とみられる。規模は、長軸 1.75 m以上×短



土層説明（ＡＡ′）

1　暗褐色土 7.5YR3/3：耕作土。φ２～10㎜大の黄褐色土塊少量、φ１～２㎜大の白色軽石（As-A）微量含む。
2　暗褐色土 10YR3/3：しまり強。粘性弱。黄褐色土粒少量含む。
3　暗褐色土 10YR3/4：しまり強。粘性弱。φ２～５㎜大の黄褐色土塊少量含む。
4　褐色土 10YR4/4：しまり・粘性強。φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物微量含む。
5　褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。



第 19 図　第 10 号住居跡・出土遺物

第８表　第 10 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(13.4)	(3.6)	-	ABIK	灰黄褐色	B	20%	内外面やや摩耗。

軸 1.25 m以上、遺構確認面からの深さは、0.60 mである。主軸方向は、N－40°－Wを指す。大半が北側の調査区外に延びており、調査が可能であったのは、南隅付近だけである。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

部分的な調査だったこともあり、カマド・壁溝・ピットは、確認されなかった。

出土遺物は、土師器有段口縁坏（１）のみである。覆土上層から出土した。口縁部は外に開く。底部の大半を欠くが、体部との境に稜を持つ。器壁が厚い。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部は、ヘラ削りである。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の７世紀代としか言えない。

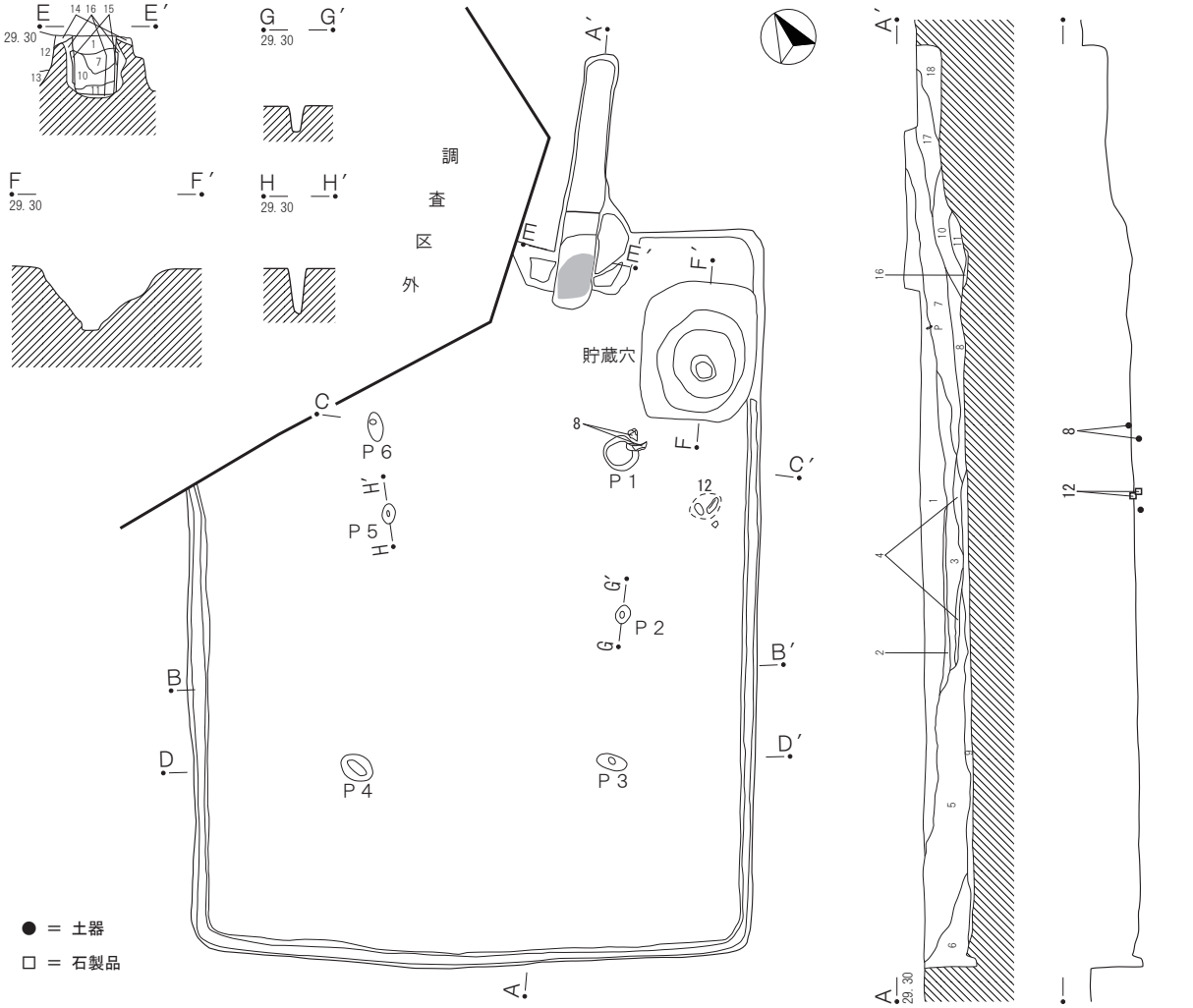
第 11 号住居跡（第 20 図）

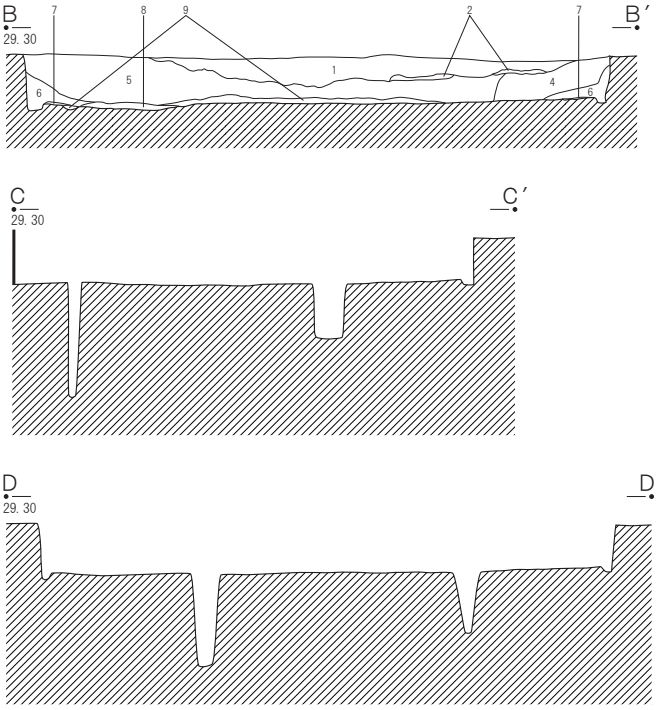
調査区北西側のＤ－５、Ｅ－４・５、Ｆ－４・５グリッドに跨って位置する。平面形は、カマド煙道部に沿う主軸方向に長い方形である。規模は、長軸 5.65 m×短軸 4.47 m、床面積 24.75 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.40 mである。主軸方向は、N－31°－Eを指す。北西隅が調査区外で未調査になったが、他の遺構との重複もなく、遺存状況は概ね良好である。覆土は、１層以下が一気に埋め戻したブロック状堆積である。各層とも多少の差はあるものの、焼土・炭化粒と多量の黄褐色土塊を含む。

カマドは、北壁中央東寄りに付設されている。燃焼部の 1/5 が壁外へ張出し、掘込みは床面から深さ 0.09 mである。燃焼部内の火床面は、被熱で黄褐色の地山が赤褐色に変化している。袖部は、黄褐色の地山で造り出し、内壁に粘土を貼り付けている。内壁は、弧状に膨らむことなく、0.32 mの同一幅で焚口まで直線的に伸びる。煙道部は、壁際で一段高くなり、1.50 m壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。

壁溝は、カマド脇を除き、全周するとみられる。床面は、ほぼ平坦であり、カマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。

ピットは、７基確認された。北東隅にある平面形が方形、深さ 0.48 mのものは、その位置から貯蔵穴とみられる。他の６基は、柱穴とみられるが、形状・深さにバラツキがある。



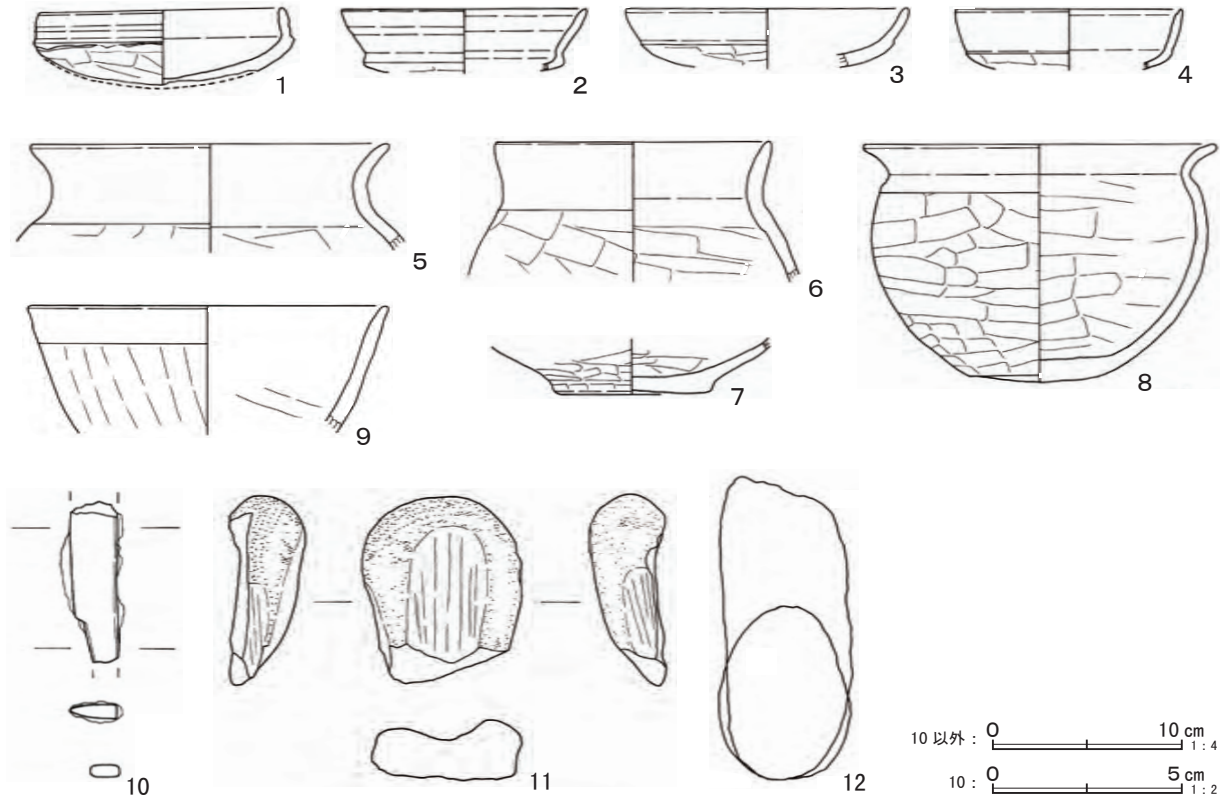


土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＥＥ′）

1 暗褐色土 10YR3/4：しまり強。粘性弱。炭化物多量、黄褐色土粒、焼土粒少量含む。
2 黒褐色土 10YR3/2：炭化物多量、黄褐色土粒少量含む。
3 暗褐色土 10YR3/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒微量含む。
4 褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
5 赤褐色土 2.5YR4/6：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、焼土粒多量、炭化物少量含む。
6 暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、焼土粒少量含む。
7 にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒・塊、炭化物多量含む。
8 暗赤色土 10R3/4：焼土塊、炭化物多量、黄褐色土塊少量含む。
9 にぶい黄褐色土 10YR5/4：しまり・粘性強。黄褐色土塊、炭化物多量含む。
10 赤褐色土 10R4/3：しまり・粘性弱。φ 10 ～ 30 ㎜大の黄褐色土塊、焼土塊多量、炭化物少量含む。
11 暗赤灰色土 2.5R3/1：炭化物、灰多量、φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊少量含む。燃焼部。
12 暗褐色土 10YR3/4：黄褐色土粒、φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊少量含む。
13 暗赤灰色土 10R4/1：黄褐色土粒、φ 10 ～ 30 ㎜大の焼土塊多量含む。
14 にぶい橙色土 7.5YR6/4：φ 10 ～ 30 ㎜大のやや焼土化した黄褐色土塊主体。
15 橙色土 5YR7/8：袖部内壁に貼付けた 15 ～ 20 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
16 赤褐色土 10R4/4：袖部・火床面の地山が被熱で色調変化。
17 にぶい橙色土 7.5YR6/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、焼土塊多量含む。
18 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、焼土粒少量、炭化物微量含む。煙道部。

0 2m
1：60

第 20 図　第 11 号住居跡



第 21 図　第 11 号住居跡出土遺物

第９表　第 11 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	12.9	(4.05)	-	ABEGIKN	明黄褐色	B	70%	底部外面剥離。
2	土師器　坏	(13.0)	(3.4)	-	ABEIKN	橙色	B	20%	内外面やや摩耗。
3	土師器　坏	(15.0)	(3.1)	-	ABCDIKN	橙色	B	20%	内外面やや摩耗。
4	土師器　坏	(12.0)	(3.2)	-	ABEIK	橙色	B	20%	
5	土師器　甕	(19.0)	(5.6)	-	ABHIK	にぶい黄橙色	B	口～胴 25%	
6	土師器　甕	(14.6)	(7.4)	-	ABDEHIK	浅黄橙色	B	口～胴 20%	
7	土師器　甕	-	(2.9)	8.4	ABCDHIK	外：灰 内：浅黄橙	B	底部 100%	
8	土師器　鉢	(18.6)	12.6	7.5	ABDEIK	橙色	B	60%	内外面やや摩耗。
9	土師器　鉢	(19.0)	(6.7)	-	ABEIKN	橙色	B	口～体 25%	内外面摩耗顕著。
10	鉄製刀子	最大長（4.3）cm、最大幅（1.3）cm、最大厚（0.4）cm。重量 (7.7) g。中段のみ残。							
11	砥　石	最大長 (5.0) cm、最大幅 (4.2) cm、最大厚 (2.0) cm。重量 (14.0) g。角閃石安山岩。1/3 欠。							

掘り方は、確認されなかった。

出土遺物（第21図）は、土師器坏（１～４）、甕（５～７）、鉢（８・９）、鉄製刀子（10）、磨石（11）、編み物石（12）がある。出土位置が明確な８・12は、貯蔵穴南西の床面直上からの出土である。出土位置を示していない遺物のうち、２・９はカマド、その他は覆土上層から出土した。

土師器坏は、１が坏身模倣坏、２は有段口縁坏、３・４は坏蓋模倣坏である。１は、口縁部が内傾し、２～４は、外に開く。法量にバラツキがあるが、いずれもやや浅身であり、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部を欠くものが多く、１は底部の器面が剥離しているが、いずれも丸底と思われる。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。５～７は、土師器丸胴甕である。５・６は、胴上部及び中段以下を欠く。５は口縁部が外反するが、６は直線的に小さく開く。いずれも器壁が厚い。７は、やや上げ底の底部である。調整は、口縁部が横ナデ、胴部及び底部の外面はヘラ削り、内面はヘラナデである。８・９は、土師器鉢である。８は、短い口縁部が外反し、詰まった胴部が丸み

を帯びる。口径に最大径を持つが、胴部中段の径とあまり変わらない。底部は平底に近いが、中央がやや出っ張る。9は鉢としたが、甑の可能性もある。口縁部から胴部が逆ハの字に直線的に開く。胴部中段以下を欠く。器壁が厚い。鉢の調整は、甕と同じく口縁部が横ナデ、胴部から底部の外面はヘラ削り、内面はヘラナデである。10は、鉄製刀子である。関付近のみの検出であり、刃部と柄部の大半を欠く。11は、砥石である。やや窪んだ片面に線状痕が認められた。片端を欠く。12は、編み物石である。大きさが異なるが、2点まとまって検出されたことから編み物石とした。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の6世紀末から7世紀初頭と思われる。

第12号住居跡（第22図）

調査区西側のD－5・6グリッドに跨って位置する。平面形は、カマド煙道部に沿う主軸方向に長い方形である。規模は、長軸2.75ｍ×短軸2.00ｍ、床面積4.73㎡、遺構確認面からの深さは、0.45ｍである。主軸方向は、N－23°－Eを指す。北側で第13号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。遺存状況は、概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、北壁中央東寄りに付設されている。燃焼部の2/3が壁外へ張出し、掘込みは床面から深さ0.08cmの断面皿状で、幅は0.45ｍである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕は、確認されなかった。片袖だけ遺存し、構築材は焼土混じりの黄褐色土塊である。煙道部は、1.25ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。

床面は平坦であり、全面に踏み固めとみられる硬化部分を確認した。ピットは、平面形が方形の浅いピット1が西壁際で確認されただけである。壁溝・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物（第23図）は、土師器坏（1・2）、甕（3・4）がある。出土量は僅少であり、図示した遺物は、すべて覆土からの出土である。

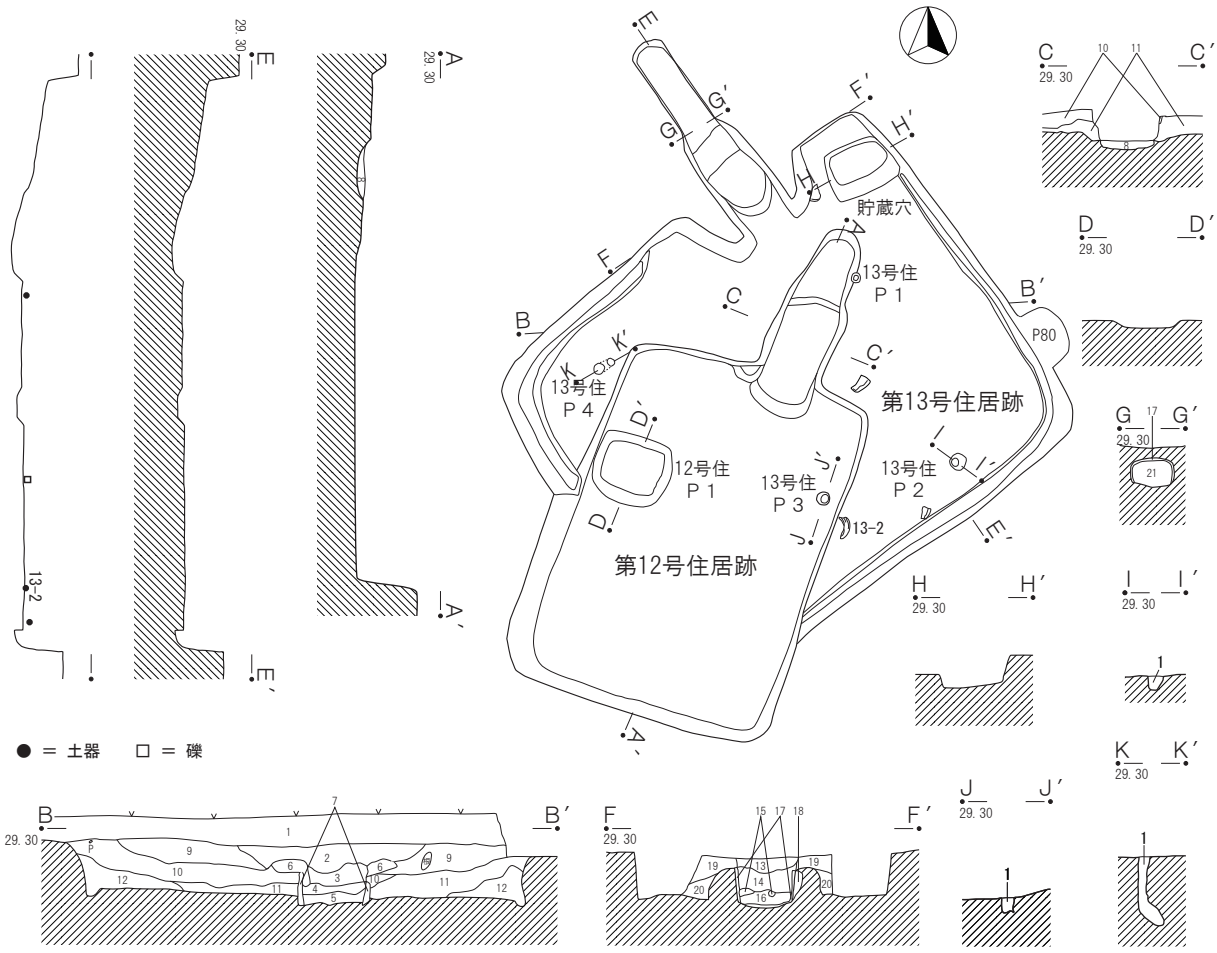
1・2は、土師器坏である。短い口縁部の開きが小さく、直立に近い。体部は内湾し、底部は平底に近い。浅身で、口径は12.5cm前後を測る。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。3・4は、土師器甕である。いずれも器壁が薄い。3は、口縁部がくの字状を呈し、胴部は下部以下を欠くが、倒卵形を呈すると思われる。4は、胴部中段から底部までの部位である。胴下部から底部に向かって緩やかにすぼまり、底部は平底である。3・4の調整は、口縁部が横ナデと指オサエ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。3は口縁部外面、4は胴部内面に輪積痕が残る。

本住居跡の時期は、8世紀後半と思われる。

第13号住居跡（第22図）

調査区西側のD－5・6グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸3.60ｍ×短軸3.05ｍ、床面積8.93㎡、遺構確認面からの深さは、0.42ｍである。主軸方向は、N－33°－Wを指す。南西側から中央部にかけて約1/3を第12号住居跡、北東壁をピット80に切られている。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、北西壁中央東寄りに付設されている。燃焼部の1/2が壁外へ張出し、掘込みは床面から深さ0.12ｍ、幅は0.45ｍである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕は、確認されなかった。袖部は、黄褐色の地山で造りだし、内壁に白色粘土を貼り付けている。内壁は、弧状に膨らむことなく、0.45ｍの同一幅で焚口まで直線的に伸びる。煙道部は、1.50ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。



第 12 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′）

1　暗褐色土 7.5YR3/3：耕作土。φ 2 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊少量、φ 1 ～ 2 ㎜大の白色軽石（As-A）微量含む。
2　暗褐色土 10YR3/3：黄褐色土塊、焼土塊少量、炭化物微量含む。
3　褐色土 10YR4/4：φ 5 ～ 10 ㎜大の焼土塊、炭化物少量含む。
4　赤褐色土 5YR4/6：しまり・粘性弱。φ 5 ～ 10 ㎜大の焼土塊多量、炭化物微量含む。天井部崩落土。
5　暗赤色土 7.5YR3/4：しまり・粘性無。焼土塊、炭化物、灰多量含む。燃焼部。
6　暗褐色土 10YR3/4：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊、焼土塊少量含む。
7　橙色土 5YR7/6：燃焼部内壁に貼付けた厚さ 10 ～ 20 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
8　暗赤褐色土 10R3/3：しまり・粘性弱。黄褐色土粒、φ 5 ～ 10 ㎜大の焼土塊多量、炭化物、灰少量含む。

第 13 号住居跡

土層説明（ＢＢ′ ＣＣ′ ＦＦ′ ＧＧ′）

9　暗褐色土 10YR3/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量含む。
10　暗褐色土 10YR3/4：しまり有。粘性弱。黄褐色土粒、炭化物少量含む。
11　にぶい黄褐色土 10YR6/5：しまり・粘性弱。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土塊少量含む。
12　褐色土 10YR4/4：しまり有。粘性弱。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒微量含む。
13　にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土塊多量、炭化物少量含。
14　にぶい黄褐色土 10YR5/4：しまり・粘性強。黄褐色土塊主体。焼土塊少量含む。
15　赤褐色土 2.5YR4/6：焼土塊層。
16　暗赤褐色土 2.5YR3/4：しまり弱。黄褐色土塊多量、焼土塊、炭化物、灰少量含む。燃焼部。
17　橙色土 2.5YR7/8：袖部・煙道部内壁に貼付けた厚さ 10 ～ 15 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
18　明赤褐色土 5YR5/6：袖部の地山が被熱で色調変化。
19　暗褐色土 10YR3/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物微量含む。
20　褐色土 10YR4/6：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土塊、炭化物少量含む。
21　褐色土 7.5YR4/3：黄褐色土粒多量、焼土粒少量、炭化物微量含む。煙道部。

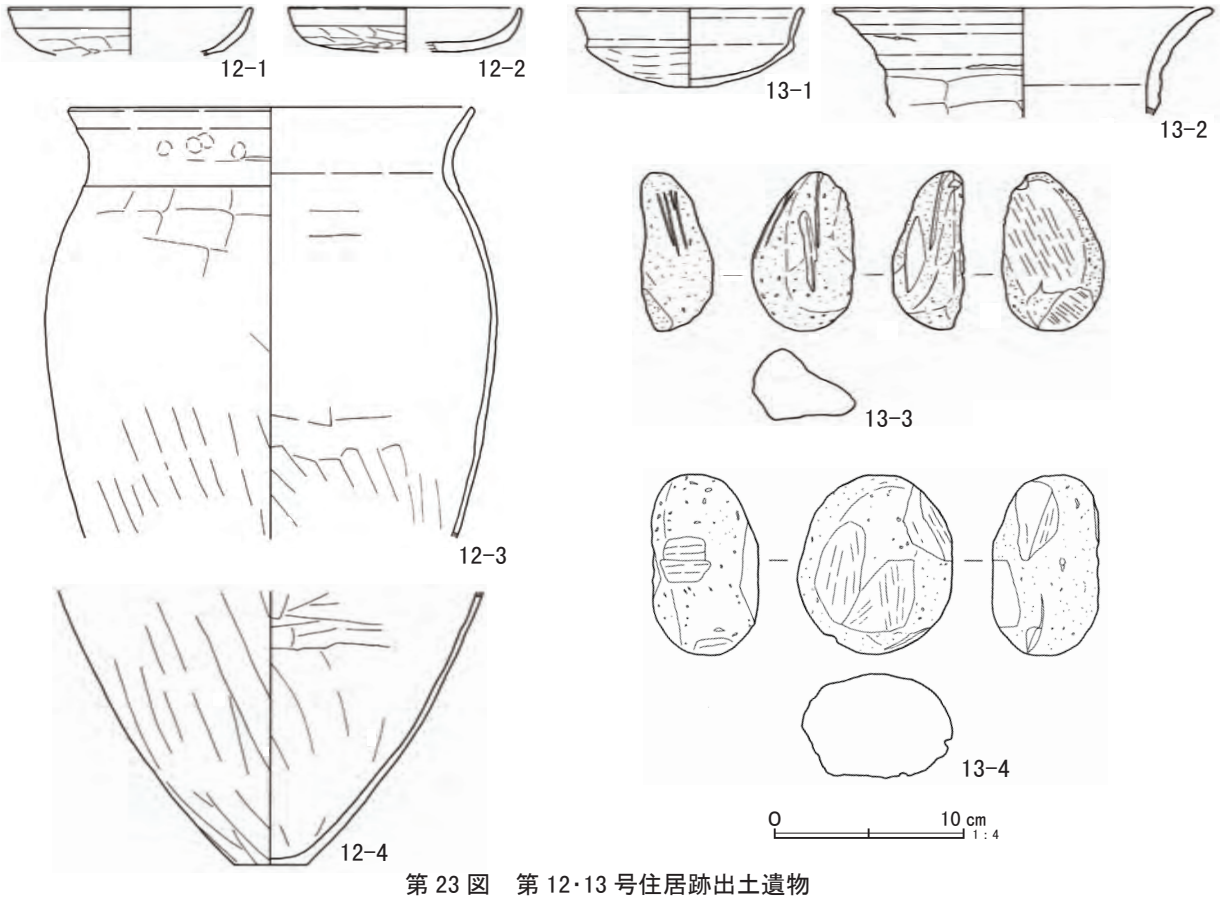
第 22 図　第 12･13 号住居跡

壁溝は、カマド下を除き全周するとみられる。床面は、ほぼ平坦である。

ピットは、５基確認された。北隅の方形の掘り込みは、その位置から貯蔵穴とみられ、他の４基はいずれも杭状で配置も一定でない。掘り方は、確認されなかった。

出土遺物（第 23 図）は、土師器坏（１）、甑（２）、磨石（３・４）がある。出土量は僅少であり、図示した遺物のうち、出土位置が明確な２以外は、覆土上層から出土した。

１は、土師器の坏蓋模倣坏である。やや深身で、口縁部が外に開き、体部と底部の境に明確な稜を



第 23 図　第 12･13 号住居跡出土遺物

第 10 表　第 12 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(12.9)	(2.05)	-	ABI	橙色	B	10%	
2	土師器　坏	(12.4)	2.4	-	ABDHIK	橙色	B	20%	
3	土師器　甕	(21.5)	(22.8)	-	ABDHK	にぶい橙色	B	口～胴 30%	口縁部外面輪積痕有。内面やや摩耗。
4	土師器　甕	-	(14.5)	(4.0)	ABCDIK	にぶい橙色	B	胴～底 40%	内面輪積痕有、所々摩耗。

第 11 表　第 13 号住居跡出土遺物観察表

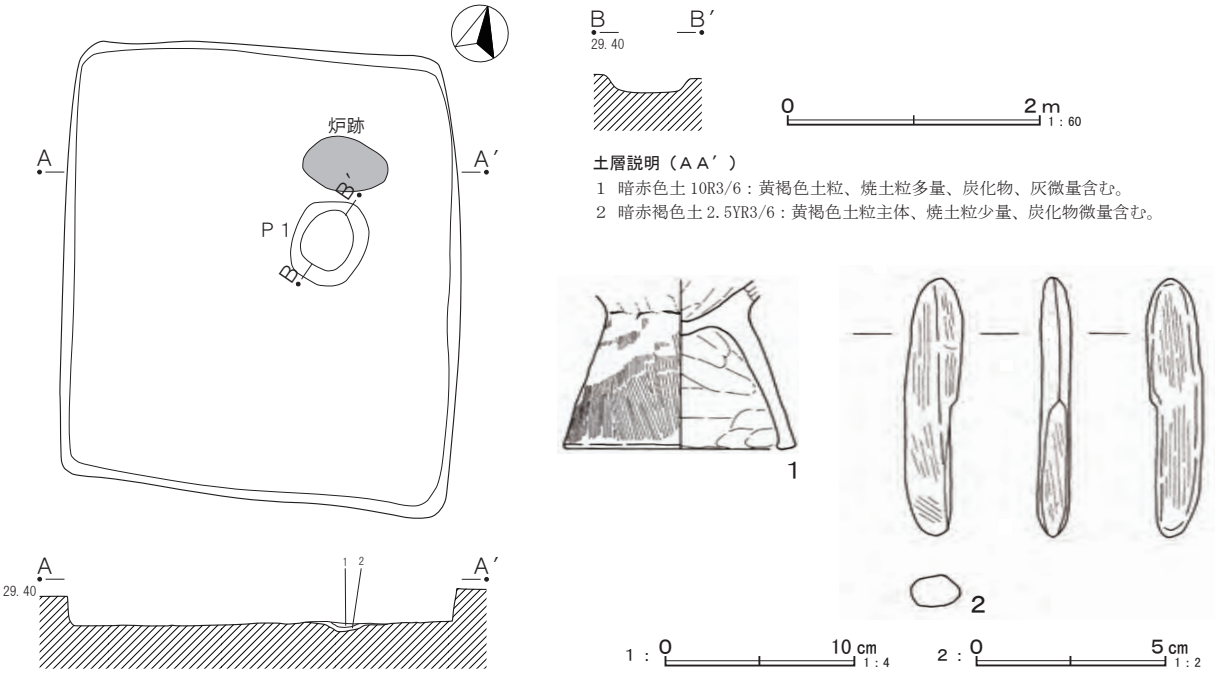
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(12.0)	4.2	-	ABDK	橙色	B	40%	内外面摩耗顕著。
2	土師器　甑	(20.0)	(5.7)	-	ABCIKM	橙色	B	口～胴 25%	口縁部外面輪積痕有。内面やや摩耗。
3	砥　石	最大長 8.4 ㎝、最大幅 5.4 ㎝、最大厚 3.7 ㎝。重量 59.5 ｇ。角閃石安山岩。完形。二面線状痕有。							
4	砥　石	最大長 9.5 ㎝、最大幅 8.2 ㎝、最大厚 5.6 ㎝。重量 173.7 ｇ。角閃石安山岩。完形。三面線状痕有。							

持つ。底部は丸底である。摩耗が著しいが、調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。２は、土師器甑である。口縁部が大きく外反することから甑としたが、鉢の可能性もある。口縁部に複数の段を持ち、所々に輪積痕が残る。胴部は、中段以下を欠くが、底部に向かってすぼまると思われる。器壁が厚い。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面は摩耗が著しく図示不可能であるが、ヘラナデと思われる。３・４は、砥石である。いずれも所々欠損するが、ほぼ全面に線状痕がみられた。

時期を明確に特定できる遺物はないが、本住居跡の時期は、住居跡の平面形や主軸方向などから古墳時代後期の６世紀中頃から後半と思われる。

第 14 号住居跡（第 24 図）

調査区西側のＦ－５・６グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 3.52 m



第 24 図　第 14 号住居跡・出土遺物

第 12 表　第 14 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器台付甕	-	(9.0)	(12.3)	ABDIKN	にぶい褐色	B	接～台 90%	外面上位摩耗顕著。
2	磨　石	最大長 6.9 ㎝、最大幅 1.4 ㎝、最大厚 0.85 ㎝。重量 13.0 ｇ。完形。砂岩。全面摩擦痕有。							

×短軸 3.04 m、床面積 10.60 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.25 mである。主軸方向は、N － 15° － Wを指す。他の遺構との重複は無く、遺存状況は概ね良好である。掘り込みが浅く、覆土の埋没状況は、確認できなかった。

炉跡は、北東側に位置する。平面形は、楕円形である。規模は、長軸 0.65 m、短軸 0.44 m、掘込みは床面から深さ 0.07 mである。火床は、黄褐色の地山が被熱で赤褐色に変化している。

床面は、ほぼ平坦であり、壁溝は確認されなかった。床面の硬化部分は確認されず、全体に軟弱である。ピットは、炉跡の北側で１基確認された。

出土遺物で図示可能なものは、土師器台付甕（１）、磨石（２）の２点のみである。いずれも覆土上層からの出土である。

１は、土師器台付甕の接合部から台部にかけての部位である。台部は、ハの字に開く。調整は、外面上位の摩耗が著しいが、全面ハケメ、内面は、胴部及び台部ともにヘラナデである。２は、磨石である。棒状を呈するが、片側面が抉れて平らである。全面に擦痕が認められた。

本住居跡の時期は、弥生時代末から古墳時代前期としておきたい。

第 15 号住居跡（第 25・26 図）

調査区西側のＧ－５・６、Ｈ－５・６グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 3.65 m×短軸 3.00 m、床面積 8.93 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.68 mである。主軸方向は、N － 57° －Wを指す。第 16 号住居跡の大半を切り、東壁中央付近をピット 99 に切られる。遺存状況は、極めて良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、西壁中央南寄りに付設されている。燃焼部の掘込みは、床面から深さ 0.08 m、幅は 0.46 mである。燃焼部内の火床面は、被熱で黄褐色の地山が赤褐色に変化している。袖部は、地山で造りだし、内壁に白色粘土を貼り付けている。内壁は、若干弧状に膨らむ。煙道部は、壁際で一段高くなり、地山を刳り抜き、0.98 m壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。

床面は、ほぼ平坦であり、カマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。

ピットは、２基確認された。南西隅の深いピットは、その位置から貯蔵穴とみられる。壁溝・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物（第 27 図）は、須恵器高盤（１）、甕（２・３）、土師器坏（４～８）、壺（９）、甕（10）、鉢 (11)、鉄製刀子（12）がある。出土位置の明確な１も含め、大半が覆土上層から出土である。６のみ貯蔵穴からの出土である。

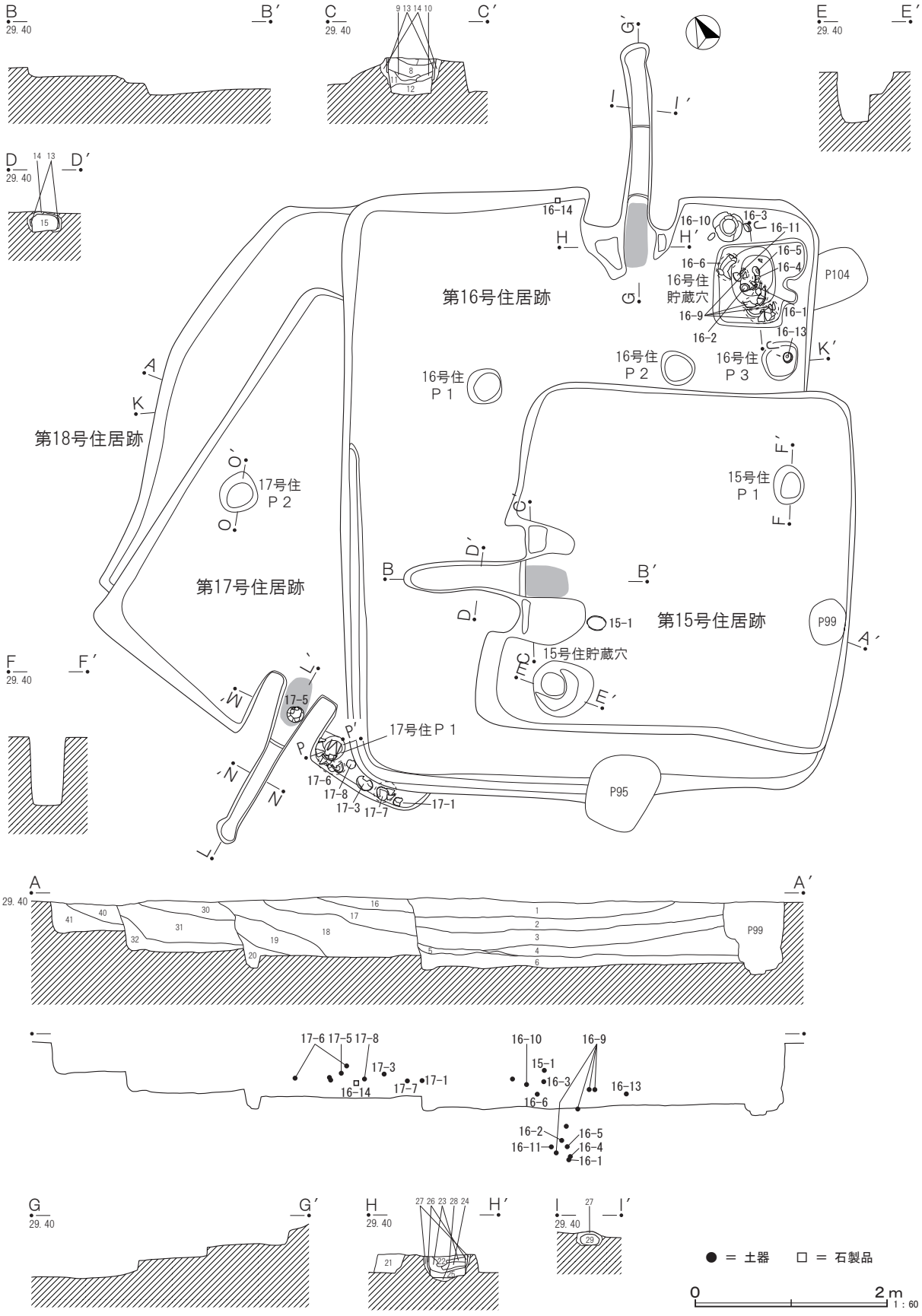
１は、須恵器高盤である。短い口縁部がほぼ直立する盤に、裾部がやや短い広がる脚部が付くが、端部は欠損している。調整は、内外面ともにロクロナデであるが、接合部付近の外面は、回転ヘラ削りが施されている。脚部中段に細い沈線が二条巡る。末野産か。２は須恵器甕の頸部片、３は胴上部片である。調整は、２がロクロナデ後、外面に二本一組の沈線を挟んで上下に緩い波状文が巡る。３はロクロナデであり、外面に自然釉が付着している。２は末野産であるが、３は産地不明である。土師器坏は、４・６・８が坏蓋模倣坏、５は有段口縁坏、７は坏身模倣坏である。やや大型の４以外は、口径が 12cm を測るが、深身のもの（４～６）と浅身のもの（７・８）があり、後者は新しい様相を呈することから流れ込みの可能性が高い。口縁部は、ほぼ直立する７以外、逆ハの字状を呈するが、開きが小さい。体部と底部の境にある稜は、深身の４～６は、やや不明瞭であるが、浅身の７・８は明確である。坏の調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。４は、内面に煤が付着している。９は、土師器壺の口縁部から頸部にかけての部位である。逆ハの字に開く器形で、器壁が厚い。調整は、摩耗が著しいことから図示不可能であったが、内外面ともにヘラミガキと思われる。流れ込みと思われる。10 は、土師器長胴甕である。最大径を持つ口縁部が緩やかに外反し、下位に段を持つ。胴部は、中段以下を欠くが、直線的に下ると思われる。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面は摩耗が著しく図示不可能であるが、ヘラナデと思われる。11 は、土師器鉢である。口縁部が直立し、外面は中段、内面は端部に段を持つ。胴部は、球形を呈する。底部を欠く。胴部中段に最大径を持つが、口径とあまり変わらない。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。12 は、鉄製刀子である。柄部で角柱状を呈する。端部付近に円孔を持つ。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の６世紀末から７世紀初頭と思われる。

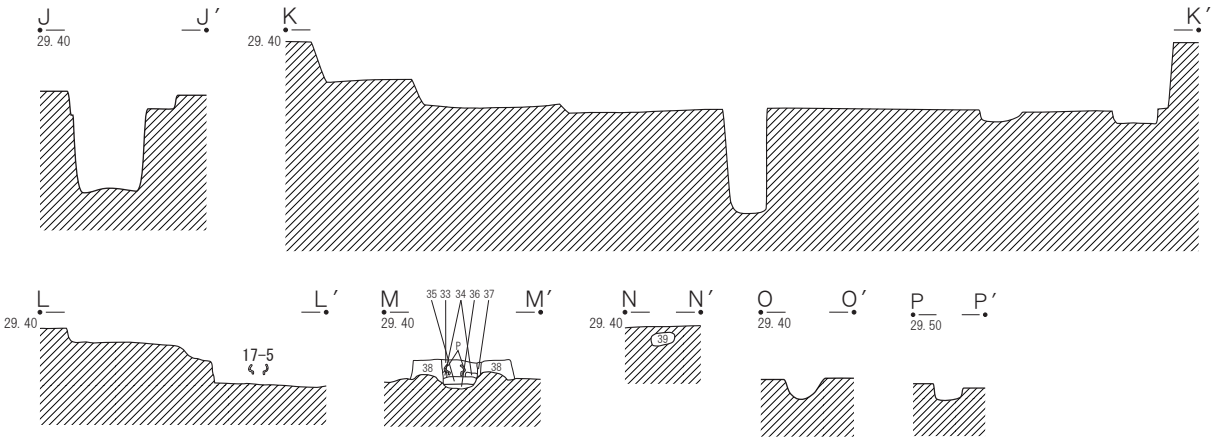
第 16 号住居跡（第 25・26 図）

調査区西側のＧ－５・６、Ｈ－５・６グリッドに跨って位置する。平面形は、カマド煙道部の軸方向に長い方形である。規模は、長軸 6.05 m × 短軸 4.67 m、床面積 8.93 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.63 mである。主軸方向は、Ｎ－ 27° －Ｅを指す。西側で第 17・18 号住居跡を切り、南東側で第 15 号住居跡、南壁と東壁でピット 95･104 に切られる。遺存状況は、第 15 号住居跡に大きく切られ、あまり良好ではない。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、北壁中央東寄りに付設されている。、燃焼部の掘込みは床面から深さ 0.11 m、幅は 0.42



第 25 図　第 15 ～ 18 号住居跡（１）



第 15 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＣＣ′ ＤＤ′）

1 黒褐色土 10YR2/2：しまり強。粘性やや有。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物微量含む。
2 暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物微量含む。
3 暗褐色土 10YR3/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量、炭化物微量含む。
4 褐色土 10YR4/6：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。
5 褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒、炭化物多量、焼土粒少量含む。
6 にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
7 暗褐色土 7.5YR3/3：黄褐色土塊、焼土粒少量含む。
8 褐色土 7.5YR4/3：黄褐色土粒多量、φ 2 ～ 10 ㎜大の焼土塊少量含む。
9 にぶい褐色土 7.5YR5/4：黄褐色土塊、焼土塊多量含む。
10 赤橙色土 10R6/6：黄褐色土粒、φ 10 ～ 30 ㎜大の焼土塊多量含む。天井部崩落土。
11 灰赤色土 2.5YR5/2：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土塊少量含む。
12 暗赤灰色土 2.5YR3/1：灰多量、φ 10 ～ 30 ㎜大の焼土塊、炭化物少量含む。燃焼部。
13 橙色土 2.5YR7/6：袖部内壁に貼付けた厚さ 10 ～ 15 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
14 にぶい橙色土 2.5YR6/4：袖部の地山が被熱で色調変化。
15 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、焼土塊、炭化物少量含む。煙道部。

第 16 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＨＨ′ ＩＩ′）

16 暗褐色土 10YR3/3：しまり強。粘性弱。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物微量含む。
17 暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量、炭化物微量含む。
18 褐色土 10YR4/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。
19 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
20 にぶい褐色土 7.5YR5/3：黄褐色土粒主体。炭化物少量含む。
21 褐色土 10YR4/6：黄褐色土塊多量、φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊少量含む。
22 赤褐色土 10R4/3：黄褐色土粒、φ 5 ～ 10 ㎜大の焼土塊多量含む。
23 赤橙色土 10R6/8：φ 10 ～ 30 ㎜大の焼土塊主体。天井部崩落土。
24 黄褐色土 10YR5/6：φ 5 ～ 30 ㎜大の黄褐色土塊主体。焼土塊少量含む。
25 暗赤灰色土 2.5YR3/1：灰多量、焼土塊、炭化物少量含む。燃焼部。
26 橙色土 2.5YR7/6：袖部内壁に貼付けた厚さ 15 ～ 20 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
27 暗赤褐色土 2.5YR5/6：袖部、煙道部の地山が被熱で色調変化。
28 にぶい赤褐色土 2.5YR5/4：火床面の地山が被熱で色調変化。
29 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊、炭化物少量含む。煙道部。

第 17 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＭＭ′ ＮＮ′）

30 褐色土 10YR3/3：しまり強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量、炭化物微量含む。
31 褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物微量含む。
32 にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
33 暗赤褐色土 5YR3/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊、炭化物少量含む。
34 赤褐色土 10R4/4：φ 10 ～ 30 ㎜大の焼土塊主体。天井部崩落土。
35 暗赤灰色土 7.5R3/1：φ 2 ～ 10 ㎜大の焼土塊、炭化物、灰少量含む。燃焼部。
36 にぶい赤褐色土 7.5R4/3：火床面の地山が被熱で色調変化。
37 橙色土 2.5YR7/6：袖部内壁に貼付けた厚さ 20 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
38 にぶい黄褐色土 10YR5/4：黄褐色土粒主体。φ 5 ～ 10 ㎜大の焼土塊少量含む。
39 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、焼土塊少量含む。煙道部。

第 18 号住居跡

土層説明（ＡＡ′）

40 暗褐色土 10YR3/4：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊少量、炭化物微量含む。
41 にぶい褐色土 7.5YR5/3：しまり・粘性強。黄褐色土粒主体。炭化物少量含む。

0 2m
1：60

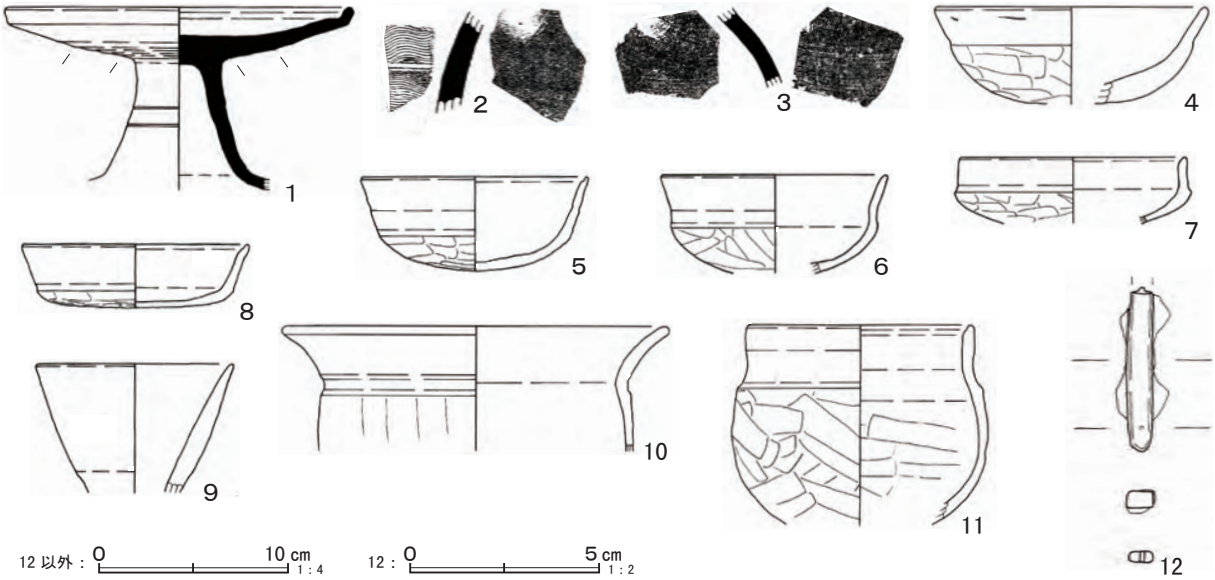
第 26 図　第 15 ～ 18 号住居跡（２）

ｍである。火床面は、被熱で黄褐色の地山が赤褐色に変化している。袖部は、地山で造りだし、内壁内壁に白色粘土を貼り付けている。内壁は、弧状に膨らむことなく、同一幅で焚口まで直線的に伸びる。煙道部は、壁際で一段、さらに 0.70 ｍ進んだ所でもう一段高くなり、地山を刳り抜き、1.30 ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。煙出しの平面形は、径 0.22 ｍの円形である。

壁溝は、西壁と東壁に部分的に残る。床面は、ほぼ平坦であり、カマド前から貯蔵穴周辺にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。

ピットは、４基確認された。北東隅の深いピットは、その位置から貯蔵穴とみられ、平面形が方形と楕円形の二段掘りになっており、多数の遺物が出土した。

出土遺物（第 28 図）は、土師器坏（１～５）、甕（６～ 11）、鉢（12）、埦（13）、石製紡錘車（14）がある。出土位置は、貯蔵穴とその周辺に集中するが、11･12 はカマド、7･8 は覆土上層からの出土で



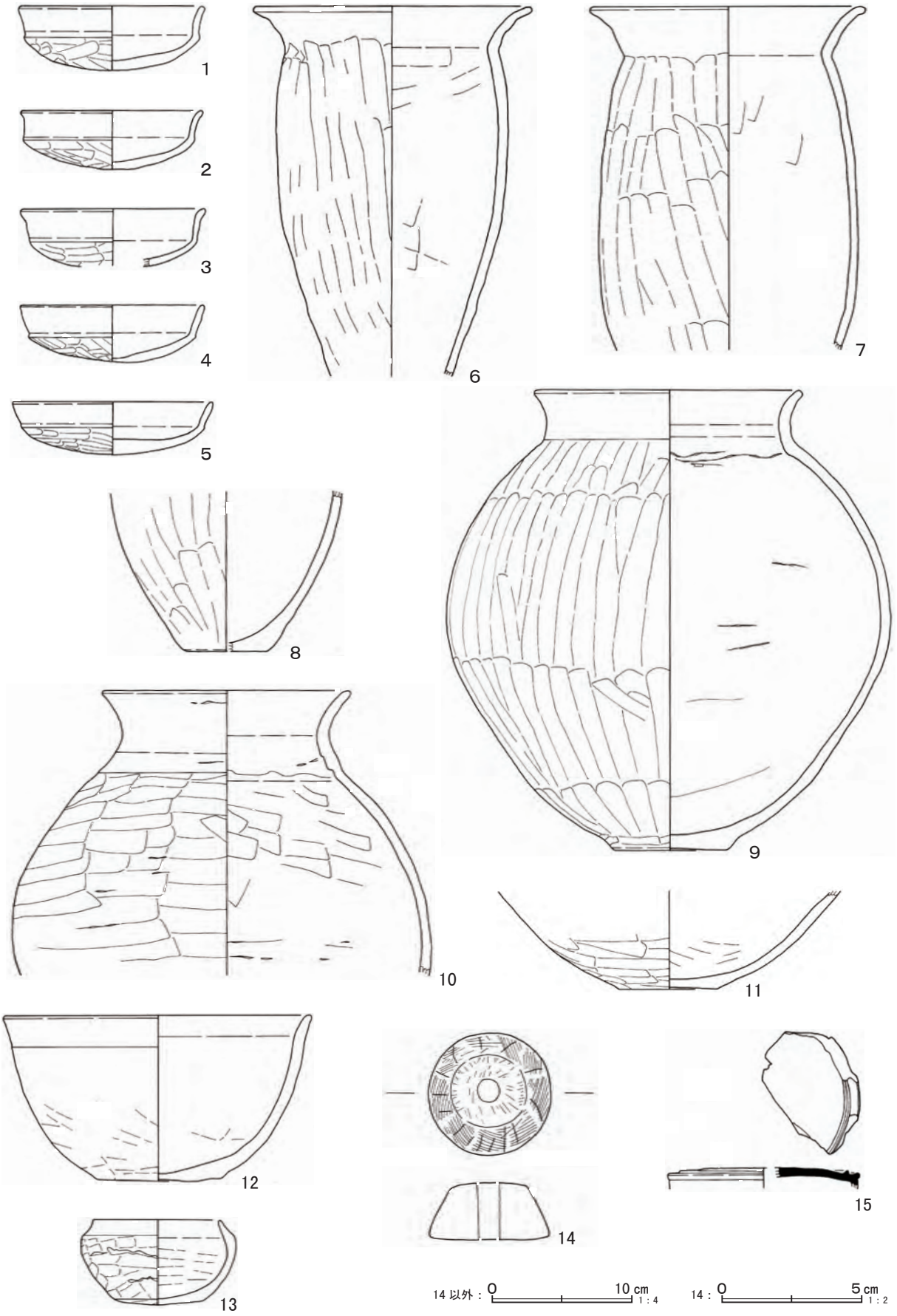
第 27 図　第 15 号住居跡出土遺物

第 13 表　第 15 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器高盤	(18.4)	(9.6)	-	ABL	褐灰色	B	口～脚 70%	末野産？
2	須恵器　甕	-	-	-	ABL	灰色	B	頸部片	末野産。
3	須恵器　甕	-	-	-	AB	灰白色	B	胴上部片	産地不明。外面自然釉付着。
4	土師器　坏	(14.4)	(5.1)	-	ABEIK	浅黄色	B	30%	内面煤付着。外面やや摩耗。
5	土師器　坏	(12.0)	5.0	-	ABEIKN	橙色	B	30%	
6	土師器　坏	(12.0)	(5.2)	-	ABDIK	外：にぶい褐 内：黒	B	25%	内面タール付着。
7	土師器　坏	(12.0)	(3.5)	-	ABEIK	浅黄橙色	B	25%	
8	土師器　坏	(12.0)	3.3	-	ABDHK	橙色	B	50%	
9	土師器　壺	(10.4)	(6.8)	-	ABCEI	橙色	B	口～頸 40%	内外面摩耗顕著。
10	土師器　甕	(20.4)	(6.6)	-	ABCIKN	にぶい黄橙色	B	口～胴 20%	内外面摩耗顕著。
11	土師器　鉢	(12.0)	(10.6)	-	ABCHIK	明褐色	B	口～胴 30%	
12	鉄製刀子	最大長 (4.4) ㎝、最大幅 (0.65) ㎝、最大厚 (0.4) ㎝。重量 (4.0) ｇ。柄部のみ残。孔（0.1 ㎜）有。							

ある。また、流れ込みで須恵器円面硯（15）も覆土上層から出土した。

１～５は、土師器坏蓋模倣坏である。口縁部が外反するものが多い。いずれも体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は、丸底である。やや大型の５以外は、口径 13cm、器高４cm 程を測る。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。６～８は、土師器長胴甕である。６・７は、口縁部が外反するが、胴部は６が最大径を上位に持ち、底部に向かってすぼまるのに対し、７は中段付近が膨らむ。いずれも胴下部から底部を欠く。８は、胴部中段から底部にかけての部位である。胴下部から底部に向かってすぼまる。底部は、平底である。９～11 は、土師器丸胴甕である。口縁部が外反し、胴部は大きく膨らみ、球形を呈する。最大径を中段に持つ。底部は、やや上げ底である。甕の調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。９は胴部内面、10 は内外面に輪積痕が残る。12 は、土師器鉢である。短い口縁部が緩やかに開き、胴部は内湾する。底部は、平底である。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は摩耗が著しいが、外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。13 は、土師器椀である。小振りで、口縁部が内傾する。体部は、やや算盤玉状を呈し、底部は、平底に近い。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。胴部外面に輪積痕が残る。14 は、石製紡錘車である。側面に弧状の線刻が巡る。完形。15 は、須恵器円面硯である。硯面付近のみの検出である。産地不明である。



第 28 図　第 16 号住居跡出土遺物

第 14 表　第 16 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(13.4)	4.6	-	ABEHKN	明赤褐色	B	70%	
2	土師器　坏	13.0	4.2	-	ABEHIKN	明赤褐色	B	80%	
3	土師器　坏	(13.2)	(4.1)	-	ACDHIKN	明赤褐色	B	30%	
4	土師器　坏	13.2	4.1	-	ABHIN	にぶい褐色	B	完形	
5	土師器　坏	14.3	3.8	-	ABCDHIKN	橙色	B	ほぼ完形	内面・口縁部外面摩耗顕著。
6	土師器　甕	(20.0)	(26.5)	-	ABCDIKM	にぶい橙色	B	口～胴 30%	内外面摩耗顕著。
7	土師器　甕	(19.8)	(24.5)	-	ABDIKM	にぶい橙色	B	口～胴 40%	内外面摩耗顕著。
8	土師器　甕	-	(11.5)	(6.0)	ABIKMN	にぶい褐色	B	胴～底 20%	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。
9	土師器　甕	(19.2)	32.8	8.1	ADEHIKN	浅黄橙 橙	B	70%	胴部内面輪積痕有。内面摩耗顕著。
10	土師器　甕	17.8	(20.4)	-	ABDEHIK	外 : 橙 内 : 浅黄橙	B	口～胴 100%	内外面輪積痕有。内外面やや摩耗。
11	土師器　甕	-	(7.0)	(7.2)	ABEIKN	橙色	B	胴～底 60%	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。
12	土師器　鉢	(22.0)	11.9	9.1	ABDEK	橙色	B	60%	内外面摩耗顕著。
13	土師器　椀	9.2	6.1	6.0	ABEIK	橙色	B	完形	胴部外面輪積痕有。内外面摩耗顕著。
14	石製紡錘車	最大径 4.4 ㎝、最大厚 2.0 ㎝、孔径 0.8 ㎝。重量 54.8 ｇ。完形。滑石。全面擦痕、側面弧状線刻有。							
15	須恵器円面硯	(13.8)	(1.5)	-	AB	浅黄色	B	硯面 25%	産地不明。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の６世紀前半と思われる。

第 17 号住居跡（第 25・26 図）

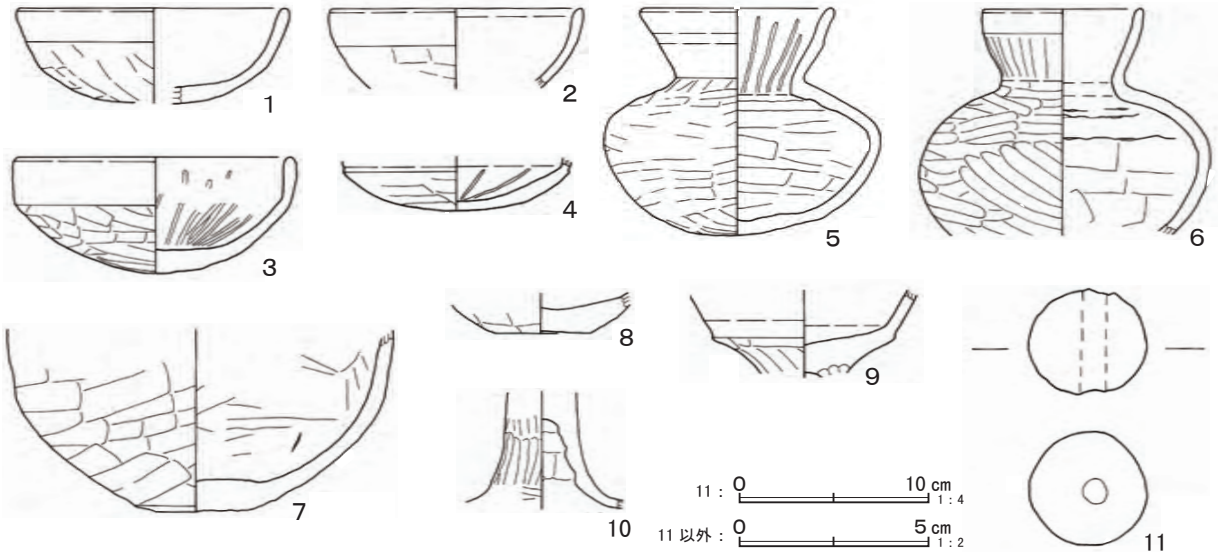
調査区西側のＧ－５・６グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 3.85 ｍ×短軸 4.05 ｍ、床面積 8.93 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.52 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 64° －Ｅを指す。東側で半分以上を第 16 号住居跡に切られ、西側で第 18 号住居跡を切っている。遺存状況は、第 16 号住居跡に大きく切られ、あまり良好ではない。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、西壁中央南寄りに付設されている。燃焼部幅は 0.36 ｍ、火床は、ほぼ床面レベルで黄褐色の地山が赤褐色に変化している。燃焼部内で小型壺が逆位に出土し、位置から支脚として使用されていたとみられる。袖部の構築材は、焼土塊混じりの黄褐色土粒を主体とし、内壁に白色粘土を貼り付けている。南袖の内壁は、煙道部から直線的に伸び、北袖は焚口に向かって若干開く。煙道部は、壁際で一段高くなり、地山を刳り抜き、1.10 ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。煙出しの平面形は、径 0.23 ｍの円形である。

床面は、ほぼ平坦であり、全体に軟弱である。ピットは、２基確認された。壁溝・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物（第 29 図）は、土師器坏（１～４）、壺（５・６）、甕（７・８）、高坏（９・10）、土玉（11）がある。出土位置は、カマド南側の西壁際、カマドに集中する。出土位置を示していない遺物は、覆土上層から出土した。

土師器坏１・２は、深身で半球形を呈し、器壁が厚い。口縁部は、１が外に開くが、２はやや内湾する。底部は、ともに丸底である。３・４は、土師器暗文坏である。内面に放射状暗文が施文されている。３は密であるが、４は間隔を空けて描かれている。３は、口縁部が直立し、体部と底部の境に稜を持ち、底部は丸底である。器壁が厚い。４は、体部から底部までの部位である。明確な稜を持ち、丸底である。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。５・６は、土師器壺である。いずれも逆ハの字に開く口縁部が、やや受け口状を呈する。胴部は、詰まった球形を呈し、最大径を中段に持つ。底部は、丸底である。器壁が厚い。５の調整は、口縁部が横ナデ、胴部は内外面ともに



第 29 図　第 17 号住居跡出土遺物

第 15 表　第 17 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(14.4)	5.0	-	CIK	橙色	B	20%	内外面摩耗顕著。
2	土師器　坏	(13.5)	(4.2)	-	ABEI	橙色	B	20%	内外面摩耗顕著。
3	土師器　坏	(15.0)	6.1	-	ABDIK	橙色	B	90%	内面放射状暗文有。
4	土師器　坏	-	(2.8)	-	ABCDHK	橙色	B	体～底 30%	内面放射状暗文有。
5	土師器　壺	10.2	12.0	-	ABDHIM	明赤褐色	B	90%	口縁部内面放射状暗文有。胴部内面摩耗顕著。
6	土師器　壺	8.4	(12.0)	-	ABDEHIK	浅黄橙色	B	口～胴 80%	胴上部内面輪積痕有。
7	土師器　甕	-	(9.7)	6.6	ABDEIKN	黄橙色 橙色	B	胴～底 50%	
8	土師器　甕	-	(2.1)	5.0	ABDEIK	橙色	B	底部 100%	内外面摩耗顕著。
9	土師器　高坏	-	(4.6)	-	ABDEIK	外 : 橙 内 : にぶい黄橙	B	坏～接 80%	内外面摩耗顕著。
10	土師器　高坏	-	(6.2)	-	ABCIK	橙色	B	脚部 50%	内面輪積痕有。内外面やや摩耗。
11	土　玉	最大径 3.1 ㎝、孔径 0.6 ㎝、重量 24.5 ｇ。完形。							

ヘラナデである。口縁部内面に放射状暗文が施文されている。６の調整は、口縁部外面端部と内面が横ナデ、胴部は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。胴上部内面に輪積痕が複数残る。７・８は、土師器丸胴甕である。７は、胴部中段から底部にかけての部位、８は底部である。胴部は、球形を呈すると思われ、底部は７が平底、８はやや上げ底である。ともに底部の器壁が厚い。調整は、外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。９・10 は、土師器高坏である。９は、坏部下位から接合部にかけての部位、10 は脚部である。９は、坏部下位に稜を持つ。10 は、上位が棒状を呈し、裾部は外反するが、端部を欠く。調整は、９の坏部は横ナデ、接合部はヘラナデ、10 は外面がヘラミガキ、内面は上位が絞り目、下位は横ナデである。11 は、土玉である。球形を呈し、中心に孔を持つ。完形。

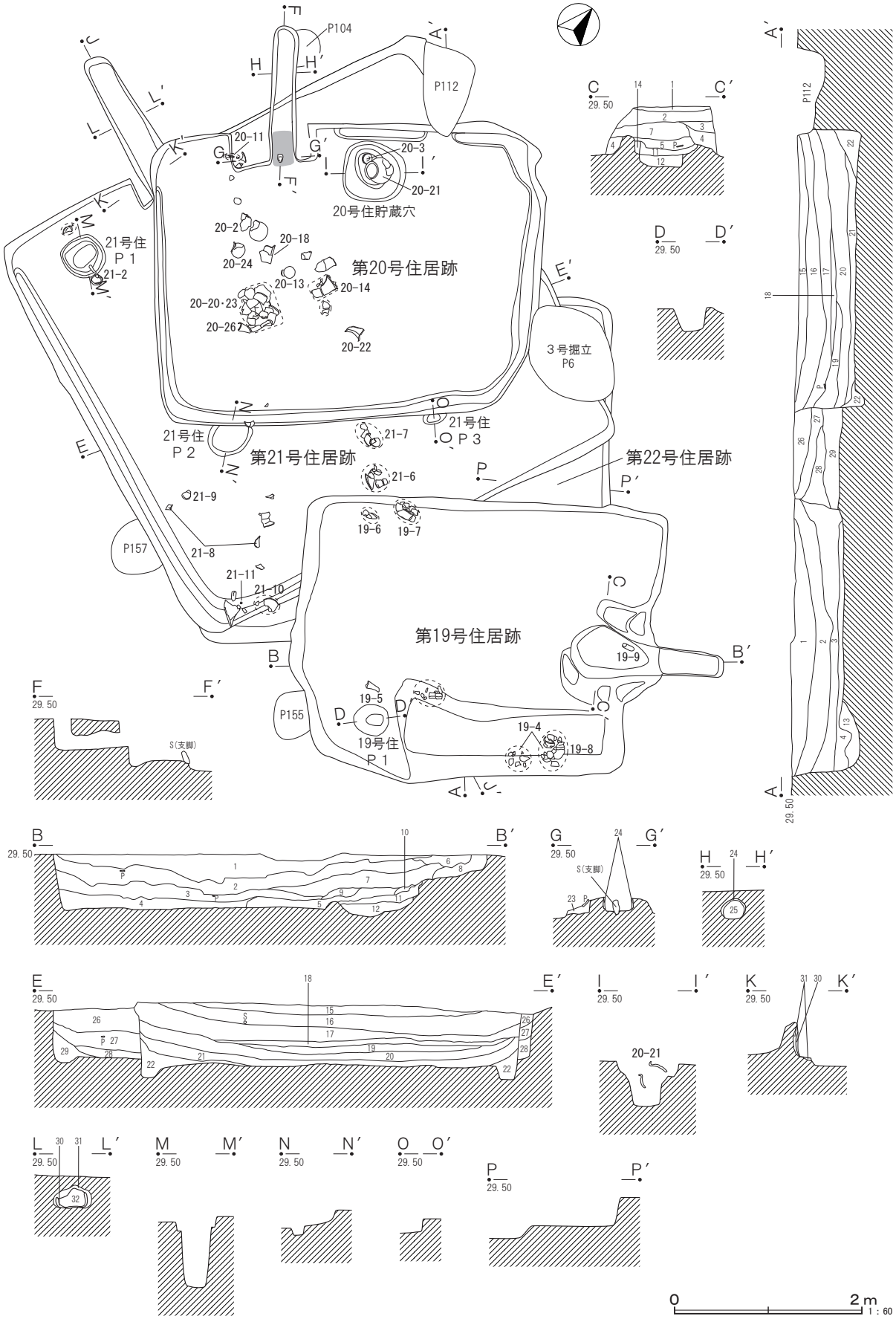
本住居跡の時期は、古墳時代中期の５世紀後半と思われる。

第 18 号住居跡（第 25・26 図）

調査区西側のＧ－５グリッドに位置する。平面形は、方形とみられる。規模は、長軸 4.25 ｍ×短軸 0.65 ｍ、遺構確認面からの深さは、0.29 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 56°－Ｅを指す。南東側で第 16・17 号住居跡に大半を切られており、遺存状況は極めて悪い。覆土の堆積状況も不詳である。

カマド・壁溝・ピット・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物は僅少であり、図示可能なものは見られなかったが、本住居跡の時期は、重複する住居跡との新旧関係や主軸方向などから古墳時代前期、４世紀代の可能性が高い。



第 30 図　第 19 ～ 22 号住居跡（１）

第 19 号住居跡（第 30・31 図）

調査区西側のＨ－６・７、Ｉ－６・７グリッドに跨って位置する。平面形は、カマド煙道部の軸方向に長い方形である。規模は、長軸 3.70 ｍ×短軸 2.84 ｍ、床面積 7.33 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.56 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 55° －Ｅを指す。北西側で第 21・22 号住居跡、北東側で第 23 号住居跡を切り、南隅をピット 155 に切られている。遺存状況は、概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、北東壁中央南寄りに付設されている。燃焼部の 1/4 が壁外へ張出し、内壁最大幅 0.96 ｍ、掘込みは床面から深さ 0.06 ｍである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕は、確認されなかった。また、燃焼部内で細長い礫が出土し、被熱痕があることから支脚として使用されていたとみられる。袖部は、黄褐色の地山で造りだし、内壁は弧状に膨らむ。僅かではあるが、南袖の裾部は、焚口付近まで残存していた。煙道部は、壁際で一段高くなり、地山を刳り抜き 1.20 ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。

床面は平坦であり、カマド前に硬化部分を確認したが、全体に軟弱である。南東隅から南壁に沿って、床面から一段低い掘り込みが確認された。平面形が長方形、横断面が皿状で、長さ 2.20 ｍ、幅 0.65 ｍ、深さ 0.20 ｍである。

ピットは、南西隅で１基確認された。壁溝・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物（第 32 図）は、須恵器坏（１）、高台付椀（２・３）、土師器甕（４～８）、石製支脚（９）がある。出土位置は、南西壁沿いにある長方形の掘り込み内とその付近、南西隅に集中する。出土位置を示していない遺物は、覆土上層から出土した。

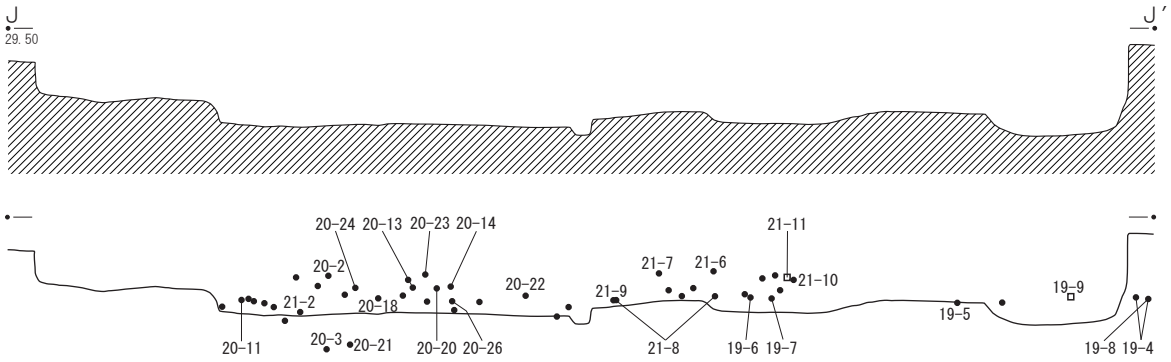
１は、須恵器坏である。口縁部が僅かに外反し、体部は内湾する。底部は、やや上げ底である。２・３は、高台付椀である。２は、肥厚した口縁部が外反し、体部は内湾する。短い高台は、２・３ともにハの字に開くが、３は器壁が厚い。１～３の調整は、ロクロナデであり、底部は回転糸切り痕を残す。すべて末野産である。４～８は、土師器甕である。口縁部は、コの字状を呈し、胴部は中段以下を欠くが、倒卵形を呈すると思われる。最大径を胴上部に持つが、あまり口径と変わらない。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。４以外は、口縁部に指オサエも施されており、輪積痕が残るものが多い。９は、石製支脚である。加工痕等はないが、被熱痕がみられた。両端欠損箇所がある。

本住居跡の時期は、９世紀中頃から後半と思われる。

第 20 号住居跡（第 30・31 図）

調査区西側のＩ－６・７、Ｊ－６・７グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 3.96 ｍ×短軸 3.07 ｍ、床面積 10.14 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.62 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 40° －Ｗを指す。大半が第 21 号住居跡と重複しており、本住居跡が切っている。また、北東壁で第３号掘立柱建物跡のピット６、北西壁でピット 112 にそれぞれ切られている。遺存状況は、概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、北西壁中央西寄りに付設されている。燃焼部幅は 0.30 ｍ、火床は、ほぼ床面レベルで黄褐色の地山が赤褐色に変化している。燃焼部内で長さ 0.18 ｍ、最大径 0.06 ｍの細長い礫が立位で出土



第 19 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′）

1 暗褐色土 10YR3/3：黄褐色土粒少量、焼土粒微量含む。
2 褐色土 10YR4/6：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物微量含む。
3 暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊少量含む。
4 褐色土 10YR4/4：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
5 にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。φ 5 ～ 20 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物、灰色粘土微量含む。
6 暗褐色土 5YR3/6：黄褐色土粒多量、焼土塊、炭化物少量含む。
7 にぶい褐色土 10YR5/3：黄褐色土塊、焼土塊少量含む。
8 赤褐色土 5YR4/6：φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊、炭化物少量含む。煙道部。
9 にぶい赤褐色土 2.5YR4/4：黄褐色土粒、φ 5 ～ 10 ㎜大の焼土塊少量含む。
10 赤褐色土 10R4/4：しまり・粘性弱。φ 5 ～ 30 ㎜大の焼土塊多量、黄褐色塊、炭化物少量含む。
11 暗褐色土 2.5YR3/2：しまり・粘性無。焼土塊、炭化物、灰多量含む。燃焼部。
12 赤褐色土 5YR4/6：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊、焼土粒多量、炭化物、灰少量含む。
13 暗褐色土 10YR3/3：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
14 にぶい赤褐色土 5YR4/4：袖部内壁の地山が被熱で色調変化。

第 20 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＥＥ′ ＧＧ′ ＨＨ′）

15 極暗褐色土 7.5YR2/3：しまり強。粘性弱。黄褐色土粒、焼土粒微量含む。
16 暗褐色土 10YR3/3：黄褐色土粒、焼土粒少量、土器片多量含む。
17 暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土粒少量、焼土粒、炭化物微量含む。
18 褐色土 10YR4/4：黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。
19 にぶい褐色土 7.5YR5/3：黄褐色土粒・塊多量含む。
20 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色土塊、炭化物少量含む。
21 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
22 にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。黄褐色土粒主体。炭化物少量含む。
23 にぶい黄褐色土 10YR4/3：φ 5 ～ 20 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒少量含む。
24 橙色土 5YR7/8：燃焼部内壁に貼付けた 10 ～ 15 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
25 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊ブロック少量含む。煙道部。

第 21 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＫＫ′ ＬＬ′）

26 暗褐色土 10YR3/3：しまり強。粘性やや有。黄褐色土粒少量、焼土粒、炭化物微量含む。
27 暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒、炭化物微量含む。
28 褐色土 10YR4/6 黄褐色土塊多量、焼土粒少量含む。
29 にぶい褐色土 7.5YR5/3：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
30 橙色土 2.5YR7/6：袖部・煙道部内壁に貼付けた 12 ～ 15 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
31 明赤褐色土 2.5YR5/6：袖部・煙道部内壁の地山が被熱で色調変化。
32 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、焼土粒少量、炭化物微量含む。煙道部。

● ＝ 土器　□ ＝ 石製品　0　2m　1：60

第 31 図　第 19 ～ 22 号住居跡（２）

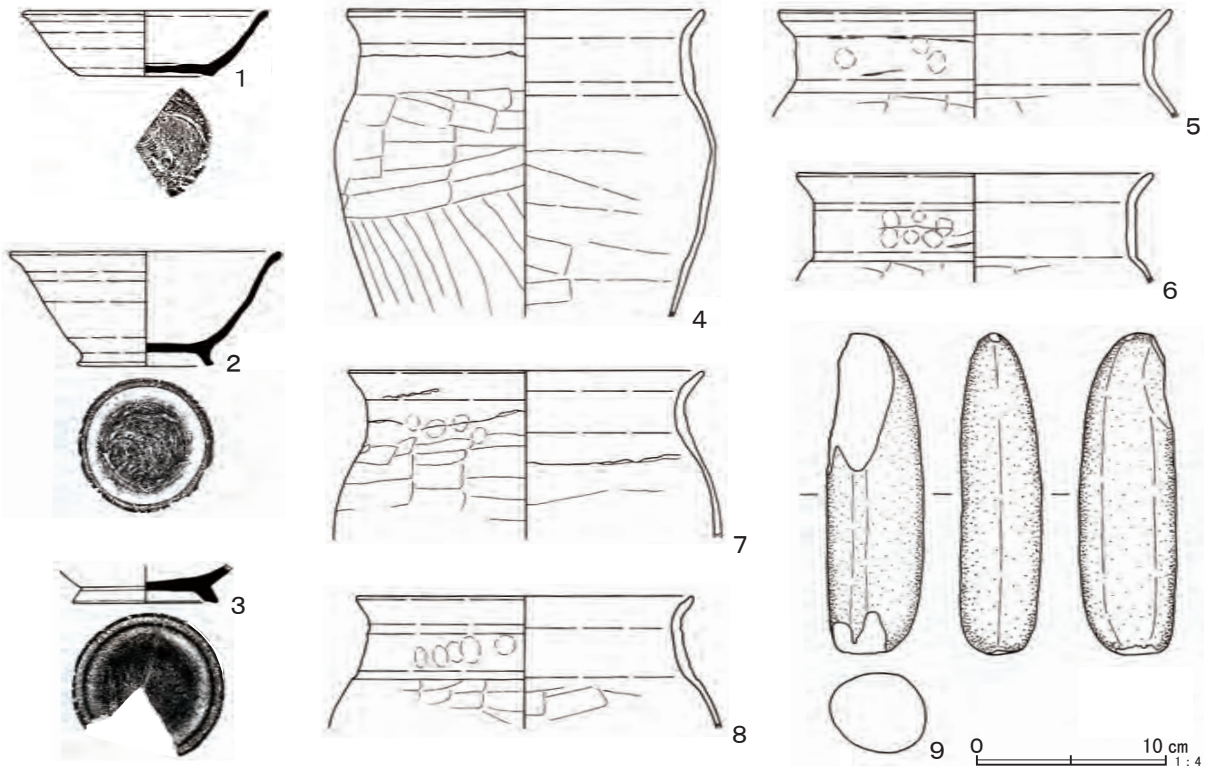
し、被熱痕があることから、支脚として使用されていたとみられる。袖部は、地山で造りだし、内壁に白色粘土を貼り付けている。内壁は、弧状に膨らむことなく、同一幅で焚口まで直線的に伸びる。煙道部は、壁際で一段高くなり、地山を刳り抜き、1.00 ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。煙出しの平面形は、径 0.25 ｍの円形である。

壁溝は、部分的に途切れているが、ほぼ全周していたとみられる。床面は、若干凹凸があり、全面にわたって踏み固めとみられる硬化部分を確認した。

ピットは、北西壁際で１基確認された。平面形が方形と楕円形の二段掘りになっており、土師器甕などが出土した。形状と位置から貯蔵穴とみられる。

出土遺物（第 33・34 図）は、須恵器甕（１・２）、土師器坏（３～ 12）、壺（13）、甕（14 ～ 24）、甑（25）、土製支脚（26）、不明鉄製品（27）がある。出土位置は、床面中央やや南西寄りに集中するが、床面からかなり浮いたものもある。出土位置を図示していないものの大半は、覆土上層からの出土である。

１は、須恵器大型甕の肩部から胴部中段にかけての部位である。調整は、外面がタタキ、内面はあて具痕が残る。２は、須恵器甕の肩部から胴下部までの破片である。調整は、内外面ともにロクロナデ

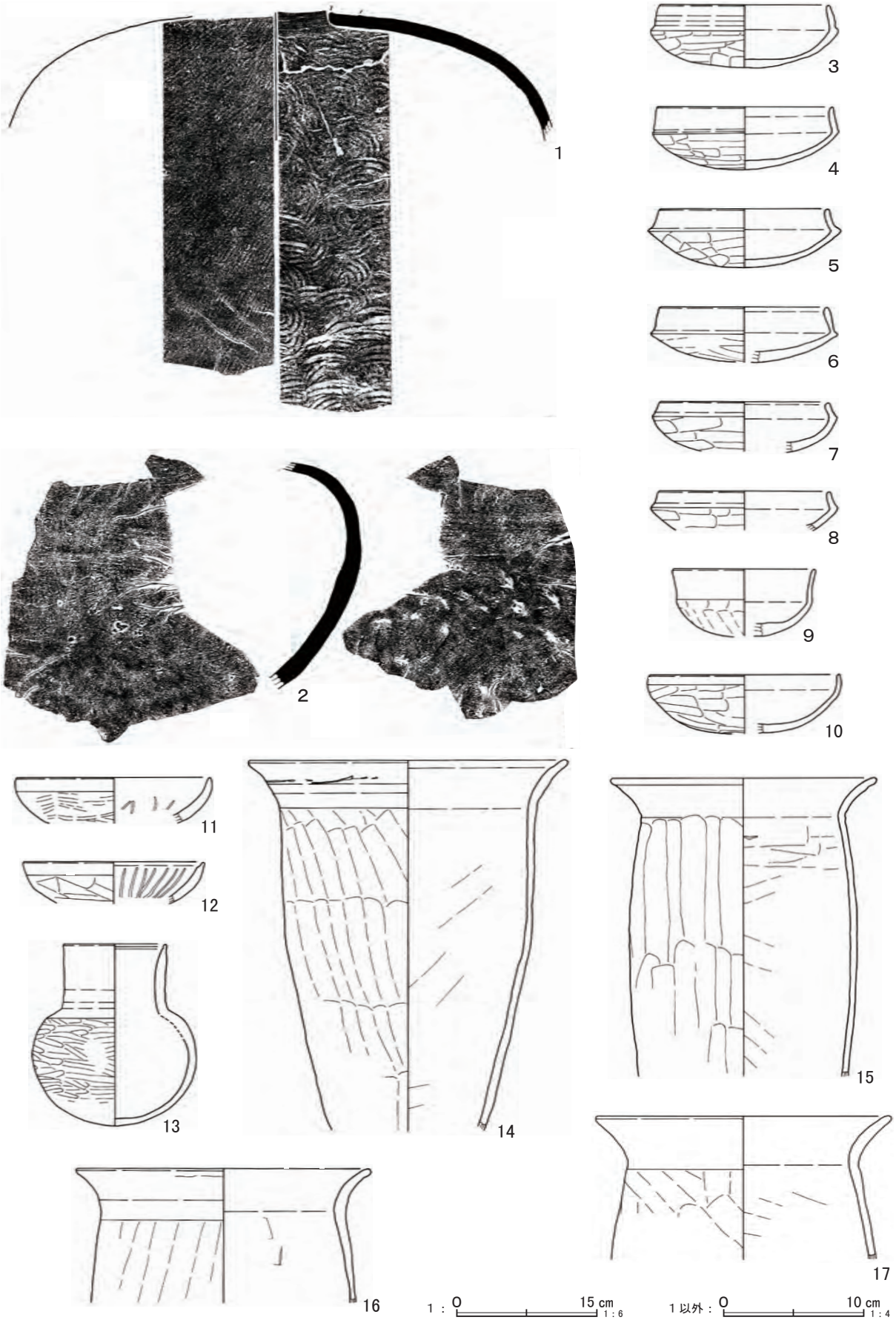


第 32 図　第 19 号住居跡出土遺物

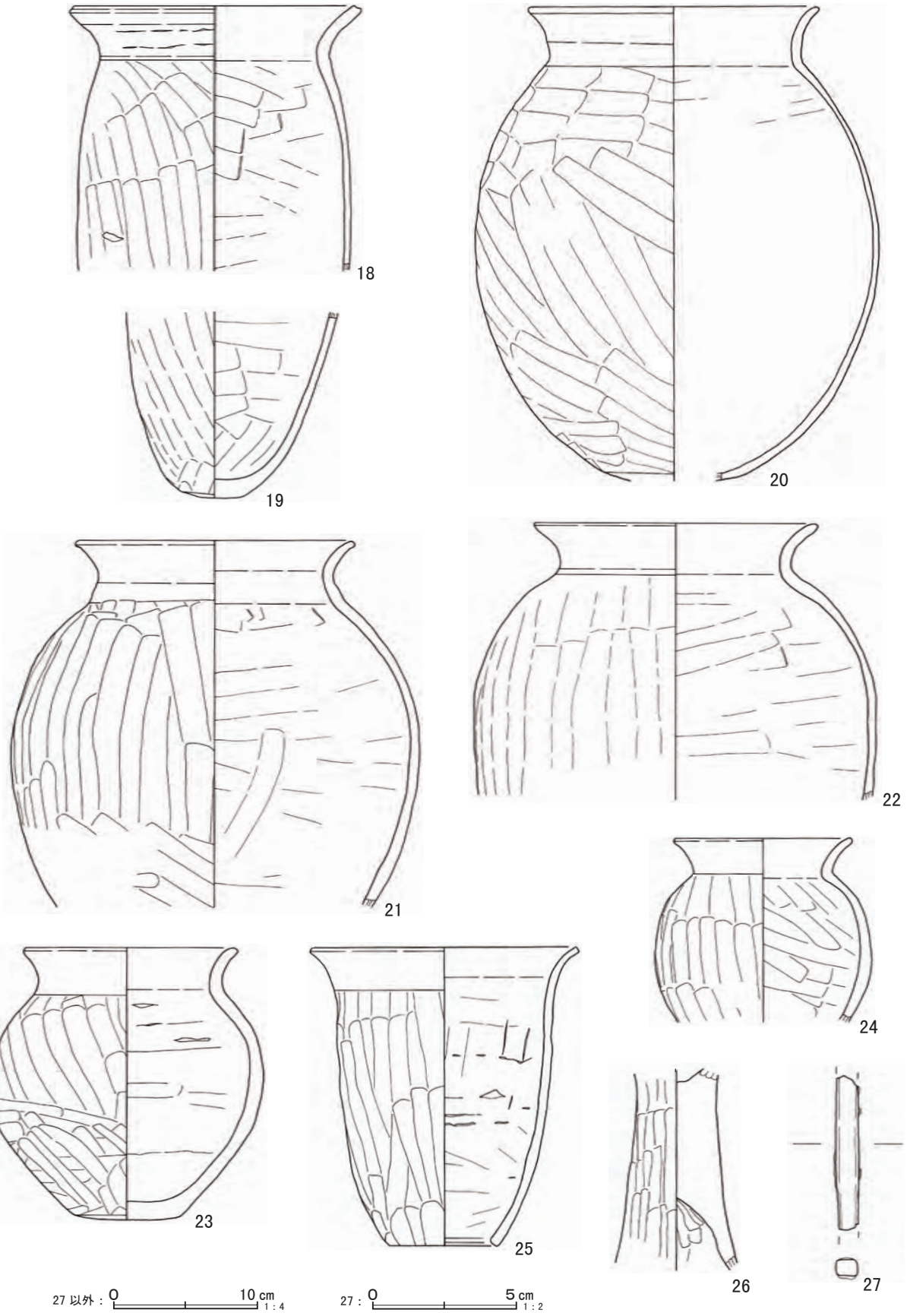
第 16 表　第 19 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	(13.0)	3.4	(7.0)	ABDHL	褐灰色	B	25%	末野産。
2	須恵器高台椀	(14.2)	6.1	7.2	ABL	灰色	B	60%	末野産。
3	須恵器高台椀	-	(2.0)	7.8	ABDH	灰白色	B	高台部 80%	末野産。
4	土師器　甕	(18.8)	(16.3)	-	ABDGIK	にぶい橙色	B	口～胴 60%	口縁部外面輪積痕有。内面やや摩耗。
5	土師器　甕	(20.8)	(5.9)	-	ABDEHIKN	外 : 橙 内 : 明赤褐	B	口～胴 20%	口縁部外面輪積痕有。
6	土師器　甕	(18.8)	(5.8)	-	ABDEHIK	橙色	B	口～胴 20%	口縁部外面輪積痕有。
7	土師器　甕	18.8	(8.9)	-	ABCGHIK	橙色	B	口～胴 90%	口縁部外面、胴部内面輪積痕有。
8	土師器　甕	(17.8)	(7.0)	-	ABCHK	橙色	B	口～胴 30%	
9	石製支脚	最大長 (17.0) ㎝、最大幅 5.1 ㎝、最大厚 4.3 ㎝。重量 (569.0) ｇ。砂岩。所々欠。被熱。							

後、胴下部にヘラナデを施している。外面に自然釉が付着している。１・２は末野産であり、流れ込みと思われる。１～12 は、土師器坏である。３～８は浅身の坏身模倣坏、９は深身の坏蓋模倣坏である。前者は、口径 12.5cm、器高 4cm 前後を測る。口縁部は内傾するが、内湾するもの、直線的なもの、外反気味に立ち上がるものなどがある。体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は丸底である。後者は、口縁部がほぼ直立し、端部がやや外反する。体部と底部の境にある稜は前者ほど明確でない。底部は、中央を欠くが、丸底である。10 は、北武蔵型坏である。口縁部がほぼ直立するが、端部がやや内傾する。体部は内湾し、底部は、中央を欠くが、丸底である、器壁が薄い。11･12 は、土師器暗文坏である。内面に放射状暗文が施文されている。短い口縁部が 11 は直立、12 はやや外に開き、内面に段を持つ。体部は内湾し、底部はいずれも欠くが、丸底と思われる。10 ～ 12 は、流れ込みと思われる。坏の調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部は、９がヘラナデ、11 はヘラミガキ、その他は、ヘラ削りである。11 は、外面に黒色処理が施されているが、大半が剥離している。13 は、土師器壺である。やや長めの口縁部が直立し、端部内面に段を持つ。胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。底部は丸底である。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラミガキ、内面はほぼ完形であることから図



第 33 図　第 20 号住居跡出土遺物（１）



第 34 図　第 20 号住居跡出土遺物（２）

第 17 表　第 20 号住居跡出土遺物観察表

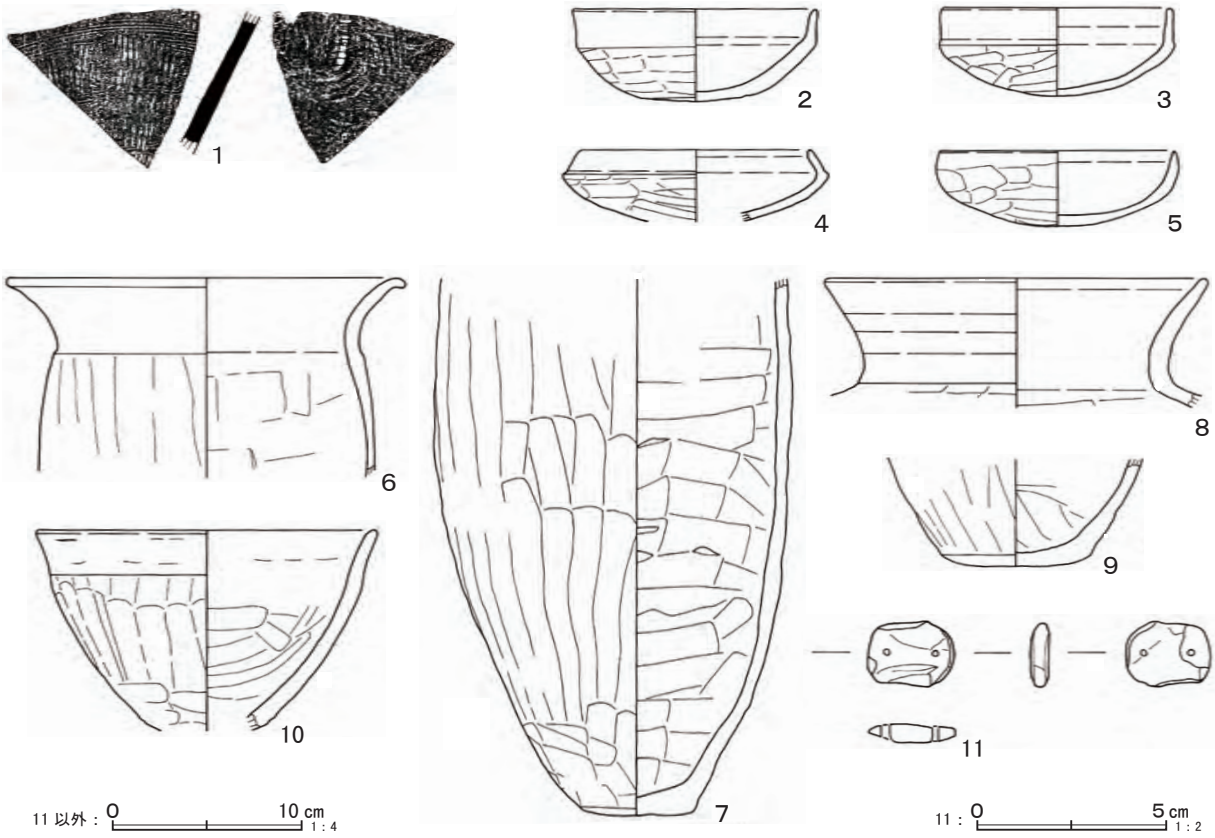
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	-	(13.9)	-	ABL	灰色	A	肩～胴 40%	末野産。
2	須恵器　甕	-	-	-	ABLN	青灰色	A	肩～胴部片	末野産。外面自然釉付着。
3	土師器　坏	12.0	4.5	-	ABEGHIK	にぶい橙色	A	完形	
4	土師器　坏	12.6	4.5	-	ABDHIKN	明赤褐色	B	80%	
5	土師器　坏	(12.2)	4.2	-	ABEGHIK	にぶい橙色	B	45%	
6	土師器　坏	(12.2)	3.9	-	ABCHK	明褐色	B	45%	内面剥離、外面摩耗顕著。
7	土師器　坏	(12.0)	(3.6)	-	ABCHIK	橙色	B	30%	
8	土師器　坏	(12.2)	(2.8)	-	ABDHIN	にぶい褐色	B	20%	
9	土師器　坏	(10.2)	4.3	-	ABCD	黄橙色	B	50%	内外面摩耗顕著。
10	土師器　坏	(13.4)	(4.2)	-	ABIKN	橙色	B	25%	
11	土師器　坏	(16.8)	(3.3)	-	BI	灰色	B	20%	内面放射状暗文有。外面黒色処理、大半剥離。
12	土師器　坏	(13.0)	(3.0)	-	ABEIK	橙色	B	30%	内面放射状暗文有。
13	土師器　壺	7.4	13.0	-	ABDIKN	にぶい橙色	B	ほぼ完形	胴下～底部外面剥離。
14	土師器　甕	(22.8)	(26.5)	-	ABDEIKN	橙色	B	口～胴 25%	口縁部外面輪積痕有。
15	土師器　甕	(19.0)	21.2	-	ABDIKN	橙色	B	口～胴 40%	胴部内面輪積痕有。内面磨耗顕著。
16	土師器　甕	(21.0)	(9.6)	-	ABDIKN	にぶい橙色	B	口～胴 25%	内外面摩耗顕著。
17	土師器　甕	(21.0)	(10.3)	-	ABDEIKN	にぶい橙色・褐灰色	B	口～胴 40%	内外面摩耗顕著。
18	土師器　甕	20.2	(18.5)	-	ABDGHKN	橙色	B	口～胴 40%	口縁部外面輪積痕有。内面やや摩耗。
19	土師器　甕	-	(13.0)	4.0	ABDHIK	にぶい橙色	B	胴～底 90%	
20	土師器　甕	20.2	(33.0)	(9.8)	ABCIK	橙色	B	90%	内面摩耗顕著。
21	土師器　甕	19.4	(25.6)	-	ABCEIK	橙色	B	口～胴 60%	
22	土師器　甕	(19.8)	(19.2)	-	ABDEIKN	灰白色	B	口～胴 30%	内外面摩耗顕著。
23	土師器　甕	(14.9)	18.9	7.5	ABDHK	浅黄橙色	B	80%	胴部内面輪積痕有。
24	土師器　甕	(12.4)	(12.9)	-	ABDEIK	橙色	B	口～胴 40%	
25	土師器　甑	(18.8)	20.7	7.6	ABDEHIKN	にぶい橙色	B	70%	胴部内面輪積痕有。内面所々摩耗。
26	土製支脚	-	(14.0)	-	ABEIKN	外：にぶい黄橙 内：橙	B	70%	
27	不明鉄製品	最大長 (5.4) ㎝、最大幅 (0.6) ㎝、最大厚 (0.5) ㎝。重量 (5.0) ｇ。両端欠。							

示不可能であったが、ヘラナデである。胴下部から底部にかけて外面の器面が剥離している。14 ～ 19 は、土師器長胴甕である。全形の分かるものはないが、外反する口縁部に最大径を持ち、胴部は中段付近がやや膨らみ、底部に向かってすぼまると思われる。底部は、19 のみ残るが、平底に近い。このうち、法量的に大きい 14 は、甑の可能性もある。14・16・18 は、口縁部外面に段を持ち、輪積痕が残る。また、14 は口縁部の内面にも段を持つ。20 ～ 24 は、土師器丸胴甕である。大型のものと小型のものがある。口縁部が外反し、胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。底部は、欠くものが多いが、平底に近いと思われる。20・21 は、口縁部外面の中段に段を持つ。甕の調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデであり、23 は胴上部内面に輪積痕が残る。25 は、やや小振りの土師器甑である。口縁部が短く、大きく外反する。胴部は、ほぼ直線的に底部に向かってすぼまる。調整は、甕と同じく口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。胴部内面中段には、ヘラ描きによる縦位の刻みが複数あり、輪積痕が残る。26 は、土製支脚である。棒状を呈するが、下位に向かって緩やかに広がる。両端を欠く。調整は、外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。27 は、角柱状を呈する不明鉄製品である。両端を欠く。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の 6 世紀末から 7 世紀初頭と思われる。

第 21 号住居跡（第 30・31 図）

調査区西側のⅠ－ 6・7、Ｈ－ 7 グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 4.94 ｍ×短×短軸 4.62 ｍ、床面積 21.15 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.56 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 68° －Ｗを指す。中央付近を第 20 号住居跡、南東壁を第 19 号住居跡、南西壁をピット 157、北東壁を第 3 号掘立柱建物跡のピット 6 にそれぞれ切られており、南東側で第 22 号住居跡を切っている。多数



第 35 図　第 21 号住居跡出土遺物

第 18 表　第 21 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器　甕	-	-	-	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
2	土師器　坏	13.0	4.9	5.8	ABCDIK	浅黄橙色	B	ほぼ完形	内外面摩耗顕著。
3	土師器　坏	(12.2)	4.65	-	ABEIK	浅黄橙色	B	50%	内外面やや摩耗。
4	土師器　坏	(12.2)	(3.8)	-	ABDHIKN	橙色	B	40%	
5	土師器　坏	(12.5)	4.0	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	25%	
6	土師器　甕	21.0	(10.6)	-	ABDIKMN	にぶい黄橙色	B	口～胴 70%	内外面やや摩耗。
7	土師器　甕	-	(28.3)	6.2	ABCIKN	明黄橙色	B	胴～底 80%	胴部内面輪積痕有。
8	土師器　甕	(20.2)	(6.8)	-	ABEIK	橙色	B	口～胴 40%	内外面やや摩耗。
9	土師器　甕	-	(5.7)	8.0	ABDEIKN	橙色	B	胴～底 70%	
10	土師器　鉢	(18.0)	(10.6)	-	ABDEIKN	橙色	B	口～胴 40%	口縁部内外面輪積痕有。内外面やや摩耗。
11	石製模造品	最大長 1.8 ㎝、最大幅 2.3 ㎝、最大厚 0.5 ㎝。重量 3.0 ｇ。緑色岩。完形。孔二つ有。							

の遺構に切られていることもあり、遺存状況は不良である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、北西壁中央南寄りに付設されているが、第 20 号住居跡に切られており、燃焼部の詳細は不明である。残存する南側の袖部は、黄褐色の地山で造りだし、内壁に白色粘土を貼り付けている。内壁は、弧状に膨らむことなく、直線的に伸びる。煙道部は、地山を刳り抜き、1.30 ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。

壁溝は、南西壁沿いで確認された。確認できた部分では、平坦な床面で全体に軟弱である。

ピットは、２基確認された。西隅のピット１は、深さ 0.75 ｍの二段掘りで、その位置から貯蔵穴とみられる。

出土遺物（第 35 図）は、須恵器甕（１）、土師器坏（２～５）、甕（６～９）、鉢（10）、石製模

造品の有孔円盤（11）がある。出土位置は、南西隅のピット１付近と床面南側から出土している。出土位置を図示していないものは、覆土上層からの出土である。

１は、須恵器甕の胴下部片である。調整は、外面がタタキ後にカキ目が施されており、内面はあて具痕が残る。末野産である。２～５は、土師器坏である。２・３は、坏蓋模倣坏である。やや深身で、口径 12.5 ㎝前後、器高５㎝弱を測る。２は、器壁が厚い。口縁部がほぼ直立し、体部と底部の境に明確な稜を持ち、内面に段を持つ。底部は、丸底である。４は、浅身の坏身模倣坏である。口縁部は、内湾気味に内傾し、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は中央を欠くが、丸底である。５は、短い口縁部がほぼ直立し、端部内面に段を持つ。体部は内湾し、底部は丸底である。４・５は、流れ込みと思われる。６・７・９は、土師器長胴甕である。全形の分かるものはないが、口縁部が大きく外反し、胴部は中段付近が膨らみ、底部に向かってすぼまる。底部は、平底に近い。８は、土師器丸胴甕である。口縁部が逆ハの字に開き、胴部以下を欠くが、大きく膨らむと思われる。口縁部外面に複数の段を持つ。10 は、土師器鉢である。短い口縁部の開きが小さく、胴部は下位に向かって内湾しながら底部にむかってすぼまる。底部を欠くが、甕と同じく、平底に近いと思われる。甕・鉢の調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。７は、胴部中段の内面、10 は、口縁部内外面に輪積痕が残る。11 は、石製模造品の有孔円盤である。いびつな隅丸長方形状を呈し、間隔を空けて外縁付近に二つの孔を持つ。完形。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の６世紀前半と思われる。

第 22 号住居跡（第 30・31 図）

調査区西側のＩ－６、Ｊ－６グリッドに跨って位置する。平面形は方形とみられる。規模は、長軸 2.13 ｍ以上×短軸 1.28 ｍ以上、遺構確認面からの深さは、0.48 ｍである。主軸方向は、Ｎ－42°－Ｗを指す。多数の遺構に切られ、本住居跡の北隅、南隅、北東壁の一部が残存するのみで、遺存状況は頗る悪い。覆土の堆積状況も不詳である。

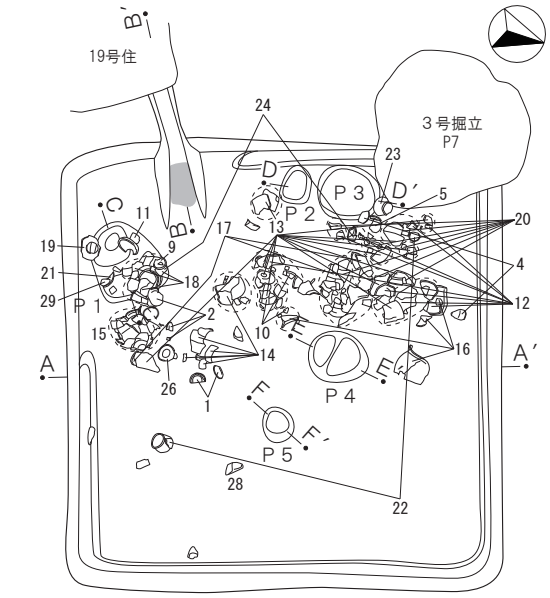
カマド・壁溝・ピット・掘り方は、確認されなかった。

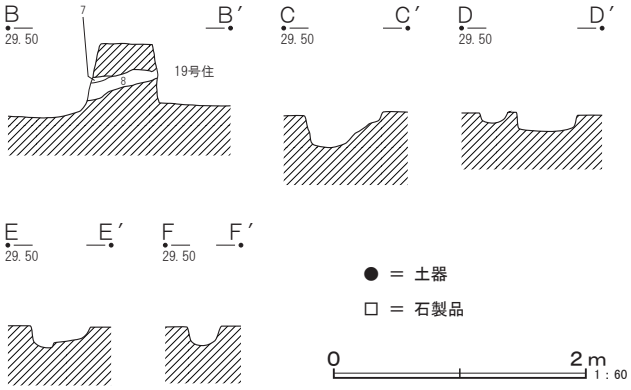
出土遺物は僅少であり、図示可能なものは見られなかったが、本住居跡の時期は、重複する住居跡との新旧関係や主軸方向などから古墳時代前期か中期としか言えない。

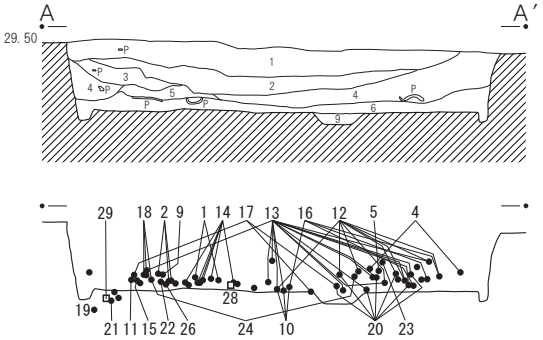
第 23 号住居跡（第 36 図）

調査区東側のＪ－６グリッドに位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 3.40 ｍ×短軸 3.34 ｍ、床面積 9.30 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.56 ｍである。主軸方向は、Ｎ－70°－Ｅを指す。カマド煙道部先端を第８号住居跡、北西隅を第３号掘立柱建物跡のピット７にそれぞれ切られている。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、西壁中央南寄りに付設されている。煙道から焚口に沿ったカマド軸方向は、本住居跡の主軸方向から南へ 18°ずれる。燃焼部幅は 0.23 ｍ、火床は、ほぼ床面レベルで黄褐色の地山が被熱で赤褐色に変化している。袖部は、地山で造りだし、内壁に白色粘土を貼り付けている。内壁は、南袖が焚口部で若干開くものの、大部分は同一幅で直線的に伸びる。煙道部は、壁際で一段高くなり、約 15°の勾配で地山を刳り抜き、立ち上がる。0.40 ｍ以上壁外へ突出するが、第８号住居跡に切られているため、全貌は不明である。

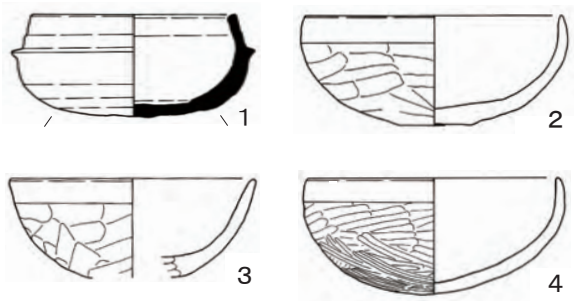


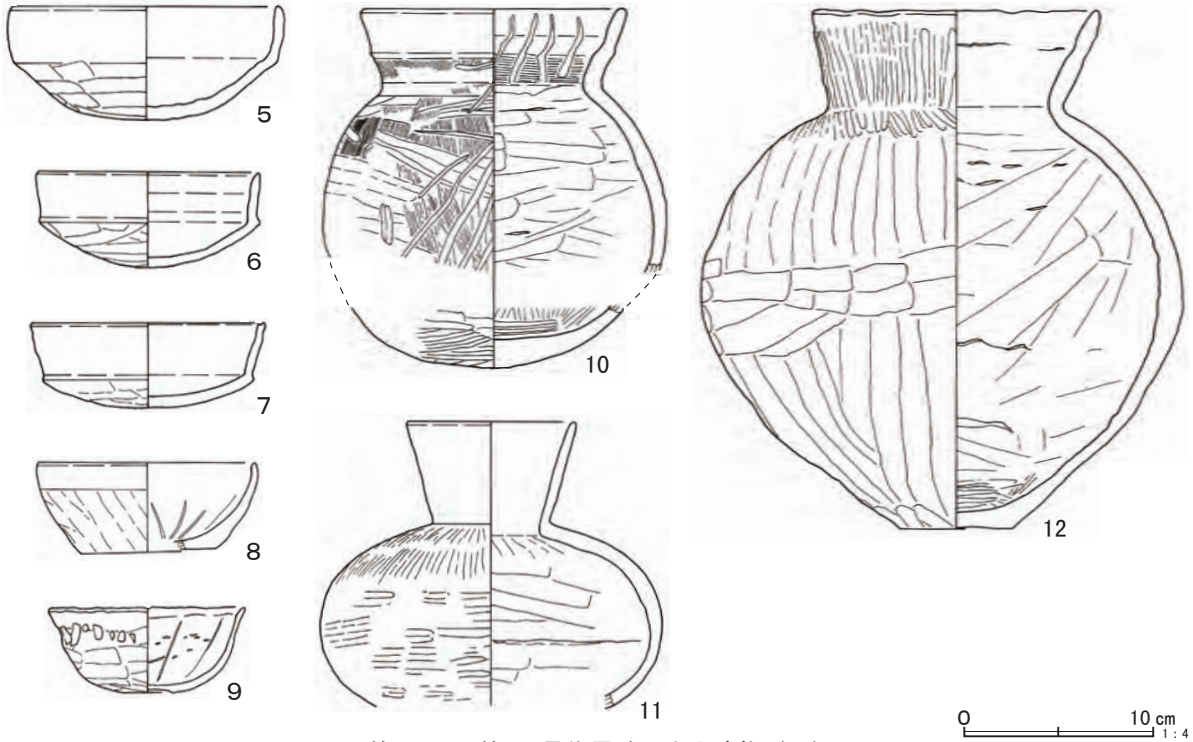




土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）

1 暗褐色土 10YR3/4：黄褐色土粒少量、焼土粒微量含む。
2 暗褐色土 10YR3/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、焼土粒少量含む。
3 にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
4 にぶい褐色土 7.5YR5/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。
5 にぶい黄褐色土 10YR5/4：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
6 褐色土 10YR4/4：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物多量、焼土粒少量含む。
7 暗褐色土 10YR3/3：焼土塊多量含む。煙道部。
8 暗赤色土 7.5R3/6：焼土塊多量含む。煙道部。
9 にぶい褐色土 7.5YR5/4：しまり・粘性強。φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量含む。





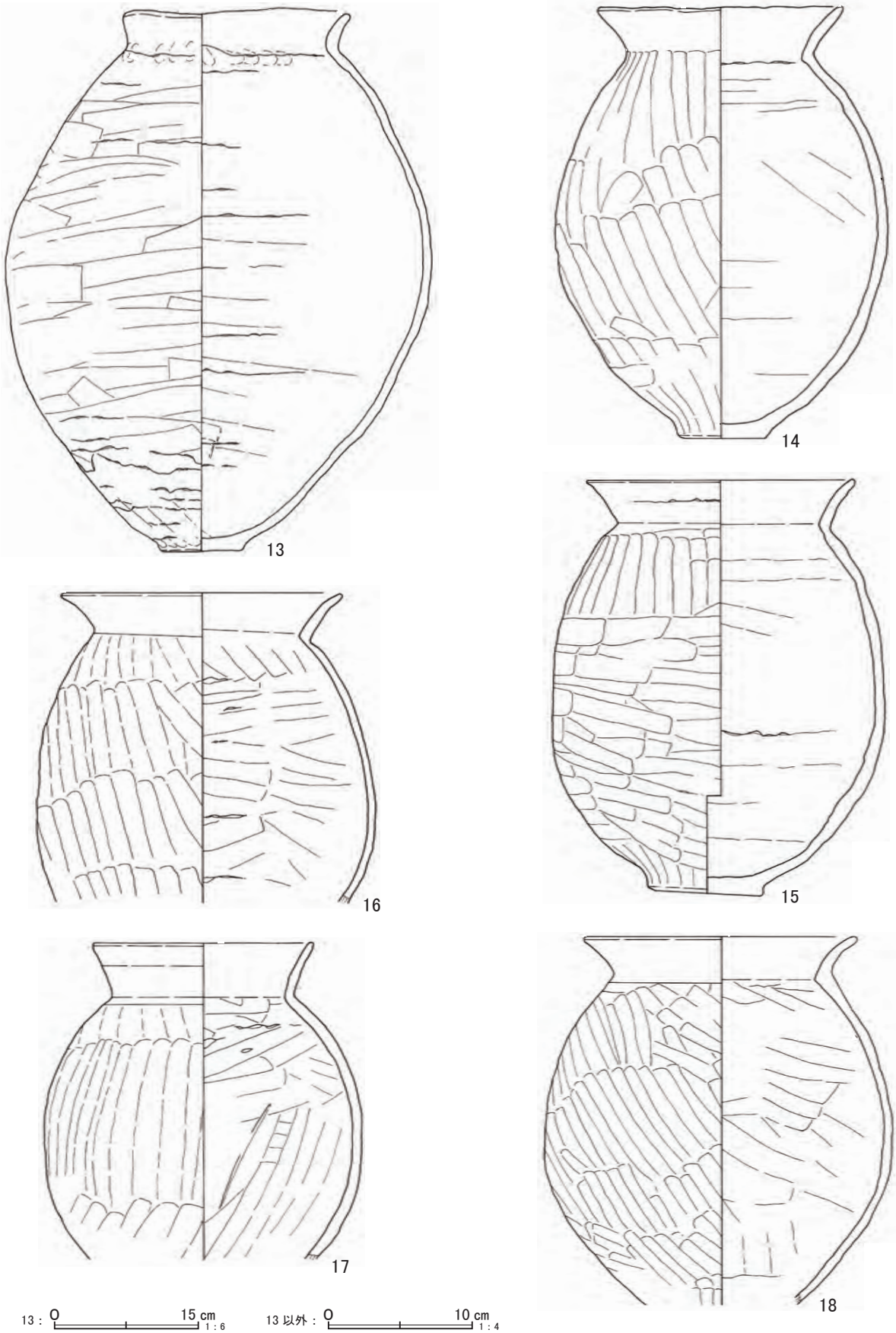
第 36 図　第 23 号住居跡・出土遺物（１）

壁溝は、部分的に途切れているが、ほぼ全周していたとみられる。床面は、ほぼ平坦であり、全面にわたって踏み固めとみられる硬化部分を確認した。

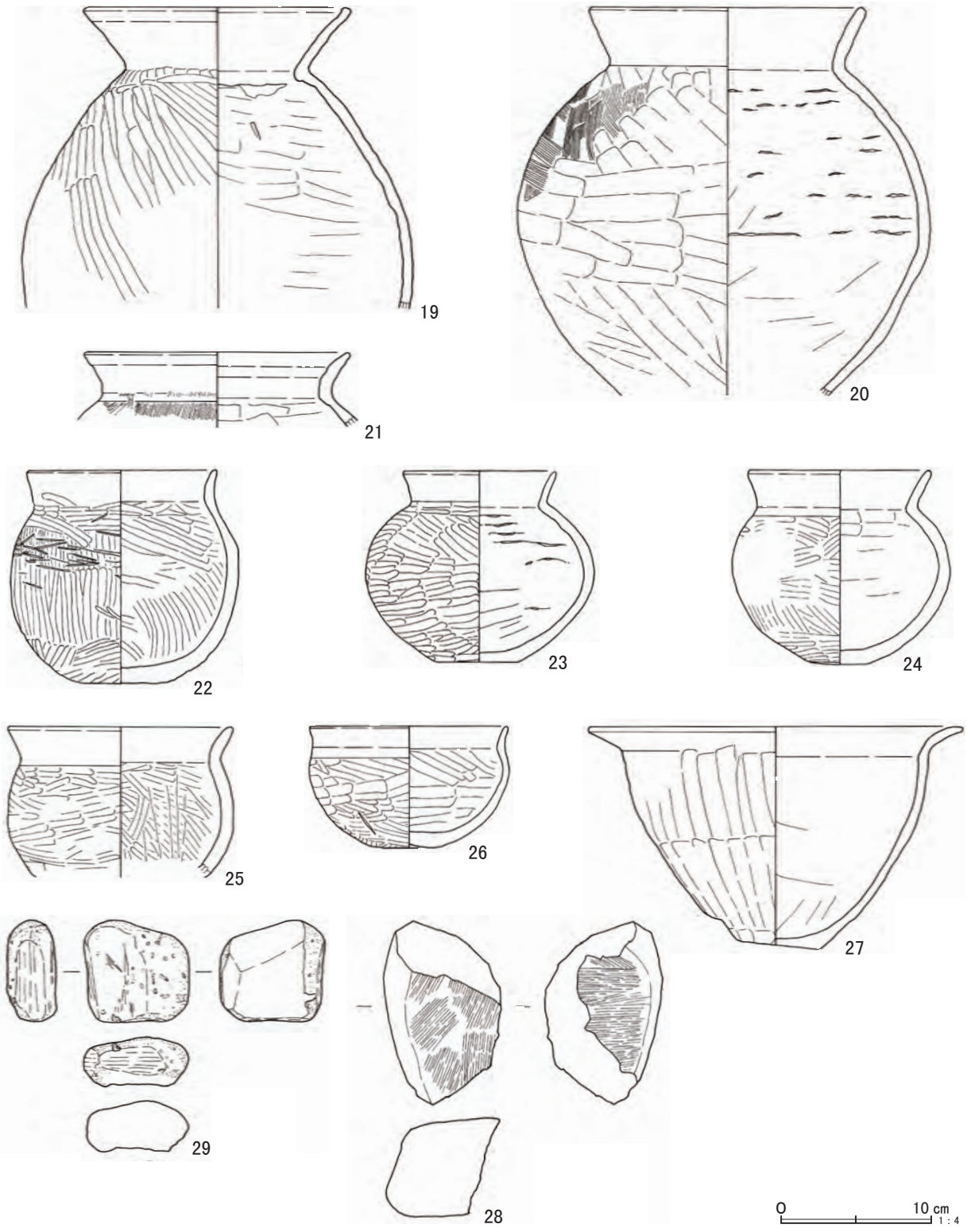
ピットは、５基確認された。南西隅のピット１は、多数の遺物が出土したことやその位置から貯蔵穴とみられる。

出土遺物（第 36 ～ 38 図）は、須恵器坏（１）、土師器坏（２～９）、壺（10 ～ 12）、甕（13 ～ 25）、埦（26）、鉢（27）、砥石（28）、磨石（29）がある。出土位置は、西側半分に大量の遺物が集中しており、その大半は床面直上か、それに近い状況で出土した。出土位置を示していない遺物は、覆土上層から出土した。

１は、須恵器坏である。口縁部が直線的に内傾し、短い受部を持つ。器壁が厚い体部は内湾し、底部は平底に近い。調整は、ロクロナデ後、底面に回転ヘラ削りが施されている。底面に自然釉が付着している。ＴＫ 216 併行期と思われる。２～９は、土師器坏である。２～４は、深身で半球形を呈する。口縁部は内湾するものとやや外に開くものがあるが、体部は内湾する。底部は、丸底とやや上げ底のものがある。５は、やや長めの口縁部がほぼ直立し、体部との境に明確な稜を持つ。体部は、底部に向かって直線的に下る。底部は、平底に近い。６・７は、坏蓋模倣坏であり、流れ込みである。口径は 12 ㎝前後を測るが、６はやや深身、７は浅身である。６は、口縁部がほぼ直立、７はやや外に開く。体部と底部の境に明確な稜を持ち、底部は丸底である。６は、口縁部内面に段を複数持つ。８・９は、土師器暗文坏である。内面に放射状暗文が施文されているが、９は間隔が間延びしている。８は、短い口縁部が直立する。体部は内湾し、底部は平底である。９は、短い口縁部がやや外反し、体部は内湾する。底部は、やや上げ底である。器壁が薄い。坏の調整は、口縁部は横ナデであるが、体部から底部にかけては、４がヘラミガキ、５～７はヘラ削り、その他は、ヘラナデである。また、９は体部上位にヘラ描きによる刻みが複数施されており、輪積痕が残る。10 ～ 12 は、土師器壺である。法量・器形にバラエティがみられる。10・11 は小振り、12 は大型である。10 は、口縁部から胴部中段付近までと胴下部から底部までの部位に分かれており、直接的な接合関係はないが、同一個体である。口縁部が受け口状を呈し、胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つと思われる。底部は、丸底である。調整は、口縁部が横ナデ、頸部以下の外面は、胴部中段付近までハケメの後にヘラナデが施され、さらにその上からヘラミガキが施されている。内面は、頸部がハケメ、胴部はヘラナデであり、所々に輪積痕が残る。接合関係にない胴下部から底部は、内外面ともにヘラミガキである。口縁部から頸部までの内面には、放射状暗文がやや間隔を空けて施文されている。11 は、口縁部が逆ハの字に開き、胴部は大きく膨らむが、詰まった球形を呈し、最大径を中段に持つ。胴下部から底部を欠くが、底部は、おそらく平底か、それに近いと思われる。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。胴部内面中段に輪積痕が残る。12 は、口縁部が逆ハの字に開き、胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。底部は、やや上げ底である。器壁が厚い。調整は、口縁部の外面がヘラミガキ、内面は横ナデ、胴部は内外面ともにヘラナデ、底部内面はヘラミガキである。内面は、口縁部から胴下部まで輪積痕が多数残る。13 ～ 25 は、土師器甕である。法量にバラエティがあり、13 は超大型、14 ～ 21 は中型、22 ～ 25 は小型である。超大型の 13 は、短い口縁部がやや外反する。胴部は大きく膨らみながらやや長胴化しており、最大径を中段付近に持つ。調整は、口縁部が横ナデ、頸部



第 37 図　第 23 号住居跡出土遺物（２）



第 38 図　第 23 号住居跡出土遺物（３）

付近は内外面に指オサエ、胴部は内外面ともにヘラナデである。内外面に輪積痕が複数残る。中型の 14 ～ 21 は、口縁部が逆ハの字に開くものとやや外反するものがあり、17 は外面、19 は内外面に段を持つ。胴部は、やや長胴化し、最大径を持つ胴部中段が膨らむものと球形のものがある。底部は、欠くものが多いが、概ね平底である。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は 16・19・20・21 以外、内外面と

第 19 表　第 23 号住居跡出土遺物観察表

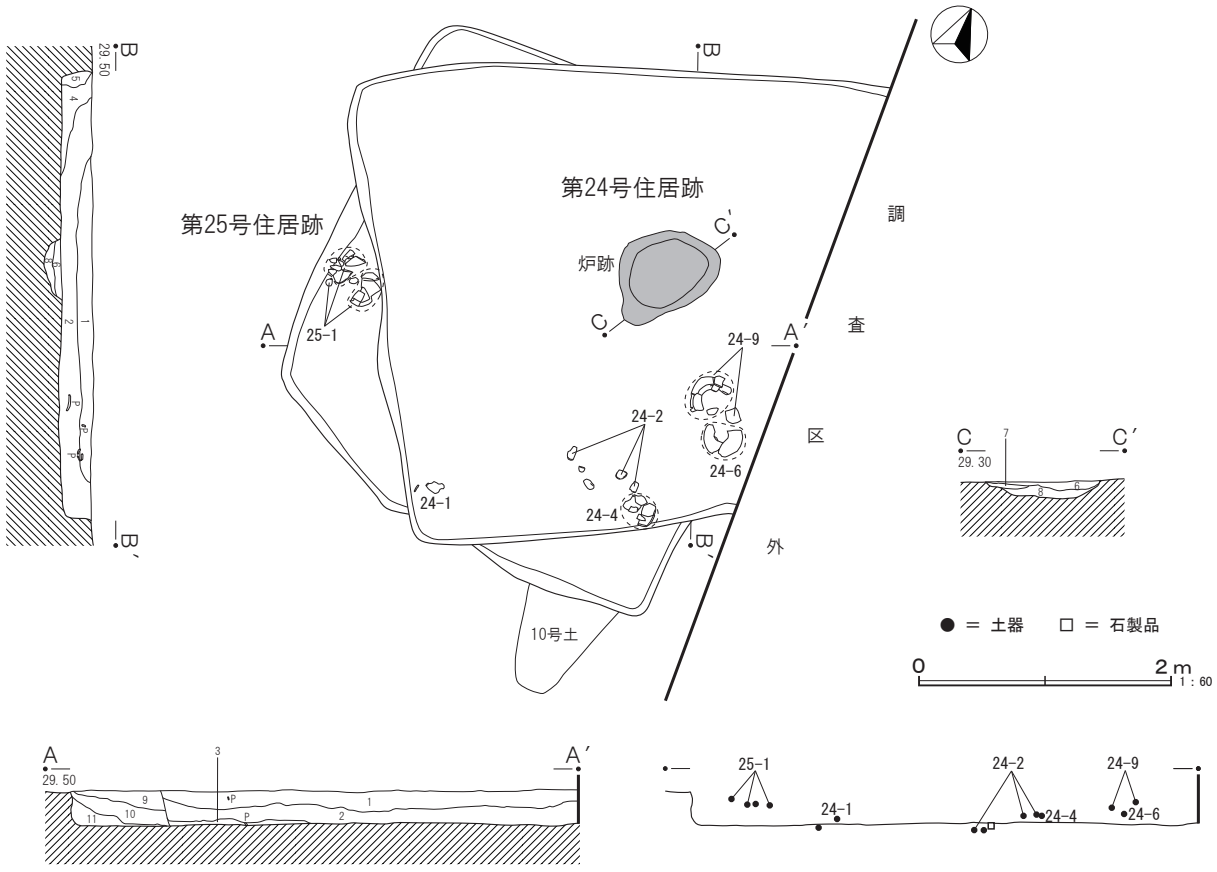
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器　坏	10.8	5.5	-	AL	オリーブ灰色	A	ほぼ完形	末野産？底部外面自然釉付着。
2	土師器　坏	(13.6)	5.8	4.0	ABEIK	外：にぶい赤褐 内：灰褐	B	80%	内面底部剥離。
3	土師器　坏	(13.0)	(5.2)	-	BCI	橙色	B	40%	
4	土師器　坏	13.6	6.1	-	ABDI	明赤褐色	B	70%	
5	土師器　坏	(14.0)	6.0	-	ABDIK	橙色	B	60%	底部内面剥離。
6	土師器　坏	11.8	5.05	-	ABCIK	橙色	B	ほぼ完形	
7	土師器　坏	(12.4)	4.5	-	ABDEIK	浅黄橙色	B	50%	内外面剥離。
8	土師器　坏	(11.6)	4.8	7.0	ABCDHIK	橙色	B	60%	内面放射状暗文有。
9	土師器　坏	10.4	4.5	2.2	ABEIKN	明赤褐色	B	ほぼ完形	内面放射状暗文、輪積痕有。
10	土師器　壺	14.0	(18.4)	-	ABEHKN	橙色	B	80%	口縁部内面放射状暗文、胴部内面輪積痕有。
11	土師器　壺	8.9	(15.1)	-	ABDIK	明赤褐色	B	口～胴 60%	胴部内面輪積痕有。
12	土師器　壺	15.2	27.4	6.0	ABEIK	橙色	B	90%	内面輪積痕有。
13	土師器　甕	23.8	56.5	8.4	ABEK	橙 黒褐	B	70%	内外面輪積痕有。内外面やや摩耗。
14	土師器　甕	(17.0)	30.0	6.2	ABDEHIN	にぶい褐色	B	60%	胴部内面輪積痕有。内面やや摩耗。
15	土師器　甕	18.6	29.0	8.2	ABDGHIKM	橙色	B	90%	口縁部外面、胴部内面輪積痕有。内面やや摩耗。
16	土師器　甕	(19.4)	(21.5)	-	ABEIKN	外：にぶい褐 内：明赤褐	B	口～胴 80%	胴部内面輪積痕有。
17	土師器　甕	15.2	(22.0)	-	ABCEIK	外：橙 内：にぶい橙	B	口～胴 70%	胴部内面輪積痕有。外面やや摩耗。
18	土師器　甕	19.0	(25.6)	-	ABDIK	黄橙色	B	口～胴 80%	胴部内面輪積痕有。内面やや磨耗。
19	土師器　甕	17.8	(20.0)	-	ABDIKN	橙色	B	口～胴 40%	胴部内面輪積痕有。
20	土師器　甕	17.9	(25.8)	-	ABDEGIK	明赤褐色	B	口～胴 70%	胴部内面輪積痕有。内面摩耗顕著。
21	土師器　甕	(17.7)	(5.0)	-	ABDIKN	橙色	B	口～胴 30%	
22	土師器　甕	12.6	14.2	6.4	ABEIK	橙色	B	完形	
23	土師器　甕	10.2	12.7	5.6	ABCDHIKM	橙色	B	90%	胴部内面輪積痕有。
24	土師器　甕	12.2	12.9	3.7	ABDEIK	橙色	B	70%	胴下部内面摩耗顕著。
25	土師器　甕	(15.0)	(10.0)	-	ABCIKN	明赤褐色	B	口～胴 50%	
26	土師器　椀	(13.2)	8.1	2.8	ABCIK	橙色	B	50%	
27	土師器　鉢	24.8	14.8	5.6	ABDIK	灰白色	B	70%	外面やや摩耗。
28	砥　石	最大長 (12.2) ㎝、最大幅 (7.7) ㎝、最大厚 (6.2) ㎝。重量 (730.0) ｇ。礫岩。大半欠。二面線状痕有。							
29	砥　石	最大長 6.8 ㎝、最大幅 7.0 ㎝、最大厚 3.3 ㎝。重量 98.0 ｇ。角閃石安山岩。完形。三面線状痕有。							

もにヘラナデである。16 の胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデである。19・20 は、胴上部外面にヘラナデ前のハケメが残る。19 の胴部外面のヘラナデは、一部ヘラ削りに近い。21 の胴部外面は、ハケメ、内面はヘラナデである。内外面に輪積痕の残るものが多い。小振りの 22 ～ 25 は、いずれも胴部外面の調整がヘラミガキであることから壺とみても良いかもしれない。短い口縁部が逆ハの字に開き、胴部はやや詰まった球形を呈し、最大径を中段に持つ。底部は、平底である。調整は、口縁部が横ナデ、胴部内面は、22･25 が外面と同じくヘラミガキ、23･24 はヘラナデである。22･25 は、胴部外面にヘラ描きによる沈線状の刻みが複数描かれている。23 は、胴部内面に輪積痕が複数残る。26 は、小振りの土師器椀である。短い口縁部の開きが小さく、胴部は半球形を呈し、最大径を上位に持つ。底部は、やや上げ底である。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面上・下位がヘラミガキ、中段のみヘラ削り、内面はヘラナデである。胴部外面下位には、ヘラ描きによる沈線状の刻みを一部持つ。27 は、土師器鉢である。やや短い口縁部が大きく外反し、胴部は底部に向かって内湾しながら下る。底部は、平底である。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面は丁寧なヘラナデである。28・29 は、石材が異なるが、いずれも砥石である。28 は、大半を欠くが、両面に線状痕がみられた。29 は、片面と側面に線状痕がみられた。

本住居跡の時期は、古墳時代中期の５世紀後半と思われる。

第 24 号住居跡（第 39 図）

調査区南東端のＫ－７・８グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 4.08 ｍ以上×短軸 3.54 ｍ、床面積 10.85 ㎡以上、遺構確認面からの深さは、0.30 ｍである。主軸方向は、



第 24 号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′）

1　暗褐色土 10YR4/4：しまり・粘性強。黄褐色土粒少量、焼土粒、炭化物微量含む。
2　褐色土 10YR4/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
3　褐色土 10YR3/3：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
4　褐色土 10YR4/3：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
5　にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒主体、炭化物少量含む。
6　暗褐色土 10YR3/3：φ 10 ～ 30 ㎜大の焼土粒・塊少量、炭化物微量含む。
7　赤褐色土 2.5YR4/6：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土粒、焼土塊多量、炭化物少量含む。
8　にぶい黄褐色土 10YR5/3：φ 20 ～ 50 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物微量含む。

第 25 号住居跡
土層説明（ＡＡ′）

9　暗褐色土 10YR3/4：しまり・粘性強。黄褐色土粒、炭化物少量、焼土粒微量含む。
10　暗褐色土 10YR3/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、焼土粒、炭化物少量含む。
11　にぶい褐色土 7.5YR5/3：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。

第 39 図　第 24・25 号住居跡

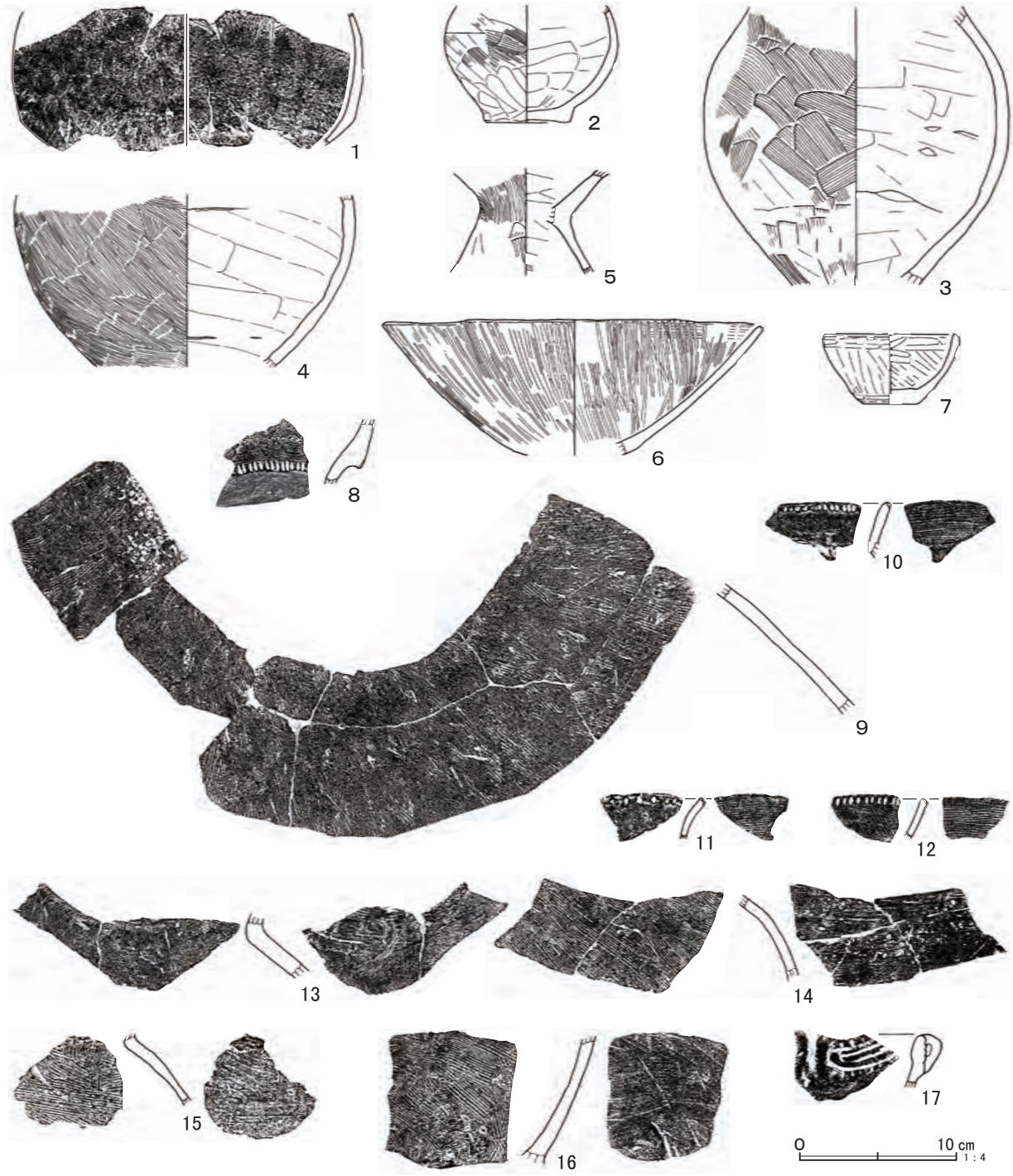
Ｎ－ 61°－Ｅを指す。東側が調査区外にあり、調査できたのは約 2/3 とみられる。西側で第 25 号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。遺存状況は、概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

床面中央東寄りで炉跡が確認された。床面から深さ５cm に断面皿状の炉底が設けられ、被熱で黄褐色の地山が赤褐色に変化していた。床面は、ほぼ平坦であり、全体に軟弱である。

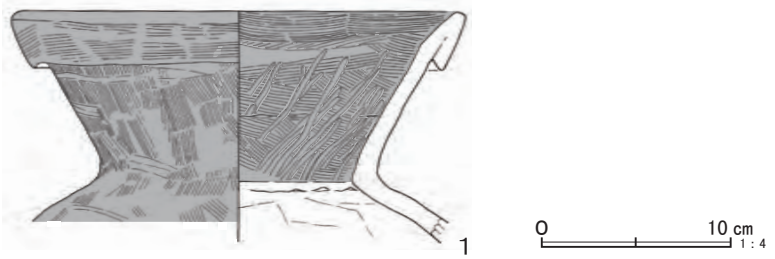
壁溝・掘り方・ピットは確認されなかった。

出土遺物（第 40 図）は、土師器壺（１・２・９）、台付甕（３～５・13 ～ 16）、高坏（６）、椀（７）がある。また、第 25 号住居跡からの流れ込みと思われる弥生時代末から古墳時代初頭の壺（８）、甕（10 ～ 12）や縄文時代後期後葉の高井東式精製波状口縁深鉢の口縁部片（17）も出土した。出土位置は、南西隅と南壁際に集中する。出土位置を示していない遺物のうち、３・５・10・17 は北側、７・８・11 ～ 16 は南側の覆土上層からの出土である。

１・２・９は、土師器壺である。１は、胴部中段付近の部位である。下位に稜を持つ。調整は、外



第 40 図　第 24 号住居跡出土遺物



第 41 図　第 25 号住居跡出土遺物

第 20 表　第 24 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　壺	-	(8.5)	-	ABDHKN	外 : 橙 内 : 灰黄褐	B	胴部 30%	
2	土師器　壺	-	(7.45)	5.5	ABCHK	橙色・黒褐色	B	胴～底 80%	
3	土師器台付甕	-	(17.8)	-	ABDIK	にぶい褐 黒褐	B	胴部 20%	内外面所々摩耗。
4	土師器台付甕	-	(11.0)	-	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	胴部 70%	
5	土師器台付甕	-	(6.6)	-	ABDIKN	橙色・褐灰色	B	接合部 70%	内外面やや摩耗。
6	土師器　高坏	24.0	(8.6)	-	ABDHIKN	橙色	B	坏部 80%	
7	土師器　椀	(8.8)	4.5	3.6	ABDIKN	赤褐色	B	55%	
8	弥生土器　壺	-	-	-	ABCHK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	頸部外面赤彩。
9	土師器　壺	-	-	-	ABEGIKN	にぶい橙色	B	胴上部片	
10	弥生土器台付甕	-	-	-	ABDK	にぶい黄橙色	B	口縁部片	
11	弥生土器台付甕	-	-	-	ADI	外 : 黒褐 内 : 灰黄褐	B	口縁部片	
12	弥生土器台付甕	-	-	-	ABDIK	にぶい褐色	B	口縁部片	
13	土師器台付甕	-	-	-	ABKN	外 : 明黄褐 内 : 橙	B	肩部片	
14	土師器台付甕	-	-	-	ABEHKN	外 : 黒 内 : にぶい橙	B	胴上部片	
15	土師器台付甕	-	-	-	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
16	土師器台付甕	-	-	-	ABCDIK	橙色	B	胴下部片	
17	縄文土器深鉢	-	-	-	ABEIKN	外 : 浅黄橙 内 : 黒褐	B	口縁部片	後期後葉高井東式

第 21 表　第 25 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　壺	23.2	(12.3)	-	ABHK	赤褐色	B	口～肩 90%	口縁部内面・外面全面赤彩。

面が縦位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。２は、胴上部から底部までの部位であり、肩部以上を欠く。小振りで、胴部は球形を呈する。底部は、やや上げ底である。調整は、胴上部外面が横ナデ、以下は、ヘラナデ後に中段付近のみハケメを施している。内面は、ヘラナデである。鉢の可能性もある。９は、大型壺の肩部片である。調整は、外面が縦・斜位のハケメ後、縦位のヘラミガキが施されている。内面は、横位のヘラナデである。３～５・13 ～ 16 は、土師器台付甕である。３は胴部、４は胴下部であり、ともに球形を呈するが、３はやや縦長である。５は接合部から台部にかけての部位である。台部は上位までしか残っていないが、ハの字に開く。13 は肩部、14・15 は胴上部、16 は胴下部の破片である。調整は、外面がハケメ、内面はヘラナデが主体となるが、３はハケメ前にヘラナデ、13 はハケメ後に横・斜位のヘラミガキが施されている。13 ～ 16 の内面のヘラナデは、13･14 が横位、15･16 が横・斜位に施されている。６は、土師器高坏の坏部である。口縁部が大きく開く。坏部下位の稜は、はっきりしない。調整は、内外面ともにヘラミガキである。７は、小振りの土師器椀である。口縁部は内湾し、体部はやや内湾しながら底部に向かって下る。底部は、平底で器壁が厚い。調整は、内外面ともにヘラミガキであるが、外面は粗く、内面は丁寧に施されている。

８は、弥生土器壺の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部外面中段にＳ字状結節文が巡り、上に細かいＬＲ単節縄文が施文されている。下は、ハケメ調整が施されており、下端にハケメによる刻み目が巡る。頸部は、横位のヘラミガキ調整で、赤彩が施されている。内面は、横位のヘラミガキである。10 ～ 12 は、弥生土器台付甕の口縁部片である。内外面ともにハケメ調整であるが、外面は斜位、内面は横位に施されている。口縁端部に細かい刻みが巡る。17 は、縄文土器精製深鉢の波状口縁部の波底部片である。半円状の突起が付き、側面の孔は貫通していない。突起脇には、楕円状の沈線、外周に刻みが施文されている。

本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第 25 号住居跡（第 39 図）

調査区南東端のＫ－７・８グリッドに跨って位置する。平面形は、方形とみられる。規模は、長軸 3.60 ｍ×短軸 3.28 ｍ、遺構確認面からの深さは、0.28 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 2°－Ｅを指す。大半が第 24 号住居跡に切られ、南東隅で第 10 号土坑を切っている。遺存状況は、極めて悪い。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

炉跡・壁溝・ピット・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物で図示可能なものは、土師器壺（第 41 図１）のみである。西壁際中央から出土したが、第 24 号住居跡からの流れ込みと思われる。口縁部から肩部までの部位である。複合口縁部が逆ハの字に大きく開く。調整は、口縁部内面及び外面全面はハケメであり、口縁部内面には、ヘラミガキも施されている。胴部内面はヘラナデであり、上位に輪積痕が残る。内外面ともにハケメ調整箇所に赤彩が施されている。

本住居跡の時期は、第 24 号住居跡との新旧関係や出土遺物から弥生時代末から古墳時代初頭としておきたい。

第 26 号住居跡（第 42 図）

調査区南東端のＫ－８、Ｌ－８グリッドに跨って位置する。平面形は方形とみられる。規模は、長軸 1.75 ｍ以上×短軸 1.05 ｍ以上、遺構確認面からの深さは、0.61 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 31°－Ｗを指す。東側が調査区外にあり、調査できたのは南西隅付近のみである。南側で第 28 号住居跡カマド煙道部と重複し、本住居跡の方が新しい。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。調査できた部分では、平坦な床面で全体に軟弱である。

カマド・壁溝・ピット・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物は僅少であり、図示可能なものはみられないが、８世紀後半に相当する須恵器坏の口縁部片、回転糸切り後に外周ヘラ削りが施された底部片、土師器坏の口縁部片、くの字状を呈する甕の口縁部片などが出土している。

本住居跡の時期は、８世紀後半と思われる。

第 27 号住居跡（第 42 図）

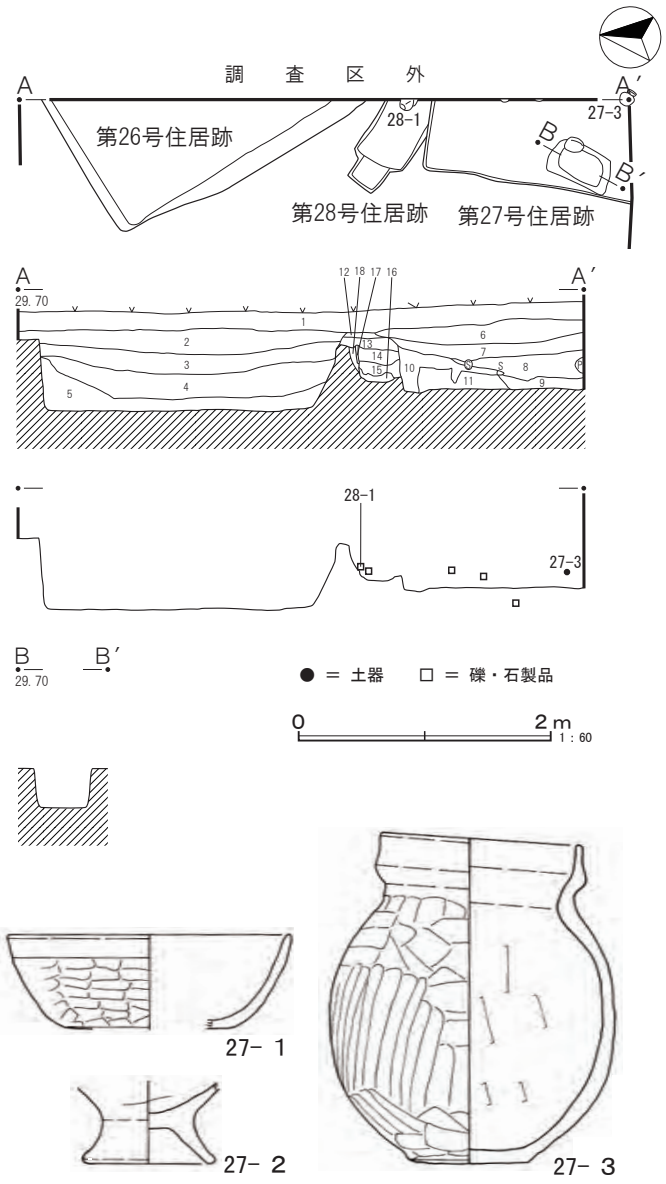
調査区南東端のＬ－９グリッドに位置する。平面形は、方形とみられる。規模は、長軸 1.50 ｍ以上×短軸 1.20 ｍ以上、遺構確認面からの深さは、0.47 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 12°－Ｅを指す。東側と南側が調査区外にあり、調査できたのは北西隅付近のみである。北側で第 28 号住居跡カマド煙道部と重複し、本住居跡の方が新しい。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。調査できた部分では、平坦な床面で全体に軟弱である。

ピットは、西壁際に１基確認された。床面からの深さは 0.30 ｍ、平面形は方形である。形状から貯蔵穴とみられる。

カマド・壁溝・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物は、土師器坏（27 －１）、台付甕（27 －２）、壺（27 －３）がある。土器は僅少であり、礫が数点検出されたにすぎない。３以外は覆土上層からの出土である。

27 －１は、やや大型で、深身の土師器坏である。口縁部から体部は、やや内湾しながら立ち上がる。



第 26 号住居跡
土層説明（ＡＡ′）

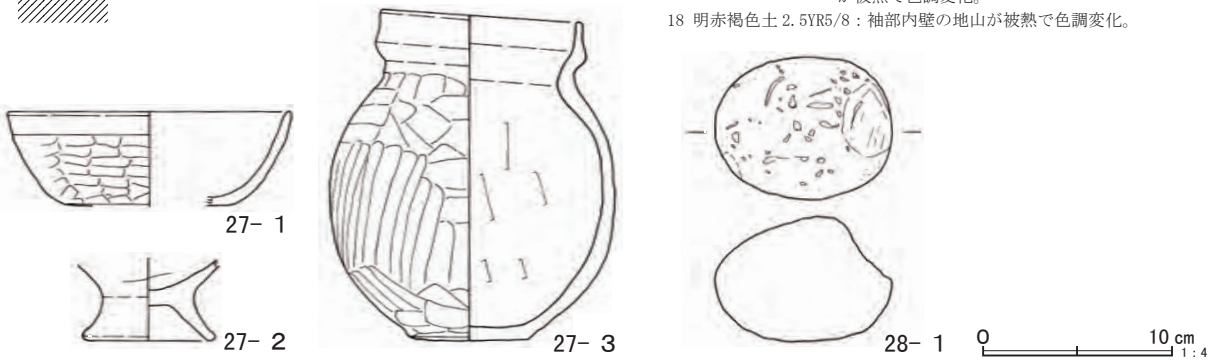
1　暗褐色土 7.5YR3/3：耕作土。φ 2 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊少量、φ 1 ～ 2 ㎜大の白色軽石（As-A）微量含む。
2　暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性強。黄褐色土粒少量、焼土粒、炭化物微量含む。
3　褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
4　褐色土 10YR4/6：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。
5　にぶい褐色土 7.5YR5/3：φ 2 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。

第 27 号住居跡
土層説明（ＡＡ′）

6　暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒微量含む。
7　暗褐色土 10YR3/4：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒、炭化物微量含む。
8　褐色土 10YR4/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、焼土粒少量、炭化物微量含む。
9　にぶい褐色土 7.5YR5/3：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
10　暗明褐色土 5YR3/4：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊、焼土塊少量、炭化物微量含む。
11　にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒主体。焼土粒、炭化物微量含む。

第 28 号住居跡
土層説明（ＡＡ′）

12　暗褐色土 10YR3/3：しまり強。粘性弱。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量、炭化物微量含む。
13　暗褐色土 10YR3/4：黄褐色土粒、炭化物少量、焼土粒微量含む。
14　にぶい赤褐色土 2.5YR4/3：黄褐色土粒、φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊多量、炭化物少量含む。
15　暗赤色土 10R3/4：φ 5 ～ 20 ㎜大の焼土塊、炭化物多量含む。
16　暗赤褐色土 10R3/2：φ 5 ～ 10 ㎜大の焼土塊、炭化物、灰多量含む。燃焼部。
17　橙色土 2.5YR7/6：袖部内壁に貼付けた厚さ 10 ～ 20 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
18　明赤褐色土 2.5YR5/8：袖部内壁の地山が被熱で色調変化。



第 42 図　第 26 ～ 28 号住居跡・出土遺物

第 22 表　第 27 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(15.0)	4.9	(9.0)	ABEIKMN	橙色	B	20%	
2	土師器台付甕	-	(4.3)	(7.0)	ABEHIKMN	にぶい橙色	B	接～台 50%	
3	土師器　壺	10.7	17.5	6.4	ABDEIK	橙色	B	完形	

第 23 表　第 28 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	砥　石	最大長 9.4 ㎝、最大幅 7.4 ㎝、最大厚 6.6 ㎝。重量 221.0 ｇ。角閃石安山岩。完形。側面線状痕有。							

底部は大半を欠くが、平底と思われる。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラナデである。流れ込みの可能性が高い。27 － 2 は、土師器台付甕の接合部から台部にかけての部位である。器壁が厚く、台部が低い。調整は、胴下部外面がヘラ削り、内面はヘラナデ、台部は横ナデである。27 － 3 は、土師器壺である。直立する口縁部が受け口状を呈する。胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。底部は平底である。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。

時期を明確に特定できる遺物が少ないが、本住居跡の時期は、古墳時代後期の 6 世紀前半から中頃

としておきたい。

第 28 号住居跡（第 42 図）

調査区南東端のＬ－８・９グリッドに跨って位置する。平面形・規模は不明であるが、遺構確認面からの深さは、0.40 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 58°－Ｗを指す。東側が調査区外にあり、さらに両側の第 26・27 号住居跡に切られており、遺存状況は極めて悪い。

調査できたのは、北西側に突出したカマド煙道部だけである。煙道部幅は、0.37 ｍの同一幅で 0.50 ｍ進み、0.08 ｍ上がってほぼ垂直に立ち上がる。煙道部は、黄褐色の地山を掘削し、内壁に貼り付けた白色粘土が被熱で表面橙色に変化している。煙出しの平面形は、一辺 0.22 ｍの方形である。

出土遺物は、カマド内から砥石（28 －１）が出土したのみである。長辺中央の側面付近がフラットになっており、線状痕がみられた。

本住居跡の時期は、重複する住居跡との新旧関係やカマドを持つことから古墳時代中期の可能性が高い。

第 29 号住居跡（第 43・44 図）

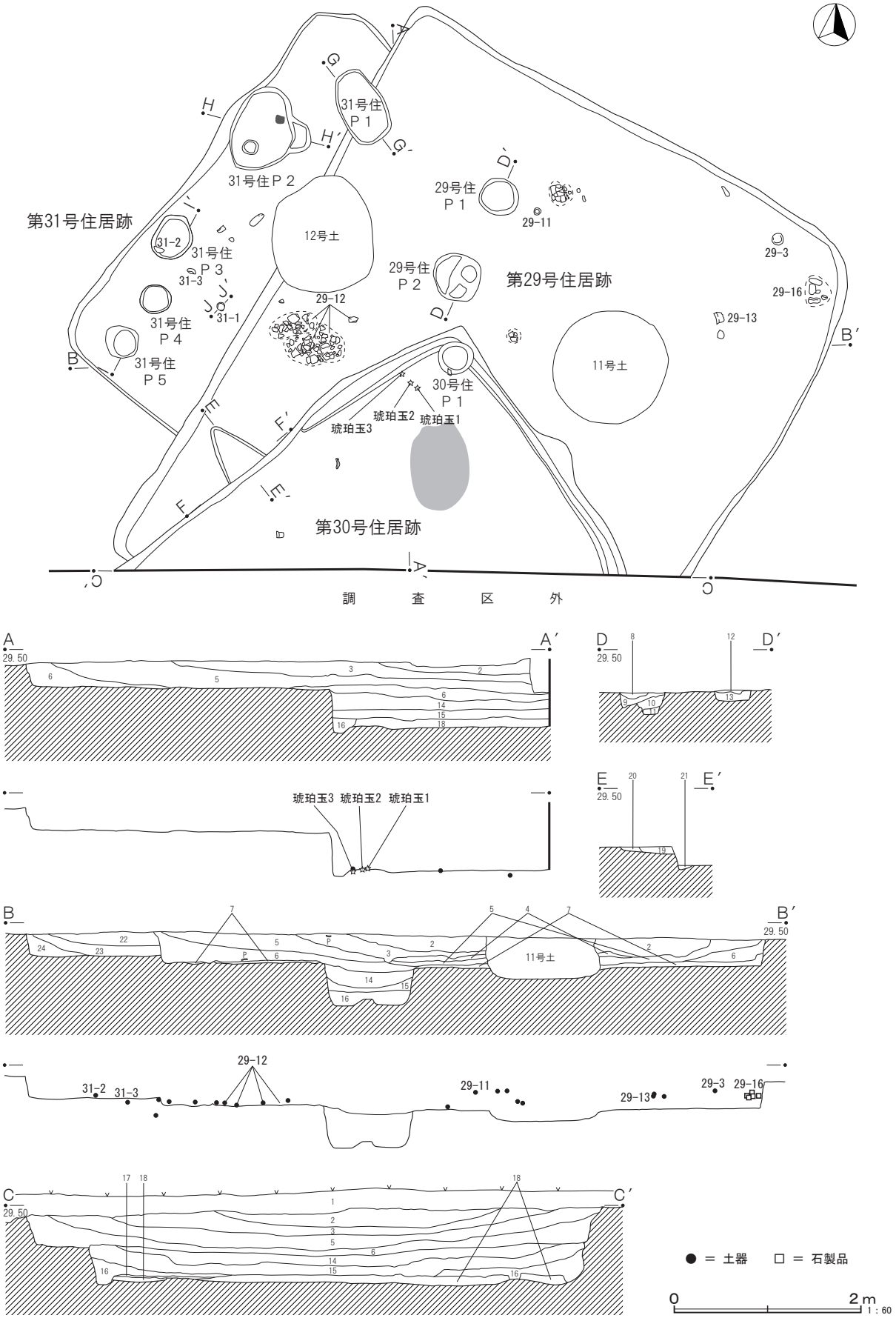
調査区南東端のＪ－９、Ｋ－９グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 6.52 ｍ×短軸 5.44 ｍ、床面積約 32.10 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.31 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 25°－Ｅを指す。南壁及び南東隅は、調査区外にあり、南側と西側で第 30・31 号住居跡を切り、本住居跡内を第 11・12 号土坑に切られるが、遺存状況は概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

床面は、ほぼ平坦であるが、第 30 号住居跡と重複する範囲は、貼床にな緩やかに窪む。中央から南側にかけて、踏み固めとみられる硬化部分を確認した。ピットは、中央北寄りで２基確認された。

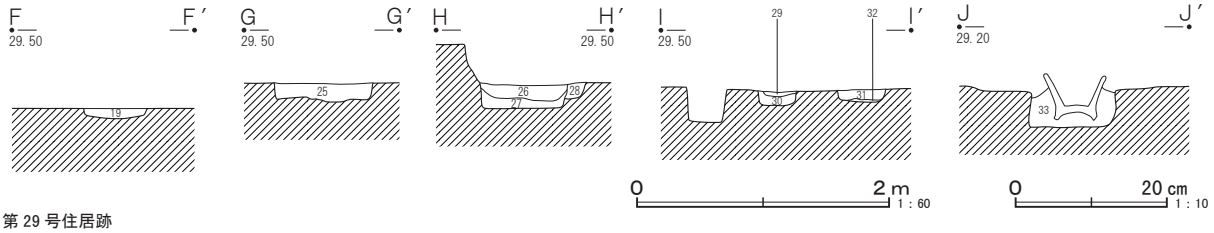
カマド・壁溝・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物（第 45 図）は、須恵器甕（１・２）、土師器坏（３～７）、甕（８～ 13）、鉄釘（14）、土錘（15）、編み物石（16）がある。出土位置は、ピット１付近、北東隅、西壁際中央付近に集中がみられる。出土位置を示していない遺物は、覆土上層から出土した。

１・２は、須恵器甕である。１は口縁部、２は胴下部の破片である。調整は、１がロクロナデ、２は外面がタタキ、内面はあて具痕が残る。ともに産地不明である。３～７は、土師器坏である。３は、浅身の有段口縁坏である。口縁部が逆ハの字に開く。体部と底部の境に稜を持ち、底部は丸底である。４は小振りで、半球形を呈する。短い口縁部がやや外に開き、体部は内湾する。底部は中央を欠くが、丸底である。５～７は、暗文坏である。５は、摩耗が著しいため、上位まで図示できていないが、すべて内面に放射状暗文が密に施文されている。いずれも短い口縁部がやや外反し、体部は内湾する。底部を欠くが、丸底と思われる。坏の調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部は、ヘラ削りである。７は、体部にヘラ削り前のタタキ目が縦位に残る。８～ 11 は、土師器長胴甕である。全形の分かるものはないが、口縁部が外反し、胴部は中段付近がやや膨らむと思われる。底部は、平底である。８の口縁部は、外面に段を複数持ち、内面は９とともに端部に段を持つ。12･13 は、土師器丸胴甕である。全形が分かるのは 12 のみであるが、口縁部は外反し、胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。底部は、平底に近いが、中央がやや出っ張る。甕の調整は、口縁部が横ナデ、胴部から底部の外面はヘラ



第 43 図　第 29 ～ 31 号住居跡（１）



第 29 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′ ＤＤ′）

1 暗褐色土 7.5YR3/3：耕作土。黄褐色土塊多量、φ１～２㎜大の白色軽石（As-A）微量含む。
2 暗褐色土 10YR3/3：しまり強。粘性やや有。黄褐色土粒少量、焼土粒微量含む。
3 暗褐色土 10YR3/4：φ２～５㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒微量含む。
4 にぶい褐色土 7.5YR5/3：黄褐色土塊、焼土粒、炭化物多量含む。
5 褐色土 10YR4/4：黄褐色土塊多量、焼土粒少量含む。
6 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
7 にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。黄褐色土塊主体。炭化物少量含む。
8 暗褐色土 10YR3/3：φ２～５㎜大の黄褐色土塊少量、炭化物微量含む。
9 褐色土 10YR4/6：φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物微量含む。
10 褐色土 10R4/4：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物微量含む。
11 にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒多量、炭化物微量含む。
12 暗褐色土 10YR3/3：φ２～５㎜大の黄褐色土塊、焼土粒少量含む。
13 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。

第 30 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′ ＥＥ′ ＦＦ′）

14 褐色土 10YR4/6：φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量、焼土塊、炭化物少量含む。
15 暗褐色土 10YR3/3：黄褐色土塊、炭化物少量含む。
16 にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。黄褐色土粒主体。炭化物少量含む。
17 極暗褐色土 7.5YR2/3：炭化物多量、黄褐色土粒、焼土粒少量含む。
18 褐色土 10YR4/4：しまり・粘性強。黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
19 にぶい赤褐色土 2.5YR4/4：黄褐色土粒、焼土粒多量含む。煙道部。
20 暗赤褐色土 2.5YR3/2：焼土粒、炭化物少量含む。
21 暗褐色土 10YR3/3：φ２～５㎜大の黄褐色土塊少量含む。

第 31 号住居跡

土層説明（ＢＢ′ ＧＧ′ ＨＨ′ ＩＩ′）

22 暗褐色土 10YR3/3：しまり有。粘性弱。黄褐色土粒、焼土粒少量含む。
23 褐色土 7.5YR4/4：φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
24 褐色土 7.5YR4/6：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
25 褐色土 10YR4/6：しまり・粘性弱。φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
26 褐色土 10YR4/6：しまり・粘性有。φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒少量含む。
27 褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
28 暗褐色土 10YR3/4：φ２～５㎜大の黄褐色土塊、焼土粒少量含む。
29 暗褐色土 10YR3/3：φ２～５㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。
30 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、炭化物微量含む。
31 暗褐色土 10YR3/3：φ２～５㎜大の黄褐色土塊、焼土粒少量含む。
32 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
33 暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性弱。黄褐色土粒主体、炭化粒少量含む。

第 44 図　第 29 ～ 31 号住居跡（２）

削り、内面はヘラナデである。12 は、口縁部中段の外面に段を持ち、胴下部内面に細かい輪積痕が残る。14 は、鉄釘の頭部である。断面形は、扁平である。15 は、大型の土錘である。筒状を呈するが、片端を欠く。16 は、編み物石である。北東隅から５点まとまって検出されたことから編み物石と判断した。このうち、２点は半分欠損しているが、大きさは、12 ㎝前後を測る。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の７世紀後半と思われる。

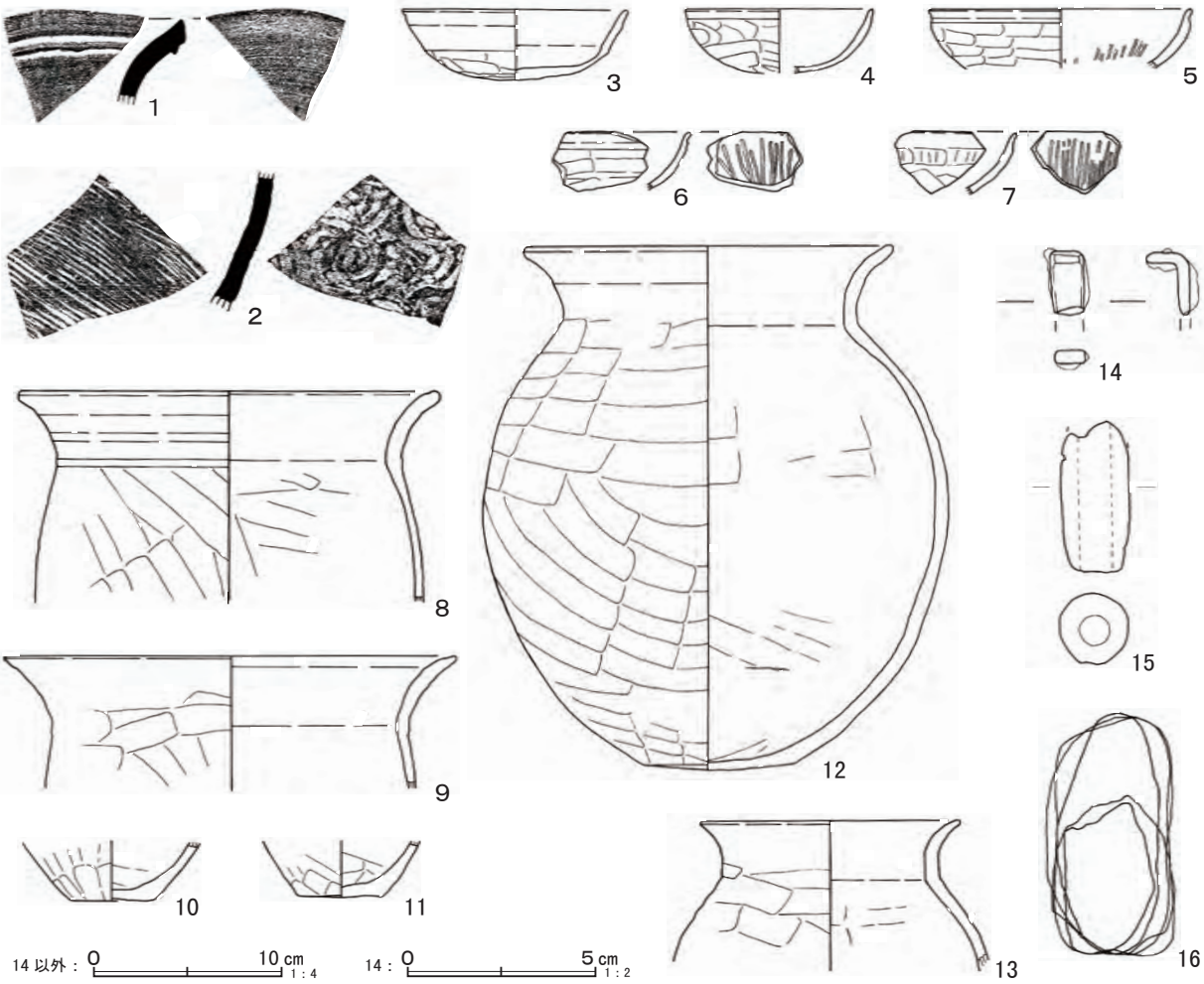
第 30 号住居跡（第 43・44 図）

調査区南東端のＪ－８・９、Ｋ－８・９グリッドに位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 4.35ｍ以上×短軸 3.10ｍ以上、遺構確認面からの深さは、0.82ｍである。主軸方向は、Ｎ－42°－Ｗを指す。南側半分以上が調査区外にあり、北側で第 29 号住居跡に切られるが、床面までの掘り込みが深いため、遺存状況は概ね良好である。北隅付近では、床面から 15cm 浮いた状況で厚さ 10cm 焼土層を確認したが、覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

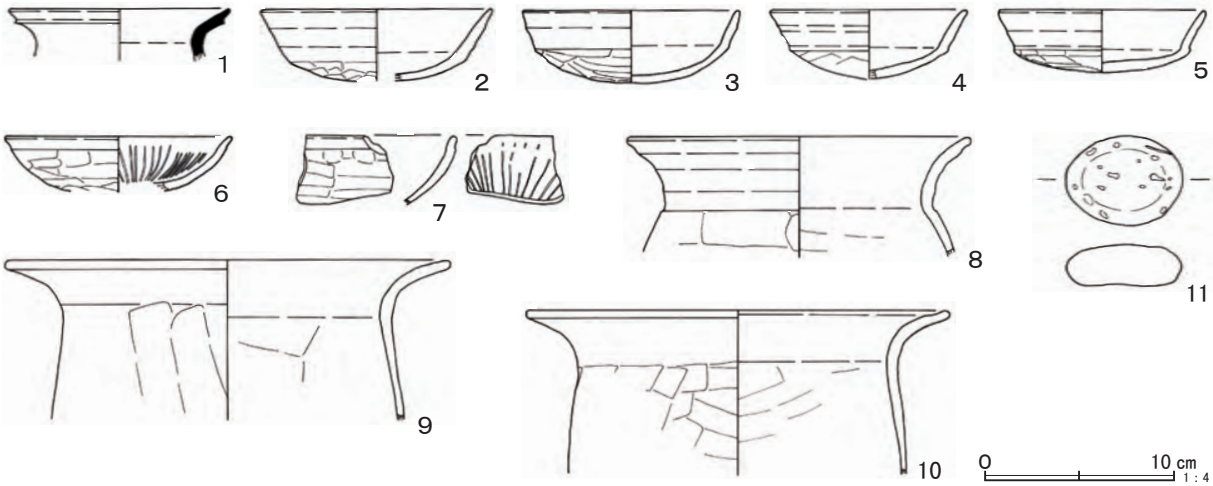
カマドは、北西壁に付設されている。袖部は崩壊流失し、形状として捉えることはできなかった。燃焼部の火床は、床面と同一レベルで被熱痕も弱く、範囲として捉えることはできなかった。煙道部は、壁際で一段高くなり、約 6° の勾配で緩やかに立ち上がる。0.60 ｍ以上、壁外へ突出するが、第 29 号住居跡に切られているため、全貌は不明である。

壁溝は、北西壁から北東壁にかけて廻る。床面は若干凹凸があり、カマド前から北東側にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。ピットは、北隅に浅いものが１基確認された。

出土遺物（第 46 図）は、須恵器提瓶（１）、土師器坏（２～７）、甕（８～10）、砥石（11）がある。いずれも覆土上層からの出土である。また、この他に図示不可能であるが、琥珀玉の破片が北東隅の



第 45 図　第 29 号住居跡出土遺物



第 46 図　第 30 号住居跡出土遺物

第 47 図　第 31 号住居跡出土遺物

第 24 表　第 29 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	-	-	-	AB	褐灰色	B	口縁部片	産地不明。
2	須恵器　甕	-	-	-	ABD	灰白色	B	胴下部片	産地不明。
3	土師器　坏	12.0	3.8	-	ABEIK	外：にぶい黄 内：黒褐	B	完形	
4	土師器　坏	(10.0)	(3.4)	-	ABCDIKN	橙色	B	40%	内外面やや摩耗。
5	土師器　坏	(14.0)	(3.2)	-	ABDIKN	灰黄褐色	B	30%	内面放射状暗文有。内面摩耗顕著。
6	土師器　坏	-	-	-	ABHK	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
7	土師器　坏	-	-	-	ABDKN	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
8	土師器　甕	(22.5)	(11.2)	-	ABKN	橙色	B	口～胴 30%	胴部内面やや摩耗。
9	土師器　甕	(24.0)	(7.1)	-	ABCDIKN	橙色	B	口～胴 20%	胴部内面摩耗顕著。
10	土師器　甕	-	(3.1)	(4.4)	ABDK	にぶい橙色	B	底部 40%	
11	土師器　甕	-	(3.0)	4.4	ABDIK	にぶい黄橙色	B	底部 90%	
12	土師器　甕	19.6	27.9	(8.0)	ABCDEHIKN	にぶい橙色	B	70%	胴下部内面輪積痕有。胴部内面摩耗顕著。
13	土師器　甕	(13.8)	(8.0)	-	ABEGIKN	橙色	B	口～胴 30%	胴部内面摩耗顕著。
14	鉄　釘	最大長 (1.7) ㎝、最大幅（0.9）㎝、最大厚（0.3）㎝。重量（2.0）ｇ。頭部のみ残。							
15	土　錘	最大長 (8.0) ㎝、最大径 3.8 ㎝、孔径 1.7 ㎝。重量（74.2）ｇ。片端欠。							

第 25 表　第 30 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　提瓶	(11.7)	(2.8)	-	AN	灰色	A	口～頸 20%	産地不明。
2	土師器　坏	(12.2)	(3.8)	-	ABDIKN	灰黄褐色	B	30%	
3	土師器　坏	(11.4)	3.8	-	ABDHIKN	橙色	B	30%	
4	土師器　坏	(10.5)	3.6	-	ABCGK	浅黄橙色	B	40%	
5	土師器　坏	(11.0)	3.3	-	ABGIKN	にぶい褐色	B	30%	
6	土師器　坏	(12.0)	(2.9)	-	ABEKN	にぶい褐色	B	20%	内面放射状暗文有。
7	土師器　坏	-	-	-	ABIK	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
8	土師器　甕	(18.2)	(6.4)	-	ABDKN	にぶい橙色	B	口～胴 40%	
9	土師器　甕	(23.6)	(8.4)	-	ABEIKN	橙色	B	口～胴 30%	内外面摩耗顕著。
10	土師器　甕	(22.4)	(13.7)	-	ABDIKN	にぶい橙色	B	口～胴 20%	
11	砥　石	最大長 6.2 ㎝、最大幅 4.7 ㎝、最大厚 2.2 ㎝。重量 48.0 ｇ。角閃石安山岩。完形。一部線状痕有。							

第 26 表　第 31 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器台付甕	-	(6.2)	8.8	ABDIM	橙色	B	接～台 80%	内外面摩耗顕著。
2	須恵器　瓶	-	-	-	AB	灰色	A	胴下部片	産地不明。
3	土師器　坏	(11.0)	(2.75)	-	ABEHIK	橙色	B	35%	

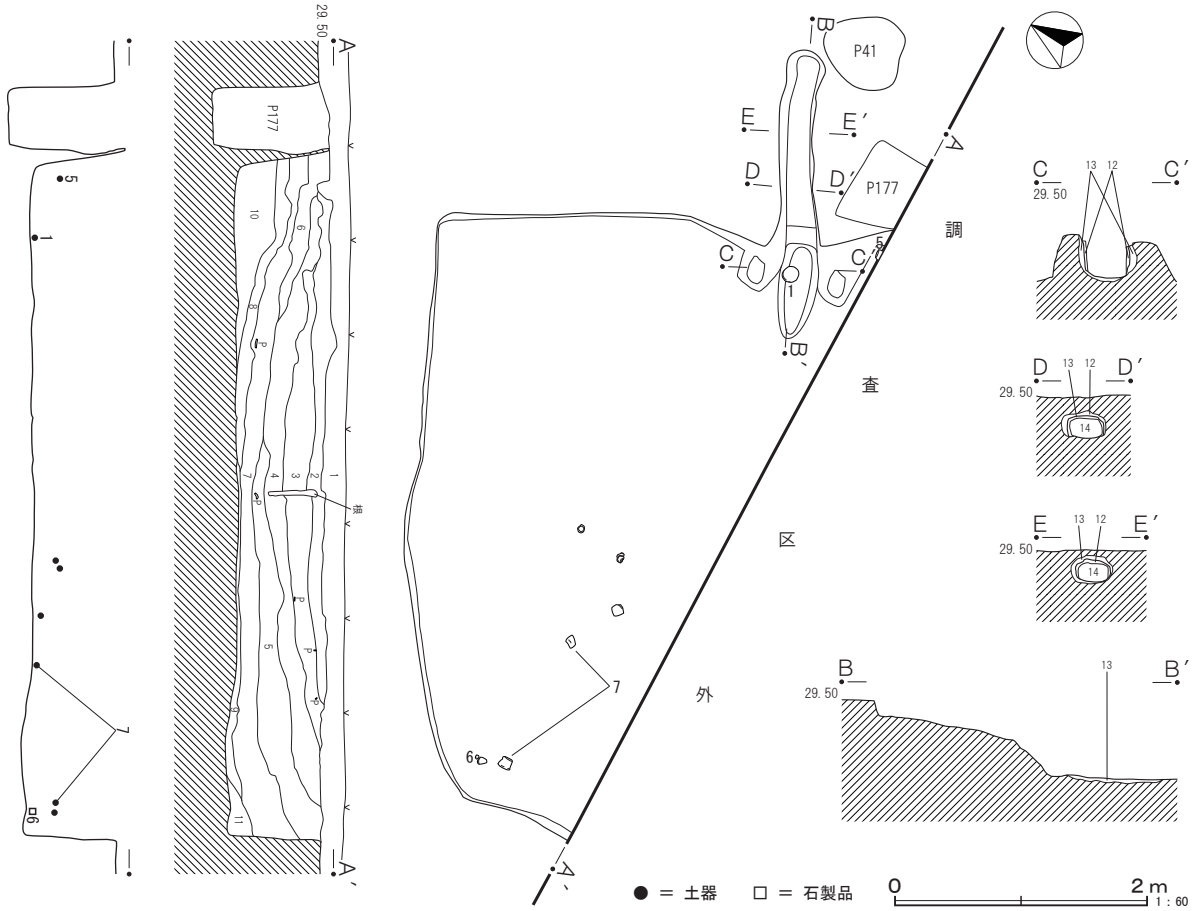
床面直上から３点出土した（図版 57）。

１は、須恵器提瓶の口縁部から頸部にかけての部位である。調整は、内外面ともにロクロナデ調整である。産地不明である。２～７は、土師器坏である。２～５は、浅身の有段口縁坏である。法量にバラツキがあるが、いずれも口縁部が逆ハの字に開き、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は、丸底であるが、５は平底に近い。６・７は、暗文坏である。内面に放射状暗文が密に施文されている。短い口縁部がやや外反し、体部は内湾する。底部を欠くが、丸底であろう。流れ込みと思われる。坏の調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りであるが、７は体部に指オサエも施されている。８～10 は、土師器長胴甕である。すべて口縁部から胴上部までの部位である。口縁部が大きく外反し、胴部はやや膨らむ。８は口縁部外面に複数、10 は口縁端部内面に段を持つ。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。11 は、砥石である。両面ともにフラットであり、側面一部に線状痕がみられた。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の６世紀後半と思われる。

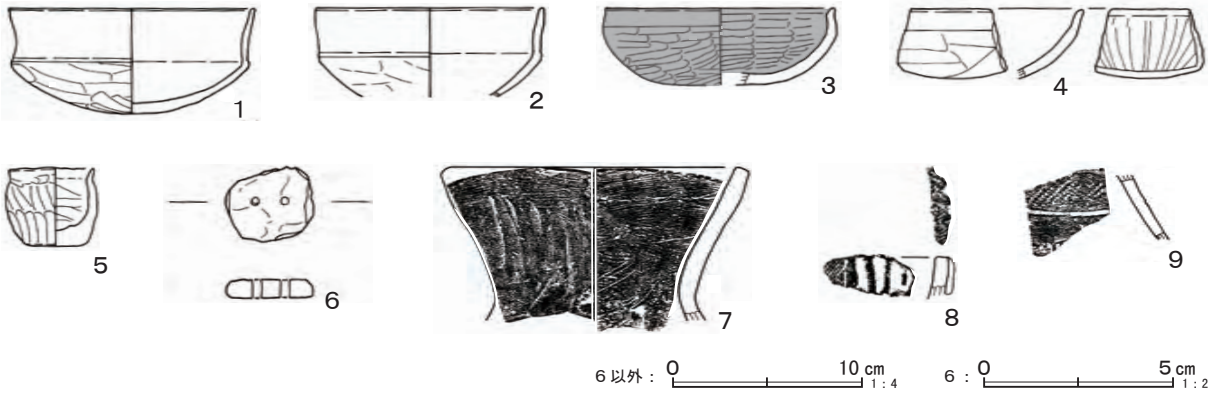
第 31 号住居跡（第 43・44 図）

調査区南東側のＪ－８・９グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 4.50 ｍ×短軸 1.10 ｍ以上、遺構確認面からの深さは、0.26 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 32°－Ｅを指す。



土層説明（AA′ BB′ CC′ DD′ EE′）

1　褐色土 10YR4/4：耕作土。粘性弱。黄褐色土塊多量、φ 1 ～ 2 ㎜大の白色軽石（As-A）微量含む。
2　褐色土 10YR4/6：しまり強。粘性弱。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒微量含む。
3　暗褐色土 10YR3/4：黄褐色土粒少量、焼土粒微量含む。
4　暗褐色土 10YR3/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、焼土粒少量含む。
5　暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土粒・塊少量含む。
6　褐色土 10YR4/6：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。
7　褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒多量、焼土塊、炭化物少量含む。
8　にぶい赤褐色土 2.5YR4/4：しまり・粘性強。黄褐色土粒、焼土塊多量、炭化物少量含む。
9　にぶい褐色土 7.5YR5/3：しまり・粘性弱。黄褐色土粒、炭化物多量、焼土粒少量含む。
10　褐色土 7.5YR4/3：しまり強。粘性有。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
11　にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。
12　橙色土 5YR7/6：燃焼部内壁に貼付けた 10 ～ 20 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
13　にぶい赤褐色土 2.5YR4/4：袖部・火床面の地山が被熱で色調変化。
14　暗褐色土 10YR3/3：黄褐色土粒多量、φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊、炭化物少量含む。



第 48 図　第 32 号住居跡・出土遺物

第 27 表　第 32 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	13.0	5.6	-	ABDEIK	橙色	B	完形	外面やや摩耗。
2	土師器　坏	(12.0)	(4.7)	-	ABDEIK	明赤褐色	B	30%	内外面摩耗顕著。
3	土師器　坏	(12.0)	4.1	-	ABCDKN	にぶい橙色	B	50%	内外面赤彩、所々剥落。
4	土師器　坏	-	-	-	ABCDIK	外：にぶい橙 内：褐灰	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
5	ﾐﾆﾁｭｱ土器	(4.5)	4.2	3.2	ABDEIK	にぶい橙色	B	90%	
6	石製模造品	最大長 2.0 ㎝、最大幅 2.2 ㎝、最大厚 0.5 ㎝、孔径 0.2 ㎝。重量 2.9 ｇ。滑石。完形。孔二つ有。							
7	土師器　壺	(16.2)	(8.15)	-	ABCDKN	橙色	B	口～頸 30%	内外面所々摩耗。
8	弥生土器壺	-	-	-	ABIN	橙色	B	口縁部片	
9	弥生土器壺	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	

東側大半を第 29 号住居跡と第 12 号土坑に切られ、遺存状況は不良である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

床面は、ほぼ平坦であり、全体に軟弱である。ピットは、５基確認された。ピット２の底面に被熱痕が確認された。カマド・壁溝・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物（第 47 図）は、土師器台付甕（１）、須恵器瓶（２）、土師器坏（３）があるが、本住居跡に伴うものは１のみであり、２・３は流れ込みである。１は、ピット４東側で床面を掘り込んで、逆位に埋設されており、丸底容器の置き台にした可能性も窺える。

１は、土師器台付甕の接合部から台部にかけての部位である。台部はハの字に開く。調整は、内外面ともにヘラナデである。２は、須恵器瓶の胴下部片である。調整は、内外面ともにロクロナデである。産地不明である。３は、小振りの土師器坏である。短い口縁部がほぼ直立し、体部は内湾する。底部は、中央を欠くが、平底に近い。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。器壁が薄い。

本住居跡の時期は、弥生時代末から古墳時代前期としておきたい。

第 32 号住居跡（第 48 図）

調査区南側のＨ－９、Ｉ－８・９、Ｊ－９グリッドに位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 4.52 ｍ×短軸 3.50 ｍ以上、遺構確認面からの深さは、0.70 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 33° －Ｅを指す。南側半分が調査区外にある。調査できた部分では、遺存状況は良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、東壁に付設されている。燃焼部の内壁幅は 0.33 ｍ、掘込みは、床面から深さ 0.06 ｍである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕は、確認されなかった。また、燃焼部内で土師器坏が逆位で出土したが、支脚として使用されたのか、カマド祭祀だったのかは、判然としない。袖部は、黄褐色の地山で造りだし、内壁に白色粘土を貼り付けている。内壁は、弧状に膨らむことなく、直線的に伸びる。煙道部は、壁際で一段高くなり、地山を刳り抜き、1.50 ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。煙出しの平面形は、径 0.28 ｍの円形である。

床面は平坦であり、カマド前に硬化部分を確認したが、全体に軟弱である。壁溝は、確認されなかった。

出土遺物は、土師器坏（１～４）、ミニチュア土器（５）、石製模造品の有孔円盤（６）があり、流れ込みの古墳時代前期の土師器壺（７）、弥生時代末から古墳時代初頭の壺（８・９）も出土した。出土位置は、カマドとその南脇、北西隅付近に集中する。出土位置を示していない遺物では、２が覆土

下層、3は北東、4は北西の覆土上層からの出土である。

1～4は、土師器坏である。1・2は、深身の坏蓋模倣坏である。口縁部は、ほぼ直立するが、端部がやや外反する。体部と底部の境に明確な稜を持ち、底部は、2が中央を欠くが、いずれも丸底である。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。3は、短い口縁部の端部が外反する。体部は内湾し、底部は平底に近い。調整は、口縁部外面が横ナデ、内面及び体部から底部の外面は、ヘラミガキであり、全面に赤彩が施されている。4は、暗文坏である。内面に放射状暗文が密に施文されている。短い口縁部がやや外反し、体部は内湾する。調整は、口縁部が横ナデ、体部はヘラ削りである。流れ込みと思われる。5は、ミニチュア土器である。短い口縁部がやや外に開く。胴部は、中段がやや膨らみ、最大径を持つが、口径とあまり変わらない。底部は、平底である。調整は、内外面ともにヘラナデである。6は、石製模造品の有孔円盤である。いびつな隅丸長方形状を呈し、中央付近にやや間隔を空けて二つの孔を持つ。完形。7は、土師器壺の口縁部から頸部にかけての部位である。口縁部がやや受け口状を呈する。器壁が厚い。調整は、内外面ともにハケメ後、縦位のヘラミガキが施されている。8・9は、弥生土器壺である。8は口縁部、9は肩部の破片である。8は、複数の棒状浮文脇に細かい羽状縄文が施文されており、縄文は口縁端部にも施文されている。内面の調整は、横位のヘラミガキである。9は、細い沈線が一条巡り、上にＬＲ単節縄文が充填されている。沈線下及び内面は、横位のヘラミガキが施されている。

本住居跡の時期は、古墳時代後期直前の5世紀末から6世紀初頭と思われる。

第33号住居跡（第49～51図）

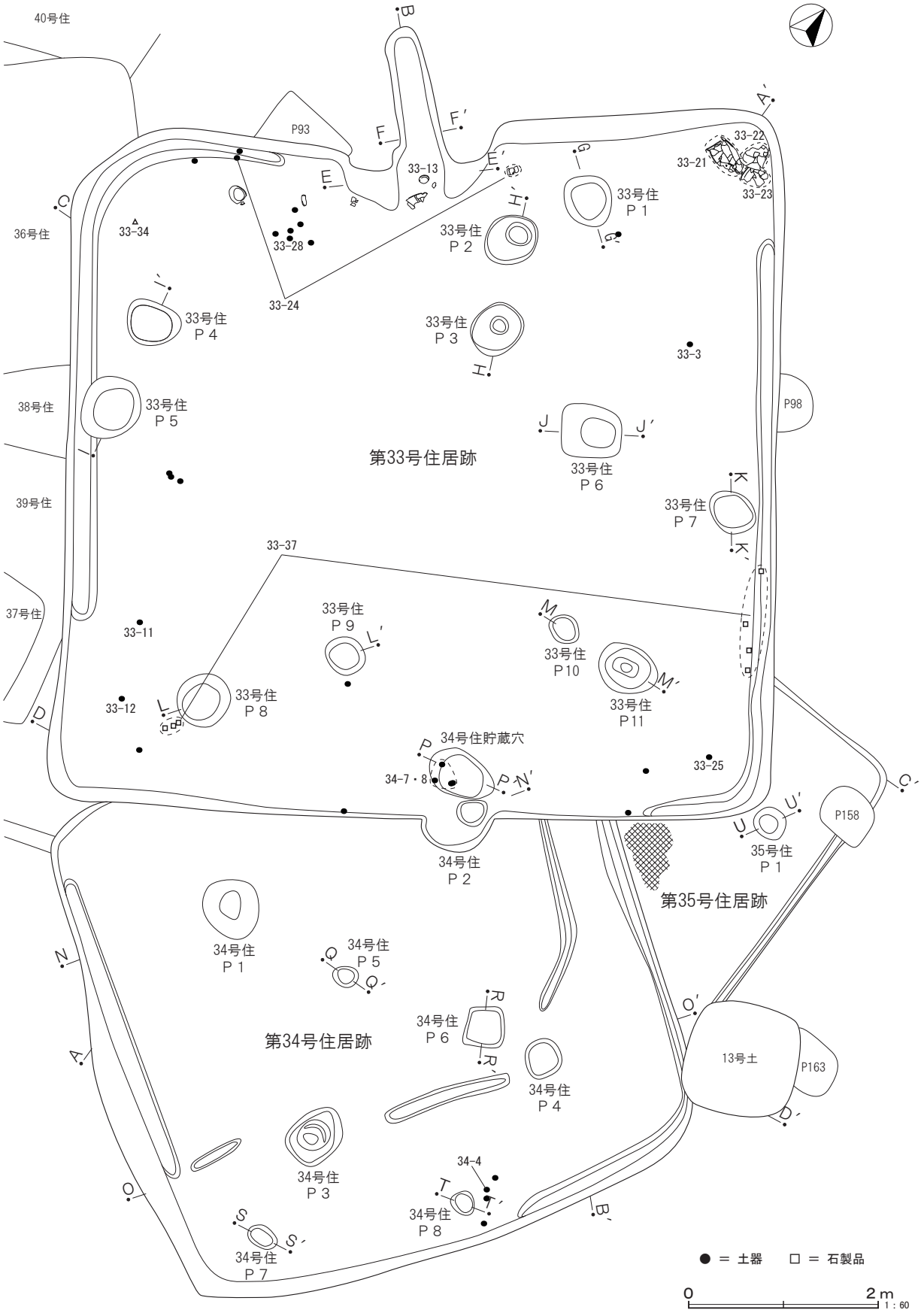
調査区南側中央のＧ－６～８、Ｈ－６～８グリッドに跨って位置する。本遺跡で確認された竪穴住居跡の中で最大規模を誇る。

平面形は、方形である。規模は、長軸7.42ｍ×短軸7.31ｍ、床面積46.20㎡、遺構確認面からの深さは、0.40ｍである。主軸方向は、Ｎ－40°－Ｗを指す。規模が大きいこともあり、多数の遺構と重複関係にある。第34～36・38・39号住居跡を切り、ピット93に切られている。遺存状況は、概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

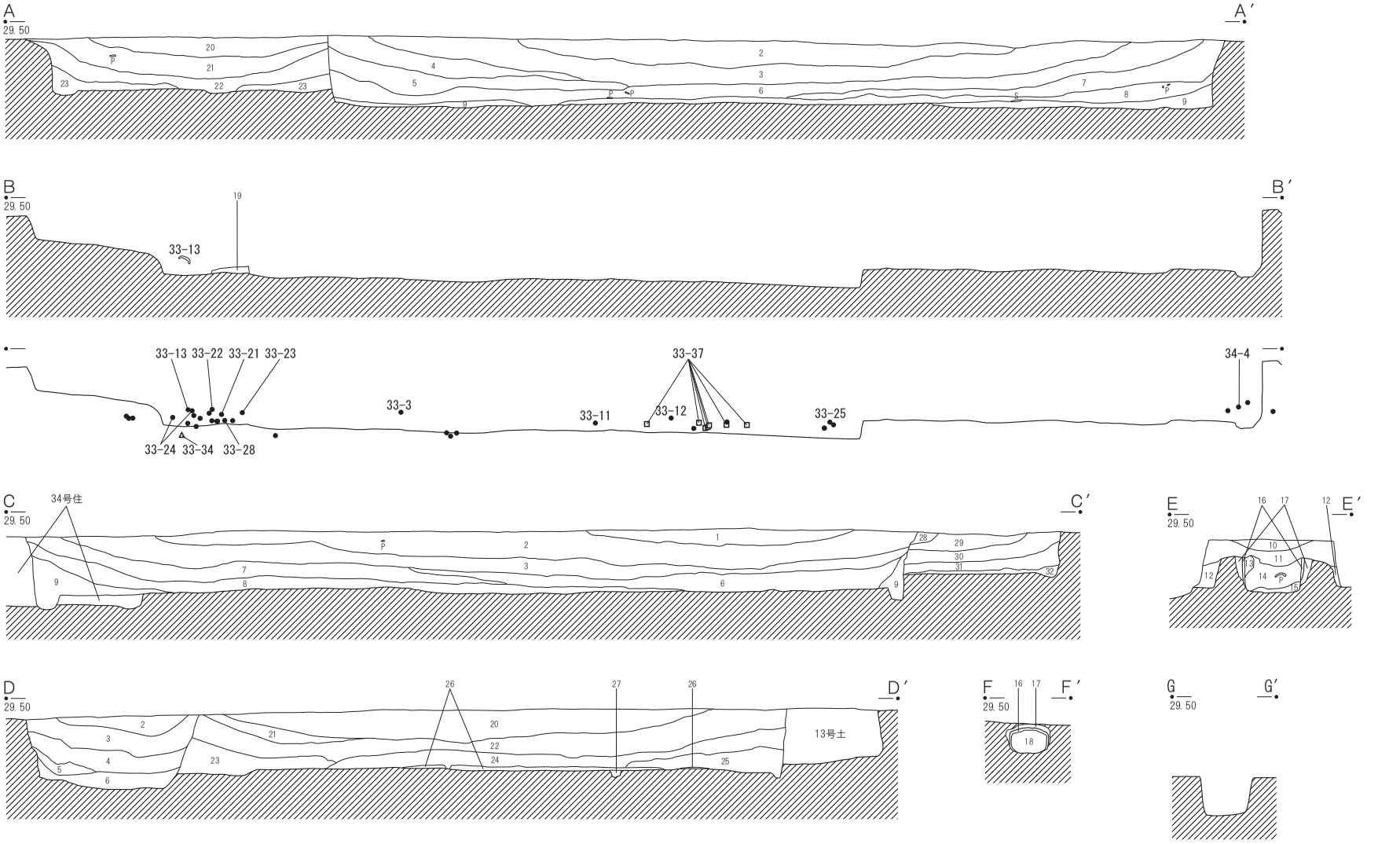
カマドは、北壁中央に付設されている。燃焼部の内壁幅は0.50ｍ、火床は床面と同一レベルで被熱痕は弱い。また、燃焼部内から土師器坏が逆位で確認され、カマド祭祀を窺わせる出土状況である。袖部は、黄褐色の地山で造りだし、内壁に白色粘土を貼り付けている。煙道部は、壁際で一段高くなり、地山を刳り抜き、1.10ｍ壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。

壁溝は、南壁と東壁北東側を除き、周る。床面は、ほぼ平坦であり、カマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。ピットは、11基確認されたが、対角線上に配列される主柱穴や貯蔵穴状のものは、確認されなかった。掘り方は、確認されなかった。

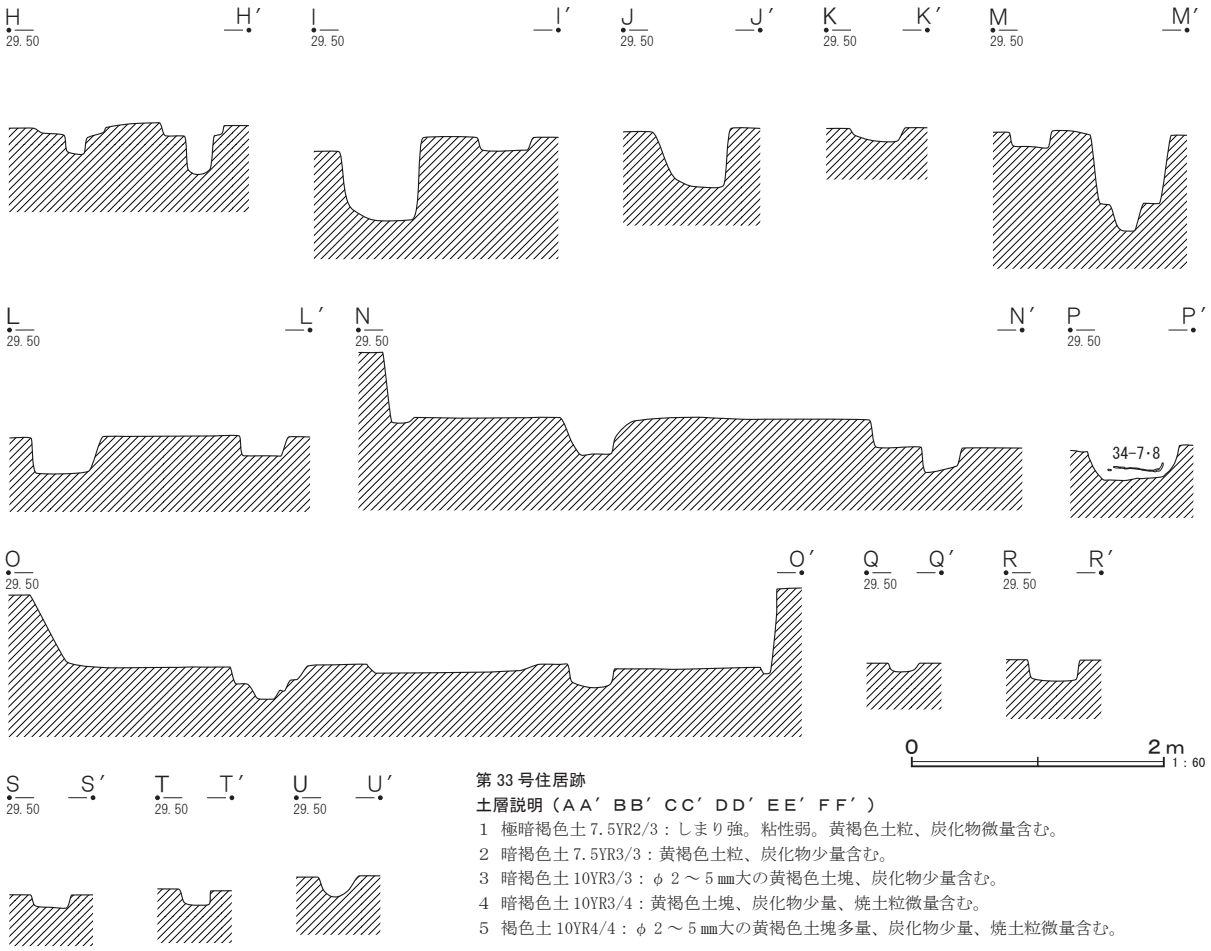
出土遺物（第52・53図）は、須恵器甕（１～３）、瓶（４・５）、甕（６・７）、灰釉陶器瓶（８～10）、土師器坏（11～20）、甕（21～28）、皿（29）、鉢（30）、土錘（31～33）、鉄製刀子（34･35）、砥石（36）、編み物石（37）があるが、灰釉陶器は流れ込みである。出土位置は、カマドや壁際、四隅付近に集中がみられる。出土位置を示していない遺物では、15がピット１、その他は覆土上層からの出土である。



第 49 図　第 33 ～ 35 号住居跡（１）



第 50 図　第 33 ～ 35 号住居跡（２）



第 33 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′ ＤＤ′ ＥＥ′ ＦＦ′）

1 極暗褐色土 7.5YR2/3：しまり強。粘性弱。黄褐色土粒、炭化物微量含む。
2 暗褐色土 7.5YR3/3：黄褐色土粒、炭化物少量含む。
3 暗褐色土 10YR3/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。
4 暗褐色土 10YR3/4：黄褐色土塊、炭化物少量、焼土粒微量含む。
5 褐色土 10YR4/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量、焼土粒微量含む。
6 褐色土 10YR4/6：黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
7 褐色土 7.5YR4/6：しまり・粘性強。φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
8 暗赤褐色土 2.5YR3/3：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物多量、焼土粒少量含む。
9 にぶい黄褐色土 10YR5/3：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
10 暗褐色土 10YR3/4：黄褐色土粒少量、焼土粒、炭化物微量含む。
11 暗褐色土 10YR3/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、焼土塊少量、炭化物微量含む。
12 褐色土 10YR4/4：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土塊少量、炭化物微量含む。
13 赤褐色土 10R4/3：φ 10 ～ 30 ㎜大の焼土塊主体。
14 にぶい赤褐色土 2.5YR4/4：しまり・粘性弱。φ 5 ～ 30 ㎜大の焼土塊多量、黄褐色土塊、炭化物少量含む。燃焼部。
15 暗赤褐色土 2.5YR3/4：焼土塊・粒多量、炭化物、灰少量含む。燃焼部。
16 橙色土 5YR7/6：燃焼部内壁に貼付けた厚さ 10 ～ 15 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
17 にぶい赤褐色土 2.5YR4/4：袖部・煙道部の地山が被熱で色調変化。
18 褐色土 10YR4/6：しまり強。粘性弱。黄褐色土粒多量、φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊少量、炭化物微量含む。煙道部。
19 暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性有。炭化物多量、焼土粒、灰少量含む。

第 34 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＤＤ′）

20 暗褐色土 10YR3/3：しまり強。粘性弱。黄褐色土粒少量。焼土粒微量含む。
21 暗褐色土 10YR3/4：φ 5 ～ 20 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。
22 暗褐色土 7.5YR3/3：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒、炭化物微量含む。
23 褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
24 褐色土 10YR4/6：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
25 にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。黄褐色土粒主体。炭化物少量含む。
26 にぶい褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒、焼土粒多量、炭化物少量含む。
27 褐色土 7.5YR4/3：黄褐色土粒、炭化物多量、焼土粒微量含む。

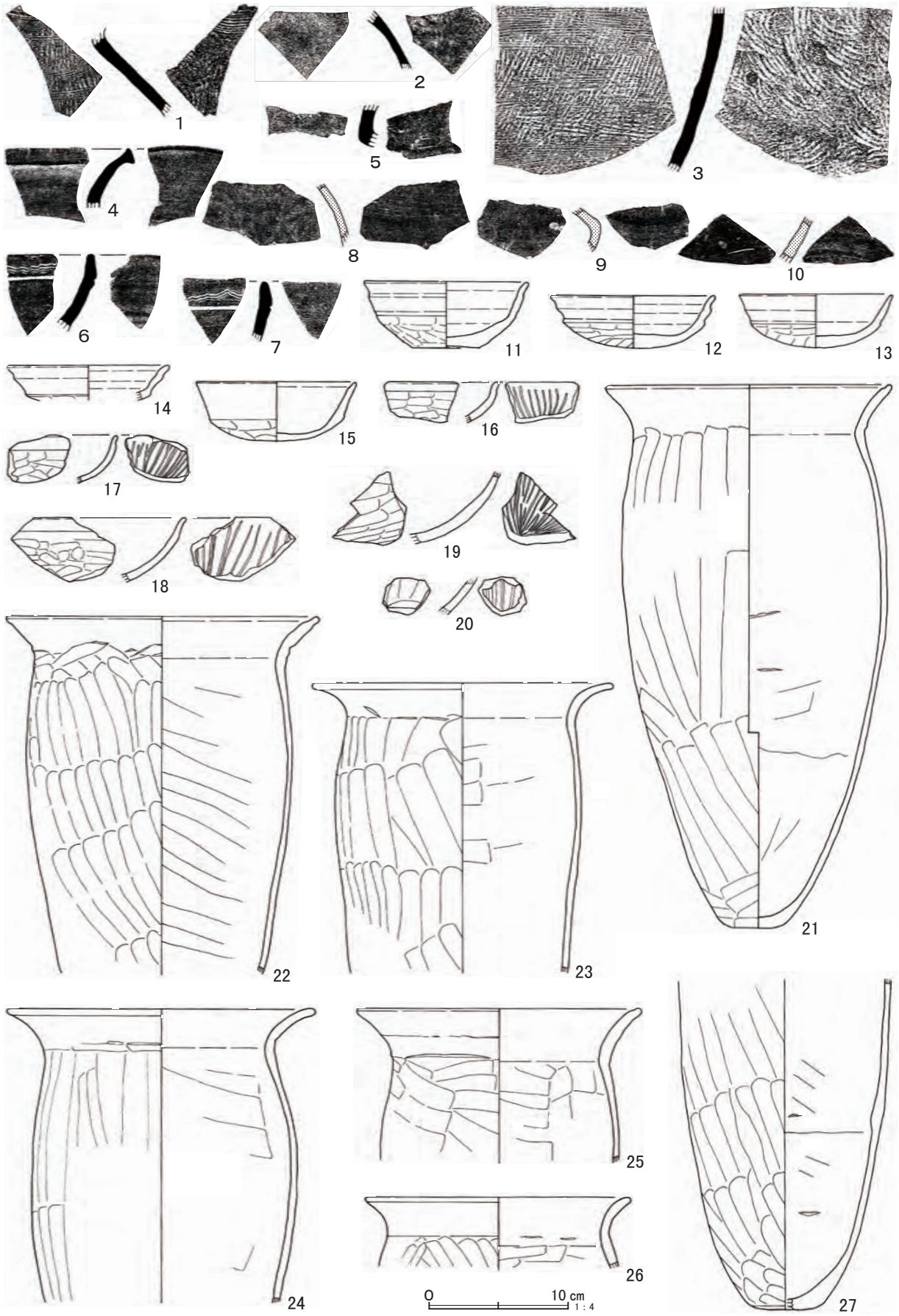
第 35 号住居跡

土層説明（ＣＣ′）

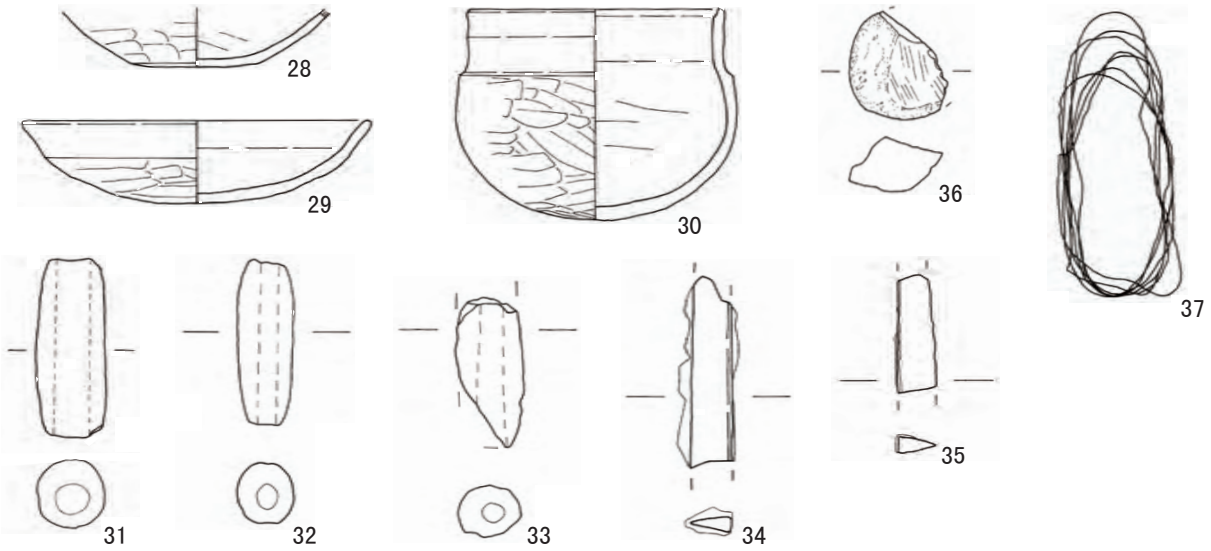
28 暗褐色土 10YR3/3：しまり強。粘性弱。黄褐色土粒少量、焼土粒微量含む。
29 暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、焼土粒少量、炭化物微量含む。
30 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
31 にぶい褐色土 7.5YR5/3：黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。
32 にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。

第 51 図　第 33 ～ 35 号住居跡（３）

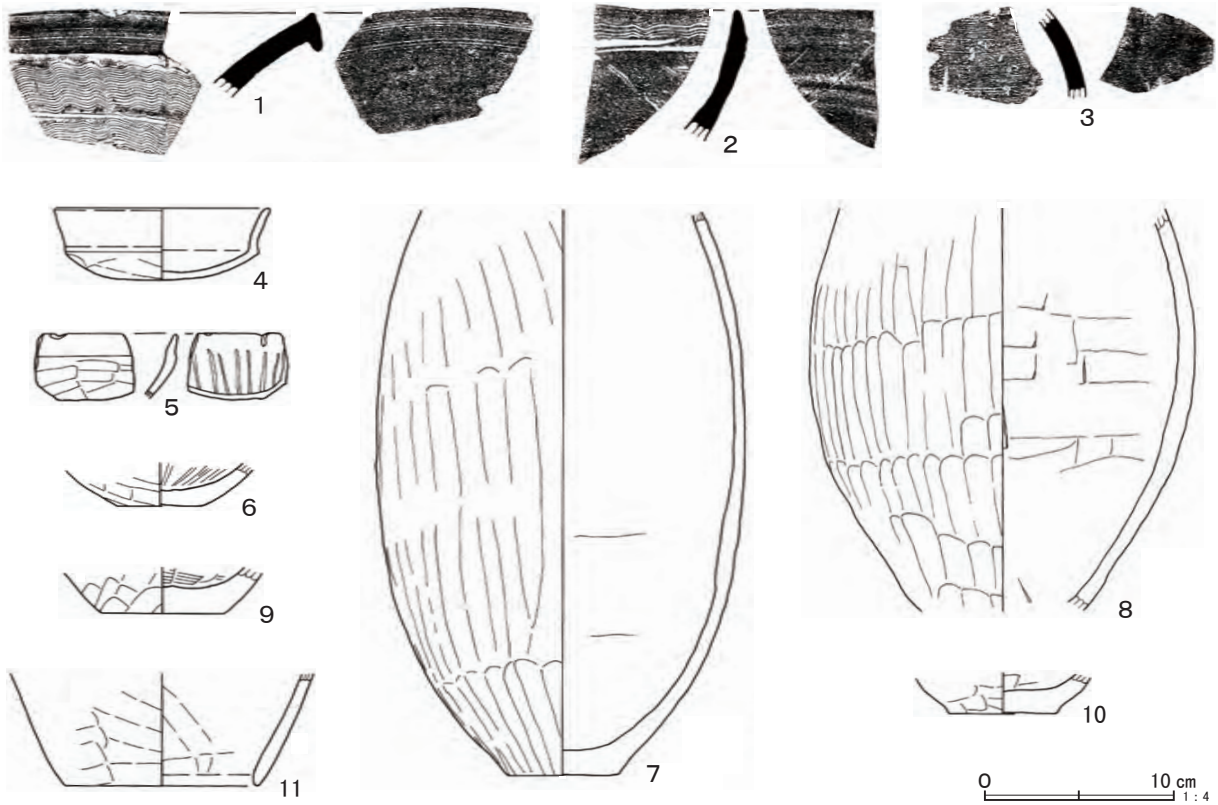
１～３は、須恵器甕である。１は頸部下位から胴上部にかけて、２は肩部から胴上部にかけて、３は胴下部の破片である。調整は、１・３の外面がタタキ後に回転カキ目、２はヘラナデが施されている。内面は、すべてあて具痕が残る。４・５は、須恵器瓶である。４は口縁部から頸部にかけて、５は頸部の破片である。調整は、内外面ともにロクロナデである。６・７は、須恵器鼈の口縁部から頸部にかけての破片である。調整は、内外面ともにロクロナデであり、口縁部にやや太い沈線上に波状



第 52 図　第 33 号住居跡出土遺物（１）



第 53 図　第 33 号住居跡出土遺物（２）



第 54 図　第 34 号住居跡出土遺物

第 55 図　第 35 号住居跡出土遺物

第 28 表　第 33 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	-	-	-	ABL	灰色	A	頸～胴上片	末野産。
2	須恵器　甕	-	-	-	AB	灰色	B	肩～胴上片	産地不明。外面自然釉付着。
3	須恵器　甕	-	-	-	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
4	須恵器　瓶	-	-	-	ABL	灰色	B	口～頸部片	末野産。内面、口唇部外面自然釉付着。
5	須恵器　瓶	-	-	-	AB	灰色	B	頸部片	末野産？
6	須恵器　甑	-	-	-	AB	灰色	B	口～頸部片	末野産？ No.7 と同一個体。
7	須恵器　甑	-	-	-	AB	灰色	B	口～頸部片	末野産？ No.6 と同一個体。
8	灰釉陶器　瓶	-	-	-	AB	灰色	B	胴上部片	産地不明。外面釉付着。
9	灰釉陶器　瓶	-	-	-	AB	灰白色	B	胴部中段片	産地不明。外面釉付着。
10	灰釉陶器　瓶	-	-	-	AB	灰白色	B	胴下部片	産地不明。
11	土師器　坏	(11.8)	4.75	4.8	ABDGIK	明黄褐色	B	60%	内外面摩耗顕著。
12	土師器　坏	11.8	3.8	-	ABDIK	明褐色	B	ほぼ完形	
13	土師器　坏	11.0	3.85	-	ABK	にぶい黄橙色	B	完形	
14	土師器　坏	(11.6)	(2.5)	-	AEHIK	暗赤褐色	A	25%	
15	土師器　坏	11.5	4.25	-	ABCDIK	橙色	B	完形	
16	土師器　坏	-	-	-	ABEIK	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
17	土師器　坏	-	-	-	ABCIK	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
18	土師器　坏	-	-	-	ABEHKN	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
19	土師器　坏	-	-	-	ABDIK	外：にぶい橙 内：橙	B	体～底部片	内面放射状暗文有。
20	土師器　坏	-	-	-	AEIK	にぶい赤褐色	B	体部片	内面放射状暗文有。
21	土師器　甕	20.6	39.0	3.8	ABDEGIKN	橙色	B	80%	胴部内面輪積痕有。内面やや摩耗。
22	土師器　甕	22.5	(25.6)	-	ABCEHIKN	橙色	B	口～胴 70%	
23	土師器　甕	21.6	(20.8)	-	ABCIK	にぶい橙色	B	口～胴 80%	内面摩耗顕著。
24	土師器　甕	(22.1)	(21.2)	-	ABDEIKN	にぶい黄褐色	B	口～胴 60%	内面やや摩耗。
25	土師器　甕	20.4	(11.1)	-	ABDEGIKN	橙色	B	口～胴 60%	口縁部外面輪積痕有。
26	土師器　甕	(19.0)	(5.2)	-	ABDIK	にぶい橙色	B	口～胴 35%	口縁部内面輪積痕有。
27	土師器　甕	-	(23.6)	(5.0)	ABDIK	にぶい橙色	B	胴～底 40%	胴部内面輪積痕有。内面摩耗顕著。
28	土師器　甕	-	(3.1)	(6.4)	ABEGIK	外：黒褐 内：橙	B	底部 60%	内外面摩耗顕著。
29	土師器　皿	(18.4)	4.4	-	ABCIKN	橙色	B	30%	内面やや摩耗。
30	土師器　鉢	(13.6)	11.2	-	ABEHK	明赤褐色	B	20%	
31	土　錘	最大長 9.4 ㎝、最大幅 3.7 ㎝、孔径 1.7 ㎝。重量 100.0 ｇ。完形。							
32	土　錘	最大長 4.4 ㎝、最大幅 1.6 ㎝、孔径 0.7 ㎝。重量 8.5 ｇ。完形。							
33	土　錘	最大長 (4.0) ㎝、最大幅 (1.8) ㎝、孔径 (1.4) ㎝。重量 (7.3) ｇ。両端欠。							
34	鉄製刀子	最大長 (5.1) ㎝、最大幅 (1.1) ㎝、最大厚 (0.4) ㎝。重量 (7.0) ｇ。刃部中段のみ残。							
35	鉄製刀子	最大長 (3.1) ㎝、最大幅 (1.0) ㎝、最大厚 (0.4) ㎝。重量 (3.5) ｇ。刃部中段のみ残。							
36	砥　石	最大長 (5.7) ㎝、最大幅 (4.9) ㎝、最大厚 (2.8) ㎝。重量 (31.7) ｇ。角閃石安山岩。1/3 欠。一面線状痕有。							

第 29 表　第 34 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	-	-	-	ABFN	灰色	A	口縁部片	南比企産。
2	須恵器　甑	-	-	-	ABL	灰色	B	口～頸部片	末野産。
3	須恵器　瓶	-	-	-	ABL	オリーブ灰色	B	胴上部片	末野産。
4	土師器　坏	11.4	3.8	-	ABDH	橙色	B	ほぼ完形	内外面摩耗顕著。
5	土師器　坏	-	-	-	ABCHK	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
6	土師器　坏	-	(2.3)	4.4	ABEHIK	外：にぶい橙 内：橙	B	底部 70%	内面放射状暗文有。
7	土師器　甕	-	(29.8)	6.0	ABCIK	褐色・浅黄橙色	B	胴～底 60%	内面摩耗顕著。
8	土師器　甕	-	(21.4)	-	ABEHIK	にぶい橙色	B	胴部 40%	内外面所々摩耗。
9	土師器　甕	-	(2.4)	(6.4)	ABCEIK	橙色	B	底部 50%	
10	土師器　甕	-	(2.15)	5.8	ABEIKN	橙色	B	底部 90%	外面摩耗顕著。
11	土師器　甑	-	(6.0)	(10.4)	ABEHIK	にぶい黄橙色	B	底部 15%	内外面摩耗顕著。

第 30 表　第 35 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	-	-	-	AL	灰色	B	胴下部片	末野産。
2	須恵器　甕	-	-	-	ADL	灰色	B	胴下部片	末野産。
3	土師器　坏	(14.0)	(3.8)	-	ABEGIKN	橙色	B	20%	内面放射状暗文有。
4	土師器　甕	(19.6)	(7.3)	-	ABCDKM	橙色	B	口～胴 20%	

文が巡る。須恵器は、末野産、ないしその可能性が高いものが多く、自然釉が付着しているものがある。８～ 10 は、灰釉陶器瓶である。８は胴上部、９は胴部中段、10 は胴下部の破片である。調整は、すべて内外面ともにロクロナデである。８・９は外面に釉が付着している。流れ込みであり、産地不

明である。11 ～ 20 は、土師器坏である。11 ～ 14 は有段口縁坏、15 は坏蓋模倣坏、16 ～ 20 は暗文坏である。有段口縁坏は、浅身のものが多いが、11 は深身で、やや上げ底であり、後述する調整技法も含め、古い様相を呈することから流れ込みと思われる。12 ～ 15 は、口縁部が逆ハの字に開き、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は丸底であるが、一部平底に近いものがある。16 ～ 20 は、暗文坏である。すべて破片での検出であるが、内面に放射状暗文が密に施文されている。短い口縁部がやや外反し、体部は内湾する。やや大型の 18･19 は、埦としても良いかもしれない。坏の調整は、口縁部がすべて横ナデであるが、体部から底部は、11 以外ヘラ削りであり、17 は指オサエも施されている。11 は、体部から底部の調整がヘラナデである。21 ～ 27 は、土師器長胴甕である。最大径を持つ口縁部が大きく外反し、胴部は上位がやや膨らむ。底部は、平底である。21・22 は、口縁端部内面に段を持つ。28 は、土師器丸胴甕の底部である。器壁が薄く、鉢の可能性もある。甕の調整は、口縁部が横ナデ、胴部から底部の外面はヘラ削り、内面はヘラナデである。21・27 は胴部中段付近の内面、25 は口縁部中段の外面、26 は口縁部下位の内面に輪積痕が残る。29 は、土師器皿である。坏蓋模倣坏を大型化した器形であるが、口縁部は外に大きく開き、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は、丸底である。調整は、坏と同じく口縁部が横ナデ、体部から底部は、ヘラ削りである。30 は、土師器鉢である。口縁部が直立し、外面中段と端部内面に段を持つ。胴部は半球形を呈し、中段に最大径を持つが、口径とあまり変わらない。調整は、口縁部が横ナデ、胴部から底部の外面はヘラ削り、内面はヘラナデである。31 ～ 33 は、土錘である。31 のみ大型であるが、その他は、４㎝程の小型のものである。いずれも筒状を呈し、両端がややすぼまる。34・35 は、鉄製刀子の刃部中段付近の破片である。36 は、砥石である。一面がややフラットで線状痕がみられた。37 は、編み物石である。南東隅で４点、南西隅で３点まとまって検出されたことから編み物石と判断した。大きさは、13 ㎝前後を測る。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の７世紀後半と思われる。

第 34 号住居跡（第 49 ～ 51 図）

調査区南側のＨ－８・９、Ｉ－８グリッドに跨って位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 5.76 ｍ×短軸 5.26 ｍ、床面積 23.50 ㎡以上、遺構確認面からの深さは、0.57 ｍである。主軸方向は、Ｎ－ 57° －Ｗを指す。北西側を第 33 号住居跡に切られ、西側で第 37 号住居跡、東側で第 35 号住居跡と第 13 号土坑をそれぞれ切る。遺存状況は、概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは確認されなかったが、恐らく北西壁に付設されていたとみられる。壁溝は、南隅を除いて周り、その内側にも間仕切り状に溝が周ることから、拡張が行われたことが窺える。

床面は平坦であり、中央部に踏み固めとみられる硬化部分を確認した。ピットは、９基確認された。ピット１～４が主柱穴になるとみられる。北隅のピットは、多数の遺物が出土したことやその位置から貯蔵穴とみられる。

出土遺物（第 54 図）は、須恵器甕（１）、甕（２）、瓶（３）、土師器坏（４～６）、甕（７～10）、甑（11）がある。出土位置は、貯蔵穴と南東壁際中央付近に集中がみられる。出土位置を示していない遺物は、覆土上層からの出土である。

須恵器は、１が甕の口縁部、２は甕の口縁部から頸部にかけて、３は瓶の胴上部の破片である。調

整は、すべて内外面ともにロクロナデであり、1・2は口縁部外面にやや太い沈線と緩い波状文、3は回転カキ目が巡る。1のみ南比企産、その他は末野産である。4～6は、土師器坏である。4は坏蓋模倣坏、5・6は暗文坏である。4は浅身で、口縁部が外反する。体部と底部の境に明確な稜を持ち、底部は、平底に近い。5・6は、内面に放射状暗文が密に施文されている。5は、口縁部から体部までの破片である。短い口縁部がやや外反し、体部は内湾する。6は、体部から底部までの部位である。体部は内湾し、底部は平底である。器壁が厚い。いずれも流れ込みと思われる。坏の調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。7～10は、土師器長胴甕である。7は胴上部から底部まで、8は胴上部から下部までの部位、9・10は底部である。胴部は、中段付近が膨らみ、底部に向かってすぼまる。底部は平底であり、器壁が厚い。11は、土師器甑の胴下部から底部にかけての部位である。胴下部から底部まで直線的に下る。甕・甑の調整は、外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。

本住居跡の時期は、古墳時代後期の6世紀前半と思われる。

第35号住居跡（第49～51図）

調査区南側中央のH－7・8、I－7・8グリッドに位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸3.60ｍ以上×短軸2.06ｍ以上、遺構認面からの深さは、0.40ｍである。主軸方向は、N－7°－Wを指す。西側を第33･34号住居跡、東壁をピット158にそれぞれ切られ、南東側で第13号土坑を切っている。調査できた部分は僅かであり、遺存状況は悪い。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、確認されなかった。壁溝は、東壁際で確認された。床面は平坦であり、若干軟弱である。

ピットは、北東隅で1基確認された。また、中央の床面直上でアンペラ状に植物繊維を編んだ蓆状炭化物が確認された。

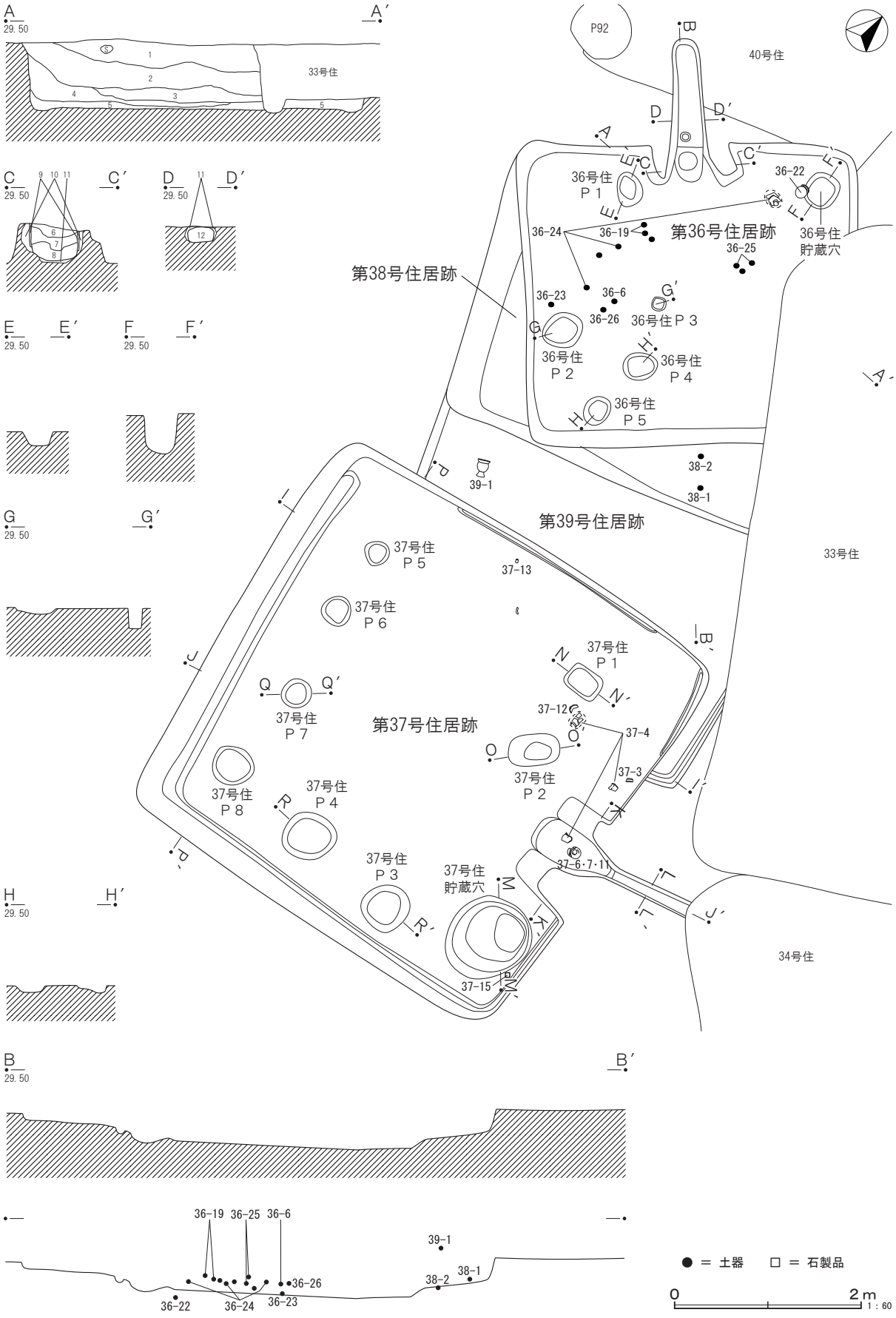
出土遺物（第55図）は、須恵器甕（1・2）、土師器坏（3）、甕（4）があるが、すべて覆土上層からの出土であり、流れ込みと思われる。

1・2は、須恵器甕の胴下部片である。いずれも調整は、外面がタタキ後に回転カキ目が施されており、内面はあて具痕が残る。末野産である。3は、土師器暗文坏である。内面に放射状暗文が密に施文されている。短い口縁部が外反し、体部は内湾する。底部は、中央を欠くが、丸底である。調整は、口縁部が横ナデ、体部はヘラ削りである。4は、土師器長胴甕の口縁部から胴上部までの部位である。口縁部が外反し、胴部はほぼ直線的に下る。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。

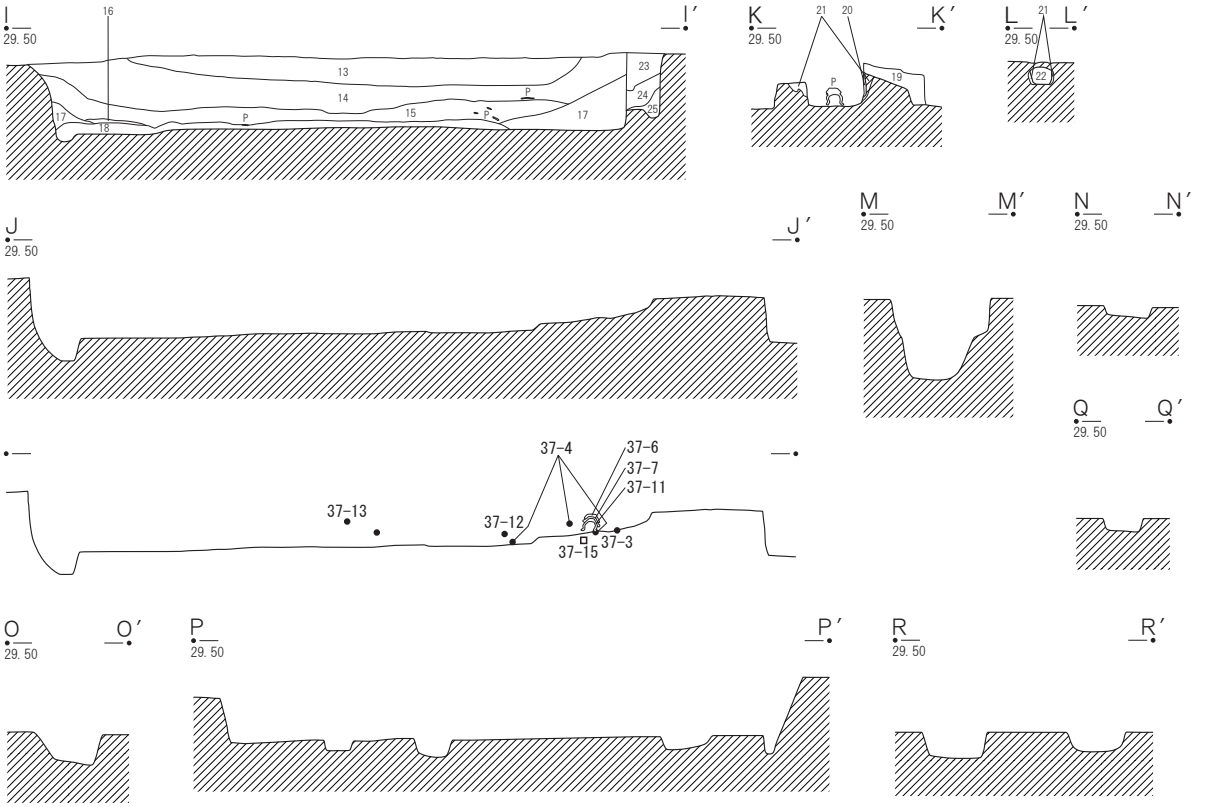
本住居跡の時期は、重複する住居跡との新旧関係や主軸方向から、古墳時代前期か中期としか言えない。

第36号住居跡（第56・57図）

調査区西側のF－7・8、G－7・8グリッドに跨って位置する。平面形は、やや横長の方形である。規模は、長軸3.52ｍ×短軸3.14ｍ、床面積8.20㎡以上、遺構確認面からの深さは、0.70ｍである。主軸方向は、N－48°－Wを指す。南東側を第33号住居跡に切られ、南側と北西側で第38・40号住居跡をそれぞれ切る。遺存状況は、概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。



第 56 図　第 36 ～ 39 号住居跡（１）



第 36 号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＣＣ′ ＤＤ′）

1 暗褐色土 10YR3/4：しまり強。粘性弱。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、焼土粒、炭化物微量含む。
2 暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性強。黄褐色土塊、焼土粒少量含む。
3 褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒多量、焼土粒少量、炭化物微量含む。
4 にぶい褐色土 7.5YR5/3：黄褐色土粒・塊多量、焼土粒少量含む。
5 にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
6 褐色土 7.5YR4/3：黄褐色土粒多量、焼土塊少量含む。
7 にぶい褐色土 7.5YR5/4：φ 2 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊、焼土塊少量含む。
8 灰赤色土 2.5YR4/2：φ 5 ～ 20 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土塊、炭化物少量含む。燃焼部。
9 橙色土 2.5YR7/6：袖部内壁に貼付けた厚さ 10 ～ 15 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
10 明赤褐色土 2.5YR5/6：袖部の地山が被熱で色調変化。
11 にぶい橙色土 2.5YR6/4：火床面の地山が被熱で色調変化。
12 にぶい赤褐色土 5YR5/4：黄褐色土粒、φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊多量含む。煙道部。

第 37 号住居跡

土層説明（II′ ＫＫ′ ＬＬ′）

13 暗褐色土 10YR3/3：しまり強。粘性やや有。黄褐色土粒、炭化物少量含む。
14 暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量、焼土粒微量含む。
15 褐色土 10YR4/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
16 赤褐色土 2.5YR4/6：黄褐色土粒、焼土粒多量、炭化物少量含む。
17 にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒多量、炭化物少量含む。
18 にぶい褐色土 7.5YR5/4：しまり・粘性強。φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土塊、炭化物少量含む。
19 褐色土 10YR4/6：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊、焼土塊多量、炭化物少量含む。
20 橙色土 2.5YR7/6：袖部内壁に貼付けた厚さ 11 ～ 13 ㎜の灰白色粘土が被熱で色調変化。
21 赤色土 10R5/6：袖部・煙道部の地山が被熱で色調変化。
22 褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、φ 2 ～ 5 ㎜大の焼土塊、炭化物少量含む。煙道部。

第 39 号住居跡

土層説明（II′）

23 暗褐色土 10YR3/4：しまり強。粘性弱。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量、焼土粒微量含む。
24 褐色土 10YR4/4：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量、焼土粒微量含む。
25 にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒主体。炭化物少量含む。

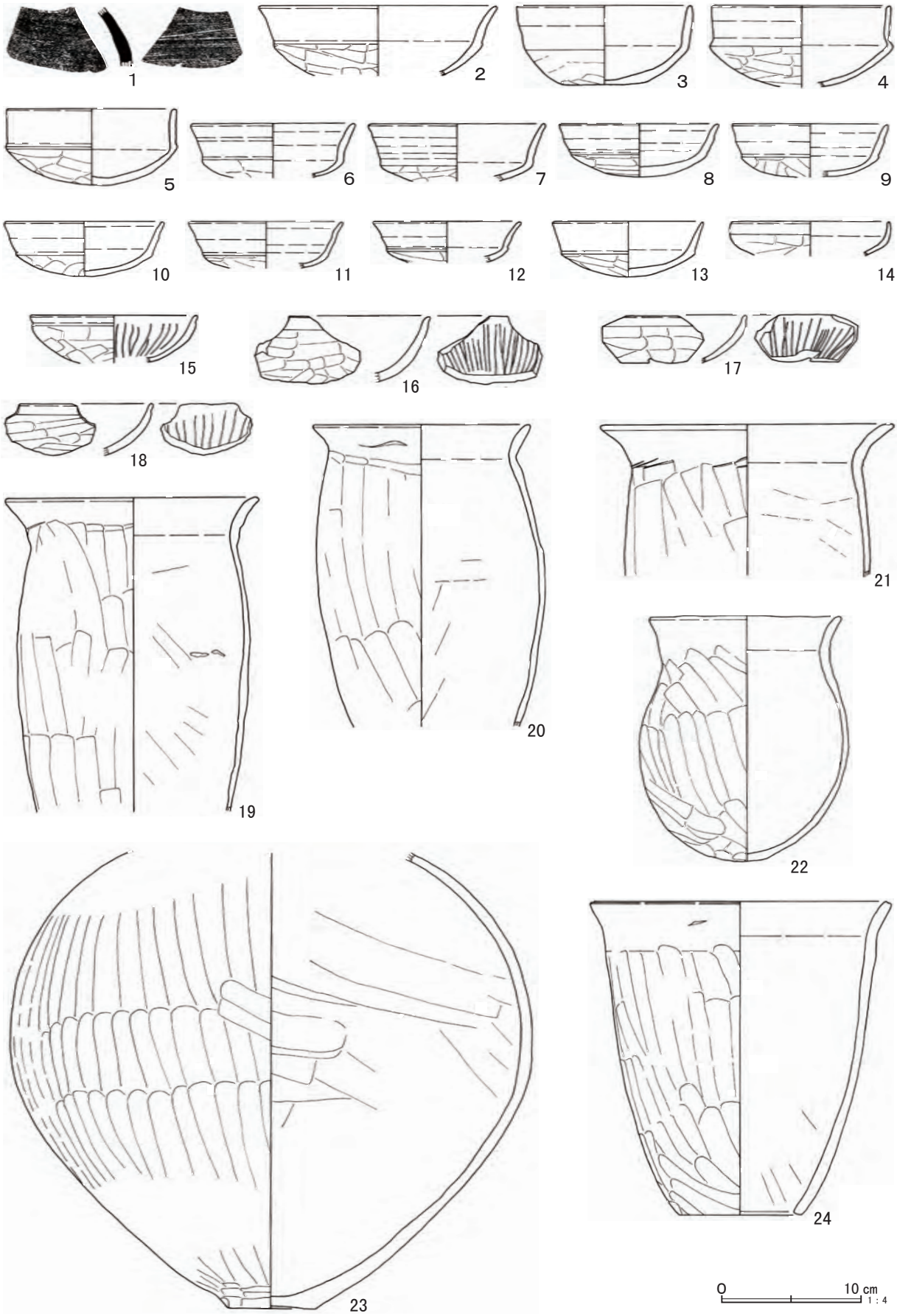
● ＝ 土器　□ ＝ 石製品　0　2m　1：60

第 57 図　第 36 ～ 39 号住居跡（２）

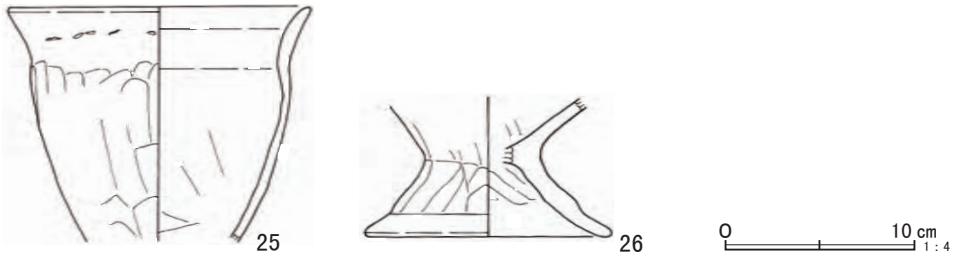
カマドは、北西壁中央に付設されている。燃焼部の内壁幅は 0.45 m、掘込みは床面から深さ 0.04 m である。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕は、確認されなかった。袖部は、黄褐色の地山で造りだし、内壁に白色粘土を貼り付けている。煙道部は、壁際で一段高くなり、地山を刳り抜き、1.10 m壁外へ突出したところで垂直気味に立ち上がる。

床面は、南東側にやや下り勾配で傾斜し、カマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。また、南側の床面直上で多量の焼土塊が確認された。

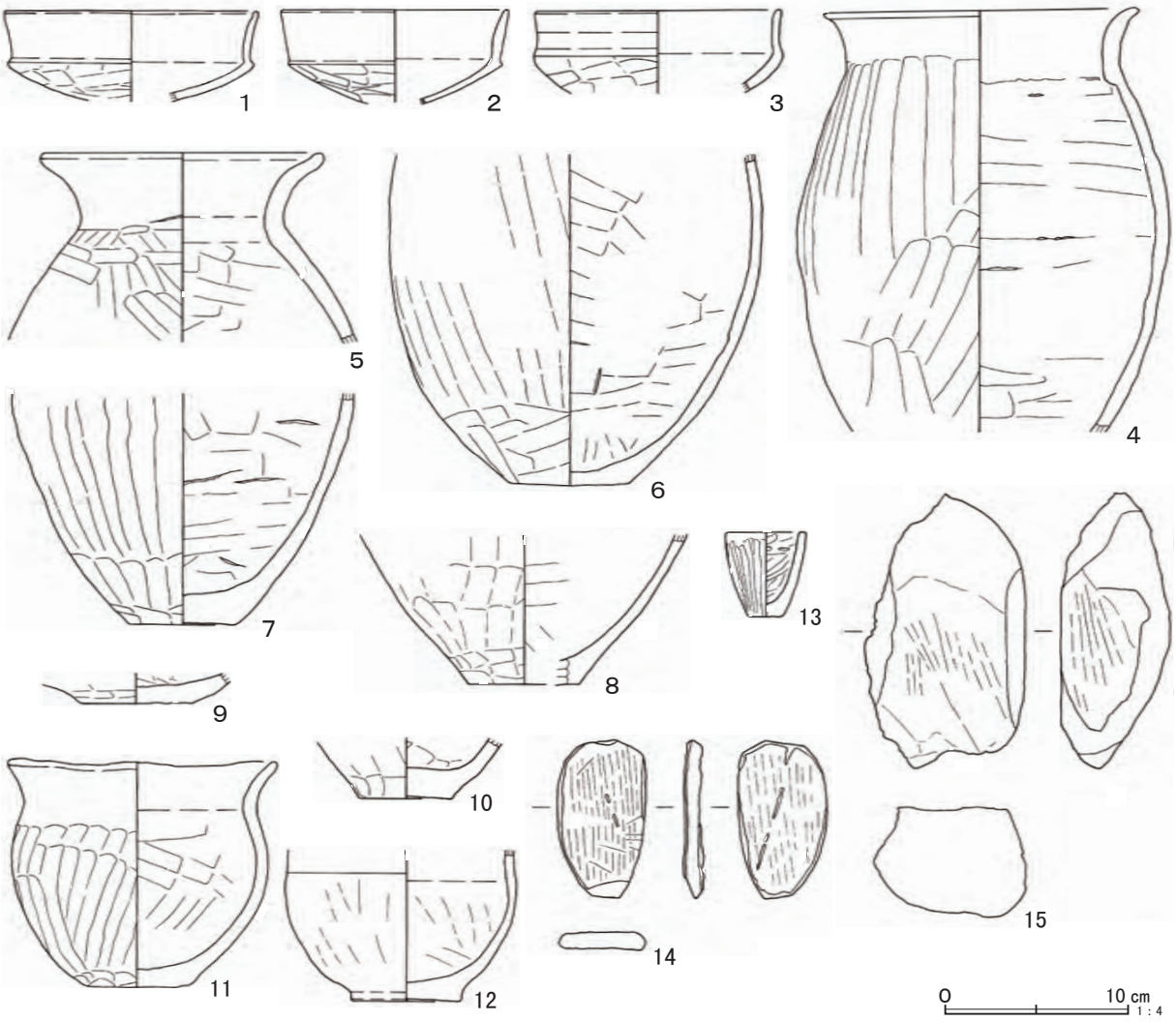
ピットは、６基確認された。北隅のピットは、土師器甕が出土したことやその位置から貯蔵穴とみ



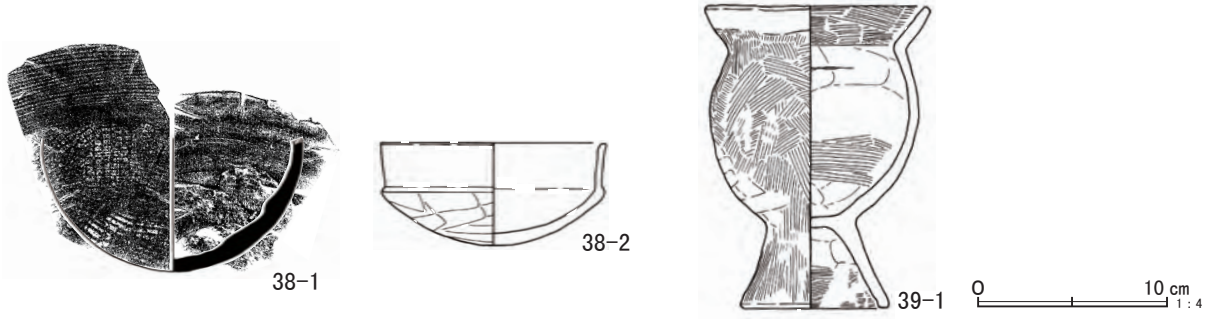
第 58 図　第 36 号住居跡出土遺物（１）



第 59 図　第 36 号住居跡出土遺物（２）



第 60 図　第 37 号住居跡出土遺物



第 61 図　第 38・39 号住居跡出土遺物

第 31 表　第 36 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　瓶	-	-	-	AB	灰色	B	胴上部片	産地不明。外面自然釉付着。
2	土師器　坏	(17.0)	(4.95)	-	ABCIKN	にぶい橙色	B	20%	
3	土師器　坏	12.6	5.7	5.8	ABEGHIKM	橙色	B	80%	内外面摩耗顕著。
4	土師器　坏	12.8	(5.75)	-	ABDHK	橙色	B	60%	
5	土師器　坏	(12.2)	5.5	-	ABCEHIK	橙色	B	50%	
6	土師器　坏	(11.8)	(3.85)	-	ABEIK	浅黄橙色・にぶい橙色	B	70%	内外面摩耗顕著。
7	土師器　坏	(12.7)	(4.1)	-	ABCIK	橙色	B	20%	内外面やや摩耗。
8	土師器　坏	(11.4)	3.8	-	ABIKN	橙色	B	50%	
9	土師器　坏	(11.2)	(3.8)	-	ABDHIK	外 : 灰黄褐 内 : 灰褐	B	30%	外面摩耗顕著。
10	土師器　坏	(11.4)	3.9	-	ABDEGIKN	灰黄褐色	B	70%	
11	土師器　坏	(11.0)	(3.8)	-	ABCIK	橙色	B	25%	内外面摩耗顕著。
12	土師器　坏	(10.6)	(2.95)	-	ABEHIK	橙色	B	25%	
13	土師器　坏	(10.8)	3.9	-	ABEHIK	橙色	B	25%	内外面やや摩耗。
14	土師器　坏	(11.4)	(2.45)	-	ABDIKN	明赤褐色	B	15%	
15	土師器　坏	(12.0)	(3.4)	-	ABEHIKN	灰赤色	B	20%	内面放射状暗文有。
16	土師器　坏	-	-	-	ABDHIK	黒褐色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
17	土師器　坏	-	-	-	ABCHIK	灰黄褐色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
18	土師器　坏	-	-	-	ABEHIK	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。内面やや磨耗。
19	土師器　甕	18.2	(22.4)	-	ABCIKN	にぶい黄橙色	B	口～胴 70%	胴部内面輪積痕有。内面やや摩耗。
20	土師器　甕	15.6	(21.6)	-	ABDIKM	にぶい橙色	B	口～胴 60%	内面摩耗顕著。
21	土師器　甕	(21.0)	(11.1)	-	ABEIKN	外 : 橙 内 : にぶい黄橙	B	口～胴 30%	内面摩耗顕著。
22	土師器　甕	13.9	17.65	-	ABIK	橙色	B	完形	胴部内面輪積痕有。
23	土師器　甕	-	(32.7)	6.3	ABDHIKN	外 : 浅黄橙 内 : 灰白	B	胴～底 50%	内外面所々摩耗。
24	土師器　甑	(21.6)	22.4	(8.8)	ABDHIK	橙色	B	50%	口縁部外面輪積痕有。内面摩耗顕著。
25	土師器　甑	(16.0)	(12.5)	-	ABCDIK	にぶい橙色	B	口～胴 70%	口縁部外面輪積痕有。内外面所々摩耗。
26	土師器台付甕	-	(7.3)	(13.0)	ABDEGIK	橙色	B	接～台 60%	内外面所々摩耗。

第 32 表　第 37 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(13.8)	(4.9)	-	ABCIKN	橙色	B	40%	内外面摩耗顕著。
2	土師器　坏	(12.4)	(5.1)	-	ABEHK	橙色	B	30%	内外面所々剥離。
3	土師器　坏	(13.4)	(4.55)	-	ABCGIKN	橙色	B	20%	
4	土師器　甕	(17.2)	(23.2)	-	ABCIKN	橙色	B	口～胴 70%	胴部内面輪積痕有。
5	土師器　甕	(15.4)	(10.4)	-	ABDEIK	にぶい橙色	B	口～胴 30%	
6	土師器　甕	-	(18.2)	6.4	ABDHK	橙色	B	胴～底 70%	内外面やや摩耗。
7	土師器　甕	-	(12.8)	5.8	ABCIKN	橙色	B	胴～底 50%	内外面やや摩耗。
8	土師器　甕	-	(8.2)	(6.0)	ABDIKN	橙色	B	胴～底 30%	内外面摩耗顕著。
9	土師器　甕	-	(1.7)	6.0	ABDEIK	外 : 赤 内 : 橙	B	底部 100%	外面やや摩耗。
10	土師器　甕	-	(3.4)	5.0	ABEGIK	にぶい橙色	B	底部 100%	
11	土師器　鉢	14.6	12.5	5.6	ABCDHIK	外 : 橙 内 : 灰褐	B	ほぼ完形	内外面所々摩耗。
12	土師器　鉢	-	(8.35)	6.0	ABIK	浅黄橙色	B	胴～底 40%	内外面摩耗顕著。
13	ﾐﾆﾁｭｱ土器	(4.4)	4.6	2.0	ABDIK	にぶい橙色	B	70%	内面輪積痕有。
14	砥　石	最大長 (8.6) ㎝、最大幅 4.8 ㎝、最大厚 1.1 ㎝。重量 (69.0) ｇ。緑泥片岩。片端欠。両面線状痕有。							
15	砥　石	最大長 (15.0) ㎝、最大幅 (8.7) ㎝、最大厚 (6.0) ㎝。重量（652.0） ｇ。礫岩。大半欠。二面線状痕有。							

第 33 表　第 38 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器短頸壺	-	(7.0)	-	ABLN	灰色	A	胴～底 50%	末野産。
2	土師器　坏	(11.9)	5.4	-	ABEHIKN	橙色	B	30%	内外面所々剥離。

第 34 表　第 39 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器台付甕	11.5	16.0	7.6	ABEHK	橙色・にぶい黄橙色	B	完形	胴部内面中段摩耗顕著。

られる。壁溝・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物（第 58・59 図）は、須恵器瓶（１）、土師器坏（２～18）、甕（19～23）、甑（24･25）、台付甕（26）がある。出土位置は、床面中央から北西側に集中がみられる。出土位置を示していない遺物は、覆土上層からの出土である。

１は、須恵器瓶の胴上部片である。調整は、内外面ともにロクロナデである。外面に自然釉が付着

している。産地不明である。２～18は、土師器坏である。２～５･13は坏蓋模倣坏、６～12は有段口縁坏、14は北武蔵型坏、15～18は暗文坏である。本住居跡に伴うものは、２・６～13であり、その他は、流れ込みと思われる。坏蓋模倣坏は、法量・器形にバラエティがあるが、口径12.5㎝、器高５㎝前後の深身のものが主体となる。有段口縁坏は、口径11㎝、器高４㎝前後のものが多い。坏蓋模倣坏と有段口縁坏の口縁部は、やや大型の２が外反し、３～５はほぼ直立、その他は逆ハの字に開く。いずれも体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は、３が平底であるが、その他は丸底である。14は、口縁部がほぼ直立し、体部は内湾する。底部は大半を欠くが、丸底と思われる。15～18の暗文坏は、破片での検出が多いが、内面に放射状暗文が密に施文されている。短い口縁部が外反し、体部は内湾する。底部を欠くものが多いが、丸底と思われる。坏の調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。19～21は、土師器長胴甕である。胴下部以下を欠くものが多いが、最大径を持つ口縁部が逆ハの字に開き、胴部は中段付近が膨らむ。22は、長胴甕と丸胴甕の中間的な形状を呈する。口縁部の外反が弱く、胴部はやや縦長の球形を呈する。胴部中段に最大径を持つが、口径とあまり変わらない。底部は、丸底である。23は、土師器丸胴甕の胴上部から底部までの部位である。胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。底部は、やや上げ底である。24･25は、土師器甑である。24は中型、25は小型である。いずれも口縁部の開きが弱く、胴部は底部に向かって緩やかにすぼまる。甕・甑の調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。19は胴部内面中段、24・25は口縁部外面中段に輪積痕が残る。26は、土師器台付甕の接合部から台部にかけての部位である。短い台部がやや外反しながら広がる。調整は、接合部から台部上位がヘラ削り、内面はヘラナデ、台部内面上位は絞り目、下位は横ナデである。器壁が厚い。

本住居との時期は、古墳時代後期の６世紀中頃から後半と思われる。

第37号住居跡（第56・57図）

調査区南側中央のＦ－８・９、Ｇ－８・９グリッドに位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸4.55ｍ×短軸4.47ｍ、床面積17.80㎡、遺構確認面からの深さは、0.60ｍである。主軸方向は、Ｎ－78°－Ｅを指す。カマド煙道先端部を第34号住居跡に切られ、北側で第39号住居跡を切る。遺存状況は、良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは、東壁中央南寄りに付設されている。燃焼部の1/3が壁外へ張り出す。燃焼部の内壁幅は0.43ｍ、掘込みは、床面から深さ0.05ｍである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕は、確認されなかった。また、燃焼部内で土師器甕・鉢３個体が入れ子状に重なって逆位で出土し、支脚として使用されたとみられる。袖部は、黄褐色の地山で造りだし、内壁に白色粘土を貼り付け、若干弧状に膨らむ。煙道部は燃焼部から一段高くなって地山を刳り抜き、1.10ｍ以上壁外へ突出する。

壁溝は、ほぼ全周する。床面はほぼ平坦であり、全面にわたって顕著な硬化部分を確認した。

ピットは９基確認した。南東隅のピットは、その位置と規模から貯蔵穴とみられる。掘り方は、確認されなかった。

出土遺物（第60図）は、土師器坏（１～３）、甕（４～10）、鉢（11･12）、ミニチュア土器（13）、砥石（14･15）がある。出土位置は、カマドと北東側に集中が見られる。出土位置を示していない遺物は、覆土上層からの出土である。

1～3は、土師器坏蓋模倣坏である。深身で、口径13㎝、器高5㎝前後を測る。口縁部は、やや外反するが、直立に近い。体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は、中央を欠くが、丸底である。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。4～10は、土師器長胴甕である。全形の分かるものはないが、口縁部が外反し、5は口縁端部に段を持ち、やや受け口状を呈する。胴部は、中段付近が膨らみ、最大径を持つ。底部は、やや上げ底ないし平底である。器壁の厚いものが多い、11・12は、土師器鉢である。口縁部がやや外反し、胴部は詰まった球形を呈する。最大径を口縁部に持つが、胴部中段の径とあまり変わらない。12は口縁部を欠くが、胴部は半球形を呈する。甕・鉢の調整は、口縁部はすべて横ナデであるが、胴部から底部の外面は、5･12がヘラナデ、その他はヘラ削りである。内面は、すべてヘラナデである。4・7は、胴部内面に輪積痕が残る。13は、ミニチュア土器である。口縁部から底部に向かって緩やかにすぼまる。底部は、平底である。調整は、内外面ともにヘラミガキである。内面上位に輪積痕が一部残る。14・15は、砥石である。14は、楕円形状を呈する両面、15は大半を欠くが、片面と側面に線状痕がみられた。

本住居跡の時期は、古墳時代後期直前の5世紀末から6世紀初頭と思われる。

第38号住居跡（第56・57図）

調査区南側中央のＦ－８、Ｇ－８グリッドに跨って位置する。平面形は長方形とみられる。規模は、長軸3.28ｍ以上×短軸2.74ｍ、遺構確認面からの深さは、0.63ｍである。主軸方向は、Ｎ－23°－Ｗを指す。南側で第39号住居跡を切り、大半を第36号住居跡、東側を第33号住居跡に切られ、遺存状況は、極めて不良である。覆土の堆積状況も不詳である。

床面はほぼ平坦であり、全体に軟弱である。カマド・壁溝・ピット・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物は僅少であり、図示可能なものは、須恵器短頸壺（第61図38－１）、土師器坏（38－２）のみである。第36・39号住居跡に挟まれた南壁際から出土した。

38－１は、須恵器短頸壺の胴部中段から底部にかけての部位である。球形を呈する。調整は、外面上位が回転カキ目、下位はタタキ、内面は上位がロクロナデ、下位はあて具痕が残る。器壁が厚い。38－２は、土師器坏蓋模倣坏である。深身で、口縁部はほぼ直立する。体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は、丸底である。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。

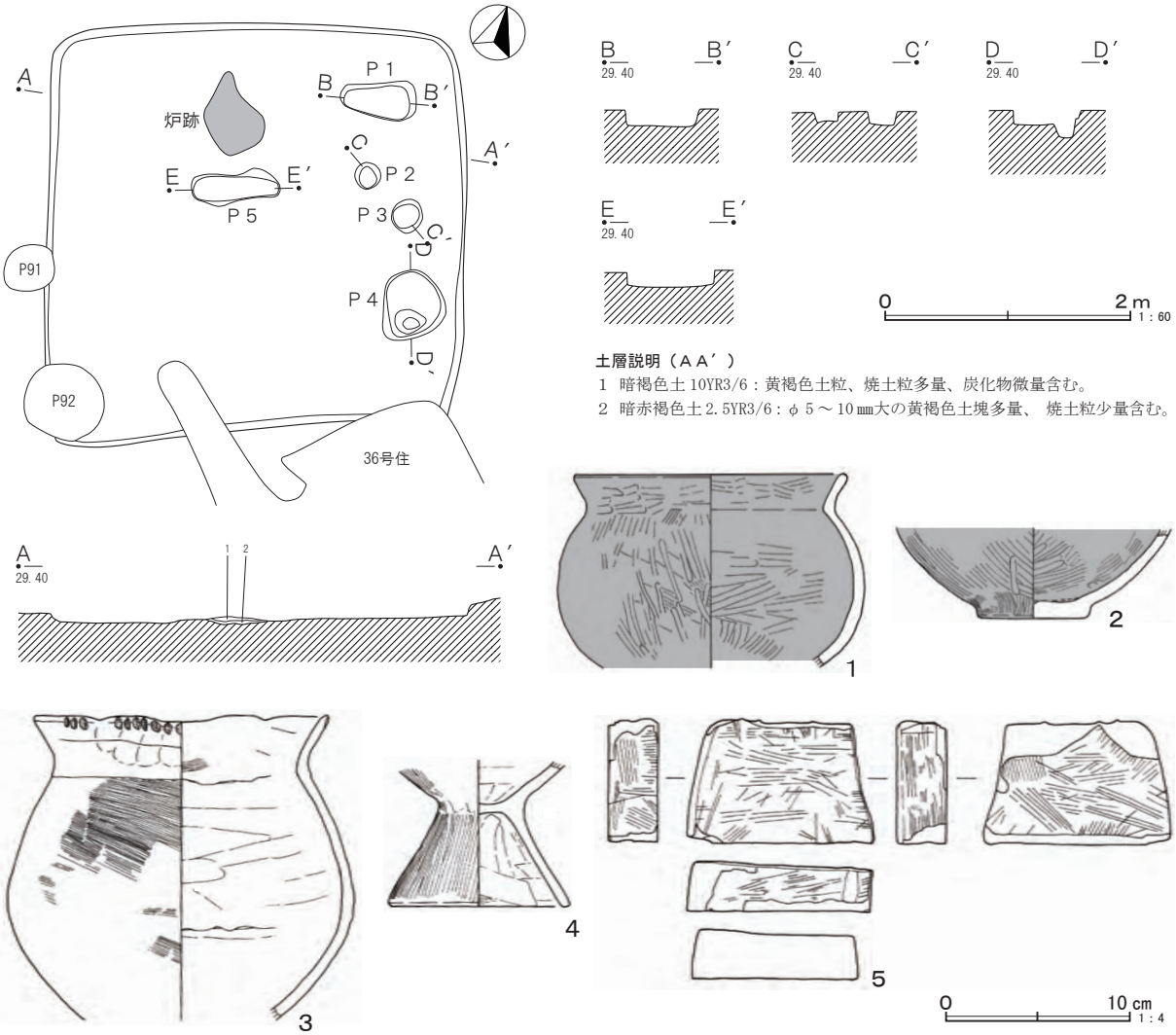
本住居跡の時期は、重複する第37号住居跡とあまり時期差がないが、古墳時代後期の6世紀前半としておきたい。

第39号住居跡（第56・57図）

調査区南側中央のＦ－８、Ｇ－８グリッドに跨って位置する。平面形は長方形とみられる。規模は、長軸3.80ｍ×短軸2.50ｍ以上、遺構確認面からの深さは、0.30ｍである。主軸方向は、Ｎ－14°－Ｗを指す。北側を第36・38号住居跡、東側を第33号住居跡、南側を第37号住居跡にそれぞれ切られており、遺存状況は極めて悪い。覆土の堆積状況も不詳である。

壁溝は、東壁際に廻る。床面はほぼ平坦であり、全体に軟弱である。カマド・ピット・掘り方は、確認されなかった。

出土遺物は僅少であったが、西壁際の床面直上から土師器台付甕（第61図39－１）が横位で出土した。最大径を持つ口縁部がやや受け口状を呈する。胴部は、やや縦長の球形を呈し、台部はハの字



第 62 図　第 40 号住居跡・出土遺物

第 35 表　第 40 号住居跡出土遺物観察表

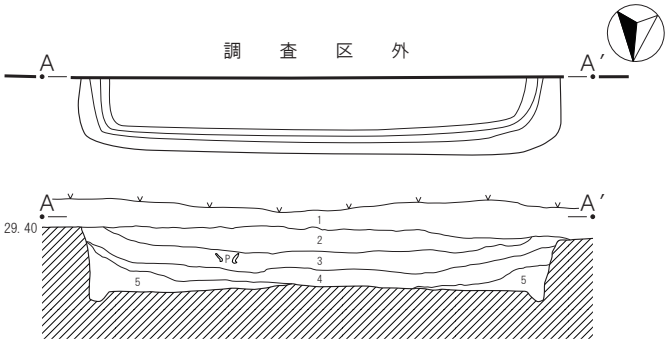
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	弥生土器広口壺	(14.9)	(10.5)	-	ABCDIKN	浅黄橙色	B	口～胴 25%	内外面赤彩、ほぼ剥落。胴上部内面剥離。No.2と同一個体。
2	弥生土器広口壺	-	(4.9)	6.0	ABCDIKN	外：浅黄橙 内：赤褐	B	胴～底 40%	内外面赤彩、ほぼ剥落。底部内面剥離。No.1と同一個体。
3	弥生土器台付甕	(16.0)	(16.5)	-	ABIK	明赤褐 褐灰	B	口～胴 20%	内外面所々摩耗。
4	弥生土器台付甕	-	(7.9)	(9.4)	ABDHIKN	にぶい橙色	B	接～台 80%	
5	砥　石	最大長 6.7 ㎝、最大幅 10.1 ㎝、最大厚 2.7 ㎝。重量（301.0） g。流紋岩。所々剥離。五面線状痕有。被熱。							

に開く。調整は、口縁部が横ナデであるが、内面は横ナデ前のハケメが明確に残る。胴部から台部外面はハケメで胴下部にはヘラナデも施されている。胴部と台部の内面は、ヘラナデとハケメが併用されている。

本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

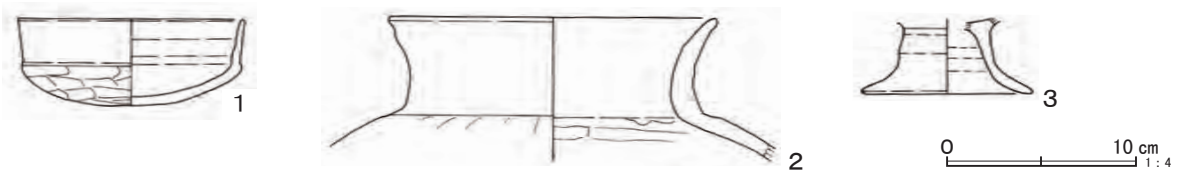
第 40 号住居跡（第 62 図）

調査区西側のＦ－７グリッドに位置する。平面形は、方形である、規模は、長軸 3.28 m×短軸 3.16 m、床面積 9.73 ㎡、遺構確認面からの深さは、0.10 mである。主軸方向は、Ｎ－ 20°－Ｗを指す。南壁を第 36 号住居跡、西壁をピット 91･92 に切られているが、遺存状況は概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。



土層説明（ＡＡ′）
1　暗褐色土 10YR3/3：耕作土。しまり・粘性無。φ１～２㎜大の白色軽石（As-A）微量含む。
2　暗褐色土 10YR3/4：しまり強。粘性弱。黄褐色土粒少量、焼土粒少量、炭化物微量含む。
3　暗褐色土 10YR3/3：φ２～５㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量、焼土粒微量含む。
4　褐色土 10YR4/4：しまり・粘性強。φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。
5　にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒主体、炭化物少量含む。

0　2m　1：60



第 63 図　第 41 号住居跡・出土遺物

第 36 表　第 41 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器　坏	12.0	4.6	-	ABDEIKN	橙色	B	70%	
2	土師器　甕	17.3	(7.55)	-	ABDEHIKN	浅黄橙色	B	口～胴 90%	胴部内面輪積痕有。内外面摩耗顕著。
3	土師器台付甕	-	(4.0)	9.0	ABDEHIK	浅黄橙色	B	接～台 100%	内外面やや摩耗。

炉は、床面中央北寄りに設けられており、床面から深さ 0.05 ｍの地床炉である。黄褐色の地山である炉底は、被熱で赤褐色に色調変化している。床面は、ほぼ平坦であり、全体に軟弱である。ピットは、中央で１基、東壁寄りで４基確認された。

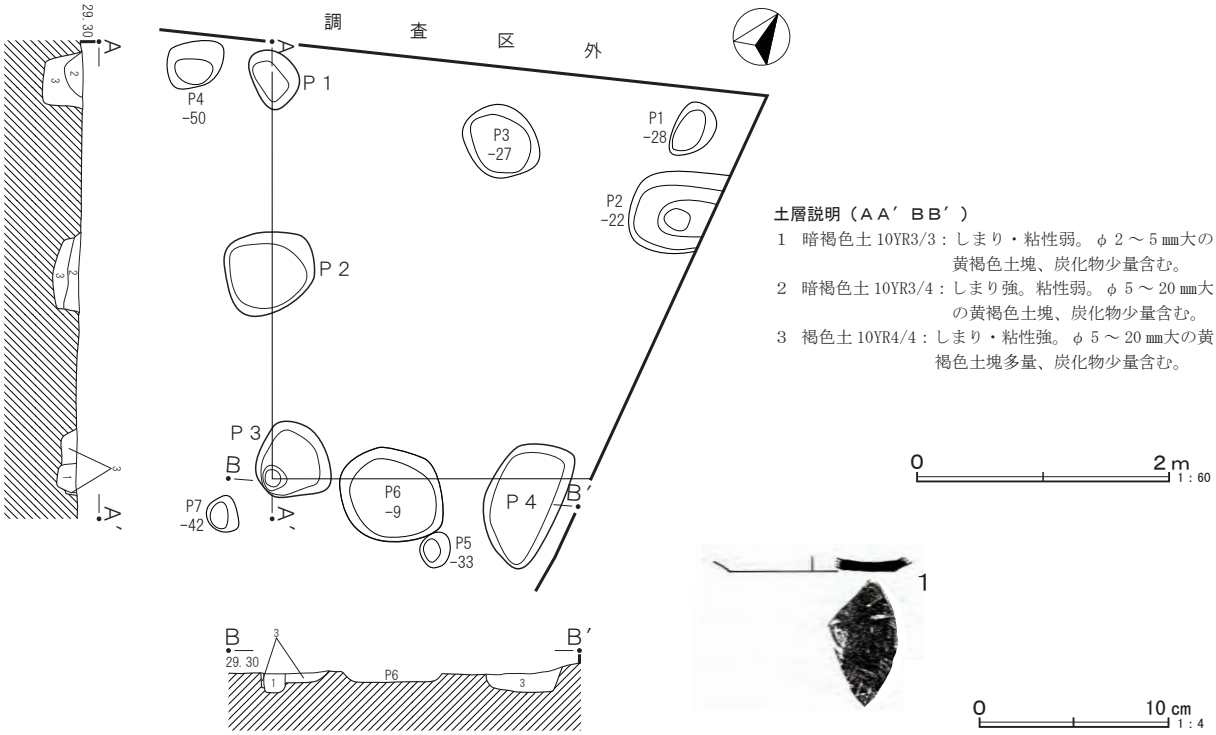
出土遺物は、弥生土器広口壺（１・２）、台付甕（３・４）、砥石（５）がある。すべて覆土上層からの出土である。

１・２の弥生土器広口壺は、接合関係にないが、同一個体である。短い口縁部が逆ハの字に開く。胴部は、球形を呈し、最大径を中段に持つ。底部は、平底である。調整は、内外面ともにヘラミガキであるが、胴部外面はヘラミガキ前のハケメが所々に残る。内外面全面に赤彩が施されているが、ほとんど剥落している。胴上部と底部内面の器面が所々剥離している。３・４は、弥生土器台付甕である。３は、口縁部から胴下部まで、４は接合部から台部までの部位である。３は、端部に刻みを持つ口縁部が逆ハの字に開き、胴部はやや縦長の算盤玉状を呈する。内外面ともに所々摩耗が著しいが、調整は、口縁部外面が横ナデと指オサエ、内面はハケメとヘラナデが併用されている。胴部は外面がハケメ、内面はヘラナデである。口縁部外面と胴部内面に輪積痕が残る。４の台部は、ハの字に開く。調整は、外面がハケメ、内面はヘラナデである。５は、砥石である。台形状を呈し、側面一面以外に線状痕がみられた。全面被熱している。

本住居跡の時期は、弥生時代末から古墳時代初頭と思われる。

第 41 号住居跡（第 63 図）

調査区南端中央のＧ－９、Ｈ－９グリッドに跨って位置する。平面形は、方形か長方形とみられる。規模は、長軸 3.65 ｍ×短軸 0.56 ｍ以上、遺構確認面からの深さは、0.50 ｍである。長軸方向は、Ｎ－83°－Ｗを指す。南側大半が調査区外にあり、北側を僅かに調査できただけである。覆土は、レンズ



第 64 図　第 1 号掘立柱建物跡・出土遺物

第 37 表　第 1 号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	-	(0.7)	(8.8)	ABDN	灰白色	B	底部 20%	産地不明。

状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

カマドは確認できなかった。調査できた北側では、床面はほぼ平坦であり、壁溝が周る。

出土遺物は、土師器坏（1）、甕（2）、台付甕（3）があるが、3は奈良・平安時代のものであり、流れ込みである。2は覆土中層、その他は上層からの出土である。

1は、やや深身の土師器坏蓋模倣坏である。口縁部がほぼ直立し、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は丸底である。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラ削りである。2は、土師器丸銅甕の口縁部から胴上部までの部位である。口縁部が外反し、胴部は大きく膨らむ。調整は、口縁部が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。3は、土師器台付甕の接合部から台部にかけての部位である。台部が低く、裾部が外反する。器壁が薄い。調整は、内外面ともに横ナデである。

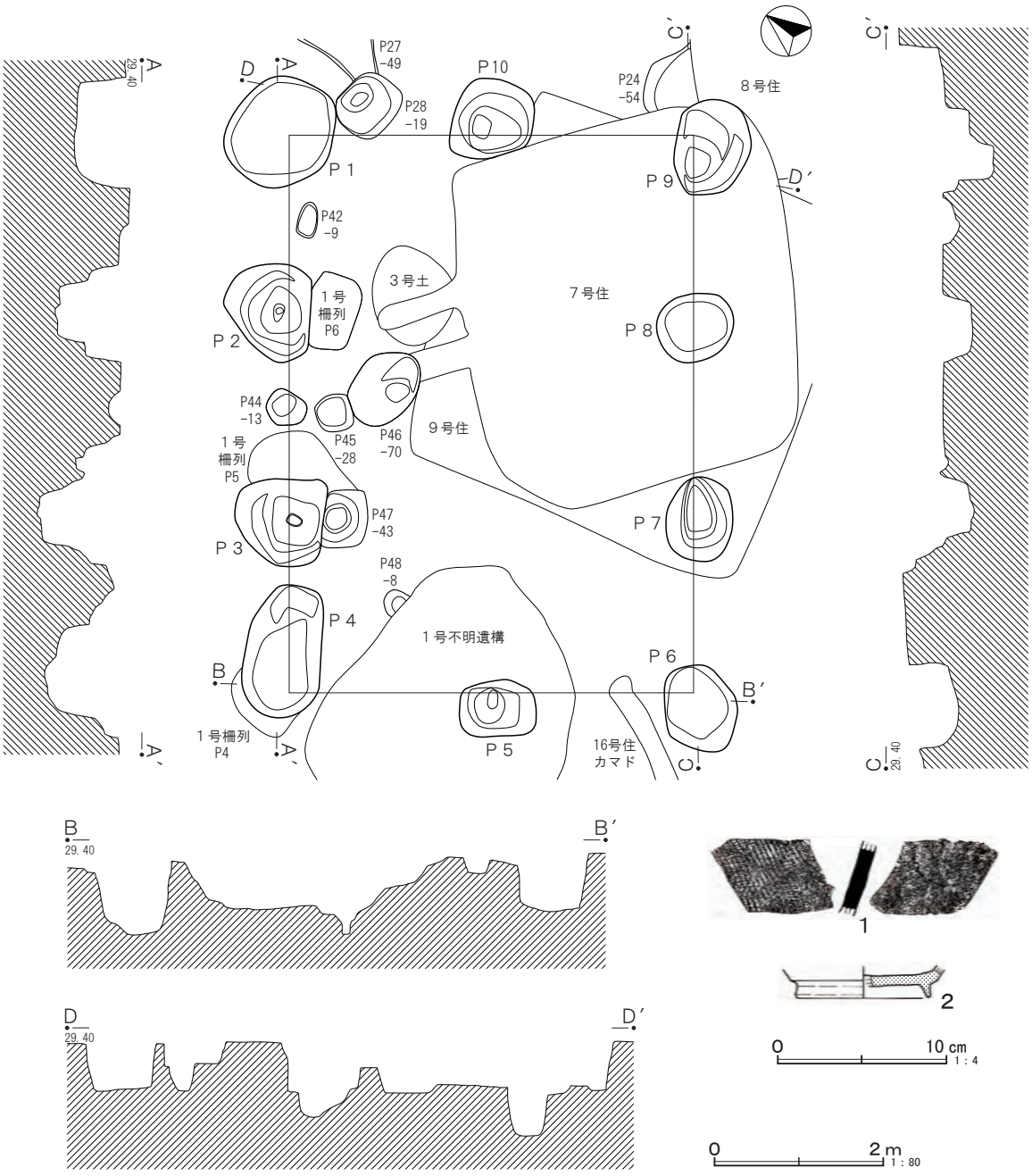
本住居跡の時期は、古墳時代後期の6世紀前半と思われる。

2　掘立柱建物跡

第 1 号掘立柱建物跡（第 64 図）

調査区北東端のＪ－1、Ｋ－1・2グリッドに跨って位置する。他の遺構との重複は無いが、本建物跡の北側と東側が調査区外にあり、ピット1～4の掘り方4基だけの調査となった。

梁行2間×桁行1間以上の側柱建物であり、梁行 3.00 m×桁行 2.50 mである。柱間は、梁行 1.50 m（5尺）、桁行 2.10 m (7尺）である。棟方向は、Ｎ－ 54°－Ｅを指す。柱の掘り方は、平面形が方形及び楕円形であり、梁行及び桁行方向の軸線上に長軸を揃えられてはいない。他の掘立柱建物跡に



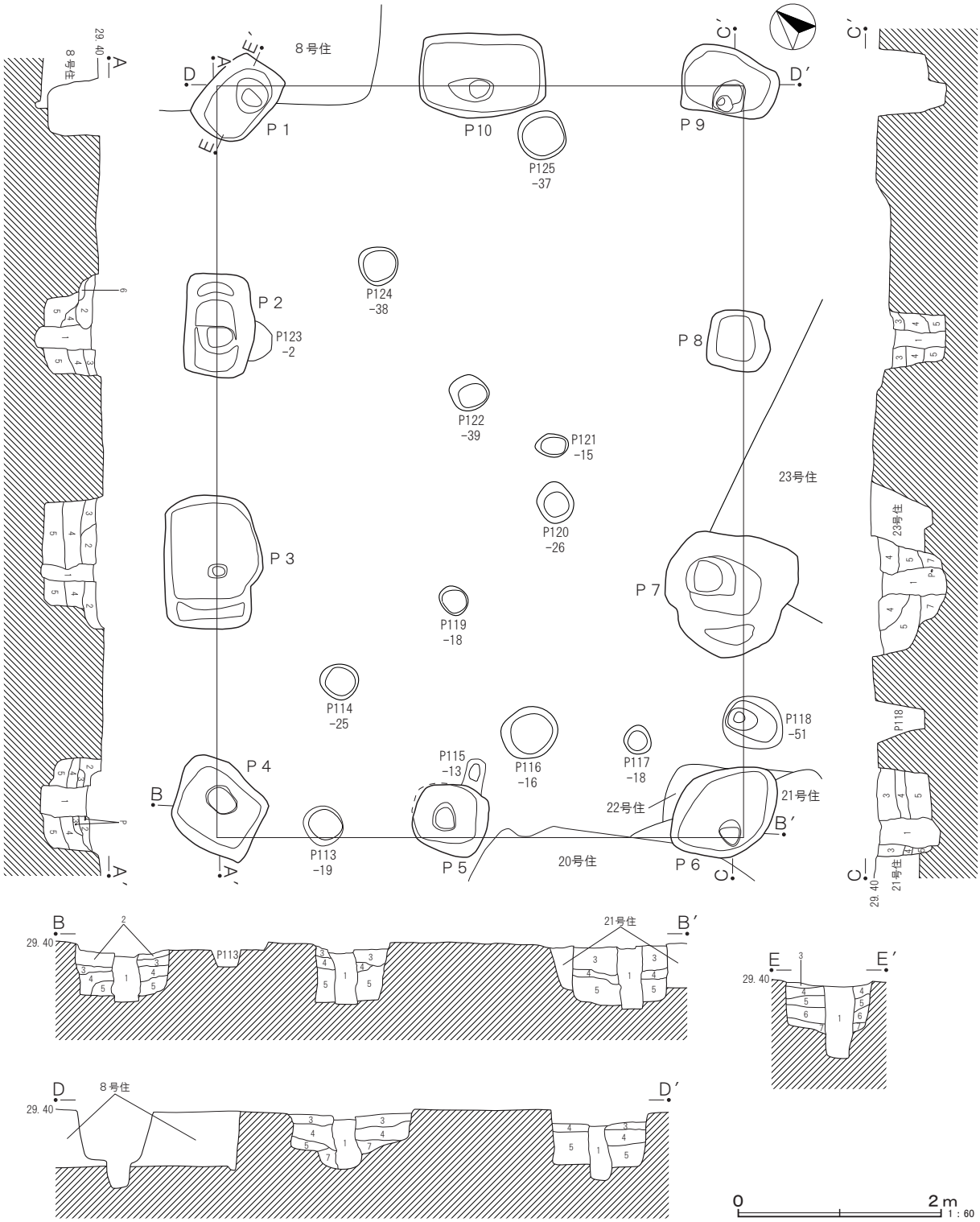
第 65 図　第２号掘立柱建物跡・出土遺物

第 38 表　第２号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器　甕	-	-	-	ABN	灰褐色	A	胴下部片	産地不明。
2	灰釉陶器高台椀	-	(1.9)	(8.0)	AB	灰白色	A	高台部 40%	産地不明。

あわせて棟方向を決めたが、桁行の柱間が梁行に比して長いことから、棟方向は 90° ずれる可能性もある。掘り方の規模は、長軸 0.50 ～ 1.05 m × 短軸 0.39 ～ 0.64 m、確認面からの深さは 0.12 ～ 0.35 m、底面標高は 28.82 ～ 29.05 mである。埋土は、柱痕跡を残して径 5 ～ 20mm 大の黄褐色土塊を多量に含む褐色土と炭化物を少量含む暗褐色土の互層堆積である。

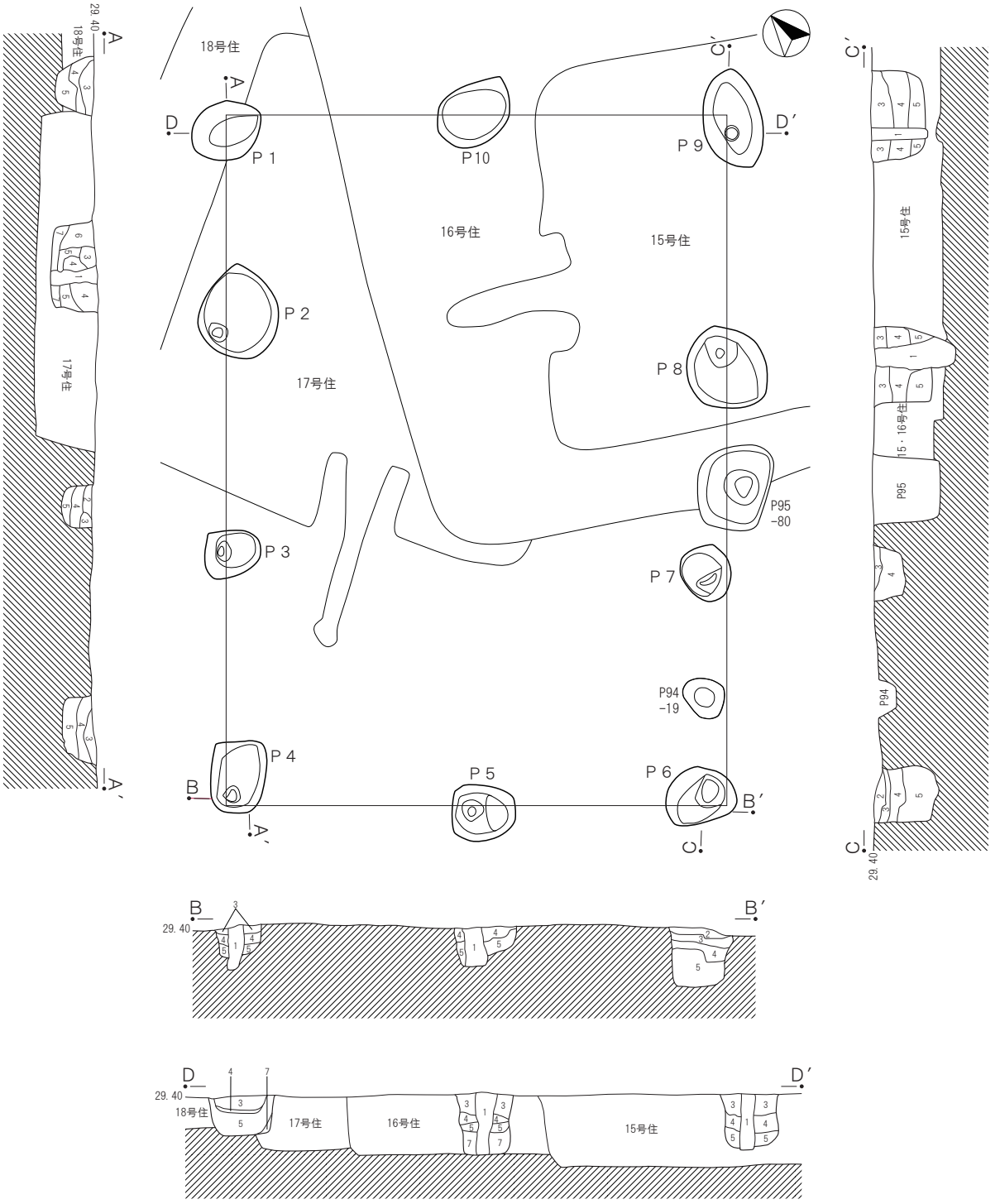
出土遺物は僅少であり、図示可能なものは、ピット３から出土した須恵器坏の底部片（１）のみである。底径が比較的大きく、器壁が薄い。底面は、回転糸切り後、手持ちによるヘラ削りが施されて



土層説明（AA′ BB′ CC′ DD′ EE′）

1 暗褐色土 10YR3/4：しまり・粘性弱。黄褐色土粒、炭化物少量、焼土粒微量含む。柱痕跡。
2 暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。
3 にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまり・粘性強。φ 3 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量含む。
4 褐色土 10YR4/4：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物微量含む。
5 褐色土 10YR4/6：しまり・粘性強。黄褐色土粒、φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。
6 黄褐色土 10YR5/6：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊主体。焼土粒、炭化物微量含む。
7 暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量、焼土粒微量含む。

第 66 図　第３号掘立柱建物跡

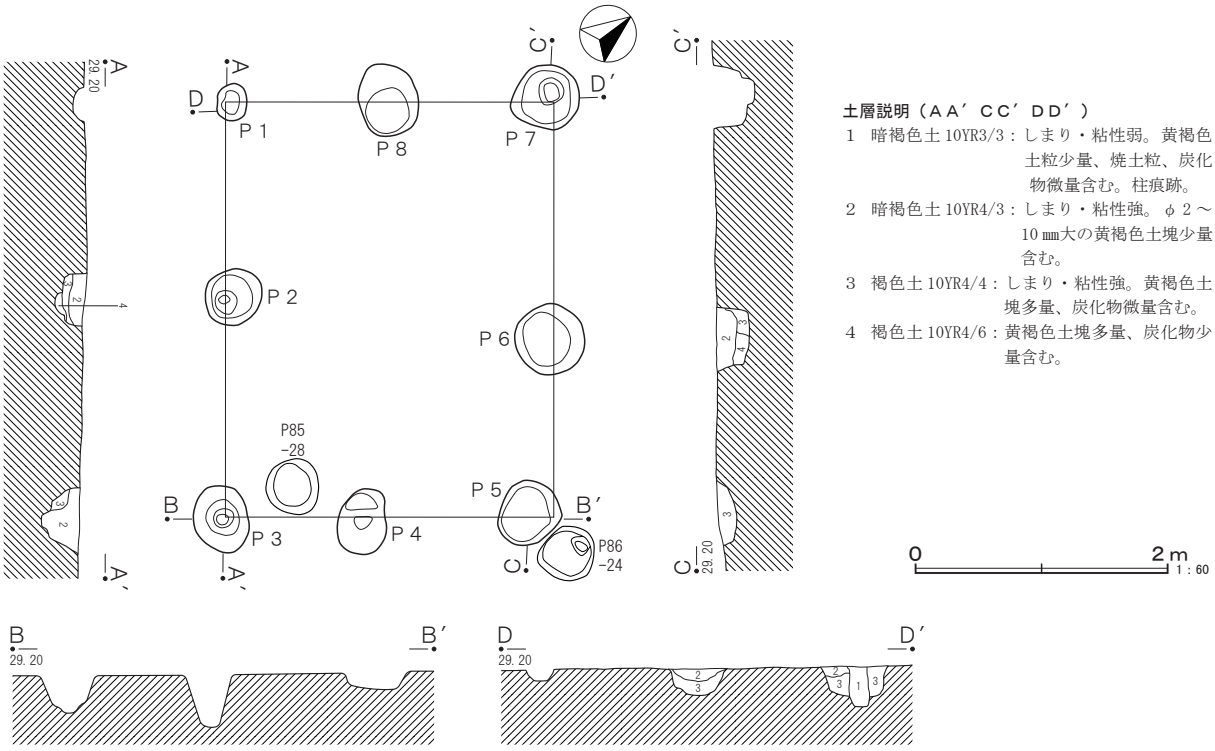


土層説明（AA′ BB′ CC′ DD′）

1 暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性弱。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量、焼土粒微量含む。柱痕跡。
2 褐色土 10YR4/4：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物微量含む。
3 黄褐色土 10YR5/6：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊・粒多量、炭化物微量含む。
4 褐色土 10YR4/6：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊・粒多量、炭化物少量、焼土粒微量含む。
5 暗褐色土 10YR3/4：しまり・粘性強。φ 2 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊少量、炭化物微量含む。
6 暗褐色土 7.5YR3/3：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量、焼土粒微量含む。
7 にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊・粒多量、炭化物少量含む。

0　2m
1：60

第 67 図　第 4 号掘立柱建物跡



第 68 図　第５号掘立柱建物跡

いる。産地不明である。

本建物跡の時期は、８世紀後半と思われる。

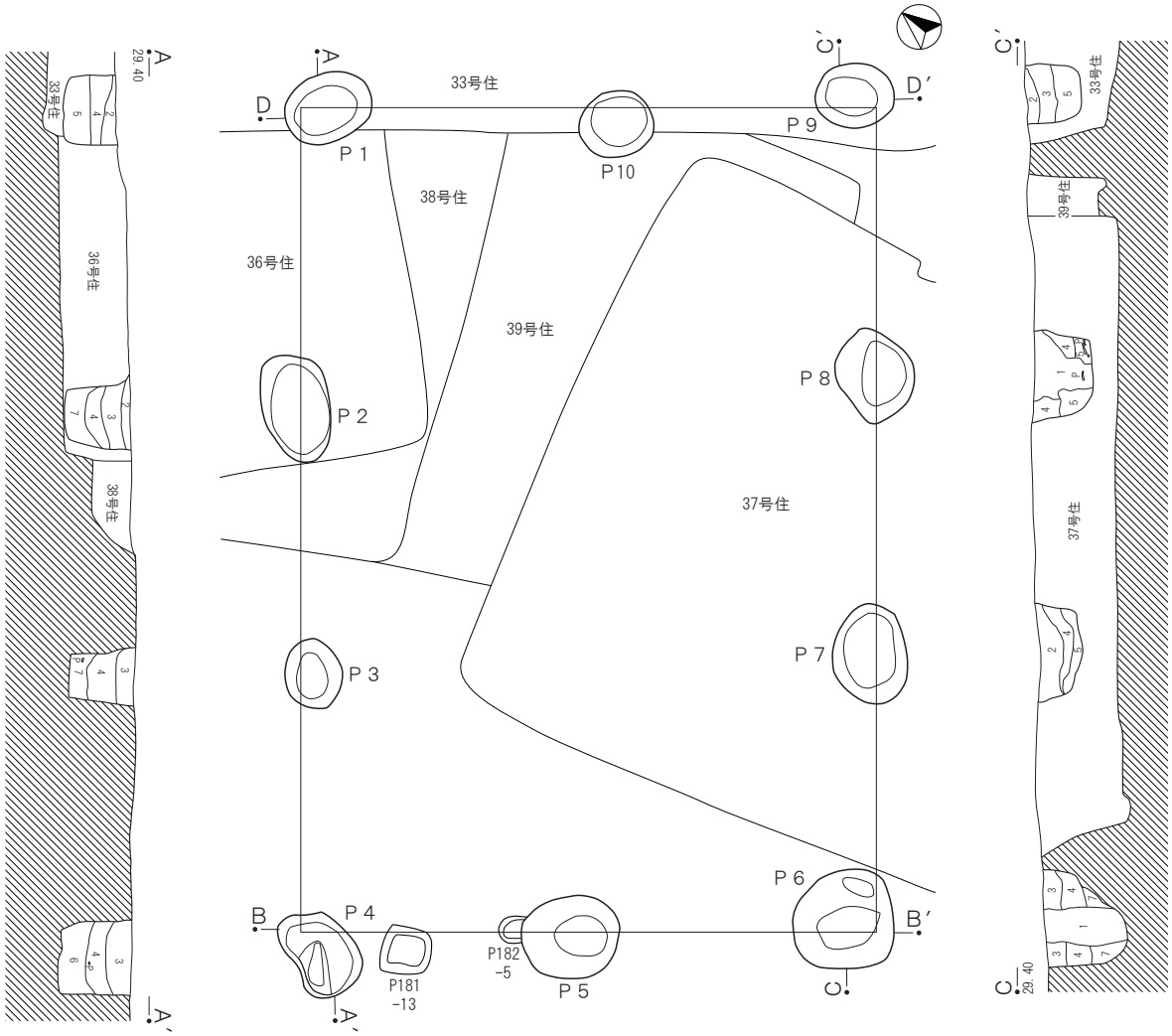
第２号掘立柱建物跡（第 65 図）

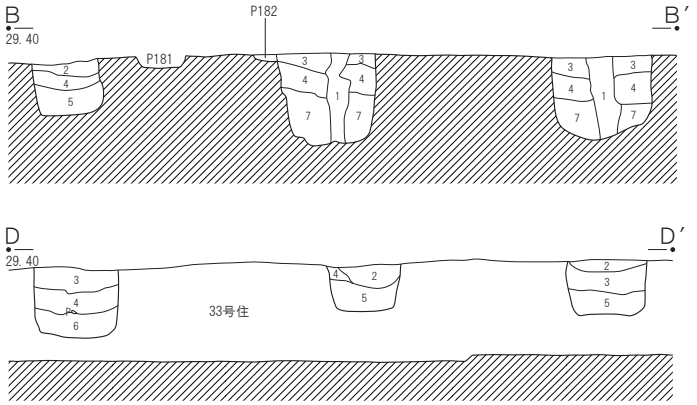
調査区北東側のＨ－４・５、Ｉ－３～５グリッドに跨って位置する。東側で第７・９号住居跡、北西側で第１号柵列跡ピット４～６とピット 47 をそれぞれ切り、南側で第１号性格不明遺構に切られている。遺存状況は、概ね良好である。

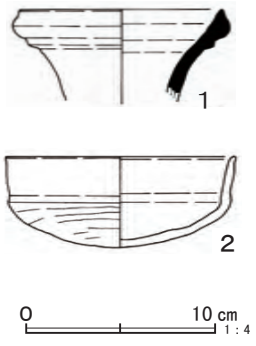
梁行２間×桁行３間の側柱建物であり、梁行 3.55 m×桁行 4.95 mである。柱間は、梁行 1.78 m（６尺）、桁行 1.62 m (５尺半）である。棟方向は、Ｎ－ 52° －Ｅを指す。柱の掘り方は、平面形が長方形及び方形であり、梁行及び桁行方向の軸線上に長軸を揃える。掘り方の規模は、長辺 1.15 ～ 1.56 m×短辺 0.85 ～ 1.20 m、確認面からの深さは 0.68 ～ 0.90 m、底面標高は 28.50 ～ 28.72 mである。埋土は、柱痕跡を残して黄褐色土塊を多量に含む褐色土と炭化物を少量含む暗褐色土の互層堆積である。また、噴砂脈がピット２・３の掘り方埋土に切られる状況で確認された。地山が割れており、その中に充填されているのがクロボクではなく細砂であることから、地割れではなく液状化であったとみられる。噴砂脈は、２～５cm の開口幅で途切れながらも北西～南東方向に伸びる。

出土遺物は僅少であり、図示可能なものは、須恵器甕の胴下部片（１）と灰釉陶器高台部（２）のみである。いずれもピット６からの出土である。１は外面がタタキ、内面はヘラナデ調整であり、内面は、僅かにあて具痕が残る。２は、高台がハの字に開くが、やや内湾する。調整は、内外面ともにロクロナデであり、底面は回転ヘラ削りである。

本建物跡の時期は、９世紀後半と思われる。







土層説明（AA′ BB′ CC′ DD′）

1 暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性弱。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。柱痕跡。
2 暗褐色土 10YR4/6：しまり・粘性強。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物微量含む。
3 黄褐色土 10YR5/6：しまり・粘性強。黄褐色土粒、φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。
4 暗褐色土 10YR3/4：しまり・粘性強。φ 2 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊少量、炭化物微量含む。
5 褐色土 7.5YR4/6：しまり・粘性強。φ 2 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒、炭化物微量含む。
6 褐色土 10YR4/4：黄褐色土粒、φ 2 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物微量含む。
7 にぶい黄褐色土 10YR5/4：しまり・粘性強。φ 2 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物微量含む。

0 2 m
1 : 60

第 69 図　第６号掘立柱建物跡・出土遺物

第 39 表　第６号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　瓶	(10.8)	(4.9)	-	AB	灰黄色	A	口～頸 15%	産地不明。内外面自然釉付着。
2	土師器　坏	(12.2)	4.8	-	ABDEIM	橙色	B	60%	外面摩耗顕著。

第３号掘立柱建物跡（第 66 図）

調査区北東側のＩ－５・６、Ｊ－５・６グリッドに跨って位置する。北側を第８号住居跡、南側で第 21 ～ 23 号住居跡をそれぞれ切り、ピット 123 に切られる。遺存状況は、極めて良好である。

梁行２間×桁行３間の側柱建物であり、梁行 5.10 m×桁行 7.20 mである。柱間は、梁行 2.55 m（８尺半）、桁行 2.40 m (８尺）である。棟方向は、Ｎ－ 47°－Ｅを指す。柱の掘り方は、平面形が長方形及び方形であり、建物四隅の長方形掘り方の長軸が外向き斜めに 45°ずれる。他の側柱の掘り方は、梁行及び桁行方向の軸線上に長軸を揃える。掘り方の規模は、長辺 0.66 ～ 1.28 m×短辺 0.64 ～ 0.95 m、確認面からの深さは 0.55 ～ 0.70 m、底面標高は 28.63 ～ 28.78 mである。埋土は、柱痕跡を残して、径 3 ～ 10mm 大の黄褐色土塊を多量に含む褐色土と炭化物を少量含む暗褐色土の互層堆積である。

出土遺物は僅少であり、図示可能な遺物はみられないが、本建物跡の時期は、周辺の遺構との関係から８世紀代としておきたい。

第４号掘立柱建物跡（第 67 図）

調査区北東側のＦ－６、Ｇ－５・６、Ｈ－５・６グリッドに跨って位置する。北側で第 15 ～ 18 号住居跡をそれぞれ切る状況が確認された。遺存状況は、概ね良好である。

梁行２間×桁行３間の側柱建物であり、梁行 4.75 m×桁行 6.20 mである。柱間は、梁行 2.38 m（８尺）、桁行 2.07 m (７尺）である。棟方向は、Ｎ－ 41°－Ｅを指す。柱の掘り方は、平面形が長方形及び方形であり、梁行及び桁行方向の軸線上に長軸を揃える。掘り方の規模は、長辺 0.62 ～ 0.96 m×短辺 0.60 ～ 0.80 m、確認面からの深さは 0.42 ～ 0.60 m、底面標高は 28.72 ～ 28.80 mである。埋土は、柱痕跡を残して、径３～ 10mm 大の黄褐色土塊を多量に含む褐色土と炭化物を少量含む暗褐色土の互層堆積である。

遺物は、８世紀後半に相当する土師器坏がピット２、須恵器坏がピット３、須恵器瓶がピット９から出土しているが、いずれも小片であり、図示不可能である。

本建物跡の時期は、８世紀後半と思われる。

第５号掘立柱建物跡（第 68 図）

調査区北東側のＤ－６、Ｅ－６・７グリッドに跨って位置する。他の遺構との重複は無く、遺存状況は、概ね良好である。

梁行２間×桁行２間の側柱建物であり、梁行 2.40 m×桁行 3.30 mである。柱間は，梁行 1.20 m（４尺）、桁行 1.65 m (５尺半）である。棟方向は、Ｎ－ 52°－Ｗを指す。柱の掘り方は、平面形が円形であり、梁行及び桁行方向の軸線上に柱穴列が沿う。掘り方の規模は、長径 0.32 ～ 0.58 m×短径 0.27 ～ 0.55 m、確認面からの深さは 0.12 ～ 0.25 m、底面標高は 28.90 ～ 28.95 mである。埋土は、柱痕跡を残して互層堆積とみられる。

出土遺物はないが、本建物跡の時期は、周辺の遺構との位置関係や主軸方向などから９世紀代としておきたい。

第６号掘立柱建物跡（第 69 図）

調査区北東側のＦ－８・９、Ｇ－７～９グリッドに跨って位置する。北東側で第 33・36・39 号住居跡南東側で第 37 号住居跡、南西側でピット 182 をそれぞれ切る。遺存状況は、極めて良好である。

梁行２間×桁行３間の側柱建物であり、梁行 4.20 ｍ×桁行 6.35 ｍである。柱間は、梁行 2.10 ｍ（７尺）、桁行 2.12 ｍ (７尺）である。棟方向は、Ｎ－ 51° －Ｅを指す。柱の掘り方は、平面形が長方形及び楕円形であり、梁行及び桁行方向の軸線上に長軸を揃える。掘り方の規模は、長軸 0.57 ～ 0.85 ｍ×短軸 0.50 ～ 0.76 ｍ、確認面からの深さは 0.42 ～ 0.70 ｍ、底面標高は 28.40 ～ 28.68 ｍである。埋土は、柱痕跡を残して、径２～ 10mm 大の黄褐色土塊を多量に含む褐色土と炭化物を少量含む暗褐色土の互層堆積である。

出土遺物は僅少であり、図示可能なものは須恵器瓶（１）と土師器坏（２）のみであるが、いずれも流れ込みである。１は、口縁部から頸部にかけての部位である。内外面に自然釉が付着している。ピット４出土である。２は、坏蓋模倣坏である。やや深身で、口縁部はほぼ直立し、端部が僅かに外反する。体部と底部の境に明確な稜を持ち、底部は丸底である。ピット８出土である。

伴う出土遺物がないが、本建物跡の時期は、周辺の遺構との位置関係や主軸方向などから８世紀代としておきたい。

３　柵列跡

第１号柵列跡（第 70 図）

調査区北東側のＧ－４、Ｈ－３・４グリッドに跨ってＬ字状に位置する。８基のピットが軸線上とそれに直行する線上に、ほぼ等間隔に配列される。北西側でピット８が第６号住居跡を切り、東側で第２号掘立柱建物跡のピット２～４に切られている。

ピット配列間隔は、1.20 ～ 1.30 ｍ（約４尺）である。長軸方向は、Ｎ－ 57° －Ｅを指す。ピットの平面形は、方形ないし楕円形である。規模は、長軸 0.42 ～ 0.90 ｍ×短軸 0.37 ～ 0.70 ｍ、確認面からの深さは 0.42 ～ 0.70 ｍ、底面標高は 28.40 ～ 28.68 ｍである。規模と底面標高にややバラツキが見られる。埋土は、不詳である。

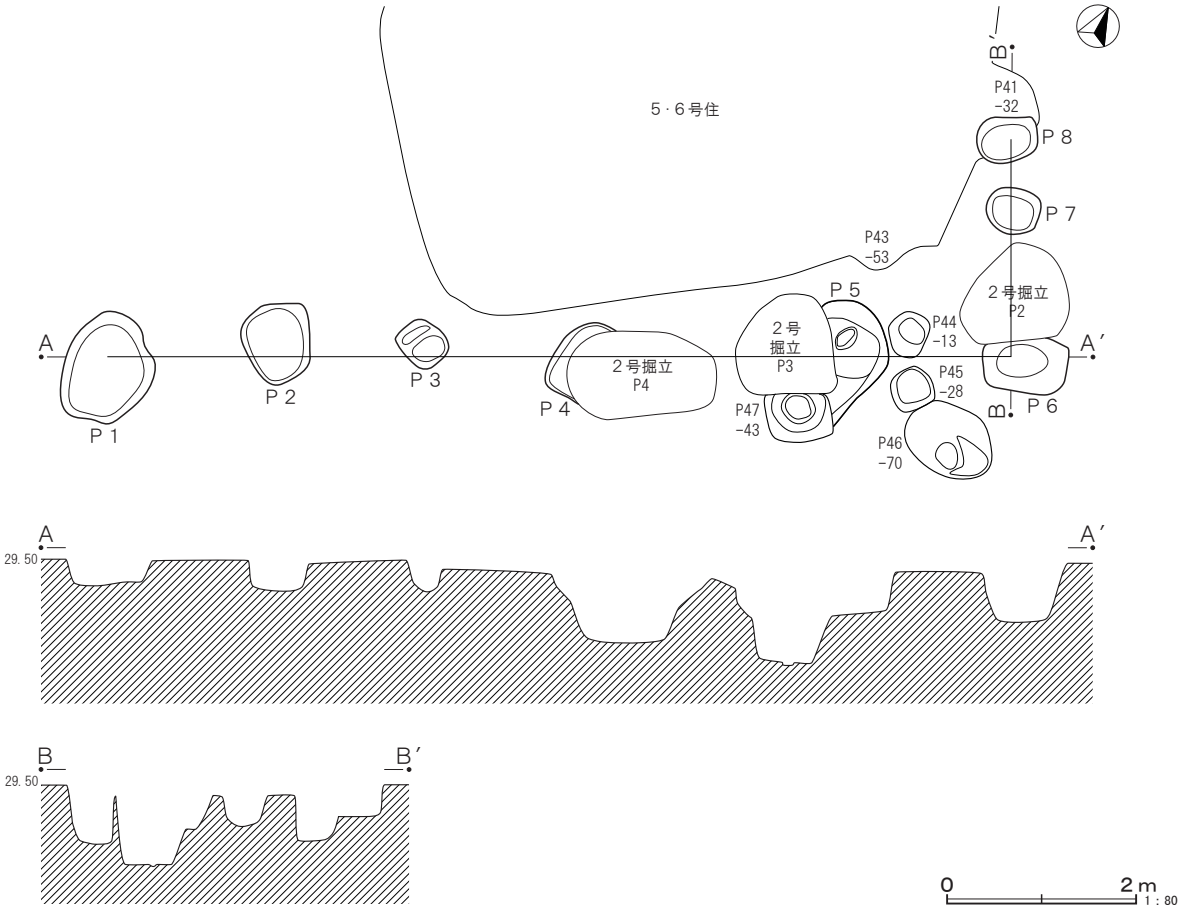
出土遺物は僅少であり、図示可能なものはみられない。

本柵列跡の時期は、重複する第２号掘立柱建物跡との新旧関係や主軸方向などから８世紀代としておきたい。

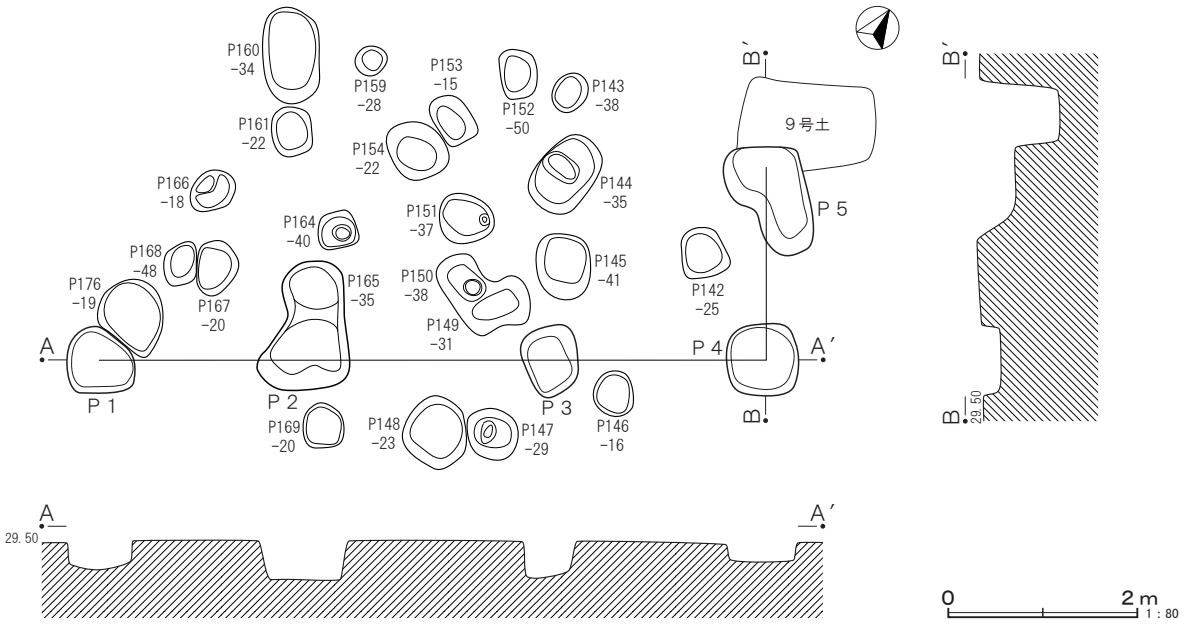
第２号柵列跡（第 71 図）

調査区南東側のＪ－７・８、Ｉ－８グリッドに跨ってＬ字状に位置する。５基のピットが軸線上とそれに直行する線上に、ほぼ等間隔に配列される。北西側で第９号土坑、南側でピット 165･176 をそれぞれ切っている。

ピット配列間隔は、1.65 ｍ（約５尺半）である。長軸方向は、Ｎ－ 54° －Ｅを指す。ピットの平面形は、長方形ないし方形である。規模は、長軸 0.63 ～ 0.90 ｍ×短軸 0.45 ～ 0.63 ｍ、確認面からの深さは 0.25 ～ 0.35 ｍ、底面標高は 29.10 ～ 29.20 ｍである。長軸方向は、第２・６号掘立柱建物跡の棟方向に沿う。埋土は、不詳である。



第 70 図　第 1 号柵列跡



第 71 図　第 2 号柵列跡

出土遺物は僅少であり、図示可能なものはみられない。

本柵列跡の時期は、周辺の遺構との位置関係や主軸方向などから８世紀代としておきたい。

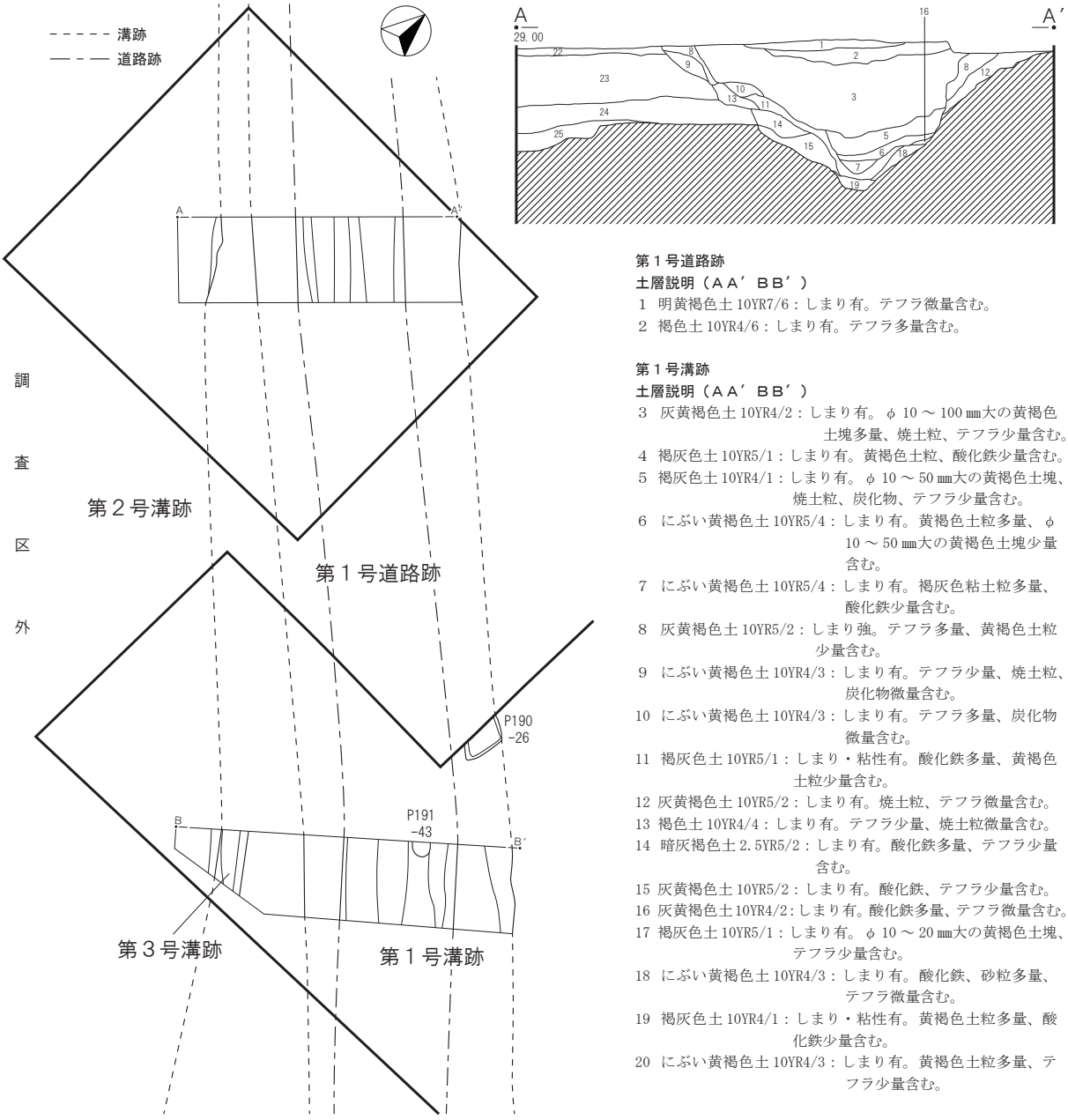
4　溝跡

第１号溝跡（第 72 図）

調査区南西端のＢ－７・８からＥ－８・９グリッドにかけて、直線的に走行する。確認された長さは 16.60 ｍ、走行方向はＮ－ 52°－Ｗを指す。 断面形は逆台形であり、上端幅 4.66 ～ 4.80 ｍ、下端幅 0.93 ～ 1.12 ｍ、 確認面からの深さは 1.77 ～ 1.84 ｍである。 底面標高は、北西端が 27.02 ｍ、南東端が 27.09 ｍであり、ほとんど高低差は無いが、緩やかに利根川方面である北西側に下る。南東側の底面でピット 191 を切り、東側でピット 190 に切られているが、遺存状況は良好である。覆土３層は、径 10 ～ 100mm 大の黄褐色土塊を多量に含み、一気に埋め戻した堆積である。３層直上の１・２層は、道路跡として使用されており、詳細は後述する。最下層の 18・19 層中と溝底面に砂粒の堆積と酸化鉄の沈着が確認され、本溝跡が水路としての役割を担っていたことが窺える。底面から 0.50 ｍ高くなった標高 27.60 ｍ部分より地山は、黄褐色土層から褐灰色粘土層へ推移し、滞水し易い状況になっている。土砂が堆積し、幾度も清掃及び掘り返しが行われたと考えられ、９・12 ～ 19・25 層は、掘り返し前の堆積土とみられる。各層に浅間Ａ軽石を含む。１・２層は道路跡であり、詳細は後述する。また、本溝跡西側の 22 ～ 24 層は突き固めたように固く締まり、水平堆積している地業跡である。なお、溝跡及び道路跡の調査は、掘り込みが深いため、住宅建設に影響を与えてしまうことや近世・近代の遺構であることから、トレンチ調査のみとした。

出土遺物（第 73 図）は、近世の磁器蓋（１）、碗（２～５）、鉢（６）、小坏（７）、湯呑（８）、小瓶（９）、陶器擂鉢（10）、甕（11）、徳利（12）、瓦（13･14）、中世の青磁碗（15）瓦質土器焙烙（16）、古墳時代後期以降の須恵器甕（17･18）、土師器坏（19）、甕（20）がある。

１～９は、磁器である。１は、碗蓋である。笠部上面に唐草文と花文、内面は環状松竹梅文が描かれている。肥前系。18 世紀末～ 19 世紀中。２～５は、碗である。２は、丸碗である。体部外面に桐文と宝文、見込みは花卉文が描かれている。肥前系。18 世紀前半。３は、銅版転写による笹文・菊花文・梅花文がコバルトで描かれている。瀬戸美濃系。19 世紀末。４は、くらわんか碗。体部外面に雪輪梅樹文、高台内面は崩れた大明年製の銘が描かれている。肥前系。18 世紀代。５は、肥前系の小碗である。18 世紀代。６は、鉢である。圏線で挟まれた部分に口縁部が型紙摺りによる半菊文と五弁花文、体部外面は菊花文と五弁花文がコバルトで描かれている。産地不明。19 世紀末。７は、小坏である。体部外面に草花文が描かれている。肥前系。18 世紀代。８は、湯呑である。腰部に染付文が描かれている。肥前系。19 世紀後半。９は小瓶である。外面に花文が描かれており、内面はロクロ痕が明確に残る。10 ～ 12 は、陶器である。10 は、堺・明石系の擂鉢の口縁部片である。19 世紀前半。11 は、常滑系の甕の胴部片である。12 は、徳利である。外面に格子状の沈線が巡る。内面はロクロ痕が明確に残る。外面に鉄釉がかかる。13･14 は、瓦である。13 は伏間瓦、14 は平瓦の破片である。ともに在地系。15 は、青磁蓮弁文椀の口縁部片である。龍泉窯系。13 世紀代。16 は、在地系の焙烙の破片である。17･18 は、古墳時代後期以降の須恵器甕の破片である。17 は、頸部片である。外面に二本一組の沈線と波状文が



第１号道路跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 明黄褐色土 10YR7/6：しまり有。テフラ微量含む。
2 褐色土 10YR4/6：しまり有。テフラ多量含む。

第１号溝跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
3 灰黄褐色土 10YR4/2：しまり有。φ 10 ～ 100 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、テフラ少量含む。
4 褐灰色土 10YR5/1：しまり有。黄褐色土粒、酸化鉄少量含む。
5 褐灰色土 10YR4/1：しまり有。φ 10 ～ 50 ㎜大の黄褐色土塊、焼土粒、炭化物、テフラ少量含む。
6 にぶい黄褐色土 10YR5/4：しまり有。黄褐色土粒多量、φ 10 ～ 50 ㎜大の黄褐色土塊少量含む。
7 にぶい黄褐色土 10YR5/4：しまり有。褐灰色粘土粒多量、酸化鉄少量含む。
8 灰黄褐色土 10YR5/2：しまり強。テフラ多量、黄褐色土粒少量含む。
9 にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまり有。テフラ少量、焼土粒、炭化物微量含む。
10 にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまり有。テフラ多量、炭化物微量含む。
11 褐灰色土 10YR5/1：しまり・粘性有。酸化鉄多量、黄褐色土粒少量含む。
12 灰黄褐色土 10YR5/2：しまり有。焼土粒、テフラ微量含む。
13 褐色土 10YR4/4：しまり有。テフラ少量、焼土粒微量含む。
14 暗灰褐色土 2.5YR5/2：しまり有。酸化鉄多量、テフラ少量含む。
15 灰黄褐色土 10YR5/2：しまり有。酸化鉄、テフラ少量含む。
16 灰黄褐色土 10YR4/2：しまり有。酸化鉄多量、テフラ微量含む。
17 褐灰色土 10YR5/1：しまり有。φ 10 ～ 20 ㎜大の黄褐色土塊、テフラ少量含む。
18 にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまり有。酸化鉄、砂粒多量、テフラ微量含む。
19 褐灰色土 10YR4/1：しまり・粘性有。黄褐色土粒多量、酸化鉄少量含む。
20 にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまり有。黄褐色土粒多量、テフラ少量含む。

P191
土層説明（ＢＢ′）
21 暗褐色土 10YR3/3：しまり有。酸化鉄多量、φ 10 ～ 20 ㎜大の黄褐色土塊少量含む。

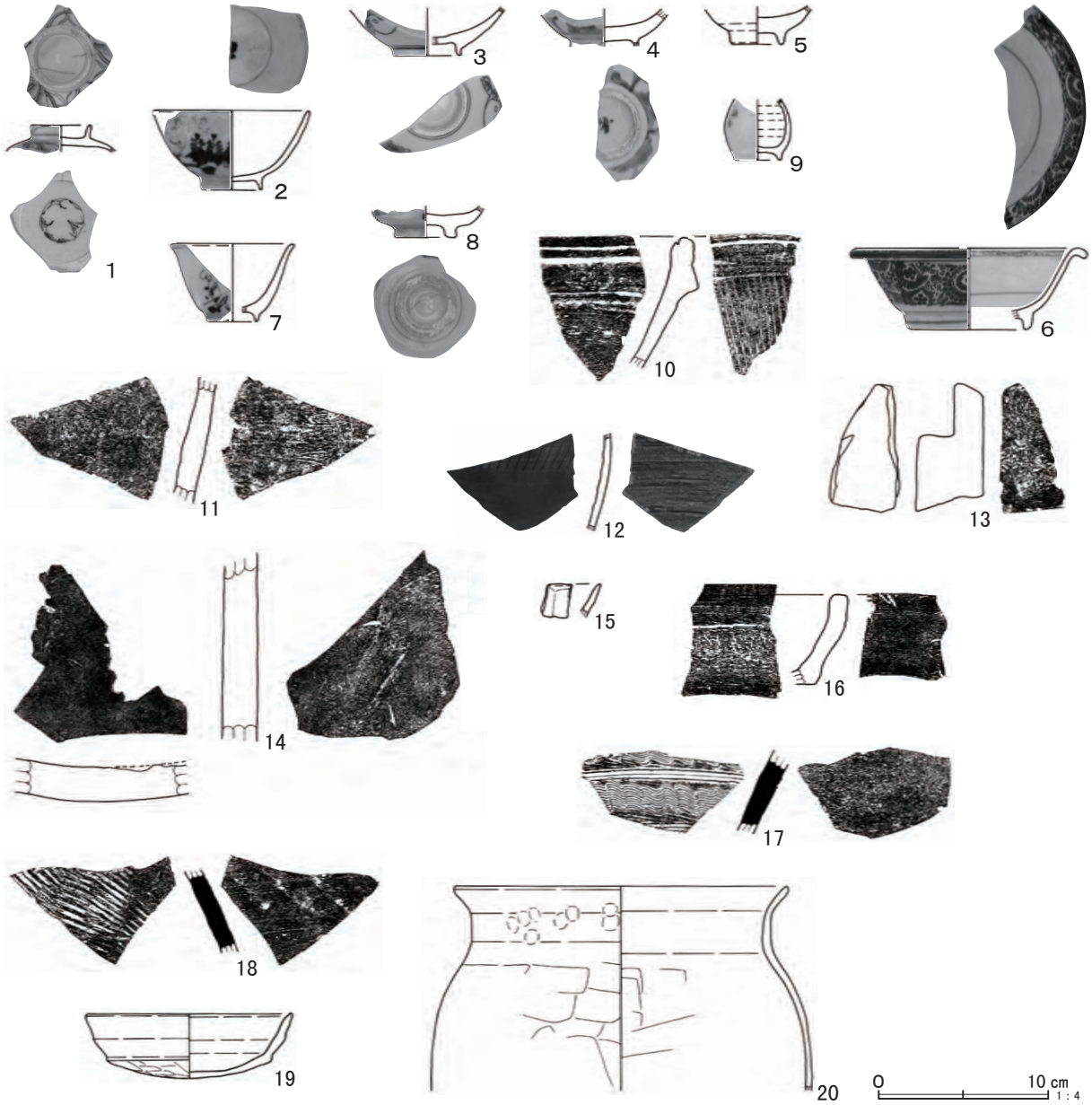
地業跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
22 灰黄褐色土 10YR6/2：しまり有。テフラ多量、焼土粒微量含む。
23 灰黄褐色土 10YR5/2：しまり強。テフラ少量、黄褐色土粒、焼土粒微量含む。
24 灰黄褐色土 10YR4/2：しまり強。黄褐色土粒、テフラ多量含む。

第２号溝跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
25 黒褐色土 10YR3/2：しまり有。テフラ多量、黄褐色土粒、φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊少量含む。

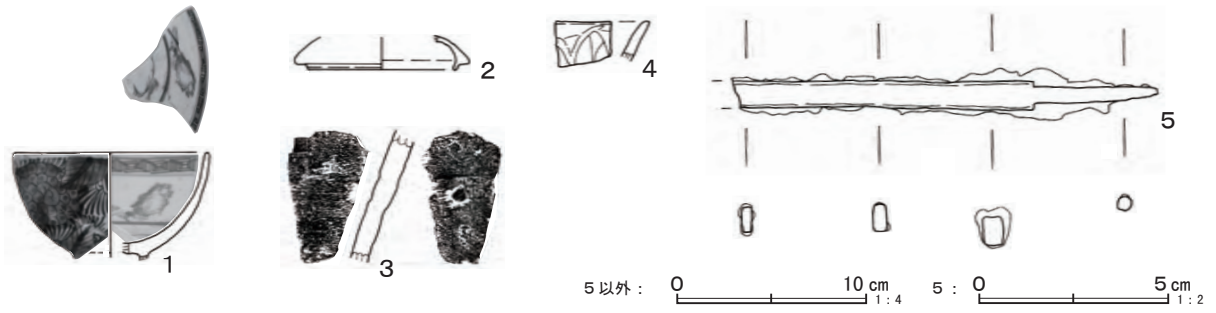
第３号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
26 黒褐色土 10YR3/2：しまり有。黄褐色土粒多量、テフラ少量含む。

平面図：0 2m 1：150
断面図：0 2m 1：80

第 72 図　第１～３号溝跡・第１号道路跡



第 73 図　第 1 号溝跡出土遺物



第 74 図　第 2 号溝跡出土遺物

第 40 表　第１号溝跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	磁器　蓋	(3.6)	(1.6)	-	-	-	-	天～体 70%	肥前系。18c 末～ 19c 中。
2	磁器　碗	(9.2)	4.7	(3.6)	-	-	-	20%	肥前系。18c 前。
3	磁器　碗	-	(2.9)	4.0	-	-	-	体～高 35%	瀬戸美濃系。19c 末。
4	磁器　碗	-	(2.2)	-	-	-	-	体～高 40%	肥前系。18c。
5	磁器　碗	-	(2.3)	(3.2)	-	-	-	体～高 90%	肥前系。18c。
6	磁器　鉢	(13.9)	4.8	(7.4)	-	-	-	20%	産地不明。19c 末。
7	磁器　小坏	(7.2)	4.6	(3.0)	-	-	-	30%	肥前系。18c。
8	磁器　湯呑	-	(1.9)	3.6	-	-	-	体～高 80%	肥前系。19c 後。
9	磁器　小瓶	-	(3.65)	(2.8)	-	-	-	胴～高 30%	肥前系。
10	陶器　擂鉢	-	-	-	-	-	-	口縁部片	堺・明石系。19c 前。
11	陶器　甕	-	-	-	-	-	-	胴下部片	常滑系。
12	陶器　徳利	-	-	-	-	-	-	胴下部片	産地不明。
13	伏間瓦	最大長 (7.5) ㎝、最大幅（4.0）㎝、最大厚（4.0）㎝。大半欠。在地系。							
14	平　瓦	最大長 (11.2) ㎝、最大幅（10.2）㎝、最大厚（2.1）㎝。大半欠。在地系。							
15	青磁　碗	-	-	-	-	-	-	口縁部片	龍泉窯系。13c。
16	瓦質土器焙烙	-	-	-	-	-	-	口～底片	在地系。
17	須恵器　甕	-	-	-	ADL	灰色	A	頸部片	末野産。
18	須恵器　甕	-	-	-	ABL	外：ｵﾘｰﾌﾞ黒 内：灰	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
19	土師器　坏	(12.2)	3.85	-	ABCDIKN	橙色	B	40%	内面摩耗顕著。
20	土師器　甕	(19.6)	(12.1)	-	ABCIK	橙色	B	口～胴 20%	

第 41 表　第２号溝跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	磁器　碗	(10.4)	(5.75)	-	-	-	-	20%	肥前系。19c 中。
2	白磁　蓋	(8.0)	(1.8)	-	-	-	-	口～体 15%	肥前系。
3	陶器　甕	-	-	-	-	-	-	胴下部片	常滑系。
4	青磁　碗	-	-	-	-	-	-	口縁部片	龍泉窯系。13c。
5	不明鉄製品	最大長 (11.3) ㎝、最大幅（0.7）㎝、最大厚（0.55）㎝。重量（13.4）ｇ。先端部欠。							

交互に巡る。18 は、胴上部片である。外面はタタキ、内面はヘラナデが施されており、僅かにあて具痕が残る。いずれも末野産である。19 は古墳時代後期、７世紀後半の土師器有段口縁坏である。口縁が逆ハの字に開き、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は、丸底である。調整は、口縁部が横ナデ、底部はヘラ削りである。20 は、９世紀前半から中頃にかけての土師器甕である。口縁部から胴部中段までの部位である。口縁部は、コの字状を呈し、胴部が膨らむ。調整は、口縁部が横ナデであり、外面は指オサエも施されている。胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。

本溝跡の時期は、江戸時代の 18 世紀末以降と思われる。

第２号溝跡（第 72 図）

調査区南西端のＢ－７・８からＥ－８・９グリッドにかけて、直線的に走行する。確認された長さは 16.30 ｍ、走行方向は第１号溝跡に沿うようにＮ－ 52°－Ｗを指す。 断面形は皿状とみられ、幅は 1.10 ｍ以上、 確認面からの深さは 0.20 ｍである。 底面標高は、北西端が 27.51 ｍ、南東端が 27.60 ｍであり、緩やかに利根川方面である北西側に下る。底面には、酸化鉄の沈着が確認された。東側で第３号溝跡と重複し、本溝跡の方が新しい。また、本跡の直上で 22 ～ 24 層の突き固めたように固く締まり、水平堆積している地業跡が確認された。覆土に浅間Ａ軽石を含む。

出土遺物（第 74 図）は、近世の磁器碗（１）、白磁蓋（２）、陶器甕（３）、中世の青磁碗（４）、時期不明の不明鉄製品（５）がある。

１は、磁器丸碗である。外面は枇杷文・菊花文・芭蕉葉文、口縁部内面は雷文、見込みは二重圏内に環状松竹梅文が描かれている。肥前系。19 世紀中頃。２は、白磁蓋物の蓋である。肥前系。３は、

常滑系の甕の胴部片である。外面に格子状タタキが施されている。４は、青磁蓮弁文椀の口縁部片である。龍泉窯系。13 世紀代。５は、断面形が扁平な角柱状を呈する不明鉄製品である。先端を欠く。

本溝跡の時期は、第１号溝跡と同じく、江戸時代の 18 世紀末以降と思われる。

第３号溝跡（第 72 図）

調査区南西端のＢ－７・８グリッドに位置し、直線的に走行するとみられたが、北西側のトレンチでは確認できなかった。第２号溝跡と重複し、壊された可能性も考えられる。西側で第２号溝跡と重複し、本溝跡の方が古い。また、第２号溝跡と同様に直上を 22 ～ 24 層の地業跡が覆っている。覆土に浅間Ａ軽石を含む。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、覆土の内容から第１・２号溝跡と同じく江戸時代の 18 世紀末以降と思われる。

５　道路跡

第１号道路跡（第 72 図）

調査区南西端のＢ－７・８からＥ－８・９グリッドにかけて直線的に走行し、前述した第１号溝跡を埋め戻した後の凹状の窪地に敷設されている。踏み固めの硬化面は、第１号溝跡断面の１層と２層の上部にそれぞれ２面確認し、轍状の線状窪みも確認された。

出土遺物はないが、本道路跡の位置と走行が明治時代初期に作成された迅速測図に図示された道路とラインがほぼ合致することから、時期は近代としておきたい。

６　土坑

第１号土坑（第 75 図）

調査区北東側のＨ－２、Ｉ－２グリッドに跨って位置する。平面形は、円形である。規模は、径 0.67 ｍ×深さ 0.23 ｍである。第４号住居跡の覆土を切っており、遺存状況は、概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

出土遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

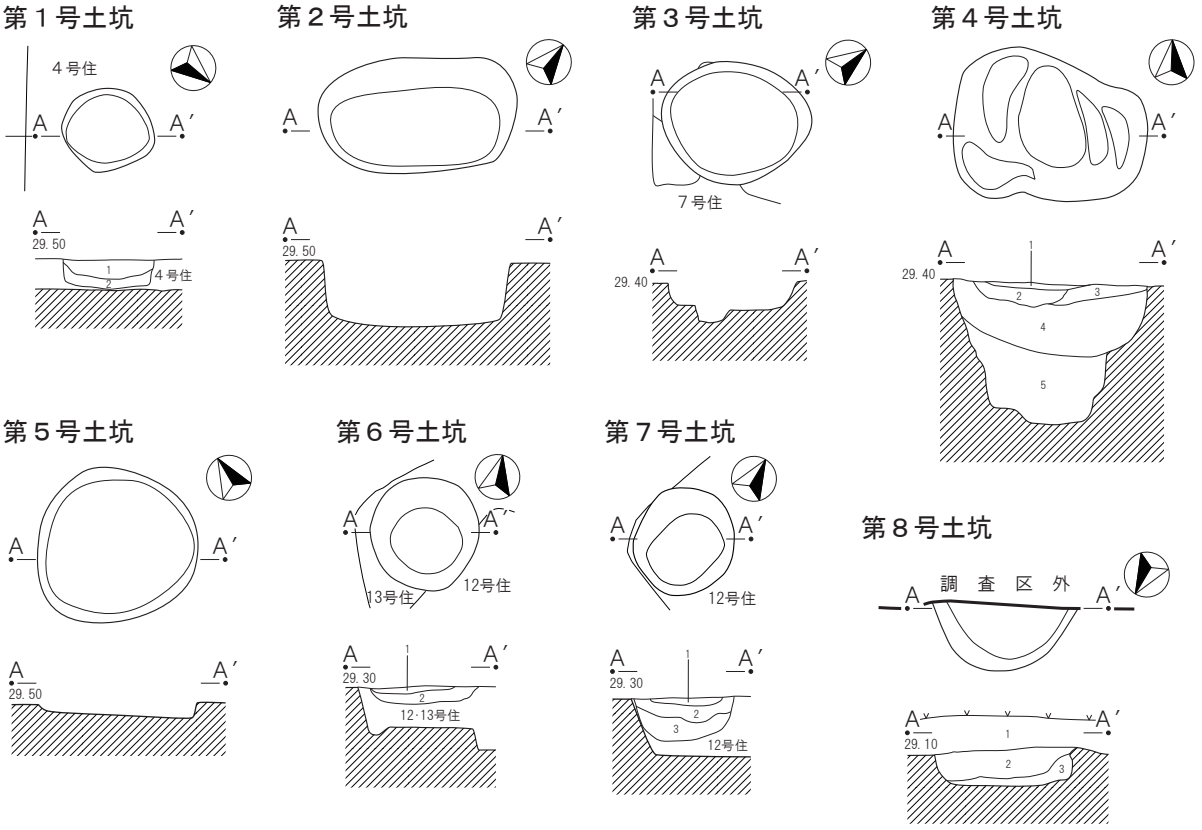
第２号土坑（第 75 図）

調査区北東側のＨ－３グリッドに位置する。平面形は、長方形である。規模は、長軸 1.67 ｍ×短軸 0.92 ｍ×深さ 0.54 ｍである。長軸方向は、Ｎ－ 50°－Ｅを指す。他の遺構との重複は無く、遺存状況は良好である。覆土は、径 10 ～ 30mm 大の黄褐色土塊を含むブロック堆積で一気に埋め戻したものと考えられるが、突き固めや版築は、確認されなかった。

出土遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

第３号土坑（第 75 図）

調査区北東側のＩ－４グリッドに位置する。平面形は、円形である。規模は、長径 1.12 ｍ×短径 0.98 ｍ×深さ 0.23 ｍである。第７号住居跡の煙道部に切られるが、遺存状況は概ね良好である。覆土は不詳であり、出土遺物もないため、本土坑の時期は不明である。



第１号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1　褐色土 10YR4/4：しまり有。粘性無。φ３～５㎜大の黄褐色土塊少量、炭化物微量含む。
2　暗褐色土 10YR3/3：しまり有。粘性無。φ３～５㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。

第４号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1　黒褐色土 10YR3/2：黄褐色土粒、焼土粒微量含む。
2　暗褐色土 10YR3/3：φ２～５㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。
3　褐色土 10YR4/4：黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。
4　褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、炭化物少量、焼土粒微量含む。
5　にぶい黄褐色土 10YR5/3：黄褐色土粒主体。焼土粒、炭化物少量含む。

第６号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1　暗褐色土 10YR3/3：φ２～５㎜大の黄褐色土塊少量含む。
2　暗褐色土 10YR3/4：φ５～10㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。

第７号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1　暗褐色土 10YR3/3：黄褐色土粒少量含む。
2　褐色土 10YR4/4：黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。
3　褐色土 10YR4/6：黄褐色土粒多量、炭化物少量、焼土粒微量含む。

第８号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1　暗褐色土 7.5YR3/3：耕作土。φ２～10㎜大の黄褐色土塊少量、φ１～２㎜大の白色軽石（As-A）微量含む。
2　暗褐色土 10YR3/3：φ２～５㎜大の黄褐色土塊少量含む。
3　褐色土 10YR4/6：しまり強。粘性弱。φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。

第 10 号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1　暗褐色土 10YR3/3：φ２～10㎜大の黄褐色土塊少量含む。
2　褐色土 10YR4/6：φ２～５㎜大の黄褐色土塊多量含む。
3　にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性強。φ２～10㎜大の黄褐色土塊多量含む。

第 75 図　第１～ 10 号土坑

第４号土坑（第 75 図）

調査区東側のＫ－５グリッドに位置する。平面形は、長方形である。規模は、長軸 1.55 ｍ×短軸 1.12 ｍ×深さ 1.10 ｍである。長軸方向は、Ｎ－ 86°－Ｅを指す。他の遺構との重複は無く、遺存状況は良好である。覆土は、径 10 ～ 30mm 大の黄褐色土塊と焼土・炭化物を含むブロック堆積で一気に埋め戻

したものと考えられ、全体に締まり強く固い。

出土遺物は、古墳時代後期の土師器模倣坏、奈良・平安時代の土師器甕があるが、いずれも小片であり、図示不可能である。

本土坑の時期は、奈良・平安時代としておきたい。

第５号土坑（第 75 図）

調査区北西側のＦ－５グリッドに位置する。平面形は、円形である。規模は、長径 1.34 ｍ×短径 1.25 ｍ×深さ 0.12 ｍである。他の遺構との重複は無く、遺存状況は概ね良好である。覆土は不詳であり、出土遺物もないため、本土坑の時期は不明である。

第６号土坑（第 75 図）

調査区西側のＤ－５グリッドに位置する。平面形は、円形である。規模は、長径 0.93 ｍ×短径 0.88 ｍ×深さ 0.16 ｍである。第 12・13 号住居跡を切っており、遺存状況は概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

出土遺物で図示可能なものは、須恵器坏（第 77 図６土－１）のみであるが、重複する第 12 号住居跡からの流れ込みと思われる。口縁部は、ほぼ直線的に外に開き、体部は内湾する。底部は、平底である。調整は、ロクロナデであり、底面は全面回転ヘラ削りである。南比企産である。

本土坑の時期は、重複する第 12・13 号住居跡との新旧関係から８世紀後半以降としか言えない。

第７号土坑（第 75 図）

調査区西側のＤ－６グリッドに位置する。平面形は、円形である。規模は、長径 0.85 ｍ×短径 0.78 ｍ×深さ 0.35 ｍである。第 12 号住居跡を切っており、遺存状況は概ね良好である。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

出土遺物は僅少であり、図示可能なものに土師器坏（第 77 図７土－１・２）があるが、いずれも重複する第 12･13 号住居跡からの流れ込みと思われる。

７土－１は、８世紀中頃の土師器坏である。口縁部がほぼ直立し、体部は内湾する。底部は平底に近い。２は、古墳時代後期、６世紀中頃の土師器坏蓋模倣坏である。口縁部はやや外反し、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は、丸底である。調整は、いずれも口縁部が横ナデ、体部から底部にかけてはヘラ削りである。

本土坑の時期は、重複する住居跡との関係から８世紀後半以降としか言えない。

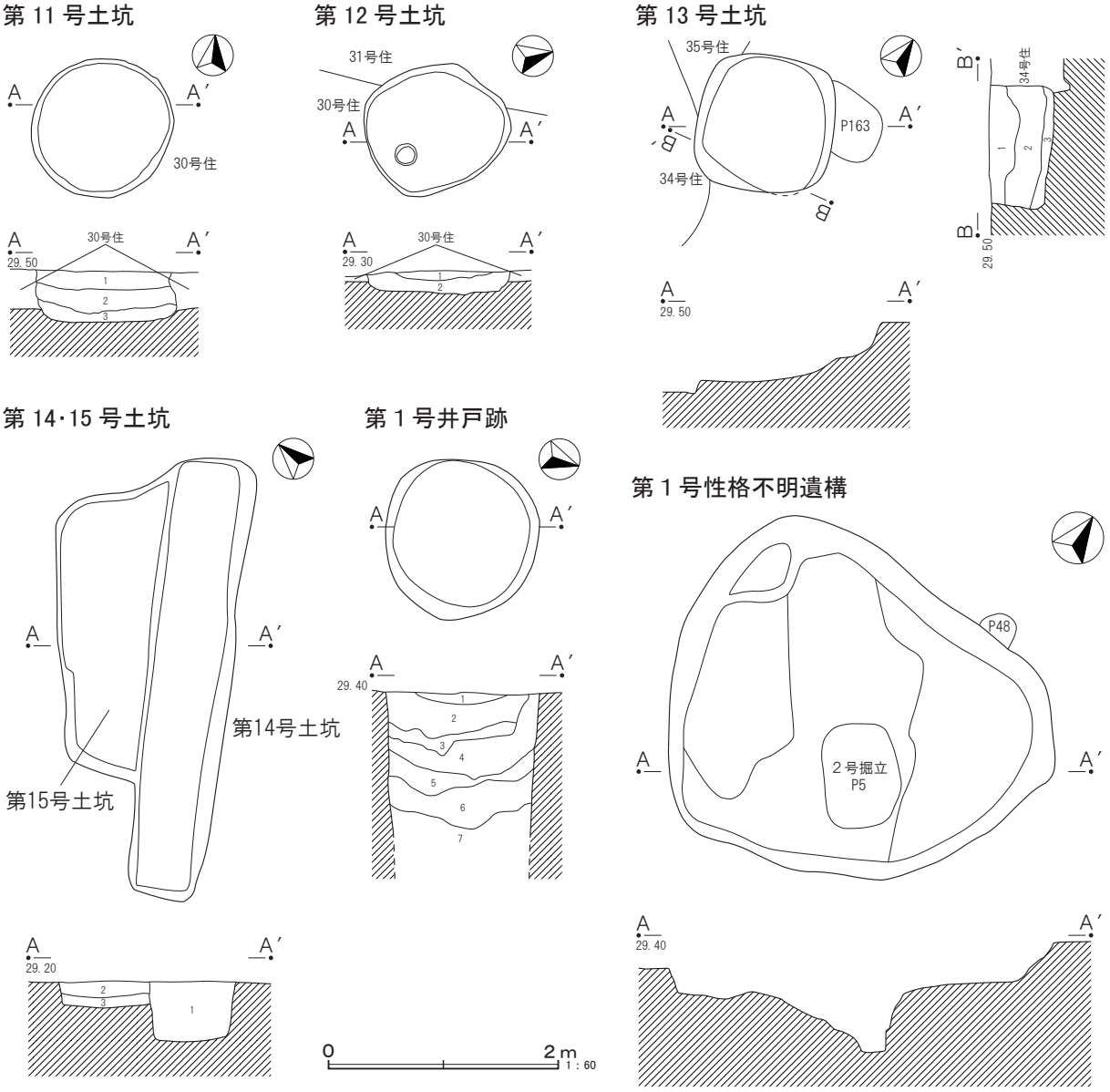
第８号土坑（第 75 図）

調査区西側のＢ－６グリッドに位置する。平面形は、円形である。規模は、長径 1.15 ｍ×短径 0.55 ｍ以上×深さ 0.31 ｍである。南東側が調査区外となり、北西側半分だけの調査である。覆土は、径２～５mm 大の黄褐色土塊と炭化物を含み、一気に埋め戻したブロック堆積である。

出土遺物は、図示不可能な古墳時代中～後期の土師器甕の小片があるのみであり、伴うものか定かではない。本土坑の時期は、不明である。

第９号土坑（第 75 図）

調査区南東側のＪ－７グリッドに位置する。平面形は、長方形である。規模は、長軸 1.67 ｍ×短軸 0.92 ｍ×深さ 0.89 ｍである。長軸方向は、Ｎ－ 63° －Ｗを指す。南側で第２号柵列の１号ピットに切



第 11 号土坑

土層説明（ＡＡ′）

1　褐色土 7.5YR4/6：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量、白色軽石（As-A）微量含む。

2　暗褐色土 7.5YR3/3：黄褐色土塊、焼土粒少量、白色軽石（As-A）微量含む。

3　暗褐色土 7.5YR3/4：黄褐色土塊、焼土粒、炭化物少量含む。

第 12 号土坑

土層説明（ＡＡ′）

1　褐色土 10YR4/4：しまり強。粘性弱。φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量、φ 1 ～ 2 ㎜大の白色軽石（As-A）微量含む。

2　暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量含む。

第 13 号土坑

土層説明（ＢＢ′）

1　暗褐色土 10YR3/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊少量、焼土粒、炭化物微量含む。

2　暗褐色土 10YR3/3：しまり強。粘性弱。黄褐色土塊、炭化物少量含む。

3　褐色土 10YR4/4：φ 2 ～ 5 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。

第 14·15 号土坑

土層説明（ＡＡ′）

1　暗褐色土 10YR3/4：しまり・粘性弱。φ 10 ～ 20 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。埋め戻し。

2　暗褐色土 10YR3/4：しまり強。粘性弱。黄褐色土粒少量、炭化物微量含む。

3　褐色土 10YR4/4：しまり・粘性強。黄褐色土粒多量、炭化物微量含む。

第 1 号井戸跡

土層説明（ＡＡ′）

1　黒褐色土 10YR2/3：黄褐色土粒、φ 1 ～ 2 ㎜大の白色軽石（As-A）微量含む。

2　褐色土 10YR4/4：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量、白色軽石（As-A）微量含む。

3　暗褐色土 10YR3/4：φ 5 ～ 20 ㎜大の黄褐色土塊、炭化物少量、焼土粒、白色軽石（As-A）微量含む。

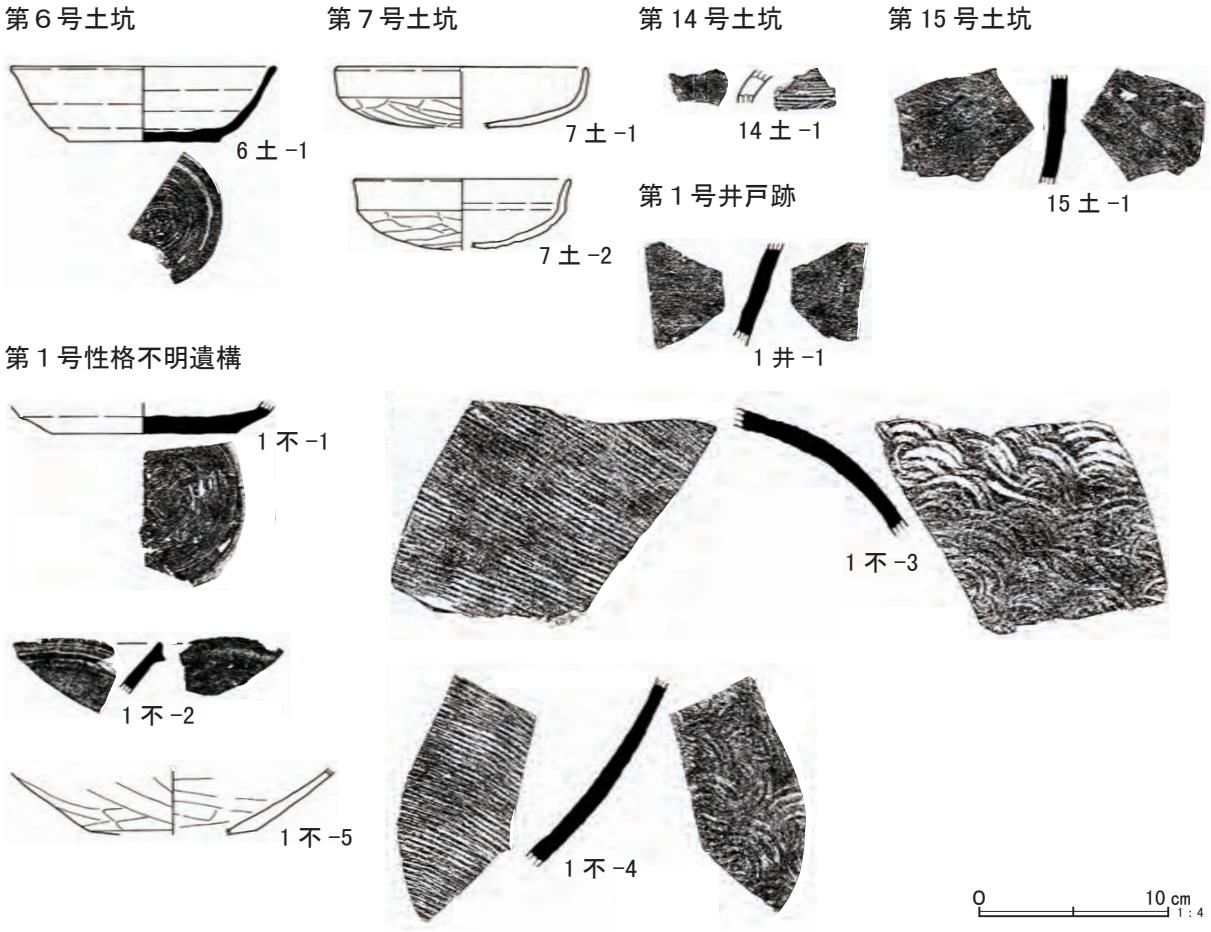
4　黄褐色土 10YR5/6：φ 5 ～ 30 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。

5　黄褐色土 10YR5/8：φ 5 ～ 20 ㎜大の黄褐色土塊多量、焼土粒、炭化物少量含む。

6　にぶい黄褐色土 10YR5/3：φ 5 ～ 10 ㎜大の黄褐色土塊多量、炭化物少量含む。

7　褐色土 10YR4/6 黄褐色土粒多量、焼土粒、炭化物微量含む。

第 76 図　第 11 ～ 15 号土坑・第 1 号井戸跡・第 1 号性格不明遺構



第 77 図　土坑・井戸跡・性格不明遺構出土遺物

第 42 表　土坑・井戸跡・性格不明遺構出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎 土	色　調	焼成	残存率	備　　考
6 土 -1	6 号土坑	須恵器　坏	(14.0)	4.0	(7.8)	ABFN	灰白色	B	30%	南比企産。
7 土 -1	7 号土坑	土師器　坏	(13.4)	3.2	-	ABDIK	橙色	B	25%	
7 土 -2	7 号土坑	土師器　坏	(11.4)	3.7	-	ABIKN	橙色	B	30%	
14 土 -1	14 号土坑	円筒埴輪	-	-	-	ABEIK	にぶい赤褐色	B	口縁部片	
15 土 -1	15 号土坑	須恵器　甕	-	-	-	ABL	灰オリーブ色	A	胴中段片	末野産。
1 井 -1	1 号井戸跡	須恵器　甕	-	-	-	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
1 不 -1	1 号性格不明	須恵器　坏	-	(1.65)	(9.7)	ABDFN	灰色	B	底部 30%	南比企産。
1 不 -2	1 号性格不明	須恵器　瓶	-	-	-	ABDK	灰白色	A	口縁部片	産地不明。
1 不 -3	1 号性格不明	須恵器　甕	-	-	-	ABL	灰色	B	肩～胴上片	末野産。外面自然釉付着。
1 不 -4	1 号性格不明	須恵器　甕	-	-	-	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
1 不 -5	1 号性格不明	土師器　甕	-	(3.45)	(8.6)	ABCIK	外 : 灰黄褐 内 : 橙	B	胴～底 30%	内面やや摩耗。

られるが、遺存状況は概ね良好である。覆土は、径５～ 10mm 大の黄褐色土塊を含むブロック堆積で一気に埋め戻したものと考えられるが、突き固めや版築は、確認されなかった。

出土遺物はないが、本土坑の時期は、重複する柵列跡との新旧関係から９世紀以前としか言えない。

第 10 号土坑（第 75 図）

調査区南東側Ｋ－８グリッドに位置する。平面形は、不整形である。規模は、長軸 0.75 ｍ以上×短軸 0.68 ｍ以上×深さ 0.25 ｍである。北側を第 25 号住居跡に切られている。覆土は、不詳である。

出土遺物はないが、本土坑の時期は、重複する住居跡との新旧関係から古墳時代前期以前としか言えない。

第 11 号土坑（第 76 図）

調査区南東側のＫ－８・９グリッドに位置する。平面形は、円形である。規模は、長径 1.26 ｍ×短径 1.22 ｍ×深さ 0.33 ｍである。第 30 号住居跡を切っており、遺存状況は概ね良好である。覆土は、径２～５mm 大の黄褐色土塊と炭化物を含み、一気に埋め戻したブロック堆積である。また、上・中層に浅間Ａ軽石を含んでいた。

出土遺物はないが、本土坑の時期は、覆土の内容から 18 世紀末以降と思われる。

第 12 号土坑（第 76 図）

調査区南東側のＪ－８グリッドに位置する。平面形は、円形である。規模は、長径 1.18 ｍ×短径 1.08 ｍ×深さ 0.23 ｍである。第 30・31 号住居跡を切っており、遺存状況は概ね良好である。覆土は、多量の径２～５mm 大の黄褐色土塊と炭化物を含み、一気に埋め戻したブロック堆積である。また、上層に浅間Ａ軽石を含んでいた。

出土遺物はないが、本土坑の時期は、覆土の内容から 18 世紀末以降と思われる。

第 13 号土坑（第 76 図）

調査区南東側のＩ－８グリッドに位置する。平面形は、円形である。規模は、長径 1.22 ｍ×短径 1.13 ｍ以上×深さ 0.52 ｍである。第 34・35 号住居跡とピット 163 を切っており、遺存状況は概ね良好である。壁面は、部分的にオーバーハングしている。覆土は、径２～５mm 大の黄褐色土塊と炭化物を含み、一気に埋め戻したブロック堆積である。

出土遺物はないが、本土坑の時期は、重複する住居跡との新旧関係から古墳時代前期か中期としか言えない。

第 14 号土坑（第 76 図）

調査区南西側のＥ－８グリッドに位置する。平面形は、長方形である。規模は、長軸 3.90 ｍ×短軸 0.74 ｍ×深さ 0.54 ｍである。長軸方向は、Ｎ－ 55° －Ｅを指す。北西側で第 15 号土坑を切り、遺存状況は良好である。覆土は単層で、径 10 ～ 20mm 大の黄褐色土塊を多量に含むブロック堆積で一気に埋め戻したものと考えられる。

出土遺物で図示不可能なものは、古墳時代後期の円筒埴輪の口縁部片（第 77 図 14 土－１）のみであり、流れ込みである。内外面ともにハケメが施されているが、外面は縦位、内面は横位に施されている。

本土坑の時期は、重複する第 15 号土坑の関係から古墳時代後期以降としか言えない。

第 15 号土坑（第 76 図）

調査区南西側のＥ－８グリッドに位置する。平面形は、方形である。規模は、長軸 2.47 ｍ×短軸 0.92 ｍ以上×深さ 0.24 ｍである。長軸方向は、Ｎ－ 47° －Ｅを指す。北東側で第 14 号土坑に切られる。覆土は、レンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。

出土遺物で図示可能なものは、須恵器甕の胴部中段の破片（第 77 図 15 土－１）のみであるが、この他にも古墳時代後期の土師器模倣坏の小片がある。15 土－１の調整は、内外面ともに横・斜位のヘラナデが施されているが、外面はタタキ目、内面はあて具痕が僅かに残る。末野産である。

本土坑の時期は、古墳時代後期としか言えない。

7　井戸跡

第１号井戸跡（第 76 図）

調査区北東側のＩ－２グリッドに位置する。平面形が円形の素掘りの井戸とみられ、井戸枠が組まれた痕跡は、確認されなかった。規模は、長径 1.42 m×短径 1.34 m×深さ 1.30 m以上である。他の遺構との重複は無く、遺存状況は良好である。覆土は、径５～ 30mm 大の黄褐色土塊を含むブロック堆積で一気に埋め戻したものと考えられる。また、上層に浅間Ａ軽石を含む。なお、安全を考慮し、底面までの調査は断念した。

出土遺物は僅少であり、図示可能なものは、須恵器甕の胴下部片（第 77 図１井－１）のみである。また、この他に底面に回転糸切り痕を残す９世紀前半の須恵器坏の底部小片があるが、図示不可能である。いずれも流れ込みと思われる。１井－１の調整は、内外面ともにヘラナデが施されており、内面はあて具痕が僅かに残る。末野産である。

伴う出土遺物はないが、本井戸跡の時期は、覆土の内容から江戸時代の 18 世紀末以降と思われる。

8　性格不明遺構

第１号性格不明遺構（第 76 図）

調査区北側のＨ－４・５グリッドに跨って位置する。平面形は、不整形である。規模は、長軸 3.25 m×短軸径 2.98 m×深さ 0.33 mである。第２号掘立柱建物跡のピット５を切っており、遺存状況は概ね良好である。覆土は、褐灰色土の単層であり、黄褐色土塊と炭化物を含み、一気に埋め戻した堆積である。

出土遺物は、須恵器坏（第 77 図１不－１）、長頸瓶（２）、甕（３・４）、土師器甕（５）がある。すべて覆土からの出土であり、流れ込みと思われる。

１不－１は、８世紀中頃の須恵器坏の底部である。底径が大きく、底面は回転糸切り後、外周ヘラ削りが施されている。焼きが良くない。南比企産である。。１不－２～４は、古墳時代後期以降の須恵器甕である。２は口縁部片である。調整は、内外面ともにロクロナデである。産地不明である。３は胴上部、４は胴下部の破片である。調整は、外面がタタキ、内面はあて具痕が残る。３の外面には、自然釉が付着している。いずれも末野産である。５は、古墳時代後期の丸胴甕の胴下部から底部までの部位である。調整は、外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。

本遺構の時期は、重複する掘立柱建物跡との新旧関係から９世紀後半以降としか言えない。

9　ピット

ピットは、191 基確認された。調査区ほぼ全面に分布するが、西側は他の遺構と同じく希薄であり、東側に集中する。時期を特定できるものはほとんどないが、概ね検出された集落跡の時期幅に収まるものと思われる。なお、東側に偏在するものについては、柱筋を捉えきれなかった掘立柱建物跡の掘り方になる可能性がある。各ピットの計測値等については、第 43 表を参照のこと。

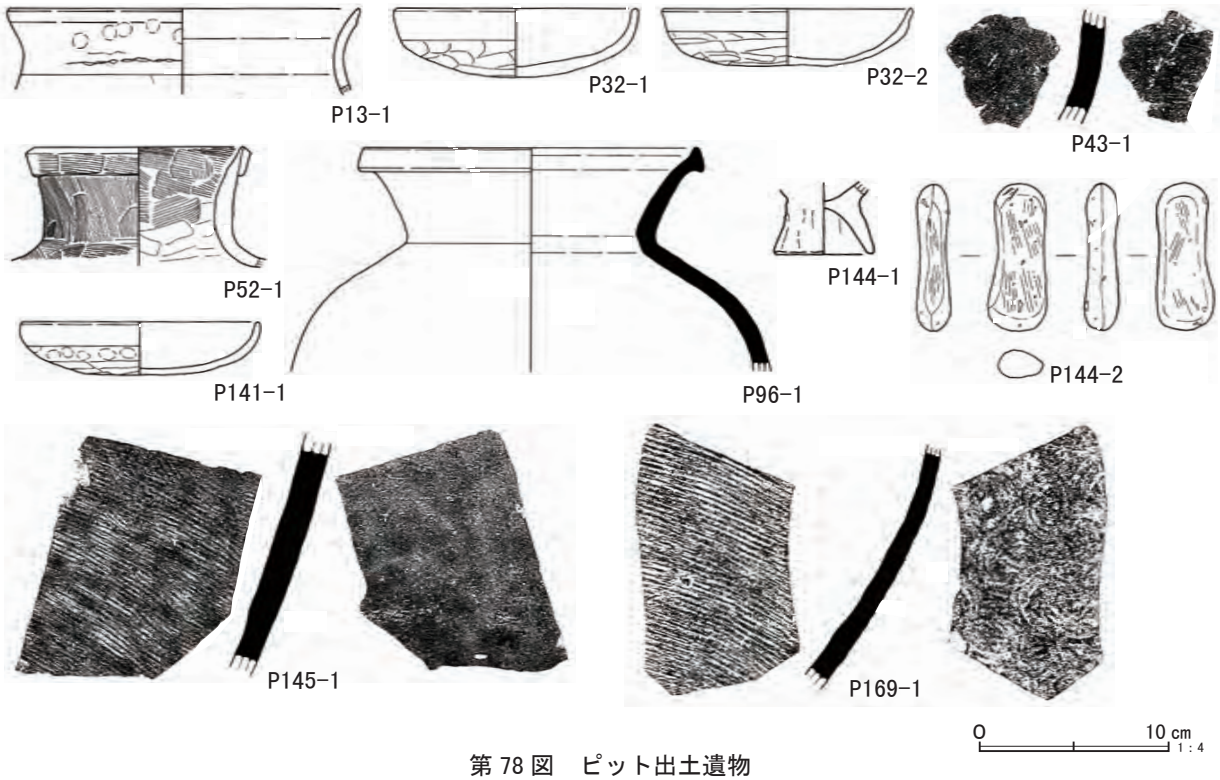
遺物は、多くのピットから出土しているが、その大半は小片であり、図示可能なものは、計 11 点である（第 78 図）。ピット 13 出土の１は、８世紀後半の土師器甕の口縁部から胴上部にかけての部位

である。口縁部は、くの字状を呈する。調整は、口縁部が横ナデ、外面には指オサエも施されており、輪積痕が残る。胴部外面は、ヘラ削りである。ピット 32 出土の１・２は、８世紀中頃から後半の土師器坏である。浅身で、口縁部は開きが小さく、体部は内湾し、底部は平底に近い。調整は、口縁部が横ナデ、体部から底部にかけてはヘラ削りである。ピット 43 出土の１は、須恵器甕の胴部中段の破片である。内外面ともにヘラナデ調整であるが、外面は斜位、内面は横位に施されている。末野産である。ピット 52 出土の１は、古墳時代前期の土師器壺である。口縁部から頸部にかけての部位である。口縁部から頸部がほぼ直立する。調整は、内外面ともにハケメが主体となるが、内面は下位にヘラナデも併用されている。ピット 96 出土の１は、奈良・平安時代の須恵器甕である。口縁部から胴部中段までの部位である。口縁部が外反し、胴部は大きく膨らむ。調整は、内外面ともにロクロナデであり、口縁部内外面に自然釉が付着している。末野産である。ピット 141 出土の１は、８世紀中頃の土師器坏である。浅身で、口縁部の開きが小さく、体部は内湾し、底部は平底に近い。調整は、口縁部が横ナデ、体部は指オサエ、底部はヘラ削りである。ピット 144 出土の１は、古墳時代前期の土師器台付甕である。接合部から台部にかけての部位である。器壁が厚く、台部はハの字に開く。摩耗が著しいが、調整は、内外面ともにヘラナデである。ピット 144 出土の２は、磨石である。全面に擦痕がみられた。ピット 145･169 出土の１は、古墳時代後期以降の須恵器甕の胴下部片である。調整は、外面が

第 43 表　ピット計測表

No.	位　置	長 (m)	短 (m)	深 (m)	備　　考	No.	位　置	長 (m)	短 (m)	深 (m)	備　　考
P1	K-1G	0.47	0.31	0.28		P35	H-2G	(0.71)	0.59	0.12	
P2	K-1G	(0.64)	0.67	0.22		P36	H-2G	(0.83)	0.78	0.56	
P3	J･K-1G	0.6	0.54	0.27	奈良・平安土師甕片出土。	P37	H-2G	0.75	0.71	0.63	古墳中～後土師坏・甕片出土。
P4	J･K-1･1G	0.46	0.36	0.5		P38	G-2G	0.81	0.8	0.08	時期・器種不明土師片出土。
P5	K-2G	0.27	0.25	0.33	古墳中～後土師甕、奈良・平安土師甕片出土。	P39	H-2･3G	0.64	0.46	0.32	
P6	K-1･2G	0.8	0.75	0.09		P40	G-3G	0.53	0.49	0.4	
P7	J･K-2G	0.28	0.24	0.42		P41	H-3G	(0.85)	0.99	0.32	６号住より新。古墳中～後土師坏・甕片出土。
P8	I-1G	1.28	1.04	1.48	３号住より新。	P42	I-3G	0.42	0.24	0.09	
P9	J-2G	0.44	0.43	0.25		P43	H-3･4G	(0.48)	0.6	0.53	５・６号住より新。出土遺物掲載。
P10	J-3G	0.27	0.18	0.15		P44	H-4G	0.48	0.42	0.13	
P11	I-2G	0.48	0.36	0.24		P45	H-4G	0.45	0.44	0.28	古墳中～後土師甕、奈良・平安須恵・土師坏片出土。
P12	I･J-2G	0.53	0.34	0.35		P46	H-4G	1	0.73	0.7	7号住より新。古墳中～後土師甕、奈良・平安須恵・土師坏片出土。
P13	J-3G	0.52	0.36	0.23	出土遺物掲載。	P47	H-4G	0.69	(0.52)	0.43	２号掘立より古。古墳中～後須恵瓶片出土。
P14	J-3G	0.76	0.54	0.4		P48	H-4G	(0.23)	0.32	0.08	古墳中～後土師甕、古墳後以降須恵甕片出土。
P15	J-3G	0.62	0.52	0.67	古墳中～後土師坏片出土。	P49	G-3G	0.29	0.25	0.26	古墳中～後土師坏片出土。
P16	J-3G	0.23	0.2	0.12		P50	G-3G	0.31	0.31	0.34	
P17	J-3･4G	0.8	0.6	0.65	8号住より新。古墳前土師高坏、古墳中～後土師坏・甕片出土。	P51	G-3G	0.22	0.16	0.31	
P18	J-3G	0.66	0.55	0.48	古墳前土師甕、古墳中～後土師甕片出土。	P52	G-3G	0.4	0.36	0.56	５号住より新。出土遺物掲載。
P19	I-3G	0.3	0.27	0.17		P53	F-3G	0.32	0.31	0.33	
P20	I-3G	0.88	0.67	0.5		P54	G-4G	0.23	0.22	0.15	
P21	I-3G	0.42	0.36	0.42		P55	G-4G	0.19	0.19	0.1	
P22	I-3G	0.72	0.61	0.43		P56	F-4G	0.29	0.28	0.17	
P23	I-3G	0.22	0.21	0.11		P57	G-4G	0.5	0.4	0.13	
P24	I-4G	(0.65)	(0.6)	0.54	８号住より古。	P58	F-3G	(0.68)	0.68	0.69	
P25	I-3G	0.25	0.23	0.16		P59	F-3G	0.32	0.29	0.5	
P26	I-3G	0.22	0.2	0.17		P60	F-3G	0.3	0.28	0.51	
P27	I-3G	1.26	0.69	0.49		P61	F-3G	0.4	0.36	0.38	
P28	I-3G	0.76	0.66	0.19	古墳中～後土師坏、奈良・平安須恵・土師坏片出土。	P62	F-4G	0.27	0.26	0.07	
P29	I-2･3G	0.83	0.5	0.35		P63	F-4G	0.24	0.22	0.11	
P30	I-3G	0.84	0.81	0.33	古墳中～後土師甕小片出土。	P64	F-4G	0.54	0.42	0.27	
P31	I-3G	0.98	0.82	0.6	古墳中～後土師甕、奈良・平安須恵坏・甕、土師坏片出土。	P65	F-4G	0.32	0.28	0.03	
P32	H･I-3G	1.10	0.79	0.59	出土遺物掲載。	P66	F･G-5G	0.4	0.31	0.05	
P33	H-2G	0.35	0.35	0.19		P67	F-5G	0.55	0.4	0.07	
P34	H-2G	0.3	0.27	0.25		P68	F-5G	0.37	0.37	0.16	

No.	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　　考	No.	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　　考
P69	D-4G	0.37	0.36	0.48		P131	J･K-5G	0.34	0.28	0.13	
P70	D-4G	0.6	0.48	0.26		P132	K-5G	0.36	0.32	0.19	古墳中～後土師甕片出土。
P71	C-4G	(0.4)	0.31	0.31		P133	K-5G	0.62	0.5	0.19	古墳中～後土師甕片出土。
P72	C-4G	0.8	0.66	0.61		P134	K-6G	0.62	0.57	0.3	古墳中～後土師坏・甕片出土。
P73	B･C-4G	0.41	0.39	0.25		P135	J-7G	0.19	0.19	0.22	
P74	B-4G	0.19	0.17	0.05		P136	K-7G	1.39	0.5	0.3	
P75	C-5G	0.2	0.18	0.14		P137	K-7G	0.32	0.3	0.2	
P76	B-5G	0.57	0.51	0.34		P138	K-7G	0.44	0.4	0.23	
P77	C-5G	0.23	0.16	0.21		P139	J･K-7G	0.65	0.57	0.17	古墳中～後土師坏・甕片出土。
P78	B-5G	0.2	0.16	0.4		P140	J-7G	0.41	0.37	0.22	
P79	B-5G	0.41	0.4	0.22		P141	J-7･8G	0.54	0.46	0.25	出土遺物掲載。
P80	D-5G	0.47	(0.31)	0.33	13号住より新。	P142	J-7G	0.43	0.36	0.38	古墳中～後土師甕片出土。
P81	C-6G	0.2	0.16	0.25		P143	J-7G	0.88	0.6	0.35	
P82	C-6G	0.24	0.18	0.27		P144	J-7･8G	0.69	0.58	0.41	出土遺物掲載。
P83	D-6G	0.22	0.21	0.23		P145	J-8G	0.46	0.44	0.16	出土遺物掲載。
P84	D-6G	0.41	0.39	0.57		P146	J-8G	0.54	0.52	0.29	古墳中～後土師甕片出土。
P85	E-7G	0.44	0.42	0.28		P147	J-8G	0.7	0.7	0.23	古墳中～後土師甕片出土。
P86	E-6G	0.45	0.42	0.24		P148	J-8G	0.76	0.48	0.31	古墳中～後土師甕片出土。
P87	E-7G	0.38	0.28	0.31		P149	J-8G	(0.58)	0.45	0.38	古墳中～後土師甕片出土。
P88	D-7G	0.22	0.2	0.18		P150	J-7･8G	0.58	0.52	0.37	古墳中～後土師甕片出土。
P89	E-7G	0.22	0.2	0.28		P151	J-7G	0.51	0.39	0.5	古墳中～後土師甕、奈良・平安土師坏片出土。
P90	E-7G	0.22	0.19	0.19		P152	I･J-7G	0.54	0.38	0.15	古墳前土師甕片出土。
P91	F-7G	0.42	0.38	0.15	40号住より新。	P153	I･J-7･8G	0.63	0.58	0.22	
P92	F-7G	0.67	0.62	0.05	40号住より新。	P154	I-7G	0.51	(0.38)	0.39	19号住より新。
P93	G-7G	(0.38)	(0.56)	0.16	33号住より新。	P155	I-7G	0.31	0.29	0.26	
P94	G-6G	0.44	0.36	0.19		P156	I-7G	(0.48)	0.59	0.33	21号住より新。
P95	G-6G	0.54	0.48	0.79	16号住より新。	P157	I-7G	0.58	0.5	0.37	35号住より新。
P96	H-6G	0.54	0.47	0.24	出土遺物掲載。	P158	I-7G	0.34	0.31	0.28	
P97	H-6G	0.7	0.64	0.28		P159	I-7･8G	1.02	0.6	0.34	古墳中～後土師坏・甕片出土。
P98	H-6･7G	(0.36)	0.62	0.46	古墳中～後土師坏・甕、奈良・平安土師坏片出土。	P160	I-8G	0.52	0.42	0.22	古墳中～後土師甕片出土。
P99	H-6G	0.49	0.38	0.77	15号住より新。	P161	I-8G	0.52	0.42	0.22	古墳中～後土師甕片出土。
P100	H-6G	0.59	0.56	0.57	古墳中～後土師甕、奈良・平安土師坏片出土。	P162	I-7･8G	0.5	0.47	0.26	古墳中～後土師坏・甕片出土。
P101	H-6G	0.64	(0.39)	0.21		P163	I-8G	(0.46)	0.55	0.22	13号土より古。
P102	H-6G	0.7	0.62	0.37		P164	I･J-8G	0.41	0.38	0.4	古墳前～後土師甕片出土。
P103	H-6G	0.31	0.25	0.17		P165	I･J-8G	0.65	(0.51)	0.35	2号柵より古。古墳中～後、奈良・平安土器甕片出土。
P104	H･I-6G	0.4	0.24	0.23	16号住より新。	P166	I-8G	0.44	0.44	0.18	
P105	H-5G	(0.56)	0.54	0.47	古墳中～後土師坏・甕片出土。	P167	I-8G	0.59	0.44	0.56	古墳中～後土師甕片出土。
P106	I-5G	0.22	0.21	0.25		P168	I-8G	0.41	0.36	0.48	古墳中～後期土師甕片出土。
P107	I-5G	0.49	0.39	0.23		P169	J-8G	0.48	0.43	0.2	出土遺物掲載。
P108	I-5G	0.3	0.25	0.12		P170	J-8G	0.5	0.49	0.29	古墳中～後土師坏・甕片出土。
P109	I-5G	0.22	0.19	0.16		P171	J-8G	0.55	0.47	0.27	
P110	I-5G	0.4	0.37	0.23	古墳中～後土師坏・甕片出土。	P172	J-8･9G	0.41	0.37	0.26	
P111	H･I-6G	0.51	0.46	0.28		P173	I･J-8G	0.61	0.54	0.32	古墳中～後土師甕片出土。
P112	I-6G	0.94	0.5	0.43	20号住より新。	P174	J-9G	0.67	0.6	0.49	古墳中～後土師坏・甕片出土。
P113	I-6G	0.4	0.37	0.19	古墳中～後土師甕片出土。	P175	I･J-9G	0.66	(0.48)	0.85	
P114	I-5G	0.38	0.34	0.25	古墳後土師坏・甕片出土。	P176	I-8G	0.73	0.68	0.19	2号柵より古。
P115	I-6G	(0.3)	0.19	0.13		P177	I-8G	0.58	0.53	0.33	
P116	I-6G	0.56	0.5	0.16		P178	I-8G	0.72	0.58	0.17	
P117	I-6G	0.29	0.26	0.18		P179	I-8･9G	0.48	0.42	0.27	
P118	I･J-6G	0.62	0.52	0.51		P180	H-9G	0.44	0.4	0.26	
P119	I-5･6G	0.3	0.26	0.18		P181	F-8G	0.4	0.38	0.13	
P120	I･J-5･6G	0.4	0.34	0.26		P182	F-8G	(0.18)	0.23	0.05	6号掘立より古。
P121	J-5G	0.32	0.23	0.15		P183	F-9G	0.34	0.29	0.13	
P122	J-5G	0.36	0.36	0.39		P184	F-9G	0.48	0.52	0.25	
P123	I-5G	(0.18)	0.38	0.03	3号掘立より新。古墳中～後土師坏・甕片出土。	P185	E-8G	0.42	0.38	0.24	
P124	J-5G	0.39	0.38	0.38	古墳中～後土師坏・甕片出土。	P186	E-8G	0.97	0.45	0.16	
P125	J-5G	0.48	0.47	0.37		P187	E-8G	1.08	0.57	0.23	
P126	J･K-6G	1.09	1.03	0.27		P188	D-8G	0.76	0.73	0.25	
P127	K-4G	1.86	0.53	0.22	古墳中～後土師甕片出土。	P189	D-8G	0.78	0.73	0.21	
P128	K-4G	0.2	0.18	0.22		P190	D-8G	0.98	(0.5)	0.26	1号溝より新。
P129	K-4G	1.16	0.72	0.32		P191	D-9G	(0.35)	0.42	0.43	1号溝より古。
P130	K-4･5G	0.68	0.54	0.17							



第 78 図　ピット出土遺物

第 44 表　ピット出土遺物観察表

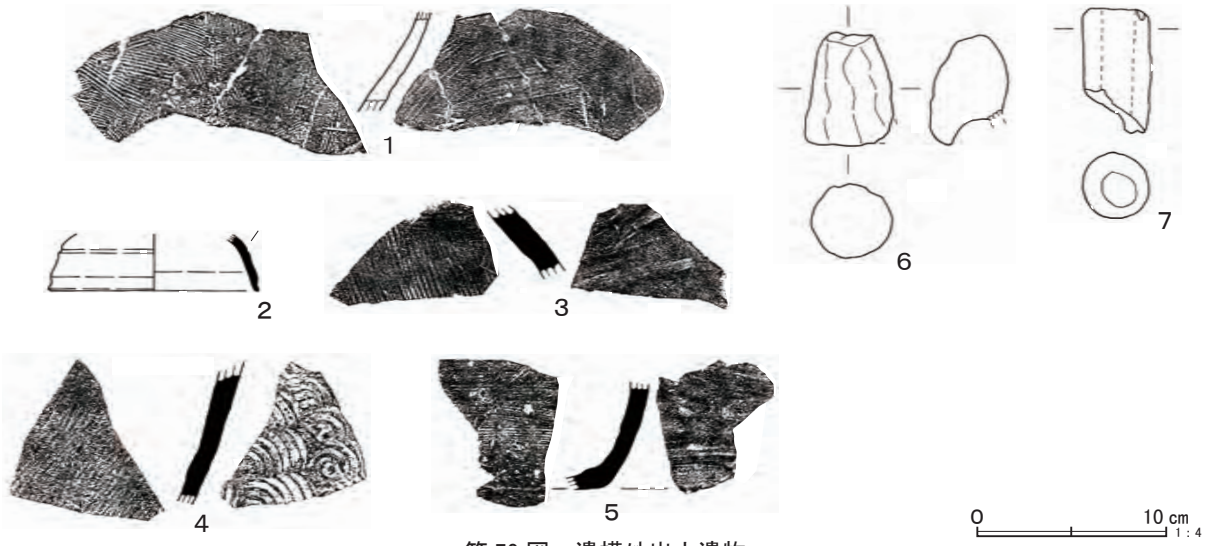
P No・番号	器　種	口径	器高	底径	胎 土	色　調	焼成	残存率	備　　考
P13-1	土師器　甕	(18.2)	(4.5)	-	ABHIKM	橙色	B	口～胴 20%	口縁部外面輪積痕有。
P32-1	土師器　坏	(13.0)	3.7	-	BEK	橙色	B	30%	
P32-2	土師器　坏	13.2	3.0	-	ABIK	橙色	B	70%	
P43-1	須恵器　甕	-	-	-	ABDLN	灰色	B	胴中段片	末野産。
P52-1	土師器　壺	(11.8)	(6.4)	-	ABDHKN	外：橙 内：灰黄褐	B	口～頸 25%	
P96-1	須恵器　甕	(17.9)	(11.8)	-	ABDL	灰色	B	口～胴 30%	末野産。口縁部内外面自然釉付着。
P141-1	土師器　坏	(12.7)	2.8	-	ABEHI	外：橙 内：にぶい橙	B	40%	
P144-1	土師器台付甕	-	(3.8)	5.3	AEIKN	浅黄橙色	B	接～台 90%	内外面摩耗顕著。
P144-2	磨　石	最大長 7.8 cm、最大幅 3.1 cm、最大厚 1.8 cm。重量 60.0g。完形。礫岩。全面擦痕有。							
P145-1	須恵器　甕	-	-	-	ABFN	灰色	A	胴下部片	南比企産。
P169-1	須恵器　甕	-	-	-	ABDL	外：青灰 内：灰	B	胴下部片	末野産。

タタキ、内面はあて具痕が残るが、ピット 145 出土 1 の内面は、横位のヘラナデが施されている。

10　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物（第 79 図）は、古墳時代前期の土師器台付甕（1）、古墳時代後期の須恵器蓋（2）、甕（5）、古墳時代後期以降の須恵器甕（3・4）、土製支脚（6）、土錘（7）があり、本調査で検出された遺構・遺物の時期と合致する。

1 は、古墳時代前期の土師器台付甕の胴下部片である。調整は、外面がハケメ、内面は横・斜位のヘラナデである。2 は、いわゆる須恵器坏Ｈの蓋である。口縁部から体部にかけての部位である。口縁部に段を持ち、やや外に開く。調整は、内外面ともにロクロナデであるが、外面上位は回転ヘラ削りが施されている。末野産か。3 ～ 5 は、須恵器甕である。3 は、胴上部片である。調整は、外面がタタキ、内面は横位のヘラナデである。南比企産である。4 は、胴下部片である。調整は、外面がタタキ後、横・斜位のヘラナデが施されており、内面はあて具痕が残る。5 は、胴下部から底部にかけ



第 79 図　遺構外出土遺物

第 45 表　遺構外出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎 土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	C－4 G	土師器台付甕	-	-	-	ABCHIK	外:にぶい黄橙 内:灰黄褐	B	胴下部片	古墳時代前期。
2	-	須恵器　蓋	(11.2)	(3.0)	-	AND	灰色	A	口～体 10%	末野産？
3	-	須恵器　甕	-	-	-	ABF	灰色	B	胴上部片	南比企産。
4	-	須恵器　甕	-	-	-	ABCL	灰色	B	胴下部片	末野産。
5	-	須恵器　甕	-	-	-	ABL	灰色	A	胴～底片	末野産。
6	-	土製支脚	最大長 6.0 ㎝、最大幅 (4.6) ㎝、最大厚 (4.1) ㎝。重量 (79) g。裾一部欠。							
7	-	土　錘	最大長 (6.5) ㎝、最大径 (3.4) ㎝、孔径 2.0 ㎝。半分欠。							

ての破片である。調整は、内外面ロクロナデ後、横位のヘラナデが施されており、外面下位は回転カキ目が巡る。６は、土製支脚である。器高が低いが、やや縦長の台形状を呈し、底面が窪む。裾一部を欠く。７は、大型の土錘である。筒状を呈するが、半分を欠く。

Ⅴ　調査のまとめ

緑川遺跡は、今から遡ること 48 年前の昭和 47 年に遺跡として周知化がなされて以来、今回初めて発掘調査が行われた。今回の調査箇所は、旧畑地であったこと、また地盤が関東ローム層に似た強固なものであったことから、遺構・遺物の残存状態が極めて良好であった。調査の結果、本遺跡では弥生時代末から古墳時代前期、中期、後期、奈良・平安時代まで長期間にわたって集落が続いていたことが明らかとなり、住居跡からは残存状態の良好な遺物が大量に出土し、多大な成果を得ることができた。

調査のまとめとして、ここでは本報告の範囲に限られるが、まず集落跡の変遷について述べ、次に本集落跡の持つ役割・性格について推考し、最後に集落跡以外についても簡単に触れてみたい。

本遺跡の集落跡の変遷を述べるにあたり、ここで扱う遺構は、住居跡、掘立柱建物跡、柵列跡とする。今回検出された住居跡は、計 41 軒である。このうち、38 軒は可能性が高いものも含めて時代・時期の特定が可能であるが、残りの 3 軒は不明である。内訳は、弥生時代末から古墳時代前期が 9 軒、古墳時代中期が後期との過渡的な様相を呈するものも含めて 6 軒、古墳時代後期が 19 軒、奈良・平安時代が 4 軒である。掘立柱建物跡 6 棟、柵列跡 2 列は、具体的な時期を特定できないものもあるが、すべて奈良・平安時代のものと思われる。これらについて時代・時期別に整理すると、以下のとおりとなる。

弥生時代末～古墳時代前期：第 4 ・ 9 ・14・18・24・25・31・39・40 号住居跡

古墳時代中期　5 世紀後半：第 8 ・17・23 号住居跡
5 世紀末～ 6 世紀初頭：第 32・37 号住居跡
5 世紀代：第 28 号住居跡

古墳時代後期　6 世紀前半：第 1 ・16・21・34・38・41 号住居跡
6 世紀前半～中頃：第 27 号住居跡
6 世紀中頃～後半：第 7 ・13・36 号住居跡
6 世紀後半：第 30 号住居跡
6 世紀末～ 7 世紀初頭：第 3 ・11・15・20 号住居跡
7 世紀中頃～後半：第 5 号住居跡
7 世紀後半：第 29・33 号住居跡
7 世紀代：第 10 号住居跡

奈良・平安時代　8 世紀後半：第 12・26 号住居跡、第 1 ・ 4 号掘立柱建物跡
8 世紀末～ 9 世紀初頭：第 2 号住居跡
8 世紀代：第 3 ・ 6 号掘立柱建物跡、第 1 ・ 2 号柵列跡
9 世紀中頃～後半：第 19 号住居跡
9 世紀後半：第 2 号掘立柱建物跡
9 世紀代：第 5 号掘立柱建物跡

弥生時代末から古墳時代前期までの 9 軒は、遺構が密集する調査区中央から東側のほぼ全面に分布する。調査区東側中央のＨ～Ｊ－６・７グリッド付近は、空白部分となるが、古墳時代中期以降の住居跡に壊されている可能性もある。他の遺構と重複し、残存状態の悪いものが多いが、住居跡の平面形は方

形と思われる。地床炉の位置は様々であり、規則性がない。主柱穴と思われるピットは、認められない。

時期を特定し得る土器が乏しいため、9軒を一括して扱ったが、第25号住居跡は、重複する第24号住居跡との新旧関係や流れ込みの出土土器から、弥生時代末から古墳時代初頭とした。そして、第40号住居跡も口縁端部に刻みの施された甕が出土していることから、弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられ、今回検出された住居跡の中では、この2軒が最も古い。第24号住居跡では、完形品はないが、土師器が比較的まとまって出土し、第39号住居跡では1点のみであるが、口縁端部に刻みのない小振りの土師器台付甕が完形で出土していることから、ともに古墳時代前期に相当する。残りの6軒については、出土遺物や地床炉を持つこと、主軸方向などから弥生時代末から古墳時代前期までと幅を持たせたが、他の遺構から出土した流れ込みの遺物を見ると、第8号住居跡から出土した器壁が厚く、胴部が倒卵形を呈する台付甕は古墳時代前期、第32号住居跡から出土した文様の施文された壺の口縁部と肩部片は、弥生時代末から古墳時代初頭に相当することから、6軒は弥生時代末から古墳時代初頭か、あるいは古墳時代前期かのいずれかに該当すると思われる。ただし、今回の調査では、いわゆるS字甕が図示不可能な小片も含め、一切出土していないことを考慮すると、弥生時代末から古墳時代初頭に相当するものが多いと思われる。なお、第Ⅳ章では、弥生時代末から古墳時代初頭に相当する過渡的な様相を呈する土器を「弥生土器」、その他のものについては「土師器」と表記した。

古墳時代前期の遺跡は、第Ⅱ章でも述べたとおり、近年利根川水系での確認例が多い。本遺跡南側の芝川を挟んで所在する大我井遺跡では、前期の遺構・遺物が確認されているが、妻沼地区において弥生時代末まで遡る集落跡が確認されたことは、新知見となる。

古墳時代中期の6軒は、調査区東側中央付近から南側に分布する。内訳は、5世紀後半が3軒、古墳時代後期との過渡的様相を呈する5世紀末から6世紀初頭が2軒、具体的な時期は不明であるが、5世紀代のものが1軒である。

中期は、5世紀後半からの確認であり、前半段階は検出されていない。住居跡の平面形は方形、規模は一辺4m前後のものが多く、前期同様、主柱穴と思われるピットは確認されていない。すべての住居跡にカマドと貯蔵穴が設けられており、カマドは東西どちらかを向き、北を向くものはない。カマドを持つ住居の構造としては、古墳時代後期以降と変わらず、完成されている印象を受ける。

中期は、全国的にも確認例が少なく、県内では北武蔵でも児玉郡で事例が多いが、市内でカマドを持つ中期の住居跡が確認されたのは、非常に少なく、しかも数軒まとまって検出され、大量の遺物が出土したことは、今回の調査における特筆すべき成果である。特に第8・23号住居跡から出土した土器は、坏、甕、壺、高坏、鉢など土師器のバラエティが豊富であり、第23号住居跡では、TK216併行の市内では最古段階に相当する須恵器坏がほぼ完形で出土している。主体となる土師器坏・甕は、坏が典型的な須恵器坏蓋模倣坏が出現する前段階のものであり、甕は長胴化し始めているが、胴部中段の膨らみが大きいのが特徴となる。土師器の調整技法は、ヘラナデが主体となるが、甕は前期に多用されるハケメが依然として残るものがあり、また後期以降に定着するヘラ削りが施されたものも少数ながら含まれている。壺は、前期に多用されるヘラミガキが残るが、ヘラ削りが併用されるものもみられ、調整技法から中期前後の流れを明確に把握できる良い事例である。

古墳時代後期は、北武蔵地域では遺跡数が爆発的に増加するが、今回の調査においても住居跡が多数

確認された。時期は概ね７つに区分され、内訳は６世紀前半が６軒、６世紀前半～中頃が１軒、６世紀中頃～後半が３軒、６世紀後半が１軒、６世紀末～７世紀初頭が４軒、７世紀中頃～後半が１軒、７世紀後半が２軒、具体的な時期は不明であるが、７世紀代が１軒の計 19 軒である。

古墳時代後期は、中期の５世紀後半から７世紀後半まで絶え間なく続く。住居跡の分布状況は、時期によって空白部分があるが、概ね西側を除いた調査区ほぼ全面に分布する。平面形は方形が多いが、長方形も出現する。規模は様々であるが、中期よりも若干大きくなる傾向にあり、このうち第 33 号住居跡は７ｍ四方を測り、今回検出された住居跡の中で最も大きい。カマドは中期と異なり、北を向くものが多くなる。主柱穴と思われるピットは、確認できた例が少なく、第７・11 号住居跡の２軒のみである。出土遺物は、土器の他に、土製品（土錘、土玉、支脚）、鉄製品（刀子など）、石製品（砥石、編み物石、紡錘車、模造品（有孔円盤））などがあり、中期よりもさらにバラエティが豊富となる。また、第 30 号住居跡では、残存状態が悪く、粉々になってしまったが、琥珀玉が出土しており、非常に貴重な事例である。なお、石製品には、利根川水系に特徴的な角閃石安山岩が多数出土しており、線状痕がみられたことから砥石と報告したが、果たして砥石として良いのか疑問が残る。

奈良・平安時代は、検出された住居跡は４軒と少ないが、掘立柱建物跡が６棟、掘立柱建物跡の可能性のある柵列跡が２列あることから、前段階までと比べて規模が縮小した印象は見受けられない。分布状況は、調査区中央付近に掘立柱建物跡、その周りを住居跡が囲むように位置する。時期は概ね４つに区分され、内訳は、８世紀後半が住居跡２軒、掘立柱建物跡２棟、８世紀末から９世紀初頭が住居跡１軒、具体的な時期は不明であるが、８世紀代の掘立柱建物跡２棟、柵列跡２列、９世紀中頃から後半が住居跡１軒、９世紀後半が掘立柱建物跡１棟、具体的な時期は不明であるが、９世紀代に相当する掘立柱建物跡が１棟である。

住居跡の平面形は、長方形を呈し、規模は小さくなり、カマドは東を向くようになる。主柱穴となるピットは見当たらず、全時代・時期を通して明確な主柱穴を持たないのが、本遺跡の住居形態の特徴と言える。掘立柱建物跡と柵列跡は、大半が調査区外にある第１号掘立柱建物跡、小振りの第５号掘立柱建物跡以外は、掘り方が大きく、大型である。出土遺物は僅少であるが、土器は須恵器、土師器、灰釉陶器があり、鉄製品（刀子、釘）もある。また、古墳時代後期の遺構からの出土であるが、円面硯の破片が出土しており、本遺跡における奈良・平安時代を考える上で重要な遺物である。

奈良・平安時代は、７世紀末から８世紀中頃までと９世紀前半段階が空白期間となるが、下限については灰釉陶器の存在から、現時点では９世紀後半までと思われる。

以上、本遺跡の集落跡の変遷について述べた。集落は、弥生時代末から平安時代まで長期間にわたって続くことが明らかとなったが、古墳時代前期の４世紀後半から中期の５世紀前半まで、奈良時代の７世紀末から８世紀中頃まで、そして、平安時代の９世紀前半の三つが空白期間となる。上記の段階が本遺跡に存在するかについては、現時点では不明と言わざるを得ないが、空白期間を埋める遺構・遺物が本遺跡南側に所在する池ノ上遺跡では確認されており、一時的に移動した可能性も考えられる。

次に本遺跡の持つ役割・性格について述べる。第Ⅱ章でも述べたとおり、本遺跡は、平坦な地形が広がる妻沼地区では珍しく、小高い台地上を呈する自然堤防上に立地しており、調査地点の西側、南側、北側は外方に向かって緩やかに傾斜する。しかし、東側は急激に下り、現況水田との高低差が約 2.6 ｍ

もあり、入り江のような地形に面している。今回の調査地点は、台地上を呈する標高が最も高い場所にあり、遺構の検出状況からみて集落の中心であったと思われる。現在の遺跡範囲は、調査地点から北西側に広がるが、外方に緩やかに下る地形と今回の調査結果を踏まえると、集落は北側、ないし北東側に広がっていると思われる。ただし、地形だけからみると、遺跡の規模はそれほど大きいものではないと思われ、遺構が密集し、複雑に重複していることは、限られた空間を最大限に利用するためであったことが窺える。では、なぜこの場所に固執するのか、このことについては、今回の調査で確認された奈良・平安時代の遺構・遺物がヒントとなる。

本遺跡は、市内では最北に位置する遺跡の一つであり、群馬県との境を流れる利根川に近く、支流がいくつか流れている。律令制が布かれる奈良・平安時代において、本遺跡の所在する妻沼地区は、幡羅郡の広沢郷に比定されており（知久 2018）、本遺跡東約 700 mには、現在の位置が正しいかどうか諸説あるが、式内社と目される白髪神社がある。そして、西側には、具体的な位置は依然として不明であるが、群馬県太田市で確認された上野国新田郡家へ東山道武蔵路が北上することが想定されている。

こうした遺跡の立地・地形に加え、今回の調査で検出された大型掘立柱建物跡や円面硯の存在を考慮すると、本遺跡は古代において重要な役割を担っていたことが窺える。現時点では、あくまでも憶測の域を出るものではないが、遺跡の規模は大きくないものの、水上及び陸上交通において上野国をはじめとする諸国との中継地としての役割を担っていた可能性が考えられないであろうか。特に水上交通における「津」のような官衙的な施設であった可能性を考えたい。そして、奈良・平安時代以前についても、水運を重視した性格の遺跡であったと考えたい。なお、本報告では、竪穴遺構を「住居跡」と表記したが、奈良・平安時代のものについては、官衙的な施設と考えるならば、「竪穴建物」とした方が良いかもしれない。

最後に集落跡以外について述べる。縄文時代は、遺構は確認されていないが、後期後葉の土器片が 1 点出土している。後期は、低地上でも遺跡が確認されるようになり、現時点では本遺跡より南側で遺跡がいくつか確認されているが、今回の結果により本遺跡の近辺に未発見の遺跡があるのかもしれない。第 14 号土坑では、古墳時代後期の円筒埴輪片が 1 点出土している。本遺跡では、同時期の集落跡が確認されているが、これは本集落跡に関わる人物の古墳に付随する埴輪の破片と考えられる。ただ周辺で古墳群が見つかっていないため、縄文時代同様、未発見の可能性がある。中世は、第１・２号溝跡から流れ込みで青磁などが出土している。今回の調査では、中世の遺構は確認されていないが、本遺跡の北側に観音堂瓦窯跡、南側に大我井遺跡があり、後者では経塚が 4 基確認されている。本遺跡は両者に挟まれているが、遺物はこれらの遺跡からの影響と思われる。近世の溝跡と同方向に走る道路跡は、近代の遺構と思われるが、北上すると利根川に向かうことから、群馬県境に橋が架かる前に行われていた渡しの船着場へ向かうのかもしれない。

以上、簡単に述べた。緑川遺跡では、試掘調査の段階で遺構・遺物が多数存在することは把握できていたが、実際に発掘調査を行った結果、これほど多くの遺構･遺物が埋蔵されていたことは予想外であった。今回の調査では、多くの貴重な成果を得ることができたが、今後の課題としては、遺跡の範囲を把握すること、集落の存続期間に空白期間があるか否か、そして何よりも本遺跡の性格が「津」となり得るのか、などを検討することが挙げられる。

引用・参考文献

熊谷市遺跡調査会　1977『横塚山古墳』

熊谷市籠原裏遺跡調査会　2000『籠原裏古墳群第 10 号墳』

熊谷市教育委員会　1985『三尻遺跡群　黒沢館跡・樋ノ上遺跡』

1988『三尻遺跡群　社裏遺跡・社裏北遺跡・社裏南遺跡』

1999『横間栗遺跡』

2000『寺東遺跡・別府氏館跡』

2003『一本木前遺跡Ⅳ』

2004『籠原裏遺跡』

2005『籠原裏古墳群』

2010『西城切通遺跡』

2013『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡　総括報告書Ⅰ』

2015『籠原裏古墳群Ⅳ（籠原裏古墳群第 12・13・14・15 号墳）　籠原裏遺跡Ⅲ』

2016『池ノ上遺跡』

埼玉県遺跡調査会　1971『横塚山古墳』　埼玉県遺跡調査会報告第 9 集

埼玉県教育委員会　1984『池上・池守』

1988『埼玉の中世城館跡』

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983『三ヶ尻天王・三ヶ尻林 (1)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 23 集

1984『三ヶ尻林 (2)・台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 34 集

1989『新田裏・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 85 集

1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 95 集

1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 128 集

2005『飯塚北遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 306 集

2005『飯塚古墳群Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 317 集

2006『飯塚北Ⅱ／飯塚古墳群Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 321 集

2011『川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 375 集

知久裕昭　2018『武蔵国幡羅郡から見た古代史　北武蔵歴史探訪』まつやま書房

深谷市教育委員会　2010『幡羅遺跡Ⅵ』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第 111 集

水口由紀子　2006「埼玉県熊谷市妻沼経塚の再検討」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会

妻沼町　1977『妻沼町誌』妻沼町誌編纂委員会

妻沼町教育委員会　1981『妻沼町西南遺跡群Ⅰ－道ヶ谷戸条里・道ヶ谷戸・飯塚南－』妻沼町埋蔵文化財調査報告第 1 集

1982『大我井経塚』資料集第二号

写 真 図 版

調査区付近遠景（遺跡から北東を望む）

調査区全景（真上から）

図版２

調査区南側全景（西から）

調査区北側全景（西から）

第１号住居跡

第２号住居跡

第１号住居跡カマド

第２号住居跡北西隅遺物出土状況

第１号住居跡遺物出土状況１

第３号住居跡

第１号住居跡遺物出土状況２

第４号住居跡南側

図版４

第５・６号住居跡

第７～９号住居跡

第５号住居跡東カマド

第７・９号住居跡

第５号住居跡西カマド

第７号住居跡カマド

第５号住居跡遺物出土状況

第７号住居跡東カマド煙道部

第８号住居跡

第11号住居跡

第８号住居跡遺物出土状況

第11号住居跡カマド

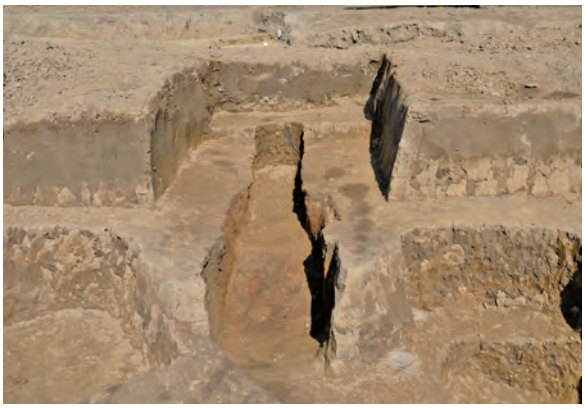
第８号住居跡西隅遺物出土状況

第11号住居跡ピット確認状況

第10号住居跡

第12・13号住居跡

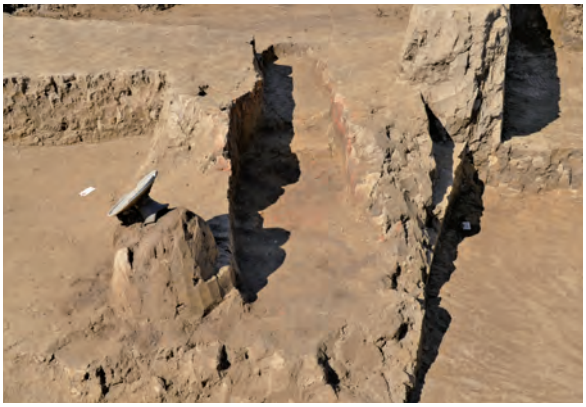
図版６



第13号住居跡カマド

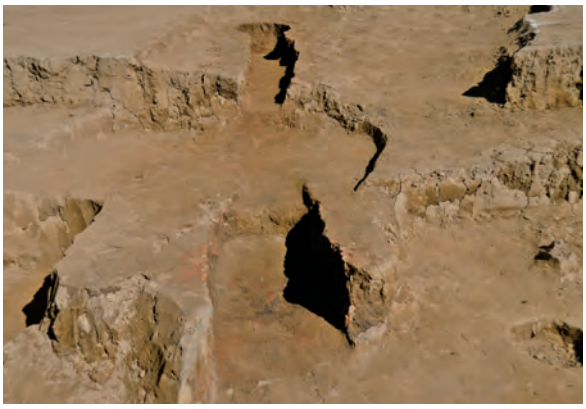
第15～18号住居跡（北東から）

第14号住居跡



第15号住居跡カマド

第15～18号住居跡（東から）



第16号住居跡カマド

第15～18号住居跡（南から）

第16号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

第17号住居跡カマド

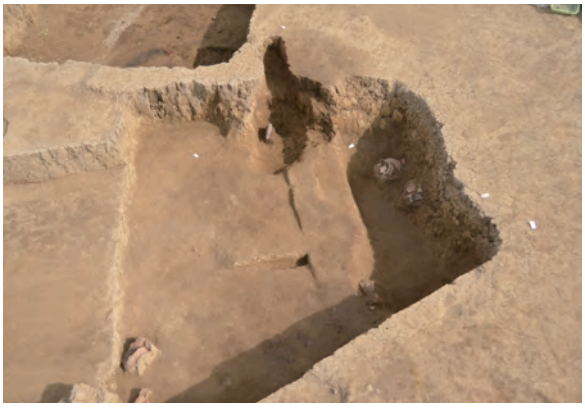
第19号住居跡カマド

第17号住居跡西壁遺物出土状況

第20・21号住居跡

第19～23号住居跡

第21・22号住居跡



第19号住居跡遺物出土状況

第20号住居跡カマド

図版８

第20号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

第21号住居跡石製模造品出土状況

第20号住居跡遺物出土状況

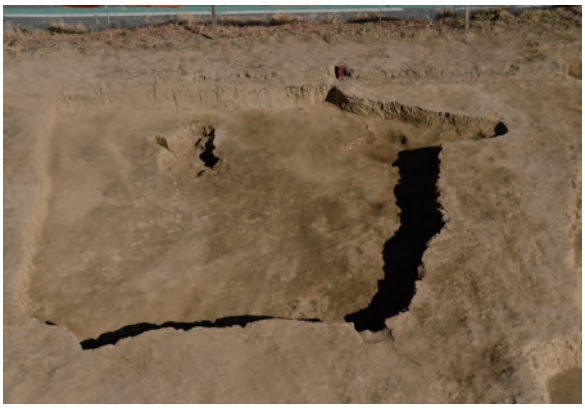
第23号住居跡

第21号住居跡カマド

第23号住居跡遺物出土状況１

第21号住居跡南西隅遺物出土状況

第23号住居跡遺物出土状況２



第24号住居跡

第25号住居跡遺物出土状況

第24・25号住居跡遺物出土状況

第26～28号住居跡

第24～31号住居跡

第27号住居跡遺物出土状況

第24号住居跡遺物出土状況

第28号住居跡カマド煙道部

図版 10

第28号住居跡カマド煙道部

第29号住居跡遺物出土状況１

第29～31号住居跡

第29号住居跡遺物出土状況２

第30号住居跡

第30号住居跡琥珀玉出土状況

第31号住居跡

第31号住居跡埋設土器断割状況

第32号住居跡

第33号住居跡

第32号住居跡カマド

第33号住居跡遺物出土状況

第32号住居跡カマド袖断割状況

第33号住居跡カマド

第32号住居跡石製模造品出土状況

第33号住居跡北隅遺物出土状況

図版 12

第34号住居跡

第35号住居跡

第34号住居跡遺物出土状況

第35号住居跡アンペラ出土状況

第34号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

第36号住居跡

第34号住居跡南東壁遺物出土状況

第３６号住居跡遺物出土状況

第36号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

第37号住居跡カマド煙道部断面断割状況

第36号住居跡遺物出土状況

第38号住居跡

第37号住居跡

第39号住居跡

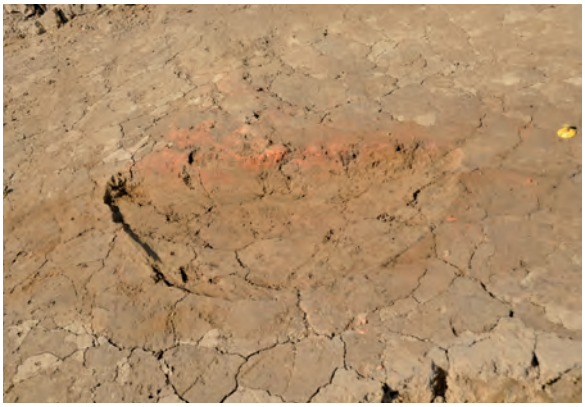
第37号住居跡カマド

第39号住居跡遺物出土状況

図版 14

第40号住居跡

第１号掘立柱建物跡



第40号住居跡炉跡断割状況

第１号掘立柱建物跡確認状況

第41号住居跡

第２号掘立柱建物跡

第41号住居跡遺物出土状況

第２号掘立柱建物跡Ｐ３噴砂確認状況

第３号掘立柱建物跡（北東から）

第５号掘立柱建物跡

第３号掘立柱建物跡（北西から）

第６号掘立柱建物跡

第３号掘立柱建物跡確認状況

第1・2号溝跡

第４号掘立柱建物跡

第1号溝跡土層断面

図版 16

第１号土坑

第６号土坑

第２号土坑

第７号土坑

第３号土坑

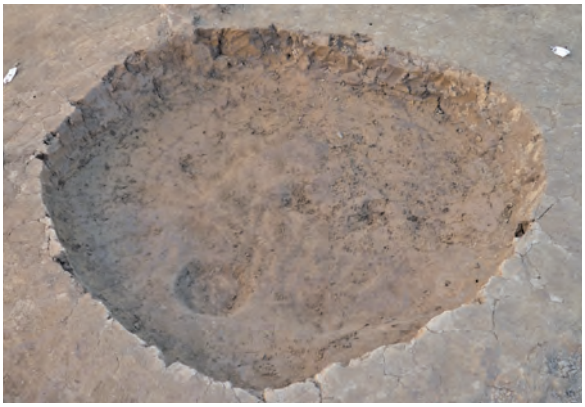
第８号土坑

第５号土坑

第10号土坑土層断面

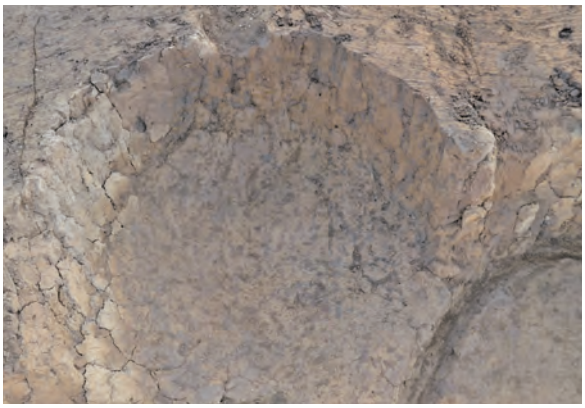
第11号土坑

第１号井戸跡



第12号土坑

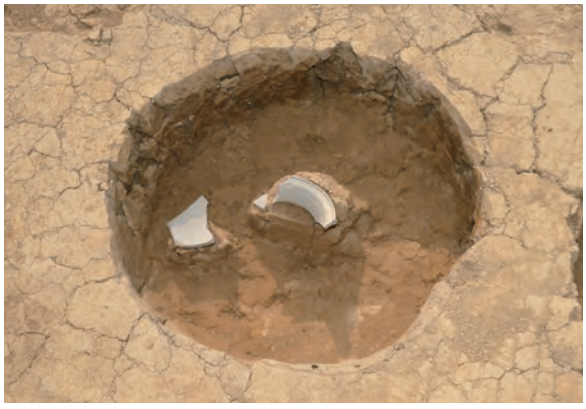
第１号井戸跡土層断面



第13号土坑

第１号性格不明遺構

第14・15号土坑



P97遺物出土状況

図版 18

第１号住居跡　第６図２

第１号住居跡　第６図７

第１号住居跡　第６図３

第１号住居跡　第６図８

第１号住居跡　第６図４

第１号住居跡　第６図９

第１号住居跡　第６図５

第１号住居跡　第６図10

第１号住居跡　第６図６

第１号住居跡　第６図11

第１号住居跡　第６図12

第１号住居跡　第６図14

第１号住居跡　第６図13

第１号住居跡　第６図15

第１号住居跡　第６図16

第１号住居跡　第６図17

第１号住居跡　第６図18

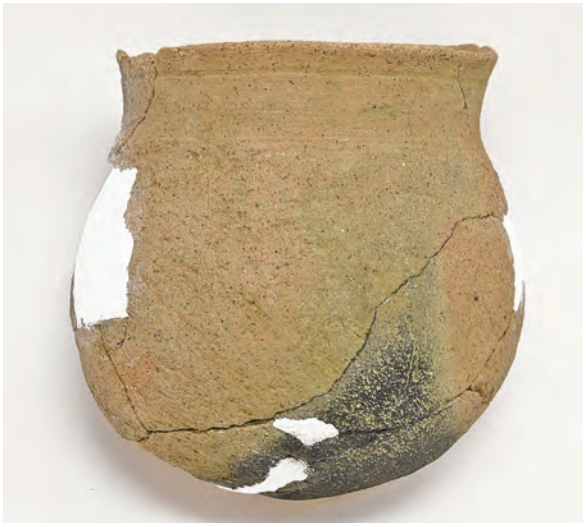
図版 20

第１号住居跡　第６図19

第１号住居跡　第６図20

第１号住居跡　第７図21

第１号住居跡　第７図22



第１号住居跡　第７図23

第１号住居跡　第７図25

第１号住居跡　第７図26

第１号住居跡　第７図27

第１号住居跡　第７図28

第１号住居跡　第７図29

第１号住居跡　第７図29底面

第２号住居跡　第８図３

第３号住居跡　第10図２

第３号住居跡　第10図3

第３号住居跡　第10図5

図版 22

第３号住居跡　第10 図７

第３号住居跡　第10 図８

第３号住居跡　第10 図９

第３号住居跡　第10 図10底面

第３号住居跡　第10 図11

第５号住居跡　第12図１

第５号住居跡　第12図２

第５号住居跡　第12図６

第５号住居跡　第12図７

第５号住居跡　第12図８

第５号住居跡　第12図20

第５号住居跡　第12図15

第５号住居跡　第12図21

第５号住居跡　第12図17

第５号住居跡　第12図18

第５号住居跡　第12図22

第５号住居跡　第12図19

図版 24

第５号住居跡　第12図23

第５号住居跡　第12図24

第５号住居跡　第12図25

第５号住居跡　第12図27

第５号住居跡　第12図28

第５号住居跡　第13図31

第５号住居跡　第13図33

第５号住居跡　第13図34

第７号住居跡　第16図１

第７号住居跡　第16図７

第７号住居跡　第16図２

第８号住居跡　第17図１

第７号住居跡　第16図５

第８号住居跡　第17図２

第８号住居跡　第17図３

第８号住居跡　第17図４

図版 26

第８号住居跡　第17図５

第８号住居跡　第17図７

第８号住居跡　第17図８

第８号住居跡　第17図６

第８号住居跡　第17図９

第８号住居跡　第18図11

第８号住居跡　第18図12

第８号住居跡　第18図14

第８号住居跡　第18図15

第８号住居跡　第18図16

第８号住居跡　第18図18

第８号住居跡　第18図19

第８号住居跡　第18図20

第８号住居跡　第18図21

図版 28

第８号住居跡　第18図23

第８号住居跡　第18図24

第８号住居跡　第18図25

第８号住居跡　第18図26

第11号住居跡　第21図１

第11号住居跡　第21図８

第12号住居跡　第23図12－３

第12号住居跡　第23図12－４

第13号住居跡　第23図13－１

第13号住居跡　第23図13－２

第14号住居跡　第24図１

第15号住居跡　第27図１

第15号住居跡　第27図４

第15号住居跡　第27図５

第15号住居跡　第27図８

第15号住居跡　第27図９

第15号住居跡　第27図11

図版 30

第16号住居跡　第28図１

第16号住居跡　第28図４

第16号住居跡　第28図２

第16号住居跡　第28図５

第16号住居跡　第28図６

第16号住居跡　第28図７

第16号住居跡　第28図９

第16号住居跡　第28図10

第16号住居跡　第28図12

第16号住居跡　第28図13

第16号住居跡　第28図15上面

第16号住居跡　第28図15

第17号住居跡　第29図１

第17号住居跡　第29図２

図版 32

第17号住居跡　第29図３内面

第17号住居跡　第29図３

第17号住居跡　第29図４内面

第17号住居跡　第29図５

第17号住居跡　第29図６

第17号住居跡　第29図７

第19号住居跡　第32図１

第19号住居跡　第32図２

第19号住居跡　第32図３

第19号住居跡　第32図４

第19号住居跡　第32図７

第20号住居跡　第33図１

第20号住居跡　第33図３

第20号住居跡　第33図４

第20号住居跡　第33図５

第20号住居跡　第33図６

第20号住居跡　第33図９

第20号住居跡　第33図10

図版 34

第20号住居跡　第33図12

第20号住居跡　第33図12内面

第20号住居跡　第33図13

第20号住居跡　第33図14

第20号住居跡　第33図15

第20号住居跡　第33図16

第20号住居跡　第33図17

第20号住居跡　第34図18

第20号住居跡　第34図19

第20号住居跡　第34図20

第20号住居跡　第34図21

第20号住居跡　第34図22

第20号住居跡　第34図23

図版 36

第20号住居跡　第34図24

第20号住居跡　第34図25

第20号住居跡　第34図26

第21号住居跡　第35図２

第21号住居跡　第35図３

第21号住居跡　第35図４

第21号住居跡　第35図６

第22号住居跡　第35図７

第22号住居跡　第35図８

第22号住居跡　第35図10

第23号住居跡　第36図１

第23号住居跡　第36図２

第23号住居跡　第36図３

第23号住居跡　第36図４

第23号住居跡　第36図５

図版 38

第23号住居跡　第36図６

第23号住居跡　第36図８内面

第23号住居跡　第36図８

第23号住居跡　第36図９内面

第23号住居跡　第36図９

第23号住居跡　第36図10

第23号住居跡　第36図11

第23号住居跡　第36図12

第23号住居跡　第37図13

第23号住居跡　第37図14

第23号住居跡　第37図15

第23号住居跡　第37図16

第23号住居跡　第37図17

第23号住居跡　第37図18

図版 40

第23号住居跡　第38図19

第23号住居跡　第38図20

第23号住居跡　第38図21

第23号住居跡　第38図22

第23号住居跡　第38図23

第23号住居跡　第38図24

第23号住居跡　第38図25

第23号住居跡　第38図26

第23号住居跡　第38図27

第24号住居跡　第40図１

第24号住居跡　第40図２

第24号住居跡　第40図３

第24号住居跡　第40図４

第24号住居跡　第40図５

第24号住居跡　第40図６

第24号住居跡　第40図７

第24号住居跡　第40図９

図版 42

第25号住居跡　第41図１

第27号住居跡　第42図27－１

第27号住居跡　第42図27－３

第29号住居跡　第45図３

第29号住居跡　第45図４

第29号住居跡　第45図５

第29号住居跡　第45図３内面

第29号住居跡　第45図12

第30号住居跡　第46図１

第30号住居跡　第46図９

第30号住居跡　第46図２

第31号住居跡　第47図１

第30号住居跡　第46図４

第31号住居跡　第47図３

第30号住居跡　第46図６

第32号住居跡　第48図１

第30号住居跡　第46図６内面

第32号住居跡　第48図３

図版 44

第32号住居跡　第48図５

第33号住居跡　第52図11

第33号住居跡　第52図12

第33号住居跡　第52図13

第33号住居跡　第52図15

第33号住居跡　第52図21

第33号住居跡　第52図22

第33号住居跡　第52図23

第33号住居跡　第52図24

第33号住居跡　第52図25

第33号住居跡　第53図29

第33号住居跡　第53図30

第34号住居跡　第54図４

第34号住居跡　第54図７

図版 46

第34号住居跡　第54図８

第36号住居跡　第58図３

第36号住居跡　第58図４

第35号住居跡　第55図３

第36号住居跡　第58図５

第35号住居跡　第55図３内面

第36号住居跡　第58図６

第36号住居跡　第58図２

第36号住居跡　第58図10

第36号住居跡　第58図19

第36号住居跡　第58図23

第36号住居跡　第58図20

第36号住居跡　第58図24

第36号住居跡　第58図22

第36号住居跡　第58図25

図版 48

第36号住居跡　第59図26

第37号住居跡　第60図１

第37号住居跡　第60図４

第37号住居跡　第60図５

第37号住居跡　第60図６

第37号住居跡　第60図７

第37号住居跡　第60図11

第37号住居跡　第60図12

第37号住居跡　第60図13

第38号住居跡　第61図38－１

第38号住居跡　第61図38－２

第39号住居跡　第61図39－１

第40号住居跡　第62図１

第40号住居跡　第62図２

第40号住居跡　第62図３

第40号住居跡　第62図４

図版 50

第41号住居跡　第63図１

第１号溝跡　第73図２

第41号住居跡　第63図２

第１号溝跡　第73図３

第41号住居跡　第63図３

第１号溝跡　第73図４

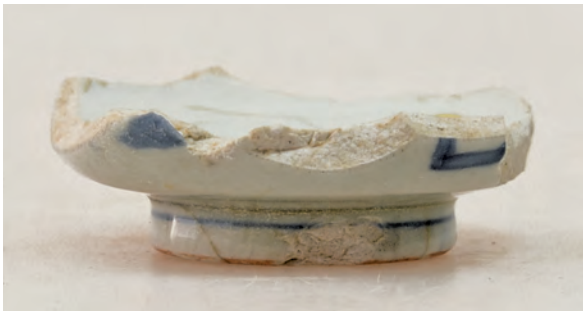
第６号掘立柱建物跡　第69図２

第１号溝跡　第73図５

第１号溝跡　第73図１

第１号溝跡　第73図６

第１号溝跡　第73図７



第１号溝跡　第73図８

第１号溝跡　第73図９

第１号溝跡　第73図19

第２号溝跡　第74図１

第６号土坑　第76図６土－１

第７号土坑　第76図７土－１

P52　第77図P52－１

P96　第77図P96－１

P144　第77図P144－１

図版 52

外面

内面

第１号住居跡　第６図１　　第３号住居跡　第10図１　　第５号住居跡　第12図３・４
第７号住居跡　第16図３・４　　第15号住居跡　第27図２・３　　第20号住居跡　第33図２
第21号住居跡　第35図１　　第29号住居跡　第45図１・２　　第31号住居跡　第47図２
第33号住居跡　第52図１～10

外面

内面

第34号住居跡　第54図１～３　　第35号住居跡　第55図１・２　　第36号住居跡　第58図１
第６号掘立柱建物跡　第69図１　　第１号溝跡　第73図17・18　　第15号土坑　第77図15土－１
第１号井戸跡　第77図１井－１　　第１号性格不明遺構　第77図１不－２～４
P43･145･169　　第78図P43－1･P145-1･P169－1　　遺構外　第79図３～５

図版 54

第24号住居跡　第40図８・10～17　　第32号住居跡　第48図７～９　　遺構外　第79図１

第１号溝跡　第73図10～16　　第２号溝跡　第74図２～４

第２号住居跡　第８図４～６　　第11号住居跡　第21図10　　第15号住居跡　第27図12
第20号住居跡　第34図27　　第29号住居跡　第45図14　　第33号住居跡　第53図34・35
第２号溝跡　第74図５

第５号住居跡　第13図35　　第７号住居跡　第16図９　　第17号住居跡　第29図11
第29号住居跡　第45図15　　第33号住居跡　第53図31～33　　遺構外　第78図６・７

図版 56

第１号住居跡　第７図30

第３号住居跡　第10図12

第３号住居跡　第10図13

第７号住居跡　第16図10

第８号住居跡　第18図22

第11号住居跡　第21図11

第13号住居跡　第23図13－３・４

第23号住居跡　第38図28

第37号住居跡　第60図15

第23号住居跡　第38図29

第28号住居跡　第42図１

第30号住居跡　第46図11

第33号住居跡　第53図11

第37号住居跡　第60図14

第40号住居跡　第62図5

第16号住居跡　第28図14

第21号住居跡　第35図11

第32号住居跡　第48図６

第19号住居跡　第32図9

第14号住居跡　第24図２

P144　第77図P144－２

第29号住居跡　第45図16

第11号住居跡　第21図12

第33号住居跡　第53図37

第30号住居跡出土琥珀玉１

第30号住居跡出土琥珀玉２

琥珀玉３

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みどりかわいせき
書　　名	緑川遺跡
副 書 名	—
巻　　次	—
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 37 集
編 集 者 名	松田　哲　武部喜充
編 集 機 関	埼玉県熊谷市教育委員会
所　在　地	〒 360 － 0107 熊谷市千代 329 番地　熊谷市立江南文化財センター　TEL048-536-5062
発行年月日	西暦 2020（令和２）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (° ′ ″)	東緯 (° ′ ″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
みどりかわいせき 緑川遺跡	くまがやしめぬまあざもりまわり 熊谷市妻沼字森廻 1327 番 1	11202	002	36° 13’46″	139° 22’22″	20181116 ～ 20190329	1,450	分譲住宅 建設工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
緑川遺跡	集落跡	縄文時代後期		縄文土器	弥生時代末から平安時代までほぼ絶え間なく集落が続くことが判明し、土器をはじめ、大量の遺物が出土した。
		弥生時代末～	住居跡　9 軒	弥生土器・土師器	
		古墳時代前期		石器・石製品	
		古墳時代中期	住居跡　6 軒	須恵器・土師器	
				石製品	
		古墳時代後期	住居跡　19 軒	須恵器・土師器	
			土坑　1 基	土製品・鉄製品	
				石製品・玉類	
		奈良・平安時代	住居跡　4 軒	須恵器・土師器	
			掘立柱建物跡 6 棟	灰釉陶器・鉄製品	
			柵列跡　2 列		
			土坑　1 基		
		中世		青磁・瓦質土器	
		近世	溝跡　3 条	磁器・陶器・瓦	
			土坑　2 基		
			井戸跡　1 基		
		近代	道路跡　1 条		
		時期不明	住居跡　3 軒	須恵器・土師器	
			土坑　11 基	石器	
			性格不明遺構　1 基		
			ピット群		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第 37 集

緑川遺跡

令和２年３月３１日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／株式会社ピーアイピー